
ゼロの使い魔 ～よくある転生のお話～

カニンガム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔 ～よくある転生のお話～

【Nコード】

N3256T

【作者名】

カニンガム

【あらすじ】

就職活動に失敗しまくっている大学生が、ゼロ魔の世界に転生する話。

主人公最強・チートな話です。アンチトリステイン、アンチルイズ、おまけに原作完全破壊するので嫌いな方は見ないほうがよいかと。文章に変なところがあったらすいません。なお、技名、魔法名、人物名

などに原作小説、漫画、ゲームなどから一部『転載』している部分があります。

プロローグ(前書き)

この小説の更新スピードは、前作とは違い不定期になりますのであしからず。

プロローグ

「…また落ちたか」

俺はそう言いながら封筒の中身を読む。

中に入っているのは、この前受けた企業の採用試験の結果である。

「これでめでたく100社突破だぜ！わーいorz」

自分で言っただけでむなしくなる。

今まで俺は101社の企業の採用試験を受けたが、今のところ完敗である。

最近は景気が悪いから、という言い訳はしたくない。

俺は超優秀ではないが、落ちこぼれでもない。

授業には毎回出席し、テストでも高得点をマークして、資格などもそれなりに取得している。

なのに落ち続けている。

大学の就職課の先生軍団も、なんで受からないの？と、首をひねっている状態である。

「やっぱりあの日以降、やる気が出ないよな…」

あの日というのは、俗に言う「女の子の日」ではない。

つい2週間前に親友が交通事故で亡くなったのだ。

あいつとは小学生の頃からの付き合いで、とても仲が良かった。

「まったく、こんなにめんどくさい就活をやらずに死にやがって…羨まし…ゲフンゲフン。死者に失礼だな。よし、気分転換に散歩にでも行くか」

そういつて表をぶらぶらしていたら、急にめのまえがまつくらになった（ポケオン風に）

「なんだよ、まったく、ってここどこだし!？」

気が付いたら、さっきまで歩いていた道ではなく、まつしろーい、そしてひろーい空間で椅子に座っていた。何が起きたんだろうと考えていると、

足元に何かがいるのがわかったので視線を落とす。

そこには、白い服を着て見事な土下座をしている、ボン、キュツ、ボンな女の人がいた。

「…あんたは誰だ？」

すると後ろから懐かしい声が聞こえた。

「彼女はアテネって言うんだと。ていうかお前もここに来るとはな」

その声を聞いて俺は固まってしまった。なぜならば、その声の主は2週間前に死んだはずの人物だからだ。

恐る恐る振り返ると、やはりあの親友が以前の姿で立っていた。

友「よう、また会えたな」

なんとか搾り出した声は、意外にも冷静な声だった。

「…お前がここにいるということは、ここはあの世か？」

友「そうだな、彼女に聞きな」

「わかった。あの〜」

女「ひいつー!!」

「？」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
い…」

女の人はずーっと俺に土下座状態のまま謝り続けている。

「…面を上げいつー!!」

女「ははーっ!」

友「何やってんだよ？」

思わず親友がツッコミを入れる。

「いや、なんとなくやってみたかった。それで、あなたは誰？」

女「私はこの世のすべてを司る神様です!」

神様は胸をはって答えた。

「はあ、それでおれはどうしてここに？」

神「あなたがここにいる理由は、あなたが死んだからです」

「What a fuck are you talking about？」

神「なぜに英語！？えーとですね、あなたは家の近所を散歩している時に真上から小型の隕石が落ちてきて、その直撃を受けて死んじゃいました」

「…なんで俺はこんなにも運が悪いんだろう」

神「それにも理由があります！」

「はい？」

神「実は、私のミスであなたの運勢が最悪に設定されていたの。

だから全然企業の内定が取れなかったわけ！それに気がついた私は、

あなたの運勢を上げようとしたんだけど…」

「したんだけど？」

神「間違えて殺しちゃった」

「よし、死刑だ」

神「ひいひい！ごめんなさい！わざとじゃないんです！またミスしただけです！

「お願いですから死刑は勘弁を〜！」

「うん、それ無理 ってちよつとまで、またミスした、だと？」

神「ぎくっ…！」

友「ああ。そいつな、俺のことも間違えて殺しちゃったんだと」

「…お前は2週間に1人間違えて殺しているのか？」

神「いえいえいえいえ！決してそういうわけではないんです！

ただ、運が悪かったというかなんというか…！」

「なんてこつたい…それで俺達はどうなるんだ？このまま

あの世にいる御先祖様とご対面ってか？」

神「それはないです。私のミスで殺してしまったので、

貴方達には他の世界に転生してもらいます。その世界とは

『ゼロの使い魔』の世界です！もちろん、色々特典も付けますよ」

「ほづ…！」

友「特典とな？」

神「ええ、もちろんです」

「友よ…」

友「ああ、分かっているとも、相棒」

神「え、なんですか？」

神は知らなかった。この2人が遠慮とか自重とかを全くしない人間だということを…

「じゃあ俺からな。火、水、風、土全部スクウェアで虚無も全部使えて

先住魔法も使えて、精霊とも会話できるようにすること。それと俺が

知っているアニメや漫画の能力や技、魔法全て使えるようにするのと、

魔力無限で、身体能力も超強化してくれ。創造魔法とかもいいね。あとはそうだな、転生先はゲルマニアの偉い人にして。それと俺の父親になった人はどんな人でも親馬鹿にしてくれ。原作の設定を

無視してもな。年齢はルイズたちと一緒にいいや」

友「気が合うな、俺もゲルマニアがいいと思ってたんだ。

じゃあ同じのでいいや。あとこいつとは双子っていう設定で」

神「」

「あれ？おゝい、大丈夫か？」

神「…いや、チートすぎるでしょ！！それは駄目よ！！」

「へえ〜神様なのに嘘つくんだ〜」

友「こんなのが神様とか信じられな〜い」

神「こ、これくらい能力、簡単につけちゃうよー！なんたって私は神様だからねー！」

「いやー、話のわかる神様でよかったよ」

友「全くだな」

神「あとは名前はどつする？君達の前世の名前はもう使えないから」

「今ここで名前を決めても名付け親が必ずその名前をつけてくれるのか？」

神「もちろん！」

「じゃあウィリアム。ミドルネームはタイベリアスで」

友「なんだそのミドルネームは？」

「映画で見ていいなって思ってたな」

友「じゃあ俺はデクスターでいいや。ミドルネームはハミルトンで」

神「そんな名前で、大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない」

神「そんなじゃこれでおしまい！君達が頼んだものはついたら全部そろっているからね。」

では、第二の人生いつてらっしゃい！」

すると目の前に光り輝く扉が現れる。

「世話になったな、神様。ありがとう」

神「…アテネ、よ」

ウイル「ん？」

アテネ「私の名前はアテネよ！覚えときなさい。困った時にはいつでもテレパシーで

呼んでちょうだい！ちょっとした頼みなら聞いてあげるからね」

友「それは助かるな。ありがとう」

「さて、そろそろ行こうか相棒」

友「ああ、行こうぜ。新しい世界に」

2人は元気よく扉に入っていった。

神「…2人に素晴らしい未来がありますように」

最後に神は2人におまじないをしてから姿を消した。

??? 「よくやった！双子だぞ！」

??? 「そう、よかった…」

??? 「おい！しっかりしろ！」

「???」「あな、た…この子たちを…お願い…」

気が付くと俺は赤ん坊になっていた。隣を見ると友がいる。

「うゝ（何だこの状況？）」

友「うゝ（さあな。だが母親は死にそうだな）」

「うづ！？（マジで！？）」

テレパシー

「???」「ちーん

「うゝうゝ（あゝあ、死んじゃった）」

「???」「そんな…何とかならんのか!？」

医者「残念ですが…」

侍者「…閣下、お子様にお名前を」

「（閣下だと？）」「

友「（ゼロ魔の世界で『閣下』と呼ばれる人は1人しかいないぞ！

？）」

「???」「そうだな、お前は今日からウィリアム・タイベリアス・フ
オン・ゲルマニアだ!!」

そしてお前はデクスター・ハミルトン・フォン・ゲルマニア！余の跡継ぎになる

のだ！」

周り「おおおお！！！」

????「さて、わしがパパじゃよ。パパはえらいんじゃぞ。ゲルマニアで一番偉い

アルブレヒト3世じゃぞ。ママはいないけどわしが何とかするぞ」

「うー！？）やっぱりかああああ！！！」

友「うー！？）さすが神様ってか！？」

こうして、帝政ゲルマニアに2人の異端児が生まれた。

この2人が、今後ハルケギニアを大混乱にすることはまだ誰も知らない…

プロローグ（後書き）

はいカニンガムです。

今回は主人公達の詳細でも書こうかと思っ
ていましたけど、
考えなおしてそのまま本編進めます。

では

第1話：赤ん坊の特権（前書き）

かなり短いんですけど。

第1話：赤ん坊の特権

さて、私ウィリアムとデクスターが生まれてから1週間が経ちました。

「うう（さて、こんな状態じゃ話すこともできないな）」

デ「うう（全くだ、不便極まりないな）」

「うう（まあ一度は通った道だからいいんだけどな）」

デ「うう（確かに。まさかこんなことが出来るとは思っていなかったよ）」

「うう（全くだ、ああ極楽極楽）」

さて、こんなこととはなんでしょう？

A：母親がわりの若いメイドたちといちゃつく。

B：母乳を飲む。

C：女性の象徴に顔を近づめて昼寝する。

答えは、全部である！

赤ん坊の1日というものは実に素晴らしい。起きておっぱいにしゃぶりついて、

おしめとつかえてもらって、昼寝して、パパに抱っこされて、夜はメイドの

胸の中で眠りにつく。これほど素晴らしい生活などこの世のどこにもないだろう。

もう一生赤ん坊でいいんじゃない？と考えるもおかしくない。

そんな生活を送っているが、いくつか不満がある。

メイドが俺達と一緒に昼寝している時にこっそり起きてテレパシーで会話する。

（おい、少し考えたんだが）

デ（なんだ？）

（今俺達ってゲルマニアの首都のウィンドボナにある城にいるんだよな？）

デ（父親があのアルブレヒト3世なら必然的にそうなるだろうな）

（どんな人でも親バカになるようにしたのは正解だったな）

デ（原作だと確か熾烈な権力争いを勝ち抜き、親族や政敵をことごとく塔に

幽閉して皇帝の座に就いたってんだからな）

(もしそんな父親だったら、俺たち今頃殺されているか幽閉されているな)

デ(ああ、恐ろしや恐ろしや!)

(しかし、あーもう早く歩けるようになって城を探索してみたい!)

デ(うん、それわかる。なんつーか憧れってというか、そういうもんだよな)

(そうそう!中世の城を生で見れるとか最高だろ?)

デ(隠し扉とか宝物庫とか!早いうちから歩く練習を始めないと)

(そうだな。てか普通の赤ん坊つてどれくらいで歩けるようになるんだ?)

デ(ん〜どうだったかな。多分1歳くらいじゃないか?)

(だが俺たちは普通じゃない。よって半年で歩けるようにしよう!)

デ(了解だ、兄貴)

(兄貴だって?俺が?)

デ(俺は双子の弟で、お前が兄だろ?)

(…あーそっか、お前って一応俺の弟になっているんだっけ?)

デ（おいおい、もう忘れたのかよ？）

（いやすまんすまん、この豊富な胸に包まれていると何もかも忘れてしまうのでな）

デ（…否定はしないよ）

（ここがあ有名なシャングリラだったのか…）

デ（いや、エル・ドラド（黄金郷）じゃないか？）

（もうどっちでも構わん。ここは楽園だ…ぐー）

デ（そのとおりだな…ぐー）

そして今日も柔らかい胸に包まれて俺達は眠りにつくのであった…

おまけ

2人の子供が寝ている様子をアルブレヒト3世が眺めていた。

アル3世「おお…我が子達はかわいいなあ…」

部下「閣下、それよりも仕事をしてください」

彼が仕事を抜けだしてはちよくちよく子供の様子を見に来ているので、

周りは困っていた。この部下もその1人である。

アル3世「もうちょっと…もうちょっとだけ、な？」

部下「その言葉、さつきも言いましたよね？」

アル3世「ぎくっ！…よく覚えているな？」

部下「そつでなければこの仕事をやっていけませんから」

アル3世「優秀でなによりだ！それじゃ、私の仕事もよろしく」

部下「はいはい、行きますよ〜」「ずるずる

アル3世「まだまだ！まだ見終わってなあい！」「ずるずる

部下「何わけわかんない」と言っているんですか？」

第1話：赤ん坊の特権（後書き）

赤ん坊の時は特に書くことないですね。

2人とも変態なのは気にしないでください。

あと、ハーレムにするのかはまだ決めていません。

次回は時を飛ばして魔法を習うことにしましょうかね。
そこから具体的な話を。

では

第2話：成長したので（前書き）

少し成長しました。

第2話：成長したので

はい、ウィリアムとデクスターです。もう生まれてから3年が経過しました。

その間に色々なことがありました。まず、生後半年で歩くことに成功したのでメイドはびっくり、父親は大喜び、周りの人は

「天才児だ!」とか「さすがアルブレヒト3世!」とか言い出すし。

そして1年が経過するころには全力疾走できるようになったので、城の中を2人で探索しました。メイドさん達が右往左往して

「あの2人はどこだー!」って大騒ぎになっていたのは内緒です。隠し扉とか見つけたときにはもう興奮しっぱなしでした。

興奮しすぎて罫に引っかけかりそうになった時もあったけどね。

あと宝物庫。蓋を開ければそこには金貨の山が。もうすごいですよ。ね。

あとはやはり、おむつを卒業できたのが嬉しかったなあ。

1人でトイレに行くというごくごく単純なことが、俺達にとってどれほど嬉しかったか。

んで、この世界のことまでだいぶ分かってきた。まず俺達双子が生まれた日、

すなわち誕生日はティールの月のフレイヤの週のラーグの曜日だと。

…何言ってるか全くわからねえ。で、調べたらハルケギニアの暦は1年が12の月と4の週(1週間が8日)で構成される384日だそうなの。

分かりやすく地球的に言うと、3月の第1週の5日目だそうなの。

これだからこの世界の暦ってめんどくさいんだよね。いつかこの大陸全て太陽暦に直してやる、絶対にだ!

そして、他の国のことも知らないといけないのだが、まだ子供なのであまり情報が入ってこない。そこで2人は親馬鹿な父のところへ向かうことに。

↳アルブレヒト3世の執務室↳

ここではやる気のない皇帝とその部下がいた。

アル3世「あー、仕事だりいー」

部下「そんな事言わないで頑張ってください。次はこれです」

アル3世「あー何々、幻獣に襲われて死にかけた、助けて？自分で何とかしろ！」

部下「そんな事言っていると信頼なくしますよ？」

アル3世「うぐっ…じゃあ調査と偵察のために現地の、なんだっけ？」

部下「ツエルプストー領です」

アル3世「そう、そいつに偵察及び討伐部隊を組織させる」

部下「わかりました」

そこに。

「父上、今よろしいですか？」

デ「ちよっとお話があるのですが」

アル3世「もちろんいいとも！さあこっちにおいでー？」

さっきまで持っていた書類を全部投げ捨てて、俺達に駆け寄ってきた。

アル3世「うゝむ今日も可愛いな。で、話ってなんだい？」

「父上、ここの書物庫の使用許可をいただけないでしょうか？」

部下「なんですって!？」

デ「絵本に読み飽きたので新しい本が読みたいのです」

アル3世「うむ、そうか…しかしまだ早いのではないか？」

「もう読み書きはできます！だから…」

部下「えっ」

アル3世「えっ」

「えっ」

デ「えっ」

アル3世「もう文字の読み書きが出来るとは！さすが我が子たち！天才児だ！」

部下「本当に書けているよ…。」

試しにその辺の紙に書いてみたら2人はびっくりしていた。

アル3世「よしいいだろう！この鍵をあげよう！これでいつでも本が読めるぞ？」

「わーい！ありがとう父上！」

デ「大好きだよ！」

目的を果たした俺たち2人は満面の笑みを父親に向ける。

アル3世「」

そんな父親は無言で鼻血を出していた。

部下「ちょ！閣下！？」

アル3世「ああ、すまん、ちょっと意識が飛んでいた」

部下「いいから鼻血を」

「そつだ、父上。魔法の練習もしたいのですけど…ダメ？」

デ「もつと父上にお役に立ちたいんです。お願いします！」

アル3世「おい！誰かいないか！？魔法の教師呼んでこい！今すぐにだ！」

(計画通り)

デ(だな)

翌日。

朝食をとった後に、1人の老人が現れた。この人が魔法を教えられるそうだ。

「ウィリアム様、デクスター様、私が魔法教師のマルモと申します。これからよろしくお願い致します」

「あー、マルモ先生。私達は教えてもらう側の人間なのでそんな丁寧じゃなくても…」

デ「その通りです。だから頭を上げてください」

マ「し、しかしお2人はアルブレヒト3世閣下の…」

「そういうのは気にしないでいいから、ね？」

マ「はあ、わかりました。ではまずお2人の杖なんですが、どこですか？」

…

……
……
デ「父上、杖頂戴？」

アル3世「誰か杖を持ってこい！」

10分後。

目の前には様々な種類の杖があった。どれにするか悩んでしまう。

マ「どれになさいますか？」

「うーん、かつこいいのも欲しいし、常に身につけておけるのも欲しい。」

マルモ先生、杖は1つしか持てないんですか？」

マ「そうですね、予備の杖を持つ人もいます。ですが最初は1つから始めたほうがよろしいかと」

「そうか、でも念の為にこれとこれで」

そう言つて俺は数ある杖の中から、めったに折れることのないほど硬い木の

イペで出来ている杖を選んだ。虫食いや耐水性に優れており、磨耗性や

耐候性が極めてよい木である。ていうかこの世界にもあつたんだね。それともう1つ、予備の杖として何の変哲もない指輪をチョイスした。

デ「俺は剣術もやりたいから軍杖がいいな。だからこれ！」

デクスターは前世で剣道を習っていて、地区大会で優勝するほどの腕前である。

だからこの中世の世界ではかなりの強さになるだろう。

マ「選びましたね？では次に契約をしなければなりません。やり方ですが

自分で見つけてください」

自分で、ねえ。じゃやってみるか。

(この杖と契約したいなー)

デ「俺も契約したいなー」

と、やる気ナッシングな感じで契約しようとした。すると、持っている杖が急に暖かくなってるのが感じられた。

「先生、暖かくなってきたんですけど」

マ「なんと！もう契約できたのですか!？」

デ「俺もできた」

マ「…お2人はやはり天才ですな…ではこのままコモン・マジックの練習をしましょう」

まず練習したのはライトやロック、アンロック、ディテイクトマジック。

もちろん一発でうまくいった。チートスゲエ。

マ「お2人のような優秀な教え子は今まで見たことがありませんよ。ではお2人の属性を確認してみましょう。外でやりますよ」

で、外に出てみると人、人、人。なにこの人ばかりは。

アル3世「皆の者！今から我が息子たちが魔法を使うから見ておれ！」

うん、わかっていたよ、あんたがやらかしたってことは。さて、気を引き締めて。

マ「まずは火からいきましょう。発火魔法、ウル・カーノですよ」

「はい、えつと発火！」

すると杖からまっすぐ炎が飛び出し目の前の藪があっという間に炎上。

他のメイジ達が消化するまもなく、藪は見事に炭化した。これなんていう火炎放射器だよ。

マ「…はい、ウィリアム様は火の属性が強いですな。次は水です」

「えー、コンデンセイションだっけ？」

次の瞬間、杖を中心に半径5mの円形の水の塊ができた。もちろん俺はずぶ濡れ。デクスターも、マルモ先生も。

アル3世「凄いいじゃないか！！さすがだ！」

その後も風属性のテストでウィンドを唱えると、その辺に生えてい

た木が

根元から引っこ抜けてしまい、土属性の錬金をやると、石ころが純金に。

まさかできないだろうと思って城壁に錬金をかけたら、なんとそれも純金になってしまった。それを見て父親は狂喜した。マルモ先生も開いた口がふさがらないご様子。見物していた他の兵士やメイドたちも

びっくりしている。なにせ、全属性をここまで使えるメイジなど今まで

見たことも聞いたこともなかったからだ。

その後に、デクスターも俺とほとんど同じことをやってのけたのでもう大騒ぎ。

アルブレヒト3世が「今日はめでたい日だ！宴会をやるぞ！」と言

い始めたので、

魔法の練習はここまでとなった。

ちなみに純金になった城壁は大金で売り払った。おかげでゲルマニアの

国庫に5、000万エキュールが臨時収入としてぶち込まれた。

その日の夜。

俺達は例によってメイドの胸で寝ていたが、誰かに呼ばれたような

気がして
目が醒めてしまった。起き上がったがメイド以外には誰もいなかった。

（気のせいかな？）

メイドを起こさないようにテレパシーで話す。

デ（そうなのかな。だが確かに呼ばれた気がしたんだが…）

すると。

？（おい、お前たち）

ふと部屋を見渡すと、窓のところに誰かがいた。いや、それは人なのだろうか。

女みたいだが、体が透けているし、まるで3D映像のように時々ざらついているようにも見える。

ともかく俺達はそれとコミュニケーションを図ることにした。

（あんたは誰だ？）

？（私はお前ら人間が風の精霊と呼ぶ存在だ。知名度は低いがね。お前たちが

気になってつい来てしまった）

デ（なぜ俺達が気になったんだ、ってああ、もしかして）

風（そうだ、お前たちには我々精霊が見えるし、話すことができるのだろう？）

その真意を確かめたくてな）

（なるほどね。で、その話は本当だってわかったわけだ）

風（ああ。それにお前らは普通の人間より面白そうだな。さっきの魔法を

見させてもらったよ。大したものじゃないか）

デ（のぞき見は趣味悪いぞ）

風（そういうな。私はそういう存在なのだから）

（えと風の精霊よ、っていちいち言うのがめんどくさいから名前付けていい？）

風（…精霊に名前をつけていい？って聞く人間は初めてだ。いいだろう、つけてくる）

（ん〜…ストーム！）

デ（うわ、わかりやすっ）

風（ストームか…いい名前だ。それでいい）

（よっしゃ。それじゃあこれからよろしくな、ストーム）

ス（ああ、よろしく）

部下「はあ、確かに。それにしても凄いことになりましたね」

アル3世「ああ、そうだな」

若干真面目になったアルブレヒト3世は遠くを眺めながら言った。

アル3世「ゲルマニアに、いや、この世界に今まで息子たちのようなメイジなど

存在しなかっただろう。これから荒れるかもしれんな…」

部下「荒れる、とは？」

アル3世「息子たちの力を利用してしようとする輩が我が国の中もから出てくるに違いない。

マルモが言うには、間違いなくあの子たちは全ての属性がスクウェアまで

成長するそうだ」

部下「全属性がですか！？あのマルモ先生が言うなら確かでしょうな…」

マルモはこの国で今まで数多くの優秀なメイジを育ててきたので、平民も

貴族もみんな彼のことを知っている。この部下も彼の指導を受けて育った

優秀なメイジの1人である。

アル3世「私は愚か者ではない。だからあの子たちを手駒にしようなどは

これっぽっちも考えておらん。ただ幸せに暮らし、ゆく

ゆくは

わしの後を継いでゲルマニアをいい国にして行って欲しいのだ…」

部下「それは素晴らしい考えですね」

アル3世「だからこれからは今まで以上に前のお前の助言が必要になる。頼むぞ」

部下「もとよりその覚悟でございます、閣下」

部下に信用されているアルブレヒト3世は満足気な表情を浮かべた。

部下「では残っている仕事をさっさと終わらせましょう」

アル3世「あーだりいーまじやってらんねー」

部下「あ、これが終われば寝顔も見れるし、添い寝もできるのでは？」

アル3世「よおおおし！…どんどん持ってこい！すぐに終わらせてやる！…」

続く…

第2話：成長したので（後書き）

ゲルマニアの情報ってあまり知らないんで適当です。
精霊出したけどこんな感じでいいのかな。

次回は、他の精霊が現れたり現れなかったり。
それとついに計画の一部が…
では

第3話：今後の計画を

さて、前回風の精霊ことストームが友達になりました。彼女は俺達と一緒にいると

とてもいい気分になれるそうです。何故かって？それは…謎です。

んで、初めての魔法の練習から1ヶ月がたちました。ゲルマニアにおける魔法の

権威であるマルモ先生が、俺達を3歳ながらもスクウェアクラスのメイジと認定

しました。そりゃいきなり城壁を純金に変えたからねえ。おまけに風魔法の

カッター・トルネードを軽くやったら庭がえぐれて大変なことになり、

ゴーレムを作ってみたら、どこかの国の「ギ」から始まって「シュ」で終わる

名前の人みたいな青銅製ではなく、この世界にない金属である、アダマンチウムで

できている5mほどのゴーレムが出来上がった。これはもう無敵でしよ。

あと庭にあった池で、デックスがアイス・ウォールを用いて池の水を氷にして立派な彫像を作った。あ、デックスってデクスターの愛称な。

で隣にいた俺がすぐさま固定化をかけまくって、解けない氷の彫像が出来上がった。

今は池から引っ張り出して、首都のど真ん中の広場に飾ってある。

それを見に

多くの人が地方からやってくる。あっという間に観光名所を1つ作ったのだった。

なんていう名前にするか考えたのだが、途中でめんどくさくなつてデックスに任せたら、「ひえひえの象」って名前にしやがった。親友よ、いくらなんでもそれはないぜ。

sonde、この最年少双子スクウェアのことは父上、つまりアルブレヒト3世が

大々的に発表し、周辺諸国はびっくり仰天した。まずトリステイン王国は

我がゲルマニアのことが嫌いらしく、

「野蛮人が嘘をつくな！」

と言いだめた。しかし、ガリア王国はとりあえずその子達の魔法を見せてくれ

と言ひ、クルデンホルフ大公国は、軍事・外交をトリステイン王国に任せて

いるのでトリステインと同じことを発言。

しかし、後日ウィンドボナにこっそりやってきたクルデンホルフの特使は、

大公からの手紙を持っており、そこには

「トリステインの連中が意味分かんないこと言つててすみません。

あいつらのことは無視してくれて結構です、大嫌いなので。

早く金返せよ、あの国の連中。とにかく私たちはゲルマニアの発言を

信用します。ぜひ一度クルデンホルフに来て下さい。歓迎します」

と書いてあった。確かクルデンホルフってトリスティンの貴族相手に金貸し

やっているんだっけ。いい国じゃないの、今度遊びにいこうっと。

アルビオンは何も言わなかった。どうやらいつも雲の上に浮かんで
いるから

下の様子は知らないようだ。

そして我らの宿敵（ いつの間にか）、ロマリア連合帝国。こいつ
らはやはり

他の国とは違った。偉そうな神官がやってきてこう言っただけだ。

「もしそれが嘘だったらみんな異端審問にかけるよ、おk？」

それを聞いて、俺とデックス、そしてアルブレヒト3世と部下はま
ず呆れて、
次に思わず笑ってしまった。

神官「な、何がおかしい！」

アル3世「あつはつはつは！何を言っているんだ？嘘ついただけで
異端審問？」

頭おかしいんじゃないのか？」

部下「それはさすがにできませんよね」

「それはない」

デ「んだんだ」

神官「き、貴様ら！ふざけたことを…」

アル3世「ふざけたこと、だと？」

ここで笑うのをやめて、真面目モードになった。

アル3世「お前、今ゲルマニアのトップに喧嘩売ったんだぞ？わか
つてんのか？」

神官「な、何のことだ!？」

アル3世「わしのことを『貴様』って言っただろ？これは不敬罪だ
な」

部下「同感です、閣下」

「私もそう思います、父上」

デ「右に同じく」

アル3世「というわけで、国外追放で我慢してやる。とつととロマ
リアに帰れ」

そついうと、部屋にいた兵士が神官の両手を掴んで引きずっていつた。

アル3世「ふ、バカなやつだ」

部下「ですが、これではロマリアとの関係が悪化するのでは？」

アル3世「心配するな。ウィリアム、きちんと録音しておいたかい？」

「もちろんです、父上！」

そう言つて俺は胸のポケットから青い石を取り出した。

部下「なんですか、それは？」

初めて見るものだったので部下は興味津々。

デ「先程の会話を全てこの中に保存したんですよ。そういうマジックアイテムです」

アル3世「凄いんだぞ、2人で作ったんだと！これを聞かせれば向こうが悪いと

いうことが証明できる」

部下「……………」

すると部下は黙りこんでなにか考え始めた。

アル3世「あれ、どうした部下？」

部下「…ウィル君、デックス君。君達は一体何者なんだ？まだ3歳なのに魔法が

全部使えるし、こんな優れたマジックアイテムを簡単に作れるし。

閣下に失礼ですが、正直異常ですよ」

「えーあーそのー」

デ「あ、あははー」

アル3世「…なにか隠しているな、息子たちよ」

「…話す前に人払いをお願いします」

アル3世「わかった。皆の者、下がれ」

そして部屋にはアルブレヒト3世と部下、俺とデックスだけになった。

そして2人で扉にロックを重ねがけして、音漏れしないようにサイレントも

忘れずにかける。

デ「これでよしと。じゃあ」

「実はですね…」

と、俺が話そうとしたとき。

ス「ちょっと待てし」

いきなり後ろにストームが現れてびっくりした。

デ「すすすすストーム!？」

アル3世「誰だ!？」

部下「くっ!」

いきなり現れた侵入者に部下は杖を、アルブレヒト3世は剣を構える。

「あー、彼女は敵じゃないですよ。ただの精霊ですから」

アル3世「なんだ、そうだったのか。精霊なら精霊って最初に言うてくれよ、

あっはっはっはって何だとお!？」

部下「せせせせせせせせ」

デ「あ、部下さんが壊れた」

部下「失礼しました」

部下の思考がい正常になったところで改めて精霊と対面する。

アル3世「しかし、精霊とは…」

ス「我は風の精霊なり。2人に問う。この子達がなぜここまで知能があり、

魔法技術に優れているのか知りたいそうだな？」

アル3世「そうだ、って聞いていたのか？」

ス「やろうと思えばこの大陸全ての会話を聞くことができる。それで、

この子達と一緒にいると実に面白そうなことがありそうだから手を

貸すことにしたのだ」

部下「お、面白そうなこととは？」

アル3世「何を考えているんだ、2人とも？」

デ「題して『この大陸は俺たちの物！ゲルマニアぶっちぎり大作戦！』ですよ」

その瞬間、部屋に沈黙が流れた。

アル3世「……………」

部下「……………」

ス「……………」

「…なあ、やっぱりお前って昔っからネーミングセンスないよな」

デ「ぐさっ！」

部下「昔から？」

あーこれはもういつそのこと全部ばらすか。

「実はですね、俺達は1度死んでいるんですよ」

そう言つて2人は話した。

前世で死んだこと。

神様とやらに色々と貰つてこの世界にやってきたこと。
などなど。

アル3世「信じがたい…が、あの魔法を見れば信用できる」

部下「そんなことがありえるなんて…」

ス「ん？おいウィリアム」

「え、なに？」

ス「他の精霊たちが来るぞ」

え？と聞き返す間もなかった。突然空気中の水分が集まって人の形になり、
そばにあったランプに火が巨大化して人形になり、地面から人形の土人形が現れる。その間わずか3秒。

「水ブルー！」

スライムみただけけど見た感じ巨乳なお姉さんがポーズを決めながら叫ぶ。

「土ブラック！」

日焼けしたみたいに肌が黒い筋肉モリモリなお兄さんもポーズを決める。

「火レッド！」

真っ赤な髪をした強気な女がポーズを決める。

ス「ストームホワイト！」

最初からいたストームもかつこよくポーズを決める。

「「「「4人揃って！ゴレンジャイ！」「「「

どぱーんつと謎のカラフルな爆発が4人（？）の後ろで炸裂する。

アル3世「

部下「

デ「までい！！4人しかいねえじゃねえか！」

「なのになんでゴレンジャイなんだよ！？つかなんで知ってるの？」

水「電波が届いたんでな」

デ「すげえ、電波を理解してやがる」

とりあえず自己紹介。

水「トリスティンの片田舎の薄汚れた水たまりからやってきた水の精霊だ」

アル3世「あっはっはっは！それってラグドリアン湖のことか？」

部下「それを水たまりって…」

「くそつたれのモンモランシーめ、きちんと掃除しやがれってんだ」

土「その辺で寝ていた土の精霊だ。穴掘りや地盤沈下なら任せろ」

デ「さらっと凄いこといったな」

火「なんでも燃やす火の精霊だ。気に入らない奴がいたら骨まで燃やすぞ」

「死体処理に有効だな。えっと、それで精霊の皆さんが何の御用で？」

呼んでもいないのに勝手に来たから理由が知りたい。そう思って聞いたのだが。

水「何を言っている？名前をつけてくれ」

デ「は？」

土「風だけ名前があるのは不公平だ。だから私にも」

火「頼むよ、かつこいい名前付けてくれ」

アル3世「えー、それでここに来たのかよ」

結局、水の精霊には「アクエリア」、土の精霊には「グランド」、火の精霊

には「マッチ」と名付けた。え、火だけ適当だっけ？気のせいだよ。

「さて、精霊も揃っているし、ここで計画を言いましょうかね」

俺は真面目になってアルブレヒト3世と向きあう。

「私達の目的は、超簡単に言えばトリステインとロマリアをけちよんけちよんに

潰して、ガリアと仲良くこの大陸を半分こして幸せに暮らす、というものです」

アル3世「…はあああああ！？」

野心の強いアルブレヒト3世でも、この発言にはびっくりしたようだ。

部下「そんな事出来るんですか!？」

デ「うまくやれば、ですが。そのためには閣下のお助けが必要になってきます。」

協力していただけますか？」

アル3世「…どこまで言ってもお前たちは私の愛しき息子たちだ。」

地獄の底まで付き合おう」

部下「ロマリアを潰す…面白そうですね、その話乗りましょう」

デ「部下さん、ロマリア嫌いなんですか？」

部下「隠していましたが、私は無神論者なので」

アル3世「だがなぜガリアとだけ仲良く、なんだ？」

デ「あの国は魔法大国なのでその技術を我が国に取り入れれば、素晴らしく

成長するでしょう。それに私達が提供する技術、これを平民にも提供すれば、国への忠誠心の向上や国の成長に役立ちます」

アル3世「平民にだど？」

「そうです。彼らがいなければ私たちは食事も食べないじゃないですか。」

王は民のためにあるもの。民なくして王はありえないんですよ」

アル3世「…いい言葉だな、気に入ったよ。それで？」

「まずは内側から変えなければなりませんね。こんな感じに」

俺は懐から分厚い紙の束を取り出した。それはここ数日間徹夜でデスクと共に書き上げた計画書の一部だった。アルブレヒト3世は部下と共にその内容を読む。その間に精霊たちと話す。

「ねえグランド、頼みがあるんだけど」

グ「なんだ、ウィル？」

「地面に埋まっている風石の位置を教えてくれたら、とっても嬉しいなって」

グ「そんなことならお安い御用だ」

デ「あれはエネルギーの塊だからな。有効に使われてもらおう」

「地図に、ってまともな地図がないんだっとな。早く作らないと」

アル3世「おい！こんなことできるのか！？」

すると計画書を読んでいたアルブレヒト3世が素っ頓狂な声を上げた。

部下「大胆ではある…しかし面白い！」

「でしょ？」

マッチ「ほう！楽しそうなピクニックのしおりだな！」

計画書を斜め読みしたマッチも笑いながら賛同する。

アクエ「そうだな、それにしても私のことも計画に入っているとはな」

アル3世「よし！これを採用だ！早速明日から動き出すぞ！」

「でも計画名だけは変えようね、あれはない」

デ「じゃあ何がいいんだよ？」

「そうだな…しばらく考えさせてくれ」

アル3世「それもそうだな。では行くぞ！」

みんな「おおおーっ！！」

アル3世「あ、魔法を見せるとか言っている国に行かないとな」

「じゃあ来週行きましょうか、まずは……」

第3話・今後の計画を（後書き）

もつめちやくちやですねー。一度アニメみなおそつかな。

やるが多すぎて何もしたくない今日この頃。

次回は他の国へ訪問します。
では

第4話・ガリアへ行くぞ！(前書き)

ついに部下の名前が！

第4話：ガリアへ行こう！

はい、ウィリアムとデックスです。今俺達はガリアに向かっている馬車の中に

いません。まだウィンドボナの城です。とりあえずガリアに手紙を出しました。

内容はいたってシンプル。

「ガリアさ〜ん、そっちに行きたいんですけど〜、いつ行けばいいですか〜？」

である。手紙が帰ってくる前に俺達は色々とやった。

まず、ゲルマニア国内及びこのハルケギニア大陸の正確な地図の作成である。

元々保管されていた地図を見てみたが、幼稚園児の落書きと同じようなものだった。

きちんとした国境を定めて、それを元に国を守る。これが基本である。

でも、日本の伊能忠敬さんのように何十年も歩いて測量する暇はないので、

ここは1つ、極めて現代的なあるものを使うことに。

〜その日の夜、ウィンドボナ郊外〜

「カウント開始。5、4、3、2、1、発射！！」

俺がカウントを終えると隣で待機していたデックスがカバーをめくってボタンを押す。

するとアトラスV発展型使い捨てロケットが打ち上げ台から発射された。ものすごい

煙があたり一面を覆った。俺達は遠く離れた場所にいたため問題はなかった。

ロケットは炎をたなびかせながら夜空へと飛んでいった。

デ「うまくいったな」

「初めて創造魔法を使ってみたけど、意外と簡単だな。じゃあ次だ」

デ「まだやるのかよ？」

「ストームが言ってただろ？今日は絶好の打ち上げ日和だって。だから今のうちに

打ち上げまくるんだよ」

デ「わかったよ、じゃあ次は何にする？」

「偵察衛星はいっぱいあったほうがいいからあと40個ぐらいやるぞ。それと

通信衛星とGPS衛星もな」

デ「GPSだって？そんなのまだ使わないからいいんじゃないか？」

「いや、原作知識が曖昧でどこにあるかわからないけど、ロシア製

の原子力潜水艦が

あるらしいんだよ。で艦内には未使用の核弾頭があるそうだ。それをなんとしても

ゲットするためにはGPS衛星が必要だ」

デ「いや、その理屈はおかしい。潜水艦なら水の中に沈んでいるんじゃないか？

なら偵察衛星で充分なんじゃ……」

「いいか、どの国の核弾頭にも全てカード型の位置把握システムが搭載されて

いるんだ。それから発信される信号で追跡が可能だ。そしてその信号つてのが

緊急周波数帯域で2種類の6桁の数字が15秒ごとに繰り返している、つまりGPS信号

なんだな」

デ「なんでそんなこと知ってたよ？」

「覚えてないのか？俺が前世で軍事オタクだったことを」

デ「…そういえばお前の部屋は武器庫と軍事資料館が混ざったような感じだったな」

前世で俺は部屋に大量のモデルガンや電動ガン、それに様々な軍事関連の書物、

おまけに有名な軍事作戦の一部始終が書いてある分厚い本などを持っていた。

「ま、昔話は後回しにして、まだまだ打ち上げるか」

デ「…あのさ、お前超能力使えるんだろ？」

「おう、それが？お前も使えるだろ？」

デ「それ使つてさ、人工衛星を直接衛星軌道上まで飛ばせばいいんじゃないね？つて

ふと思つたんだが…」

「……………」

デ「……………」

「…打ち上げたほづがかつこいいじゃん？」

デ「でも効率悪いぜ」

「ああああもう！わかつたよ！じゃあそつしよう！」

結局その後59個の人工衛星を宇宙空間に飛ばした。コンピュータとかどこに

置こうかと言う話になったが、打ち上げ台つくるためにこの辺の木を全部

吹き飛ばして更地にしてしまった。ちょうどいいや、ということここで

衛星からの信号を受信するための施設を地下に建てることに。電気はある

わけではないけど、グラウンドに穴を掘ってもらつて、地下に腐るほど埋まつて

いる風石のエネルギーを電気エネルギーに変換する風石発電システム

ムを

設置した。前世で工学部に所属していたデックスが考案したもので、まず風石から風を出す。その風でタービンを回す。電気ができる。タービンを回した風はきちんと浄化して、施設内の空調に使う。こうすれば環境汚染はゼロのクリーンな発電が出来るわけだ。

この施設は地球によくある核シェルターのような構造になっている。通信アンテナ群が地上を埋め尽くしており、その地下40mのところに

司令室やらがある。他にもレーションや水などの食品保管庫、ウィンドボナ城へとつながる地下通路、ここから約20リーグ（km）離れた

場所に設置した予備の通信アンテナ群と繋がっている外装通信ケーブル

などがある。あと、アンテナとかケーブルには全て固定化魔法をかけた。

かなり本気でかけたので、核ミサイルの直撃を受けても平気である。

作り終えてから2人は気がついたが、ここってゲルマニア軍の司令部兼避難所になってつけじゃないか？なのでこの施設の名前を決めて、地下施設の入り口に名前入りの金属板を付けておいた。そこには

「OPCENT GERMGHQ（ゲルマニア軍総司令部オペレーションズ・センター）」

と書いてあった。いつかこの施設は必ず使われるだろう。

工事自体は1時間ほどで終わったので、俺達はさっさとウィンドボナ城に

帰ることに。帰る前に周囲2リーグ(km)に認識阻害魔法をかけておいた。
これで誰も近づくことはできない。じゃあ帰るとするか。なにせ無断で
外出しているからな。今頃親父が発狂しかけているだろう。

〜同時刻、ウインドボナ城〜

S i d e 部下改め、ヴィンセント・フレデリック・ヴォン・アー
コウ

アル3世「うおおおおお!!!!息子たちよ!!どこへ行ったのだあ
ああああ!!!!」

メイド「閣下!城内にはいません!!!!」

兵士「警備の者も見っていないと報告しています!!」

アル3世「うわあああああん!!!!」

「はあ
…」

私の口からはさっきからため息しか出てこない。ウィリアム様とデ

クスター様が

行方不明になったのだ。メイドの報告では風呂から出た後にトイレに行くと言って

姿を消したそうだ。それを聞いた私の上司、アルブレヒト3世は最初は固まり、

次の瞬間大声で急いで探すように命令した。それが90分前。まだ見つからない、

という報告を聞いた閣下はなんと泣き始めてしまった。私も結婚しており、

妻との間に子供もいるから閣下の気持ちかわからないでもない。でもここまで親馬鹿とは…

閣下がテーブルに突っ伏して男泣きをしているので、私は床に落ちていた

書類を拾い集めた。すると昨日ウィリアム様からもらった例の計画書があった。

「閣下、これは大事な書類ですからきちんと…」

その時、私の目に書類の一部が見えた。そこには

「ちよつと外で仕事/ウィル、デックス」

と書いてあり、日付を見るとなんと今日だった。

「閣下！これを！」

アル3世「ぐすつ…なんだよヴィンス」

鼻をかみながら渡された書類を見た閣下は、今度はうれし泣きを始

めた。

アル3世「そうだったのか！無事なのか！よかったあああああ！
」

「よかったですねー（棒）」

ウィリアム様：デクスター様：急いで帰ってきてください…

S i d e o u t

帰ってみたら親父が泣きながら突撃してきた。おっさん、それは気持ち悪いよ。

ヴィンスさんも疲れた顔をしていたからちょっと悪いことしたかな、と反省。

怒られた後に、城の下まで伸ばした地下通路をつなげてきちんと施錠した。

二重隔壁の電子ロックだから「アンロック」の魔法では開かないように

しておいた。そして新しい部屋をもらってそこを自分達専用の作戦室にした。

出かける前に音を立てないようにして、デックスがウィンドボナ城の地下にも

風石発電システムを設置したのでこの部屋は電気が使える。いずれは城全体、そして街全体、最終的には国全体で電気が使えるようにするのが目標である。

デ「それで？衛星からのデータは来たか？」

「落ち着け、すぐに出るよ」

さつき作った司令部の地下と、この城の地下には創造魔法でちゃちゃっと作ったスーパーコンピュータ、クレイ社の^{ジャガー}Jaguarを2つ設置してある。この

スパコンは単純計算で1秒間に1700億回の計算ができる性能で、世界スパコンランキングで1位を取ったこともある。今は中国製のスパコンが1位なんだけど、中国製の物は爆発する危険性があるので使わないことに。あの国の物ってよく爆発するよね。

リストにまとめてみるとこんなに爆発したものがある。

「工場」

石油工場 爆竹工場 プラスチック工場 アルミ工場 爆竹工場

「建物」

ラーメン店 うどん屋 ネカフェ マンション 住居ビル 炭鉱
厨房 裁判所 原発施設

「家電」

TV PC 冷蔵庫 洗濯機 空調機 脱水機 湯沸かし器 変圧器
温水便座 IH調理器
偽iPod 携帯 自爆装置 電球

「家具」

ガラステーブル やかん 圧力鍋 ゆたんぼ 電気あんか 椅子
蒸し器 ガスコンロ

「乗り物」

バス タクシー タクシーのトランク 偽ヨタ車 飛行機 高速鉄道
バキュームカー

「食べ物」

インスタントラーメン タマゴ でんぷん 風邪薬

「その他」

タイヤ ライター ローソク 石油パイプライン マンホール 花火 電池 手榴弾
肥溜め 肛門 地面 道路 水道管 ガス管 電気メーター 配電盤 下水管
電車の電源ボックス 飛び降り自殺中のおっさん

とてもじゃないけど、こんな国の物は使えないよね。

話がずれたけど、とにかくキーボードを操作すると早速偵察衛星からの画像が

出てきた。ゲルマニアのデータ、他国のデータ、などなど。衛星が

かなり
高性能なので、今トリステイン国内を移動中の馬車の手綱を握っている人が
鼻くそをほじっているのも見える。

これを使えばきちんとした国境線の確立、及び国防ができる。
あと、例のGPS衛星だが、実はあまり期待していない。何故かというと、
いつからあるのかすらわからない原子力潜水艦の核兵器の信号装置だから
もう電池切れしてるんじゃないか？と考えているからだ。それにロシア製だし。

だけど衛星に反応があり俺達は狂喜した。

「いよっしゃあああああ！ほれ見るビンゴだ！」

デ「すげえ！さすが俺の親友だ！それで正確な場所は？」

「ちよつとまで、すぐに分かる。えっと、どこだここ？」

信号の発信源はゲルマニアでもガリアでもない場所だった。原作知識がないので
さっぱりである（ 以前も書いたけど、作者はアニメしか見ていません！）。

「まあいいや、俺達の遍在を送るか？」

デ「いや、スキルニルにしようぜ」

「じゃあそつしよう。ほれ」

近くの箱に入れておいたスキルニルを取り出して血を付けると2人になった。

「よし、お前たちにはこの場所に行つて潜水艦を見つけてここまで持ってくるんだ」

デ「攻撃されたら反撃していいからな。出来れば殺すな、半殺し程度で」

「了解！」

そしてダミーの2人は転移魔法で消えていった。

「よし、今日はとりあえず寝て、明日地図を持って行こうぜ」

デ「わかった」

作戦室を生体認証システムでロックしてからそれぞれ自分達の部屋に戻った。3歳になってから親父が部屋をくれたのだ。前世みたいに本棚にはたくさんの本がある。ベッドの前にはメイドがいた。

メイド「ウィリアム様、そろそろ寝る時間ですよ」

「ああ、わかっているよ、マギー」

この若いメイド、名前はマーガレットという。俺の専属メイドで、

小さい時から

世話になっているので大好きである。それに胸が結構な大きさなので（おそらくHだと思う）、とても幸せな気持ちになれる。

着替える前に俺はH&Amp;K社のHK45Tをホルスターごと外して枕元においた。

宝物庫をあさっていたら、信じられないことに新品同然のこれが油紙でぐるぐる巻きになった状態で見つかったのだ。デスクスもFN社のFive-sevenを手に入れて満足気だった。弾丸と予備弾倉も

かなりの数が保管されていたので、全部に固定化魔法をかけて金庫に入れて管理している。

マギー「ではあかりを消しますね」

月夜の光が部屋に差し込む中、俺は母性の塊に挟まれながら眠りについた。

隣の部屋でデスクスもまた、専属メイドのリーダーの胸に包まれていた。

しばらくしてガリアから返事が来た。中身は

「いつでもよかよか 歓迎するお」

だった。なかなかフレンドリーでいい国じゃないの。今のガリア国王って

誰だったっけ？名前忘れちゃったけどまあいいや。ではお出かけの準備を

しないかね。まずはルートの確認だが、これは既に決まっているからいいとして、

次は誰が行くか。俺とデックスはもちろん行くが、ヴィンセントさんは

親父がきちんと仕事するようにここにいないといけないからついていけない。

他に適当な人がいないのもう俺達だけでよくな？ということになり、

馬車3台でれつつらごーというものすごく適当なことに。それがゲルマニア

クオリティー。

「なあデックス。お前の言ったとおりだったよ」

デ「だろ？俺もいいこと言うだろ、たまには」

「だな。あー快適だ」

こんな会話をしている場所、それは馬車の中である。中世の馬車は木で作った箱に車輪をつけて馬で引いているようなものなので、衝撃吸収材なんてものは欠片もなかった。故に普通の道を走っていても

ケツが4つに割れるかと思うくらい揺れるのだ。そこでデックスの出番である。

彼は馬車を根本的に観直して、車輪と車体の間にゴムで作った衝撃吸収材を

入れて、さらに車輪にはサスペンションを搭載。これでおしりの心配はなくなり、快適な長旅ができるようになる。

俺達は馬車の窓からゲルマニアの田園風景を眺めていた。色々と育っていていい感じだね。でも貴族って連中は税率をキチガイかと思うくらいに上げて平民からお金を巻きあげて優雅な生活を送っている。もちろん中にはそうでない貴族もいるかもしれない。だがこの「貴族制」ってのは間違っているんじゃないか、と思う。

「時間は限られている。やれるところまでやるっぜ」

デ「そうだな。俺達でこの国をもっとよくしないとな」

「貴族からしてみたら大損害かも知れんが知ったことか。この理不尽な

制度は徹底的に破壊する。そして原作が始まる前までに確実に…」

デ「だな。ところで話は変わるが、アルビオンのことなんだが」

「それが？」

デ「計画書には何も書いていなかっただろ？完全に放置するのか？」

アルビオンのことを聞かれて、俺はちょっと考えた後、答えた。

「…いや、それなんだが考えがある。あの国にある風のルビーと始祖のオルゴール。」

「ぜひいただこうと思う」

デ「でもどうやって？スネークするのか？」

「いや、限り無く違法に近いけどぎりぎり合法的に、かつスピーディーにな。」

そのためには国内整備が完全に終わってから、すなわち作戦のフェイズ2が

完了していないとできない」

デ「つまり…軍を動かすのか？どういう名目で？」

「おいおい、アルビオンじゃちょっとした騒ぎがあったら？」

デ「…あーなるほどな。よくわかった」

「物分りのいい親友で嬉しいよ」

やつとのことですついたガリア。王都リュティスは人口30万人というハルケギニア

最大の都市である。いやはや凄いとこらだ。人がいっぱいいて賑やかだね。

で、俺達はこの賑やかな都市の郊外にある王族の居城・ヴェルサルテイル宮殿に

向かった。ジョゼフの先々代の王ロベスピエール3世によって森を切り開いて

造られた宮殿は、世界中から招かれた建築家や造園師の手による様々な増築物によって現在も拡大を続けている。薔薇色の大理石と青いレンガで作られた巨大な王城「グラン・トロワ」に案内された俺達はガリア国王と2人の王子との面会をした。

「お初にお目にかかります。ウィリアム・タイベリアス・フォン・ゲルマニアで

ございます、陛下」

デ「その双子の弟のデクスター・ハミルトン・フォン・ゲルマニアです、陛下」

ガリア国王（名前忘れた。確かロベスピエール4世だっけ？）が椅子に座ってヒゲをいじりながら話す。

「君達がゲルマニアの皇太子、というわけか。まだ若いのに礼儀正しくて

よいな。それで全属性でスクウェアクラスというのは本当のことなのか？」

ほーら、さっそく聞いてきたよ、このおっさん。

「もちろんでございます。お許しがいただければ魔法をお見せいたしますが」

「おお。見せてくれるか。楽しみだ」

移動しながら俺達は2人の王子と会話をする。ジョゼフとシャルルである。

ジョ「しかし3歳で全部スクウェアとはね。大したものだよ」

デ「そんなことはありませんよ。まだまだ未熟ですし」

シャ「そうだ、今日はシャルロットもここに来ているし一緒に見ようかな」

「シャルロット様というのは確かシャルル殿下の…」

シャ「そうだ、私の娘だよ。君達と同年になるかな」

ジョ「私の娘のイザベラともあとで会うことになるが、仲良くやってくれると」

「ありがたい」

なんでこの人達こんな砕けた話し方するんだろ？

で、庭。そこには国王やその臣下がいっぱいいた。その中にシャルロットとイザベラの姿も。

「じゃあ見せてくれ。とりあえずゴーレムを出してもらえるか？」

「かしこまりました」

俺とデックスはそれぞれ杖を出して若干本気で魔法を唱えた。

「クリエイト・ゴーレム！」

これが間違이었다。

Side ジョゼフ

俺は無能王子だ。魔法もろくに使えない。いつもドカンと爆発する。なぜそうなるのかはさっぱりわからないが、そのせいでいつも皆の者が

馬鹿にしている。だがチェスは得意だ！むしろ特技だ！

それで今日はゲルマニアの天才児がやってきて魔法を見せるといふ。私と同じように爆発でもしてくれないかな。だが彼らに魔法を教えてもらうという手もあるな…3歳でスクウェアになれたんだしなにかコツとかがあるのかも知れん…

なんてことを思っていたら本当に半端ない爆発が起きてしまったではないか！
まさか失敗したのか！？

S i d e o u t

何が起きたのかというと、俺達はこういうことをしたかったのだ。ゴーレムを作る。少量の火薬も錬金する。ゴーレムの背後で爆発させて
戦隊物よろしくかつこいいポーズを決めさせる。

だがテンションが上がっていたせいか、錬金する火薬を間違えてしまい、
黒色火薬ではなく、どういふことかヘキサニトロヘキサアザイソウルチタンが
出来上がってしまった。HNIWとかCL-20と呼ばれるこの爆薬は、2006年時点で
実用化、量産されている爆薬の中では最大の威力を持つ物であり、
爆速は
秒速9,400mというありえないくらいの代物である。

まあ錬金したHNIWの量は少なかったので、石床にひびが入った程度で済んだ。

ただ爆煙が凄いので観客は騒然としている。そして煙の中からアダマンチウム製の

15mの無傷のゴーレムがのしと出てくると（何故か）拍手喝采になった。

国王にいたっては笑っている。

「はっはっは！創りだしたゴーレムに攻撃したのに無傷とな！それほど強力な

素材で出来ているというわけか！素晴らしいじゃないか！」

デ「ありがとうございます、陛下」

ジヨ（なんだ失敗じゃなくて演出だったのか…ちえっ）

シャ「すごいな！一体あのゴーレムは何で出来ているんだ？」

やば、ここはちよろつと嘘を。

「我が国で発見された新しい金属でございます。決して壊れない強度を持っています」

<決して壊れないだって!？

<そりゃすごいな！

周りの人々も驚いている。

「うむ！わしは君達がスクウェアクラスであるとここに断言する！

皆の者、異論はあるか？」

「ありませーん

「よし。じゃあわしはこの後公務があるのでな。ジョゼフ、シャルル、後は任せたぞ」

ジョ「わかりました。さてウィリアム殿下、デクスター殿下。私とシャルルの

娘達とお茶でもいかがですかな？」

「喜んでお供させていただきます」

デ（ついにタバサとイザベラに会えるんだ！）

（そうだな。タバサ可愛いよタバサ）

デ（んだと？タバサは俺の嫁だ）

（お前頭に蛆でも湧いてんじゃねえのか？タバサは俺の嫁になるのだあ〜！）

デ（屋上へ行こうぜ…久しぶりにキレちまったよ…）

（ここに屋上とかねえし）

テレパシーで言い争いをしながら俺達は歩き続けた…

次回に続く

第4話・ガリアへ行く！(後書き)

ジョゼフとかシャルルとか国王の話し方に違和感があるのは気にしないでください。なにせ適当ですので。間違っているところがあったらバンバン指摘していただけるとありがたいです。

今回はタバサとイザベラと初遭遇。そして次の国へ。
では

第5話：あの子は俺の将来の嫁！！（前書き）

ヒロインの一部が登場

あとイザベラの年齢がわからなかったのでタバサと同じ年、つまり主人公達と同じ年ということにします！

もし間違っていたら言ってもらえると助かります。

6/16 ショウ様からご指摘があり、イザベラはタバサより2つ年上と判明しました。

第5話：あの子は俺の将来の嫁！！

はい、ウィリアムとデクスターです。今俺達はジョゼフ&シャルル兄弟に案内されて

「プチ・トロワ」にやってきた。ここにシャルロットとイザベラがいるそうなの。

シャルル久しぶりの国外からのお客様だし、何しろ同じ年だと聞いてシャルロットは

楽しみにしているよ」

「そうですか。私達も楽しみです、シャルル殿下」

ジョ「殿下と呼ぶのはよそうじゃないか。歳は離れているがお互い皇太子だし、

隣国通し仲良くやっていこう」

ゲルマニアで歴史を調べた結果、原作とは異なりガリアとゲルマニアとの間では

あまり、というか全く戦争が起きていないことが判明した。理由はお互いにあった。

俺達の父親であるアルブレヒト3世は自分の子供が欲しくて子作りに励み戦争なんか

クソくられ状態だったし、ガリアもガリアで前の国王のロベスピエール3世が大の戦争

嫌いだったこともあり、イギリスとフランスのように仲が悪いという状態ではなかった。

なので、ゲルマニアとガリアの関係は非常に良好であり、今回もスムーズに国境を

越えることが出来た。

デ「そうですね…じゃあそういうことで、ジョゼフさん」

シャ「君達はまだ3歳なのに礼儀もできているし魔法も使える。ゲルマニアは将来

凄いことになりそうだな」

「あ、あはは…（否定出来ない）」

デ「そ、そうなるかもしれないですね」

ジョ「この部屋にいる。入るぞ」

ジョゼフが扉をノックして部屋に入るとそこには。

「エレエヌ、ほくら」

「あははは」

実に美しい女の子が2人、部屋の中で遊んでいた。

シャ「シャルロット。お客様だよ」

「ほんと？」

その時、俺とデックスは胸をロケットランチャーで撃たれたような衝撃を受けていた。

(…ふつくしい)

デ(それ以外に例える言葉を見つけないことができない)

(だが、イザベラも美しいな。あの歌が似合うな)

デ(歌だって?どんな?)

(青色の〜長い髪を〜風がや〜さしくつつ〜む〜 ってやつ)

デ(ウイル、それ亜麻色や。じゃタバサは俺の物)

(ちょ!)

俺が止める間もなく、デックスがタバサの前に行ってきちんとお辞儀をした。

デ「ゲルマニアから参りました、デクスター・ハミルトン・フォン・ゲルマニアです。」

以後お見知りおきを

デックスの笑顔を見たシャルロットは顔を赤くしながら返事をした。

「…シャルロット・エレヌ・ド・オルレアンです。よろしくおねがいします」

と言って2人は握手した。俺も負けじとイザベラにあたってくちやんす。

「はじめましてイザベラ様。私はデクスターの双子の兄で、ウィリアム・

タイベリアス・フォン・ゲルマニアと申します」

必殺女殺しスマイル！ 命名したのは「デ」から始まる名前の俺の弟。

「へ、へえ、あなたがあの天才兄弟の兄なのね。あたしがイザベラよ。よろしく」

するとイザベラも顔を赤くしながら俺と握手した。そんな2人を見ていた父親は。

シャ「おやおや」

ジヨ「これはこれは…面白いことになりそうだ」

娘達の変化を見て笑っていた。

使用人が下がって紅茶を飲みながらみんなで話す。

シャルロット（以後シャル）

「デックスはもうまほうつかえるの？」

デ「うん！シャルロットもすぐに使えるよ」

シャル「たのしみ！」

イザベラ（以後イザ）

「にしても全属性でスクウェアなんて一体どれだけ練習したの？」

「（ここは適当に）実はですね、最初は全然魔法が使えなかったんですよ。」

マルモ先生という老練のメイジの方に教えてもらったところ、こんなことに」

イザ「なるほどね。あたしも早く魔法使いたいな」

ジヨ「俺が魔法を使えないからもしかしたら娘のお前も使えないかも知れんな」

そうだった、ジヨゼフは虚無の担い手だから普通の魔法使えないんだっけ？

今のうちのこっそりと教えておくか。

「ジヨゼフさんは魔法使えていますよ？」

ジヨ「なんだと？」

シャ「えっ？」

2人はその言葉に振り向いた。

「実は私、魔力の流れといいますが、とにかくそんな感じのものが見えるんですよ。」

それで私が観る限り、ジヨゼフさんの魔力の流れは正常ですよ。それに魔法が

使えないならそもそも発動すらできないじゃないですか、普通」

シャ「それはそうだね。じゃあなんで兄さんの魔法は爆発しかなかったんだ？」

デ「…これは仮の話ですが、4大属性に当てはまらない魔法かもしれませんよ？」

ジヨ「まさか、虚無だと言いたいのか？この私が？」

「可能性が一番高いのはそれです」

ジヨ「ふむ…虚無か。面白そうだな。あとで父上にも聞いてみよう。それよりも

ウィリアム、いやウィルと呼ばせてもらおうぞ。イザベラが魔法をきちんと

使えるか見てやってくれんか？」

イザ「お父様！？」

ジヨ「私が仮に虚無だしたら娘のイザベラもそうなるかもしれない。一度見て

もらいたいのだが」

「お安い御用です、ジヨゼフさん。じゃあイザベラ、ちょっと失礼」

そう言うと俺はイザベラの頭に手を置いてなでなでしてあげた。

イザ「うえっ！？ななな何してんだい！」

「こつすると将来きちんと魔法が使えるようになるおまじないです

よ

というのは嘘で、イザベラの体内の魔力循環をきちんとあげた。原作では

魔法使えなくてシャルロットを嫉妬していたからね。

イザ「なんかきもちいい…」

眼を閉じて笑顔でイザベラがそうつぶやく。

「はいおしまい」

イザ「あっ…」

手をはなすとイザベラはものすごく残念そうな顔をした。

「イザベラの魔力循環は問題ないですよ。普通に魔法が使えると思います」

ジヨ「そうか、よかったよかった」

シャ「しかし魔力の流れを見ることができるとは流石だな」

デ「いえいえ、そんなことは」

シャル「デックスすごい」

デ「ありがと、エレーヌ」

イザ「それはあたしだけが呼んでいいんだよ！」

「いいじゃないか、イザベラ。仲良しだし」

イザ「むむむ…」

デ「おいウィル、そろそろじゃね？」

「ああ、そうだな」

外を見ながら俺とテックスは話す。

「ジョゼフさん、シャルルさん、実は私たちは次の国へ行かなければなりませんので」

デ「今日はこのへんで帰ります」

ジヨ「そうか、残念だな。次はもっと話をしようじゃないか」

シャ「そうだね。また馬車で移動かい？」

「いえ、そろそろ我がゲルマニア軍の最新の船が到着する予定です」
すると使用人の1人が部屋に飛び込んできた。

「ジョゼフ殿下！シャルル殿下！外に大きな船が突然現れました！」

デ「ほくらきた」

外に出ると、そこにはゲルマニア軍最新の風石軍艦が浮かんでいた。動力源は風石、
というのは真つ赤な嘘であり、本当は常温核融合炉と反重力ジェネレーターのおかげで空を浮いていられる。

ジヨ「これは…今まで見たことのない船だ！」

シャル「かつこいー！」

イザ「うちの両用艦隊とはぜんぜん違うスタイルだね」

それもそのはず、モデルにしたのはアメリカ海軍が誇るアーレイ・バーク級ミサイル

駆逐艦フライト？Aだからだ。武装もまったく同じで、乗組員は替えがいくらでも

きくターミネーターである。ただし名前もそのままだといかん、とデックスが

言い出したので変えることにした。その結果、こいつはヴァリアント級ミサイル

駆逐艦と呼ばれるようになった。「valiant」とは「勇敢な」とか、「雄々しい」

とか、「英雄的な」、っていう意味である。

シャル「いかにも鉄の船、って感じだね」

デ「そうですね。さっき見せたゴーレムと同じ素材で造られていますので」

ジヨ「じゃあこれは絶対に壊れない船ということか！すごいな！」

イザ「でもここには降りれないよ？どつするんだい？」

デ「フライで飛んでいきますよ」

シャ「なるほどね。ところで次はどこに行くんだ？」

「クルデンホルフ大公国へ向かいます」

ジヨ「そうか。てつきりトリスティンに行くものかと思っていたぞ」

デ「あの国はねえ……」

「ゲルマニアのことを野蛮人野蛮人うるさいから完全に無視しようかと」

シャ「無視って……」

デ「ハルケギニアの中で一番の魔法先進国であるガリア国の王に認められたと」

公表すれば誰だって納得するでしょう」

「ま、国名が「ト」で「リスティン」な国はきつと気に入らないでしょうがね」

ジヨ「ははは！なるほどな。アルビオンには行くのか？」

デ「アルビオンですか…特に何も言っていないし行かなくてもよいかと」

「それではまた近い内に会えることを祈っています」

ジヨ「おう！また会おう！」

シャ「今度は我々がそっちに行くよ！」

「そうですね。歓迎しますよ」

シャル「また会えるよね、デックス？」

なんか涙目になってるシャルロットかわええええええ！！

デ「もちろんだよシャルロット。また遊ぼうね？」

シャル「うん！」

「じゃあね、イザベラ」

イザ「…絶対に」

「ん？」

イザ「絶対にまた来るんだよ！いいね！」

「わかってるよ。必ずここに戻ってくるよ。じゃあね」

イザ「ぐすっ…うん！」

一筋の涙がイザベラの頬を流れ落ちたが、すぐにイザベラは笑顔になった。

そして俺達は船に飛んでいき、艦橋に陣取り命令を下した。

「全速前進！目標、クルデンホルフ大公国！」

「アイアイ・サー！」

時速200リグ(km)のスピードで船はクルデンホルフへと向かった…

ジヨ「おいおい、ずいぶんと早いな、あの船」

シャ「一体どれだけの風石を使っているんだろうっね」

シャル「デックス行っちゃった…」

イザ「約束しただろ、エレーヌ。また一緒に遊ぼうって。だから待っていよう？」

シャル「うん！」

「ゲルマニア空軍所属ヴァリアント級ミサイル駆逐艦1番艦「ヴァリアント」艦橋」

そこでは艦長席に座ったウィルが完成したハルケギニア地図を見ながらのんびりと考え事をしていた。国内地図の方はすでに親父に渡してあるので、それを元にして俺達の計画書通りに事は進んでいる。デッキスは艦内を歩きまわって機械などのチェックを行なっている。

俺はクルデンホルフ大公国の隣にあるそれなりの大きさの国の事を考えていた。

トリステイン、トリステイン。そう、クソツタレの国、トリステイン。人は誰しも

孤島にあらず、要するに人はみなもちつもたれつ。だがことにトリステインに関しては話が別だ。キーワードはクソ、そうトリステインはクソツタレなのだ。つまり

この国の人間（貴族）は自分の国が一番だと勘違いしていて、他の国が言う事を

無視する傾向があり、あまつさえ他の国が持っている技術を自分のものにしようと

する。信用していないにもかかわらず、だ。つまり「技術」は欲し

いけど、それを
持っている「国」は信用しない。

と、まあ、こういうわけだ。だが「技術」を盗まれた！と怒る事な
かれ。

クソに期待するほうが間違っているのだから。

うん、いったいどういふことかって？まっ、気にするな。これぞ
トリステイン、
クソツタレの国。はじめからずっとそうだった、これからだってそ
うだろう。

なのでそんなクソに行く必要などどこにもないので、我々はクルデ
ンホルフへ

行くことにしたのだった。それにロマリアにも行く気はない。この
前神官を

国外追放したから関係悪化しているし。まあじきにそんなことはど
うでも

良くなるんだがな。

ただ、どうしてもクス、いやトリステインには行かなければならな
い時がある。

まだ先の話だが絶対に行かないとね。貴重な人達が死んじゃうし、
うん。

それまでにゲルマニア国内魔改造計画、すなわち「新たな日の出」
作戦を

完了させる必要がある。かなりの強行軍になるが、それをやれるだ
けの力を

俺達兄弟は持っているので全力でやろうではないか。

デ「ただいま」

「おう。艦内の調子はどうだった？」

デ「問題なんてどこにもなかったぜ」

「それは重畳」

デ「にしてもシャルロット、可愛かったなあ…えへへ」

…訂正、「俺」が全力で頑張ろう。女にうつつを抜かしている奴は放っておこう。

第5話：あの子は俺の将来の嫁！！（後書き）

一国の王子なんだから敬語使えよ、って思う人もいるかも知れませ
ん。

ですが私は敬語が嫌いなのでご了承ください。

次回はクルデンに行きます。

では

第6話：スネーク！（前書き）

タイトルを見て今回何が起こるのかわかるでしょう、たぶん。

あと今回から台詞の前に名前入れるのをやめました。

私はあまりいいとは思わないんですけど、やめたほうがいいという
感想をいただいたので。

第6話：スネーク！

「ゲルマニア空軍所属C-130Jスーパーハーキュリーズ、貨物室」

さてさて、今私ことウィリアムとデックスは前世のとあるゲームみたいなお話をやろうと

しています。現在クルデンホルフ大公国上空、高度25,000ft、メートルに直すと

7,500mに到達しました。俺達はふたりしてパラシュートと酸素ボンベを背負って

ハイテクなヘルメットもして待機しています。なんでこんなアホみたいなお話を

しているのかというと。

「数時間前、「ヴァリアント」艦橋」

「なあデックス」

「なんだ？」

デックスは書類から顔を上げてこっちを見た。

「クルデンホルフってさ、軍事及び外交はぜんぶトリスティン王国に任せているんだよね？」

「ああ、そのようだがそれが？」

「つまりさ、俺達が普通にあの国に入ったらトリスティンの連中にもかち合っつてことだ」

「えーそれはいやだな。俺達はクルデンホルフと話をしに行くのに横から文句言っつて

くるかもしれないな」

「だろ？だからさ、今回はトリスティンの連中にバレないように極秘裏に潜入する

ことにしよう」

「極秘裏に？」

「おうよ。そこでだ、まず乗り物がある。これじゃないやつ」

これ「ヴァリアント級ミサイル駆逐艦

「これじゃ駄目か。じゃあ何に乗って行くんだ？」

「これだ」

そう言っつて俺は創造魔法でC-130Jを作り出した。ロッキード・マーティン社の

前身の1つであるロッキード社のC-130ハーキュリーズに近代化改修を施した輸送機

であり、愛称はスーパーハーキュリーズである。あ、ハーキュリーズっつてというのは

「ヘラクレス」の英語読みだよ。

「ほう、これが。かつこいいじゃないk…ま、まさかこれから飛び降りるんじゃない？」

「ないだろうな!？」

「さすが俺の親友！よくわかったな！どこぞの蛇みたいに鳥になるうぜー！」

「」

その瞬間デックスは持っていた書類を落とし、顔面が蒼白になった。なんでかな？

って思っただけけど、前世のことを思い出して俺は納得した。

「ああ、そうだったな。お前って確か高所恐怖」

「あああああ！！！それ以上言うな！もう高いところは嫌いなんだ！」

彼は前世で飛行機事故に巻き込まれたことがあった。事故と言っても墜落した

わけではなく、大きな乱気流のおかげで飛行機の高度が一気に2,000mほど落ちた

のだった。そのせいでデックスは重度の高所恐怖症になり、ある一定の高さ以上には行けなくなった。

ちなみに今俺達がつている船はデックスが念入りに魔法をかけたので、

絶対に乱気流に巻き込まれないし、しかもストームにも頭を下げて、船が

飛んでいるときに揺れないようにしてあるので、彼は安心して乗れる。

「大丈夫だって。パラシュートがあるんだし問題ないじゃん」

「ば、パラシュート？」

「そつだよ。今回俺達は夜間に潜入する。そのほうがバレにくいし、
んで、

降下方法はHALOで…」

「まで、HALOってなんだ？ゲームなら知ってるけど」

「それじゃねえよ。HALOってのはHigh Altitude
Low Openingの略で、日本語に

訳すると「高高度降下低高度開傘」ってなる。パラシュートによる
潜入作戦に

用いられるために開発された降下方法で、視認外である高高度（
10000m前後）を

飛ぶ航空機から飛び降り、自由落下して低高度（300m以下）
でパラシュートを開き

敵地に降下・潜入する方法だ」

「でもよ！パラシュートの降下って危険なんじゃ…それに低高度な
んで！」

「低高度で開傘すること自体が危険に思つかも知れんが、実際は約
300km/h以上には

加速しないし、むしろ空気抵抗で減速するので、一般の降下作戦
と比べても危険性

自体はほとんど変わんねえよ。心配すんなって、やばくなったら魔法使えばいいだろ？

それに」

そこで俺はデックスの両肩に手を置いて話した。

「もしシャルロットにこのこと知られてみる？将来彼女が召喚する使い魔の

シルフィードと一緒に乗れないぞ？今のうちに克服しておいたほうがいいんじゃないか？

ないのか？」

「げっ！！」

シャルロットの名前を出した途端、デックスは背筋を伸ばした。

「まゝお前に任せるけど、シャルロットにダサイって言われるかもね」

「それは嫌だ！わかった！お前に任せるよ！」

「良い判断だ」

その後俺達は飛行機に乗り移って現在に至るといっわけだ。船は帰らせた。

「」

「落ち着けよ」

そして予定地点に到達したので貨物室内のランプが赤になり、後部のハッチが

ひらきはじめた。そこからは2つの月が綺麗に見える。

「おー、いい夜だな。スカイダイビングにはもってこいだ！」

「……………ああ」

さっきからデックスはハッチに背を向けて決して外を見ないようにしている。

「大丈夫だって、俺を信用しろよ」

「わかっている！わかってはいるんだが…」

「まあ飛び降りちまえば後はどうにでもなるし。それじゃあ復習だ。この高度だと

気温がマイナス54度になるって言ったよな？」

「ああ、聞いたよ」

「重症を負う危険性が40%以上ってことは？」

「もう耳にたこができるくらい聞いた！」

「ならいい。あとは俺についてこい！」

「…よし」

そしてランプが緑になった。降下開始の合図だ。

「鳥になるぞ！いやっほおおおお！！！」

「うっうっう！！シャルロット！愛してるぞおおおお！！！」

2人は飛行機から飛び降りた。そこは真っ暗な世界だった。地上にはわずかに

明かりが見える。俺達は顔を真下に向けて降下していった。後ろのほうから

デックスの悲鳴が聞こえた気がしたが気のせいだろう。

俺はヘルメット内部に映し出されているヘッドアップ・ディスプレイに表示されて

いる高度計から目を離さなかった。それはあつという間にゼロに向かって

かっている。そしてヘッドアップ・ディスプレイの中心には目的地、すなわちクルデンホルフ

大公の屋敷の座標が赤く表示されていた。これで自分の行く場所を見失うことはない。

高度が1,000mを通過した時点で姿勢を正して、300mを切ったところでパラシュートを

開いて、無事に2人は大公の屋敷の近くに着陸した。もちろん誰にも気付かれずに、だ。

「無事か、デックス？」

俺が声をかけると、デックスは何故か小さな声で笑っていた。

「くっくっく…楽しい。実に楽しいな」

「…変なスイッチ入ったな」

「おかげで高所恐怖症が治った。感謝するよ」

「そうか、よかったな。それじゃあ行くぞ」

「ああ」

2人は装備一式を帰還途中のC-130Jの貨物室に転送して、屋敷へと向かった。

「ここか…」

屋敷が見えるところまで来た俺達はどうやって入ろうか考えていた。事前に手紙は送っており、「近いうちにそちらに行きます」と書いておいた。

俺達が馬車でガリアに行っている間に届いているはずなので問題ないはずだが…

「あの門番…トリスティン兵か？」

門には4人の武装した兵士がいた。俺はデックスと同じように双眼鏡で観察する。

「ん〜いや、あれはこの兵士だ。だから顔を見られても問題ない」

「わかった。それじゃあ行こう」

そして堂々と門へと歩いて行くと、当然のごとく門番に武器を向けられる。

「貴様ら！こんな時間に何の用だ？ここは大公殿下のお屋敷だぞ！」

こんな時間って…まだ夜の9時ぐらいじゃないか。

「帝政ゲルマニア第1皇太子、ウィリアム・タイベリアス・フォン・ゲルマニアだ。

大公殿下にお取次ぎ願いたい」

「同じく帝政ゲルマニア第2皇太子、デクスター・ハミルトン・フオン・ゲルマニアだ。

大公殿下からの手紙を持っている。これだ」

そう言つてデックスが手紙を門番に渡す。門番は疑いの目をこちらに向けながらも

中身を読む。すると血相を変えて頭を下げた。

「ししし失礼いたしました！どうぞお入りください！」

「夜分遅く申し訳ありません、大公殿下」

「いやいや、構いませんよ」

そう言うのはクルデンホルフ大公。名目上ながらも独立を維持できるほどの豊かな財力を

背景に、トリステイン国内の多くの貴族たちに金を貸している。そのためトリステイン

国内にかなりの影響力を持つ。ただしトリステイン王家とマザリーニ、ラ・ヴァリエール

公爵家のみは頭が上がりず、娘に対してもこの3者には逆らわないよう戒めている。

「そちらからの手紙に書いてあったとおり、この会合は表向きなかつたことにします」

「助かります、大公殿下。ことにトリステインの連中には聞かれないものでして」

すると大公はいらついた表情を浮かべた。

「私もだよ、デクスター殿下。あの連中、いつになったら金を返すんだ？」

「失礼ですが、クルデンホルフ大公国はトリステインに対してどれだけの金を

貸しているのですか？」

と質問してみたが、じつはもう知っている。トリステインとロマリア、それに

ここクルデンホルフに俺とテックスのスキルニルを送り込んである

のだ。もちろん
顔は変えてある。そのスパイ情報網のおかげでかなりの情報を手に入れた。

ガリアには送り込んでいない。何故かというところあの国とは友好関係にあるため、
情報のやりとりが盛んなのである。

「実はな…」

そう言つて大公は俺達に耳打ちした。

「そ、そんなにですか!？」

「ああ。早く返して欲しいものだ。いい加減あの国に頭をさげるのは嫌なんぞな。

おっと失礼。客人の前で愚痴をこぼしてしまった」

「いえいえ、お気になさらないでください。それよりも…」

そう言つて俺は満面の笑みで大公に話しかける。

「クルデンホルフ大公国が正式な独立国になることができるプランがあるのですが、

興味がありますか、大公殿下？」

「な、なんだつて!？」

当然のごとく、大公は驚いた。だって今までどうやってもそれができなくて困っていたからね。

「ど、どうすればそんなことができるのだ!？」

「これをお読みください、大公殿下」

そう言っでデックスが書類を渡す。それは「新たなる日の出」作戦のフェイズ2、

すなわち国内整備後に初めて行う予定のある計画だった。それをじっくりと

読んだ大公は信じられないといった表情を浮かべながら聞いてきた。

「…これは、すごい。これならトリスティンから解放される!我が国が!だが、我々は

あなた方に何を提供すればいいのだ？」

「お金はいりません、そこまで困っておりませんので。ただ強いて言えば…ベアトリス

姫殿下を私の妻として迎え入れたいのですが」

「べ、ベアトリスを!？」

「まあ、まだ先のことですけどね。最終的な判断は全て姫殿下にお任せしますし」

(お前! 抜け駆けしやがって!)

(うるせえ! お前だつてタバサに先制アタックしただろ!)

「…わかった。この計画通りに事が進んだら、ベアトリスと会わせよう」

「ありがとうございます、大公殿下」

「ではそろそろ我々は引き上げます。夜遅くに失礼しました」

「そういえばどうやってこの国に入ったのだ？」

「空から飛び降りてきました」

「は？」

大公が口をあぐりあけている。

「この国の上空を船で通過してそこから飛び降りてフライでやってきました（嘘）」

「そうだったか：それならばトリステインの兵士にも気がつかれないな。さすが天才兄弟

ですな！」

「いえいえ、そんなことは」

「ではでは」

そう言っただけ俺達は大公の屋敷を後にして、他に人に見られていない場所まで行って

レポートで国外へ脱出。そのままレポートを繰り返してヴァリアント級ミサイル

駆逐艦へ戻った。

「ふう、俺シャワー浴びてくるわ」

「あいよー」

俺は1人艦橋でまた考え事を始めた。

「新たなる日の出」作戦。これは全部で4つのフェイズに分かれている。

フェイズ1：国内整備（近代化、貴族制の撤廃、及び常設軍の創設も含める）

フェイズ2：クルデンホルフ大公国の正式な独立の支援、及び：秘密

フェイズ3：アルビオン内戦への介入（レコン・キスタのこと）

フェイズ4：……………

まずフェイズ1だが問題が大有りである。というか問題しか無い。近代化はそれほど問題ではない。俺達の力で無理やり技術力を上げる。

問題は急激に上がる技術力や制度に国民がついていけないかどうか、である。

マイクロソフト社製のゲーム「Rise of Nations」をやったことのある人は、

わかるかもしれないが、図書館で時代進化などの研究を行う時に、チートで

いきなり時代を「中世」から「現代」まで引き上げる。それと同時に他のテクノロジーも一気に向上させる。それがフェイズ1なのだ。

解決策としては、

1：無理やり洗脳

2：学習装置テストメントで覚えさせる

が上がったが、もちろん2番の学習装置テストメントを使う。これならあつという間に覚えることができるし、記憶もそのままだし。

貴族はどうするかだが、さっき言ったスキルニルのスパイを各領地に送り込んでいて、

ゲルマニアの貴族はどうなのかを調べさせた。その結果、ゲルマニア国内の貴族のうち、

9%の貴族は領民にも慕われており、うまく領地運営を行なっている事がわかった。

その中にはツエルプストー家も含まれている。そして35%の貴族は、どちらかというところ

いいんじゃない？という感じだった。で、41%の貴族はどちらかというところだめでしょ？

という感じで、残りの15%の貴族はもう死ねよという感じだった。なので、フェイズ1を

終える頃にはあまりいい印象がない56%の貴族には早々に”ご退場”頂いてもらい、残りの

貴族には他の仕事を与える。つまり、議員になってもらう。新しく作る議会は、任期が

5年間で、比例代表制による選挙で選出された70人の議員で構成される一院制にする。

それに伴い、国名も変える必要がある。国王を頂点とした立憲君主制国家、つまり

帝政ゲルマニアではなく、ゲルマニア王国になるのだ。初代国王は引き続き親父で

内閣とともに行政権を執行する。デックスは財務官、俺は国防長官となる。また2人で

国務長官も兼任する。あとの主要ポストには元貴族を採用予定だ。

：それじゃ独裁じゃないカ、と言いたくなるかもしれないが、これはあくまで最初の

5年間の話である。それ以降は国民が判断するので、国民を裏切らないよう、一生懸命
頑張るしか無いのである。

そこまで考えていたときに、通信機がなった。

「はいもしもし」

すると原潜奪取に向かった俺が応答した。

「原潜ゲットしたよ。水没してたけど核兵器は全部無事だ。原子炉は死んでいるけどね」

「ごくろうさん。敵に襲われなかったか？」

「いや、なんかでつかい龍がいてさ、顔隠していたから問題なかったけど、

襲われそうになったから感電させといた。で、その間にゲット」

「そうか、わかった。で、今どこにいる？」

「バレないようにゲルマニア国内の沿岸に隠しておいた。これが座

標
」

「うむ、わかった。すぐにそこに行く」

「はいはい。あとこれが写真ね。じゃ」

そして送られてきた写真を見たが。

「これかよ……」

写真にはロシア製のヤンキー型原子力弾道ミサイル潜水艦が映っていた。

これには確か16発のR-27潜水艦発射弾道ミサイルが搭載されていたはずだ。

弾頭には1,000ktの核弾頭が200ktが3つのMIRVだった気がする。

俺がその画像を見てびっくりしていると、シャワーを浴び終えたデックスがやってきた。

「どうした？」

「ああ、原潜を見つけた。核兵器もだ」

「よっしゃあ！で、それどうするの？」

「…そうだな、ロマリアヤトリスティンへの牽制に使おうと思う。」

「つまり、洋上でドカーンッ！ってか？」

「なるべくそれがいい。陸地でやるとえらいことになるし。今からその潜水艦を見に行く。」

でも早く帰りたいからテレポートしようぜ」

「了解！」

そして2人は一瞬で潜水艦を隠してある場所まで飛んだ。そこは海が目の前にある

場所で、よくテレビドラマに登場するような断崖絶壁だった。その崖の下で

俺達のスキルニルが待っていた。

「おお、ご苦労さん。それで原潜は？」

「ああ、ここの下を掘って原潜基地にしたんだ。そこに保管してある」

「艦内の水は全部排水して、ケーブルつないで電気を通してあるから直せば

また使えるぞ。あと核ミサイルだけど、確認したら旧ソ連製のR

-27型潜水艦

発射弾道ミサイルで間違いない。16発あって、弾頭には1、0

00ktの核弾頭が

搭載されている」

「今すぐ撃てるのか？」

「それがそうでもないんだ。ミサイルの燃料が劣化している可能性がある。確認

できないから念には念を入れて入れ替えたほうがいいと思う。そ

れに電気系統の

劣化も発見した。これは俺達でさっさと直したぞ」

「すごいな、とても大きい…」

初めて原子力潜水艦を生で見るデッキスは見とれている。俺はというと、前世で

アメリカ海軍の横須賀基地の基地開放日に遊びに行ったときに何回か見ている。

ちなみにヤンキー型原子力潜水艦はこんなスペックである。

全長：128 m

全幅：11.7 m

喫水：7.9 m

水上排水量：7,850 t

水中排水量：10,100 t

機関： - 700

出力：180,000 kW

速力：水上16 kt 水中27 kt

乗員：114名

武装

533 mm魚雷発射管×4、600 mm魚雷発射管×2、魚雷×16
D-7発射管×16（潜水艦発射弾道ミサイルR-27/RSM-25）

「まあでかいな、すごく。で、原子炉は動かないんだよね？」

「ああ、まったく。だって炉心がないんだもん。動くはずがない」

「じゃあ原子炉とつばらって常温核融合炉を入れてみたら？」

「おお、それはいいね。速度も早くなるし」

「まあ実際にこいつ使うかどうかは置いて、じゃあそれやっ
いて。終わったら

また連絡よろ」

「あいよー」

そう言っただけ俺達はウィンドボナ城に帰還した。

「ただ」

「いま」

2人して親父の部屋に入ると、そこにはヴィンセントさんと親父が
いた。

「お帰りなさいませ、ウィリアム殿下、デクスター殿下」

「おおおお！帰ってきたか！で、どうだった？」

「クルデンホルフ大公国は我が国の計画に同意しました。これでう
まくいきます。

あとガリアですが、今のままなら仲良しなので問題ないかと」

「それで父上、こっちはどうです？」

「うむ！すでに全貴族へウィンドボナ城へ出頭するよう手紙を出し

「である」

「それに正確な地図のおかげで各領地の線引きも完了し、国境の正確な位置も特定

しました。現在トリスティン側の国境には極秘裏に部隊を集結させています。

何か言われたら国境警備の部隊といえは問題ないでしょう」

「よっしゃあ！さすが父上にヴィンスさん！」

「ではとうとう……」

2人が期待の目を俺達に向ける。

「ええ。『新たなる日の出』作戦（Operation New Sunrise）、フェイズ1、発動！」

「「「おーっ！」「」」

「やっぱりその作戦名変えねえか？なんか気に入らないんだよね」

「昔のお前がつけたへんちくりんな作戦名よりはましだろ？」

「私も同感です」

「ウィルの言う通りだな」

「うっ…いいじゃん、『ゲルマニアぶつちぎり大作戦』って…」

「「「ないない」「」」

第6話：スネーク！（後書き）

あはは〜うふふふ〜ニートになりたいな〜

次回は国内で。
では

第7話：良い人だけをチヨイス！（前書き）

無理やりDAZE

第7話：良い人だけをチヨイス！

それから2週間後、ウィンドボナ城、午前10時

今ここにはゲルマニアの全ての貴族が集結していた。アルブレヒト3世の勅令なので

みんな従うしかない。実はこのゲルマニアという国、貴族が利害関係の上で寄り集まって

できたので、親父にに対する忠誠心はあまり高くないのである。そのせいで、今ここに

集まっている貴族の中からは不満の声も少なからず聞こえる。

「なんで全貴族を集めたりするんだ？」

「まったくだな。面倒くさいったらありゃしない！」

「何を考えているんだ、この国のトップは？」

でも、中にはアルブレヒト3世に忠誠を誓っている貴族もいる。

「だが例の天才双子皇太子殿下のおかげでこの城は凄いことになっているじゃないか」

「そうだな。スイッチ、だったか？それを押すだけで明るくなるとは大したものだ」

「しかしそれって魔法ではないらしいぞ？」

「いいじゃないか、魔法でなくても。いちいちライトと唱える手間

が省ける」

そう、今ウィンドボナ城には電気と水道、下水道が完備されている。ガスはまだ無い。

なので廊下や部屋の天井には蛍光灯がついており、机にも電気スタンドがある。

「いや、それでもプリミル教の教えに背くことになるのでは…」

ある貴族がそう言った瞬間、その周りにいた貴族全員が口をそろえてこう言った。

「プリミルなんかクソくらえ!!」

その言葉に会場は一瞬沈黙するが、すぐにほとんどの人々が同意した。さつきまで

「アルブレヒト3世逝ってよし!」

と思っていた反対派の貴族も、

「アルブレヒト3世万歳!」

の賛成派も。

「その通りだ! あのクソ神官共、金ばっかたかりやがって!」

「そのくせ私達には何もしてくれないしな!」

リスティンの
ラ・ヴァリエール領との関係ぐらいだろうか。

（今日は一体何が起こるんだ？ みんなロマリア死ねとか言っているし……。まあ私も

ロマリア教にはあまりいい印象はないがな。まあ、すぐにわかるかな）

10分後、会場の upper 座にアルブレヒト3世と俺とデックス、ヴィンスさんが現れると、
貴族たちは話すのをやめてこちらに顔を向ける。

「諸君！ 本日は急に集まってもらって申し訳ない！ だが重要な話がある！」

口火を切ったのは親父殿だった。

「諸君に聞きたい。この国では、いやこのハルケギニアでは誰が一番偉いだろうか？」

すると1人の貴族が立ち上がる。

「閣下、もちろん我々貴族でございます！ ロマリアの神官などク

ソ食らえです！」

その言語に周囲の貴族も賛成する。

「その通りだ！」

「ロマリアなんか滅んじまえ！」

「あーあー静粛に！　ロマリアに関する事なら同意見だ。あいつらはいずれ殲滅する。

だが」

と、ここで親父は間を開けてから再び話す。

「貴族が一番偉い、というのは間違っていると私は思う。何故か？　それはだな諸君、

平民の人々がいなければ我々は食事をする事とも、服を着る事とも、風呂にはいる

こともできないからだ」

それには多くに貴族が反対した。その多くは前回説明した”56%の貴族達”である。

「何を言っておられるのですか、閣下！　魔法を使える我々貴族こそ！　メイジこそが

一番偉いのですよ！」

「その通りです！　魔法を使えない平民などどうでもいいではありませんか！」

あー、これはないわ。なんで魔法使えるだけで偉くなるんだ？そんなことを
考えながら隣を見ると、デックスも親父もヴィンスさんも顔をしかめていた。

その言葉を聞いてツェルプストー侯爵ら”9%のいい貴族達”と”35%のまあまあな貴族達”が反対の声を上げる。

「それは違うぞ！ 平民が居なかったら私たちはどうやって生きていくというのだ？」

彼らがいるから我らがいるのだ！ 平民をないがしろにしてはいかん！！」

「ツェルプストー侯爵の言う通りだ！ 領民を、平民の人々の生活を守ることに

貴族の仕事だ！ 私腹を肥やすために貴族をやっているのではない！！」

うん、いいこと言うじゃないか。領民に慕われているわけだ。俺は親父に目配せして発言の許可をもらった。

「まさに今の言葉の通りです。我々貴族や王族の使命とは、領民の国民の、平民の皆さんの生活、家族、そして愛する我が祖国を守ることなのです。

魔法が使えるから偉い？ メイジだから偉い？ いったい誰がそんなことを

決めたんですか？」

「うい、ウィリアム殿下、それは……」

「このような平民のことを見下すような人間はゲルマニアに必要ありません。父上？」

「うむ」

アルブレヒト3世が頷くと、会場に多くの兵士たちが入ってきた。

「な、なんだ!？」

「こら! 離さないか!！」

そして兵士たちは”56%の貴族達”を取り押さえ、杖を取り上げ、さらに首に

「魔力抑制リング」をはめた。これはデックスが作った代物で、付けられたが最後、

絶対に魔法が使えなくなるというものだ。たとえ杖を持っていても使えないぞうだ。

俺も実際に試してみたけど、この世界の魔法は確かに使えなかった。で、開発者のデックスが説明する。

「その首輪は魔法を使えなくするマジックアイテムです。これあなた方はメイジでは

ありません」

「なんだと!？ ふざけるな! ファイヤーボール!！」

1人の貴族が憤慨し、隠し持っていた予備の杖で俺達を狙ったが、火花1つ出なかった。

「おお、うまく働いているな。素晴らしい発明だ、デックス」

「感謝の極み」

「貴様！ 閣下に攻撃するとは！ 成敗！！」

「ぎゃあああああ！！！！」

親父も大喜び。そして攻撃しようとした貴族はその場で兵士に斬られて死亡した。

「で、首輪組は全員逮捕な」

と俺が言うと当然、

「なぜだ！！」

という叫び声が会場を埋め尽くしたが、俺とデックスが大量の資料を見せながら

説明する。

「父上の命により、ここにいる貴族全員にスパイを送り込んで調べさせてもらった。

その結果、首輪組は領民から信頼されておらず、金ばっか取り上げている

クソみたいな貴族だということが判明した。これが証拠だ」

「そういうわけで、君達は全員逮捕だ。容疑は…言い始めたらキリがない。だって

こんなにあるのだから」

デックスが机においた書類は軽く3mを超えていた。それを見た首輪組は、

「もはやこれまで…orz」

状態になり、その他の良い貴族達は、

「うへへ、なんだあれ？ あんなに悪いことしたのかよ。ないわw
ww」

という顔をした。

「父上、あとはよろしくお願いします」

「うむ。連れていけ！」

「「「「ははっ！！」「「「「」

こうして哀れ”56%の貴族達”は全員御用となった。残った貴族を数えると…

あら不思議。66人じゃないですか。ここに俺とデックス、親父、
ヴィンスさんを

足すと70。ぴったり議会の定数に達しました。

「さて、諸君。君達の事を調べさせてもらったが、不正もなく、領民にも信頼されている

素晴らしい人だということがわかった。そこで、君達にとっても重要な仕事を頼みたい」

” 良い貴族達” に親父が話しかける。

「私はこの国を根本的に変えようと考えている。そのためには諸君の協力が必要なのだ！

だが、諸君も何をしたらよいのかわからないまま『はい、協力します』とは言えない

だろう。なので、今から私の息子たちが全てを説明する。それを聞いた上で、協力するか

しないかを決めていただきたい。もちろん協力しないからと言って罰を与えたりとか

そういう事は一切しないと約束する。ではウィリアム、デスクス、頼んだぞ」

「かしこまりました、父上」

そして俺とデスクスは部屋を暗くしてもらい、作戦室と繋がっているノートパソコンを

プロジェクターにつないで、壁にかかっている大型プロジェクタースクリーンに

映しだした。その間に使用人が資料を配る。昨日の夜にパワーポイントで作った

ものだ。

「おお！ これはなんですか!？」

「絵がいきなり浮かび上がったぞ!？」

「信じられん…」

ノートパソコンなんて文明的なものを見たことあるわけがない貴族達は驚いている。

「ではみなさん。これより『新たなる日の出』作戦の概要をご説明いたします」

Side ツエルプストー侯爵

あ…ありのまま、今起こった事を話すぞ!

『私はアルブレヒト3世閣下の命令に基づき、貴族会議に出席していたが、

いつのまにか大量の貴族が逮捕されていた』

な…何を言っているのかわからないかと思うが、私も何を起こったのかわからなかった…

頭がどうにかなりそうだった…魔法だとか精霊の力だとか、そんな

チャチなもんじゃあ

断じてない。もっと恐ろしいものの片鱗を味わったよ…

そして今度はウィリアム殿下とデクスター殿下が何かの説明をするとのことだ。

ん？急に部屋が暗くなったな…ってなんだあれは！？さっきまで何もなかった

白いカーテン（プロジェクタースクリーンのこと）に絵が浮かび上がったぞ！

あれも魔法なのか！？ いや、聞いたことがないぞ？

「ではみなさん。これより『新たなる日の出』作戦の概要をご説明いたします」

ウィリアム殿下がそう言って、説明が始まった。

（1時間後）

「…であるからしてここはこうします、次に…」

（長いな…）

「さらに2時間後」

「…というわけで、こいつらにはグッバイしてもらって…」

(…ま、まだあるのか…)

「昼食をはさんでさらに数時間後」

「…最終的にはこの国はこんな感じに…」

(z z z …)

Side out

「日が暮れて」

「いやはや、説明に時間かかりすぎちゃったかな。もう太陽も地平線に隠れて」

「月が見え始めているよ。」

「…というわけで、説明を終えます。何か意見、質問は？ はいツェルプストー侯爵」

「あのウィリアム殿下、1つ質問と1つ意見がございます 貴族制の撤廃。

これには異存ありません。新たな政治形態や国内整備のご考えにも賛同できます。

しかしそれら全てを、こんな夢物語のようなことをこんな短期間で本当に

できるのですか？」

まあ、至極もつともな意見だろう。だって3年間でゲルマニアの時代を中世から現代にまで引き上げて、陸海空の常備軍を創設しなければならないのだから。

「常備軍については私から説明します。これは可能です。徴兵制度を取り入れて、

満18歳で男子は3年、女子は1年9ヶ月の兵役につき、その後も予備役として

年間50日間訓練を行わなければならないようにします。我がゲルマニアは

国民皆兵国家、すなわち国民全員で国防を担おうという国家を目指して

いるので、故に」

隣のデックスも発言する。

「技術等の話でしたら私が。技術レベルをあげるとはたいして問題ではありません。

そのためのプランは確立していますので。問題はその技術を国民が受け入れてくれるか

どうか、です。そこはきちんと腹をわって話し合いたいと思います。あとは私達を

信用してくれ、としか言いようがありません」

俺達の説明を受けて納得したような顔をしていたツエルプストー侯爵だった。

「なるほど。よくわかりました。それで意見なんですが…説明長すぎませんか？」

みんなで窓の外を見ると月がきれいな夜だった。あ、コウモリ飛んでる。

「やっぱりそう思った？」

「ええ」

「他のみんなも？」

「「「「「「「「「「「「」

「じゃあ次からは早めに終わらせようかね」

こうしてこの部屋にいる70人のメンバーはゲルマニア議会の議員となり、
きちんと役職も決められた。

親父：国王・議会議長

ウィリアム：副王・国防長官・國務長官
デックス：副王・財務長官・エネルギー長官・國務副長官

「ちよつとまで、お前なんで副長官なんだ？」

「え、前線外交はお前に任せるよ。俺元々技術畑の人間だし」

「めんどくさいことを押し付けやがって…まあいい」

ヴィンスさん：国王首席補佐官

ツエルプストー侯爵：国土安全保障長官

ベルフツド男爵（農業が盛んな平野に領地を持っている）：農務長官

セイル公爵（ツエルプストー侯爵の左隣に領地を持っている）：司

法長官

ビショップ侯爵（漁業が盛んな沿岸部に領地を持っている）：水産

長官

なごごなど…

「さて、これからが忙しくなるな」

貴族達が帰った後、親父がそうつぶやいた。

「そうですね。これで閣下も、いえ陛下もきちんと仕事をしてくれるでしょう」

それに答えるように、凄みのある笑みを浮かべながらヴィンスさんが言う。

「なんてこつたい……」

「父上、そう落ち込まずに。とりあえず明日には今日起こったことを全て公表しなければいけないですね」

「デックスの言うとおりだな。平民の人々にきちんと理解してもらえるようにしないと」

「…それを私がやれと？」

「……だって国王陛下ですから」「」

俺とデックス、ヴィンスさんが口をあわせてそう言うと、親父は椅子に座り込んで
なにやらブツブツ言い始めた。

「えーなんで私がそんなことを……」

「原稿は私達が用意しますから。ね？」

「…それならいいや」

なんとか親父を納得させた後、俺とデックスは作戦室に戻る。するとテーブルに置いて

あつた電話機がうるさくなっていた。

「はい、こちらウィリアムです」

誰からかかってきたのかというと。

「おお、ウィリアムか！ 私だ、ジョゼフだ！」

そう、ジョゼフである。この前ガリアに行ったときにこっそり渡しておいた。

「こんばんは、ジョゼフさん。どうしました？」

「それがな！ 虚無魔法が使えるようになったんだ！」

「え、まじで？」

「おう！ 父上をお願いして、土のルビーと始祖の香炉を見せてもらつてな。それをシャルルと一緒にしばらくいじくっていたら、なんか呪文が見えてな。

それを唱えてみたら素早く移動ができるようになった！ これはいい！

それとなんだったかな、エクスプロージョン爆発とやらも覚えたぞ」

「凄いいじゃないですか！おめでとつございます！」

原作通り「爆発」と「加速」をマスターしたか。よかったよかった。

「いやはや、これもウィリアム、君が教えてくれなければわからない

かったことだ。

感謝するぞ！」

「いえいえ。イザベラ様やシャルロット様はお元気ですか？」

「ああ、相変わらず元気だ。ただ……」

そこでジョゼフの声に陰りがでた。

「どうされました？」

「……父上のお体が良くないんだ。悪い時だと立ち上がることもできないくらいだ」

「そうですか……」

えーと、原作では今のガリア国王が死ぬ前にジョゼフが王になるように遺言残した
んだっただけかな。それで最終的にジョゼフがシャルルをちよめちよめしたのか。

「こんなことは考えたくないが、もしかするともう長くないのかも知れんな……」

「失礼ですが、そうなった場合、次の国王は誰になるのでしょうか？」

「そこなんだよな。シャルルは俺より魔法も使えるし皆から評価されている。

だが父上は虚無が使えるようになった俺にも王の資格があると言

い出してな」

「…お願いですから兄弟同士で王位求めて内戦とかやめてください
ね？」

原作みたいになるのはいやーよ。

「そうならないように今努力しているところだ。だが、万が一その
ようなことになったら…」

ジョゼフはため息をついた後、こう告げた。

「イザベラとシャルロットだけはゲルマニアに逃がす。だから2人
をよろしく頼む」

「はい！？ 何故にうちなんですか？」

「イザベラは君に気があるようだし、シャルロットも最近ずっと「
デックス」とつぶやいているそうだ」

「は、はあ…」

「これはガリア王国皇太子としてではなく、1人の父親としての頼
みだ。頼む！」

…俺まだ3歳なんだけどな（中身は違うけど）。

「…わかりました。そうなった場合はこちらで必ず」

「感謝するよ」

「あ、そうだジヨゼフさん。ちょっとしたことを教えてあげましょ
う」

「ん、なんだ？」

「明日から3年間、ゲルマニアですんごく面白いことが起こります
よ。なので見てて

くださいな。では」

「いいのか、そんな事言ってる？」

「いいんだよ。あの人面白いこと好きそうだし」

「そうかなあ、っと秘密ドックからメールだ。常温核融合炉の搭載、
機器の

アップグレード、弾道ミサイルの燃料交換など全部終わったって」

「そうか。じゃあ次にやることは…なんだっけ？」

「えっと計画書によると、対虚無用の結界を展開する、だね」

「わかった、じゃあやるか」

そう言っただけ俺達は指パッチンをした。するとゲルマニアとガリア、

「はら」

クルデンホルフ大公国に一瞬で対虚無魔法フィールドが張り巡らされた。
これで上記の国では虚無魔法が使えなくなった。俺達は使えるけどな！

「こうすればロマリアのクソが持っている始祖の円鏡もただの鏡だ」
「そうそう。あの覗き野郎どもめ」

仕事に満足した俺達はそれぞれの部屋に戻り、メイドと一緒に寝ることにした。
ちなみに、俺とデックス専属メイドにはちゃんとブラジャーなどの下着を着てもらっている。これじゃないとダメなのだ！

今日のマギーの下着は上下共に黒の下着であった。しかもブラジャーはもう少しで乳首が見えそうなくらい際どいもので、パンティーもGストリングである！
これはフロントがV字型にカットされてバックとサイドが細いひも状にデザインされた、Tバックの一種である。

「あの、ウィリアム殿下…この下着、なんか見えそうなんですけど…」
マギーは顔を赤らめながら小さな声で主張するも。

「まあマギーが今まで使っていた下着とは違うけど、これからはこれが主流に

なつていくんだ。それを一番最初に付けているマギーはとても運がいいんだよ」

と説得。これは本気でやるつもりである！

「そ、そうなのですか！？　ありがとうございます」

「お礼はいいからさ。もう寝よう」

「はい！」

こうして2人はでかいベットに横になって、胸に包まれながら眠りについた。

同じく隣でもデックスがリーダと一緒に寝ていた。リーダは水色の下着を付けていたが、マギーと違って上下ともめっちゃ透けていた。シースルーというやつである。

(うへへ、こりゃたまらん！)

とか考えながらデックスはリーダの胸を揉みつつ寝た…

おまけ。

ロマリア連合皇国。そのトップの聖エイジス32世、ヴィットーリオ・セレヴァレと
虚無の使い魔「神の右手・ヴィンダールヴ」であるジュリオ・チェ
ザーレがいた。

「おかしいですね……」

「そうですね……」

2人はさつきまでゲルマニアの天才兄弟を始祖の円鏡で見っていたのだ。あの国にこの
兄弟が生まれてからゲルマニア国内での活動が思うようにいかず、
拳句の果てには
ウインドボナ城にいた神官が国外追放された。そのため監視を強めていたのだが、

ウィルとデックスの張った対虚無魔法フィールドのせいで、始祖の円鏡が使えなくなってしまうた。

「トリステインとアルビオンは見る事ができますね…」

「ただどゲルマニアとガリア、クルデンホルフは見れない…何があったのでしょうか？」

ここにいる誰にもそれはわからなかった。

「こうなったら直接国内に忍びこむしかありませんね。私が行きます」

とジュリオが言うが、ヴィットーリオはそれを制した。

「いや、まずその辺の神官に行かせましょう」

「わかりました。手配します」

こうしてゲルマニアへ3名の神官が極秘裏に潜入することになった。うまくいくはずがないことも知らずに…

第7話：良い人だけをチヨイス！（後書き）

超無理矢理ですが、そこはご都合主義とどうか適当とどうか。文句などがあつたら好きなかだけ言ってください。役職についてはアメリカを参考にしています。

次回から計画通りに国内を整備してゆきます、おそらく。では

第8話・ゴミはポイっちょ（前書き）

良い子のみんな！

ゴミはきちんと分別して捨てるんだぞ？

第8話：ゴミはポイっちょ

突然だが、「東方の三博士」、あるいは「東方の三賢者」はご存知だろうか？

そう、キリスト教の新約聖書に出てくる人物のことで、イエス・キリストの誕生時にやってきてこれを拝んだとされる。彼らはイエスを見て拝み、乳香、没薬、黄金を贈り物としてささげたそう。この贈り物の数からして、賢者達は3人だったんじゃないか、ということから三賢者と呼ばれるようになった。

場所も世界も時代も違うが、今それを再現：いや再現ではないがそれっぽいことをやるうとしてる3人がいた。そうだな、「ロマリアの三神官」と仮の名前を付けておこう。彼らは教皇直々の命令により、商人の荷馬車にこっそり潜んでゲルマニアに侵入することになっていた。前回、どこかの誰かさんのせいで教皇、ヴィットーリオの持っていた覗き専用鏡が使えなくなってしまったからである。つまり彼ら3人の任務を簡単に言うと、「覗き」である。なんとも羨ましい任務であろうか。

ただし覗きの対象は双子の兄弟なので、そつちに興味がある人ではないと興奮しないだろう。ともかく、彼らは命令を受けてゲルマニアへと向かう事になった。

〔ガリア・ロマリア国境付近〕

Wikipediaの「ゼロの使い魔」のページに載っていた地図によると、ロマリアから

ゲルマニアに行くにはガリアを通るか、砂漠を通るかしか無い。でも砂漠には

「人間逝つてよし主義」のエルフがいっぱいいるらしいので、ガリアを抜けるしか無い。

そんなわけで、「ロマリアの三神官」に乗せた馬車はのんびりとガリアへと

向かっていった。馬がのんびりと馬車を引き、周りには豊かな田園風景。心が癒され

そんな感じがする景色であるが、三神官はそんなものには目もくれずにいた。

正確には見る事ができなかった。何故かというところ、これからや

ろうとしている

ことは、現代的に言えば「不法入国」なので、ガリアの国境検問所の係官に

バレないように、3人は馬車の二重底に隠れていた。その上に藁をたんまりと

敷いて、おまけに羊がうるさく鳴いている。これならバレないだろうと3人は

考えた。

そんななか、前の方では馬の手綱を握っている2人の男が会話をしていた。

彼らはロマリアの商人である。

「つたくよお、なんでこんなことしなきゃいけないんだ？」

「小さい声で話せ。後ろの3人に聞こえるぞ」

「こっちはきちんと仕事してえのに、めんどくさいったらありゃしない。あの3人さえ

居なけりゃもっと荷物を積めるのに」

この2人は双子であり、主にガリアへ羊を輸出していた。運が悪
いことに、たまたま

首都に来ていたときに目をつけられて、今回の仕事を押し付けられ
たのだった。

しかもタダで。当然反論したが、神官いわく、

『すげえिकासブリミル様の国のためガンバ!』

だど。これを断ると間違いなく牢獄行きになると察した2人は泣く泣く引き受けた。

「そう言えば、最近ガリアの商人たちを見なくなったよな?」

「だよなあ。いつもこの道ですれ違うのに」

何故かガリアの商人たちがロマリアへ行かないのか。答えはすぐ目の前にあった。

馬車がガリア国境が見える丘にたどり着くとそこには。

「お、おい! なんだあれ!？」

急に馬車が止まったので、神官達も驚いて藁をまき散らしながら外に出てくる。

「おい! 何があっ…」

文句を言おうとしたが口があんぐりと空いているので最後まで言えなかった。

ロマリア・ガリア国境にはとてつもない高さの壁が出来ていた。だいたい20から30メートルと言ったところだろうか。一番上には見たことのないものが置いてあり、下の方を監視しているようだった。

そして、壁から10リーグ程のところに大きな看板がかけられていて、多くの人達がそれを読んでいた。ほとんどが商人である。

「なあ、なにがあつたんだ？」

双子が近づいて他の商人仲間に聞いてみると、

「おお、お前らか！ 見てくれよこれ！ 国境封鎖だつてよ！」

「「はあ！？」「」

看板にはこう書いてあつた。

『えーと、ガリアとゲルマニアは他の国と交易する気が無くなつちやつたので、

両国は本日よりトリスティン及びロマリア方面の国境を封鎖します。なお、

壁から5リーグ内に入ると自動的に撃ち殺されますので近づかないように。

撃ち殺されてもこちらに責任はありません、そちらの不法侵入で

すので。

文句がある人は直接言いに来てください。壁に向かって大声で

「文句がある！」

たとえば、係員が陛下の所までご案内いたします。もっとも、皆さんの声が

5リーグ先の係員に聞こえれば、の話ですが。

それとついでにあと3つ。本日より帝政ゲルマニアは国名を變更、ゲルマニア

王国となります。それに伴い、ゲルマニアでは貴族制度を廃止し、領地も国に

返還されます。詳しくは貴国のトップに手紙を送ったのでそちらにお問い合わせ

ください。

次に、ガリア王国とゲルマニア王国との間で通商同盟、及び安全保障同盟を

締結したことをここに宣言します。意味が分からない人は分かる人に聞いて

ください。

最後に、両国内にいる全てのロマリア教の神官は全員ロマリアに帰らせます。

だっぺいらないから、って言うか邪魔。とっとと送り返すからね。

ガリア国王ロベスピエール4世

ゲルマニア国王アルブレヒト3世

「な、なんだってー!?!?」

という叫びが丘に響き渡った…

同じセリフがトリステインの商人たちからも、ゲルマニア国民からも、そして何も

知らされていなかったジョゼフとシャルルの口からも飛び出た。

「父上! これはいったいどういうことなのですか!?!?」

「そうですよ! なぜ我々に知らせなかったのです!?!?」

当然のごとく、青髪兄弟は父親に詰め寄った。

「ゲルマニアと極秘裏にやるという話し合いをしたのでな、仕方なかったんじゃないよ」

「話し合い? いつされたのですか?」

シャルルが不思議そうに尋ねる。それもそのはず、ロベスピエール4世はここしばらく

体調が良くなかったので、ずっとベッドで寝ていたのだった。

「ジョゼフ、お前も持っているのだろう？ あのマジックアイテムを」

「え？ ああ、あれですか！ ええ、持っていますが…まさか父上もお持ちで？」

「そうだ。これでやりとりをしていた」

そう言いながらロベスピエール4世がポケットから出したものは衛星携帯電話だった。

暇さえあればウィリアムとデクスターは様々な人工衛星を次々と飛ばしていたので、

こういうことも可能になった。

「それはなんですか？」

初めて見るものにシャルルも興味津々。

「驚くなよ、シャルル？ これはな、遠くにおいても会話ができるマジックアイテムだ！

例え相手がゲルマニアにいても、だ！」

「なっ！？ これでそんなことができるの、兄さん？」

驚いて思わず素の口調で話してしまうシャルル。

「そうだ！ 早速かけてみよう」

そう言ってジョゼフはウィルに電話をかけた。

その時俺は、城の前で親父が国民へ演説している様子を見ていた。

「…よつて、本日から貴族や平民とか、そういう区別を無くし、皆平等な身分で

暮らすのだ！ 差別することは許さん！」

「おおお！！アルブレヒト3世ばんざーい！！」

すると携帯がマナーモードで振動し始めたので、少し離れた場所にある作戦室に入り受信ボタンを押した。

「はい、ウィリアムです」

「私だ。今大丈夫か？」

「ええ、父上が演説しているのを後ろから見ていただけですので。それでどうです？」

「面白い始まりだったでしょう？」

「ああ、とても面白かったよ！ 一体いつの間にあんな大きな壁を作ったんだ？」

国境を封鎖している壁は、地面からの高さ30m、厚さは10m、そして地面の下にも

20m伸びている。素材はもちろんアダマンチウムである。上には

オート・メラーラ
76mmスーパードラピッド砲が無数に設置されている。これはイ
タリアのオート・
メラーラ社が開発した高性能な両用砲である。名前の通り、発射速
度がとても
早く、1分間に120発も発射できる。最初は普通にフランクス
CIWSでも
置こうかと思っていたが、あれは射程短いし、ミサイルみたいな高
速機動が
できる敵なんてこの世界にはいないと思ったので、対空攻撃にも対
地攻撃にも
使えるこれにした。

さらに念には念を入れ、ESSM (Evolved Sea S
parrow Missileの略)が
搭載されているMk41VLSや、長距離対地攻撃用のBGM-1
09Gトマホーク巡航
ミサイル(通常弾頭バージョン)が4発入るMk143装甲ボックス
スランチャーを
こっそり配置してあった。しかし、この追加兵装はまだゲルマニア
国内の
壁にだけ付いていた。

「昨夜のうちにこっそりと。それでこれが今の映像です。そのマジ
ックアイテムの
青いボタンを押してテーブルか何かに置いてください」

そうやって俺はコンソールを操作し、ジョゼフ達がいる部屋にデ

ータを転送した。

ロベスピエール4世の寝室では、テーブルに置いた携帯電話から空中にモニターが現れて、様々な映像が浮かび上がった。それらは、壁の上にある監視カメラからの

映像で、商人たちが困惑していたり、驚愕しているのがよく見える。

「はっはっはっは！！ 見るシャルル！ 連中の驚いた顔を！ これは傑作だ！」

「そうだね、兄さん。それにしてもすごいマジックアイテムだ…」

ロベスピエール4世もそれを見て。

「ふん、いいざまだな。それでウィリアム殿下、本当に我々2国間のみで

やっていけるのかね？」

「ええ、ご心配なく。私も弟も動いておりますので。近いうちに私がそちらに向かいます

のでその時に詳しく話しましょう」

「なら安心だな、ゴホッ！ゴホッ！」

「父上！」

ロベスピエール4世は突然咳き込み両手で口を押さえるが、その手には血が付いていた。

「ゴホッ!…私も長くはないということか。やれやれ」

「そろそろお休みになられたほうがいいですね。ではこれで失礼いたします」

そう言っただけで俺は電話を切った。

電話を終えて外に戻るとまだ親父が演説をしていた。この演説はゲルマニアの全ての

都市、村でみんなが見ていた。事前に映像転送用のマジックアイテムを設置しておいたのだ。

そして、演説の中にはこれからやっていく事を盛りこんであった。例えば貴族はいなくなり

領地は全部国が一括管理することや、消費税を25%と高めに設定するけど、その分社会福祉を

充実させることなどなど。なかでも一番国民が喜んだことは、「教育を受けられること」

だった。親父が、

「みんなで一緒に勉強しようぜ!」

と言ったら、子供を持つ親などがとても喜んでいて。調べたところ、ゲルマニアの識字率は

36.3%（男性51.0%、女性20.84%）だった。とっても低い。ちなみに日本は99.8%

(男性99.9%、女性99.7%)とめっちゃ高い。さすが先進国、我が国もこれくらいの高さを目指そう。

あと、ゲルマニアに常設軍を創設する、と言ったら職がない男達が歓声をあげた。

国民全員で国を守ろう！という言葉が効いたみたいだ。ゲルマニアの人口は

トリステインの120万人よりは多いけど、ガリアほど多くはなくて750万人ほどで

ある。これはあくまで目標だが、陸軍に25万、空軍に15万、そして海軍に10万、

総兵力50万人の軍隊にしたいなーなんて考えている。予備役は別にしてね。

あ、でも陸軍そんなにいらさないな。俺とデッキスが前線で大暴れすればいいし、

チート使って。よし、陸軍を20万にしよう。で、沿岸警備隊を作ってそこに

3万いれて、残りは情報部にでも。うん、そうしよう。

そこにデッキスが疲れた表情をしながら戻ってきた。

「おいウィル、ロマリアのクソ神官共をみんな捕まえたぞ。どうやって向こうへ返す？」

「ご苦労さん。そうだな、ガリア経由で返すのは面倒だから、食料と水を持たせて

砂漠方面に捨てておけ。運がよければロマリアまで帰れるだろう」

「そうだな。じゃあそうしとく。ん？ ちょっと待て、あっちにも壁張ったけど出入口作って無いぞ？」

単純に国境を分断するための壁なので、出入口を作るのを忘れていた。あと、この壁は俺達で「グレートウォール」という名前にした。

「しまった、そうだったな…じゃあこうしよう。まず神官共に簡単なパラシュートを括りつける。で、そいつらを大きなパチンコでグレートウォールを越えるように

飛ばす。どうよ、完璧じゃね？」

「やべえ、それ最高だな。それでいこう。にしてもみんな嬉しそうな表情だったな」

「ああ、やはり貴族制って言うのは問題ありありだったからな。これからは忙しくなるぞ？」

「望むところだ」

そう言いながら2人はにやっと笑った。

おまけ。各国の反応。

く羅馬リアく

ここでは例の2人がガリアとゲルマニアから来た手紙を読んでいた。

「先手を打たれましたか…」

「報告によれば、この壁には見たことがない大砲が数多くあるとのことですよ」

「軍を動かして、と思いましたがそれはやめておきましょう」

「では…」

「今は黙ってみているしかないでしょう。あの2カ国がどのように変わるのか…」

なのでヴィットーリオとジュリオは覗き専用鏡を使ってロマリア国内、正確には教会のシスターさん達の着替えと風呂を覗くことにした。

「おおおお…美しい」

「同感です」

くクルデンホルフ大公国く

大公はこのことを事前に知らされていたので、「ついに始まったか…」ぐらいしか考えていなかった。なのでゆっくりとその手紙を読みながら椅子に座っていた。

「ばばー？」

足元に娘のベアトリスがよちよち歩いてきたので、大公は仕事をやめて娘を抱き寄せる。

「とても面白いことがあったんだよ、ベアトリス」

「ん？」

「おーよしよし。これからもっと面白くなるぞ？」

「わーい」

まだ1歳のベアトリスは何のことがよくわかっていなかったが、とりあえず喜んでいた。

トリスティン王国

トリスティンの王都、トリスタニア。王城をはじめ白い石造りの建物が目立つ美しい街。

王城と貴族の屋敷、下町の間には大きな川が流れている。貴族・平民が多数生活しているが、街一番の大通りとされるブルドンネ街でも道幅は5メートルほどしかなく、裏通りのチクトンネ街には多数の酒場や賭博場もある。

そこにある王城の廊下を全力疾走している1人の男がいた。ロマリア皇国の枢機卿であり、その一方で事実上のトリスティン宰相のマザリーニである。まだ40代なのに、頭髪も髭も真っ白で指も骨ばっており、年齢よりも遙かに老けて見える。

その彼が例の手紙を持ってある部屋に飛び込む。そこにはトリステイン王国の王女、アンリエッタ・ド・トリステインと、その母であるマリアンヌ太后が優雅にお茶を楽しんでいた。その光景を見てマザリーニは一瞬イラツとしたが、表情を変えずに報告をする。

「マリアンヌ様！ 姫様！ これを！」

「何事ですか、マザリーニ？」

「ゲルマニアとガリアが国境を完全に封鎖してしまいました！ よって我がトリステインはアルビオン以外との交易ができなくなります！ これをお読みください！」

そう言つて彼は2カ国からの手紙を差し出すが。

「ちょっと待つてくださいな。まだお茶を飲み終わっていません」

「えっ」

（…あれ、おかしいな。ついに耳までおかしくなっちゃったのかな？ 国家の緊急

事態だつて言うのに「まだお茶を飲み終わっていない」？ 勘弁してくれよ、おい…）

そんなことを考えていたマザリーニをよそにマリアンヌは続ける。

「この後アンリエッタはお勉強の時間なので、それから話しましょう」

「おかあさま、おべんきょういやく」

「何言ってるの、お姫様なんだからきちんとしないと駄目でしょう？」

「ぶー」

（はあ…アンリエッタ姫にはこんな風になって欲しくないものだな）

その希望が近い将来木っ端微塵に吹き飛ぶことを彼はまだ知らない。これからも

彼は苦勞することだろう、そりゃもう色々と…

第8話・ゴミはポイっちょ（後書き）

駄目だ、更新が大変… 日常も大変…

「グレートウォール」はあれです、「アーマードコア・フォーアンサー」に

出てくるGA社のアームズフォート。あれかっこいいですね。

あとアホリエッタの父ちゃんがいつ死んだか忘れたのでもう死んだことに
しました。

次回もまあ色々とぬくぬくと
では

第9話：国内整備：デクスター視点（前書き）

今回はデックス中心でいきます。

第9話：国内整備：デクスター視点

ゲルマニアが王国になって1週間後。

「ブルミル暦改め、太陽暦2000年5月12日、ウィンドボナ城の隣の合同庁舎」

「ここは俺とウィルであつという間に作った高層ビル群であり、国家運営に必要な全ての建物が入っている。エネルギー省、運輸省、財務省などなど。ただ、ウィルの強い要請により、国防総省だけは分離してあつてここから10km離れた場所に建設された。見た目はアメリカのペンタゴンそのまんまである。あいつ、昔っからアメリカ軍大好きだったからなあ。ここを第2のアメリカにするつもりなのかな？」

「まあいい、それで今俺は財務省の会議室で各省庁のトップと話し合いをしている。」

「親父のかわりにヴィンスさん、ツエルプストー国土安全保障長官、ベルフツド農務長官、セイル司法長官、ビショップ水産長官。これだけではまだ足りないので、70人の議員の中からもうちょっと選んだ。その結果、領地運営に最も優れていたクロウ伯爵に」

「内務長官になってもらった。あと、こっそり見つけた自動車をブリミル教の神官に」

「バレないように分解して、さらに火石と風石を動力源にしたエンジ」

ンを開発した
エメリツヒ男爵。ゲルマニア版コルベール先生とも言うておこつ
か。彼には
国防技術開発局のトップになってもらった。神官共がいなくなつて
彼はとても
喜んでいた。あとでわかったことだが、彼が見つけた自動車という
のは、
トヨタ製のプリウスだった。

他にも労働長官に商務長官、社会福祉長官などが集まった。教育
長官には俺と
ウィルが強く推薦したマルモ先生になってもらった。彼は喜んでや
らせてもらつたと
言っていた。

「えーと、今私の兄のウィリアム国防長官兼國務長官がゲルマニア
常設軍の設立に
向けて走り回っているので、今日の会議には参加できません。予
めご了承ください。
さて、ではまず各自報告を」

「では私から」

と言って椅子から立ち上がったのはベルフツド農務長官。

「全国の農業の件ですが、何故かどの農地でもあらゆる作物が豊作
になっており、
皆笑顔で収穫をしていました。それに、以前まで農業に使えなか
った土地でも

急に木が生え出したり、草原になっていたり、なんと言ったら

良いのか

わからない状況です」

するとビショップ水産長官も立ち上がった。

「水産業でも同じような現象が起きています。沿岸部での漁業の収穫率がかなりの

高数値になっています。毎日漁船が山盛りの魚を獲って帰港していますから」

「それは大変素晴らしいですね。きっと精霊様がゲルマニアに微笑んでくれているのでしょ」

と、偉そうに言ったが、実は事前に土の精霊グランドと水の精霊アクエリアに頼んで

ゲルマニアの土の状態を活性化してもらい、また沿岸部の生態系も活性化してもらった。

結果、海には魚が溢れ、土は栄養たっぷりの状態になった。

「次は私から報告します」

と、セイル司法長官。

「アルブレヒト3世陛下から頂いたゲルマニア王国憲法と法律の草案。ほぼ完璧と言って

いいでしょう。このまま議会で決議を取る予定です」

「わかりました」

そしてクロウ内務長官が手を上げて発言する。

「先の革命から1週間が立ちましたが、元貴族も元平民も皆仲良く仕事をしております。」

ただ、逮捕された貴族達の親族が今だに抗議しております。いかがいたしましたしょう?」

「それについては国王陛下からいい考えが。ヴィンセント首席補佐官」

「はい。皆さんこれをご覧ください」

そう言つて立ち上がったヴィンスさんは壁のスクリーンにこの惑星の全体図を出した。

「ここがゲルマニア。そしてここからここがハルケギニア大陸です。調査の結果、

他の大陸にも人間が住んでいることが確認されました。そしてまだ未開拓の土地も。

そこで、逮捕した貴族及びその親族の皆さんには未開拓地の調査を依頼したいと

思います」

その言葉に皆が驚いた。

「補佐官! それでは奴らが未開拓地でのうのうと暮らすことになりませぬ!」

「あの連中がここから居なくなるのは大いに結構ですがそれは……」

そこで俺が立ち上がって発言する。

「ええ、彼らが安全に到着したあとにそういう事があるかもしれないね」

そこで悪い笑みを浮かべながら俺は続ける。

「ですが、もし移動中になんらかの事故が発生して全員が亡くなったりでもしたら、

それは悲劇ですよな？」

そう言うと、皆納得したような表情を浮かべた。

「悲劇ですな」

「痛ましい事故ですからね」

「事故ならやむを得ないでしょうな」

「そういうことです。では私から。お手元の資料の4ページを御覧ください。現在

運輸長官のフェルガス長官が国防技術開発局のエメリツヒ長官と一緒に自動車を

開発中です。これをゲルマニア国民全員に乗ってもらいましょう。もう馬車は

時代遅れです。それに伴い水道や電気などのインフラの整備、一般道路や高速道路、

及び電車などの交通機関の整備も同時に行います。かなりハードスケジュールに

なりますが、これらを3年間で完了しなければなりません。それ

が父上からの
「命令ですので」

ここにいるメンバーにも、まだ「新たなる日の出作戦」を話していない。まあいつか話す時が来るだろう。

そして俺はコップの水を少し口に含んでから話を続けた。

「問題は、ゲルマニアが成長している間に他国からの干渉があるかもしれないと
いうことです。今国境を完全に封鎖しているので、ロマリアとトリスティンからは
誰も入ってこれません。しかし、アルビオンとの交易ルートは今
だ健在です」

アルビオンとはまだ微弱ながら交易をしている。あの「ラピュタ」はかなり重要な
軍事拠点になるのでむやみに国交断絶などはしない、とウィルが以前言っていた
のを思い出した。

『考えてみるよ、デックス！ 空飛ぶ不沈空母だぞ！ おまけに目と鼻の先に

トリスティンがある！ しかも自給自足できるとききた！ もう完璧すぎる！

あそこは絶対に捨てないぞ！』

ふっ、あいつらしい考え方だな。

ちなみにクルデンホルフとの国境は開いているものの、ガリア軍が厳しい検問所を作っているので、トリステイン人やロマリア人は絶対に入れないようにしてある。

さらにスパイ対策として、俺達があげた嘘発見器を設置してある。国境を通過したい人達に嘘発見器をつけて、

「あなたはトリステイン人ですか？　ロマリア人ですか？　間者ですか？　間諜ですか？　スパイですか？」

と聞けばいい。もしスパイだったら

「おいテメーどこ中だ、こら？」

をして、情報を聞いたあと手早く、静かに人生を終えてもらう。ただの民間人だったら二度と来んじゃねえぞ！と脅して返す。

「なので、ロマリアとトリステインの連中がアルビオン経由で我が国に侵入してくる

可能性はゼロではありません。でもアルビオンとの交易ルートは維持するように

陛下に言われていますので潰すことができない。どうしたら良いと思いますか？」

実はその点については既に考えてあったが、他の人達に計画にかかわらせ寄与させ
たかった。計画段階から参加すると実際にやる時にさらに実力を発揮
できるからだ。

するとツエルプストー国土安全保障長官が立ち上がった。

「殿下、私の考えをお聴きください。アルビオン政府と交渉して、
向こうの港に

ゲルマニア行きの船に乗るものをチェックするための関所を設置
するのです。

そうすれば商人に偽装して不法入国するのをある程度防げるので
はないでしょうか？

その代わりに、我が国の技術をアルビオンに少し提供すればよい
でしょう」

「それは素晴らしい考えですね」

それと全く同じようなことを俺は考えていた。

「もし何かの生物に乗って国境を越えようとしても、グレートウォ
ールの対空砲で
撃墜できますし、強行突破しようものならヴァリアント級ミサイ
ル駆逐艦数隻を
増援に向かわせて対処できます」

「なるほど。他の皆さんもこの案でよろしいですか？」

全員が無言で挙手する。

「ではこれでいきます。首席補佐官、父上と國務長官にこの事を伝えといてください」

「わかりました」

その後も

「現在、土メイジ達が全力で国民全員のための新しい家を建設中です」

とか、

「殿下がおっしゃっていたレアメタル鉱山を大量に見つけました！」

とか様々な報告が続いて、そろそろ会議終りにしようかと考えていたがその時、

会議室のスクリーンに国防総省の制服を着た軍人が映しだされた。彼の名前は、

エルンスト・ヴェルナー・クレイドル将軍。昔からゲルマニア陸軍を率いてきた

熟練の軍人であり、大の戦争好きである。なのでウィルと酒を飲んだ次の日にはさっそく意気投合していた。まあウィルは子供だからオレンジジュースだったけど。

「殿下、緊急事態です！ 5分前に旧ツェルプストー領付近の国境で、トリステインの

偵察部隊と思われる兵隊を確認しました。ラ・ヴァリエール領の民兵かと思われれます」

「……なんだと!?!」「……」

將軍の報告に皆が驚く。会議室がざわめく中、マルモ教育長官がテーブルを叩いて静かにさせ、將軍に尋ねた。

「將軍、1つ聞きたいのだが、我々が設置した警告板を彼らは読まなかったのか?」

「はっ。それが警告板を無視してグレートウォールに接近しているようです」

「なるほど……」

そこでマルモは悲しげな表情を浮かべた。

「どうされました、マルモ先生?」

今までそんな表情を見たことがなかった俺は聞いてみた。すると彼は首を振りながらこう答えた。

「いえ、トリステインの人々は文字も読めないのかと思うと悲しくなってきましたね……」

その言葉を聞いて全員が笑い出した。

「…ふふふ、あっはっはっはっは！！」

「マルモ先生、大変お上手ですな！」

「そうか、彼らはそこまで頭が良くなかったんだな」

「昔から奴らの頭は良くないと知ってはいたがここまでとは…」

笑いが一段落ついたところで将軍が報告を続けた。

「それで、1分前に国防長官が第1国境警備部隊に敵勢力を無力化するよう命じました」

「無力化？」

セイル司法長官が聞き返す。

「そうです。コショウと催涙ガスがたっぷり詰まった砲弾で彼らを追いつめます」

「それは…」

全員、頭の中で想像しただけで嫌になった。

「兄上もひどいことをする。わかりました、将軍。対処は任せます。何かあったら

すぐに知らせてください。ですがくれぐれも殺さないようにお願いします」

「了解しました、殿下」

そう言って將軍は通信を切った。

「殿下、なぜトリステインの時代遅れの能なしどもを殺してはいけないのですか？」

この中で俺について2番目に若いベルフッド農務長官が過激な発言をする。

「まだ我が国には常設軍がありません。もし連中を殺して戦争が始まった場合、我々には

グレートウォールがあるので敵軍が侵攻するのは不可能でしょう。しかしこちらから

追撃するのは不可能なんです。ヴァリアント級ミサイル駆逐艦はありますけど、

あれは空軍のものです。陸を制するには陸の兵士が必要です。その兵士の育成が

まだ出来ていない。故に今は連中を殺すのを我慢するというわけですよ」

(まあ俺とウィルが前線で大暴れすれば話は別だけだな)

「なるほど…そういうことでしたか。分かりやすいご説明ありがとうございます」

懇切丁寧に説明するとベルフッド農務長官は納得してくれた。

「私だってあの国の生意気な貴族共を今すぐに根絶やしにしたいですよけど、まだその

時期ではありません。辛抱強く待つことにしましょう」

く旧ツェルプストー領、ゲルマニア・トリステイン国境付近く

そこには20人の男達が馬に乗って草原をゆっくりと進んでいた。彼らはこの領地の

管理者であるラ・ヴァリエール公爵の私兵部隊であった。1週間前に起きたゲルマニア

政変、及び国境閉鎖。その一報が王宮のアホ親子の耳に入ると（手紙はすぐに届いたけど

どこかの誰かさんがお茶を飲み終わるまで決して読まれなかった）

2人は、昔から

ゲルマニアのツェルプストー候爵と何回も戦ってきたラ・ヴァリエール公爵に

「壁の偵察」を依頼した。

それくらい自分でやれよおい、と思いながらも楽しそうな任務だったので、公爵は

2つ返事で承諾し、部隊を送り今に至る。

「隊長、まだ進むんですか？ そろそろあの看板から5リーグですよ？」

男達の中の1人が先頭に行く隊長に話しかける。すると不機嫌そうに顔をしながら
隊長の男が返事をする。

「君はあの看板の内容を信じているのか？ あの野蛮人が書いたものを？ まったく
馬鹿馬鹿しい。あいつらの言うことなんかこれっぽっちも信用するものか。心配は
いらん、私についてこい」

「りょくかい」

そんなこんなでついにグレートウォールから5リーグ地点を通過して、さらに近づこう
とした。すると。

「ん？」

隊長の斜め後ろにいた男が目を凝らした。

「どうした？」

「いえ、あの壁の上で何かが光ったような……」

それ以上先を言えなかった。いきなり頭上でドでかい爆発音と共に茶色の煙が

そこら中を包み込んだからだ。逃げる間もなかった。76mmコシヨウ・ガス砲弾が

飛来してきて、その近接信管が男達の頭上10mで起動したのだ

った。

「な、なんだこれは！？ は…はつくしよい！…！」

「くしゃみが止まらへつくしよん！…！」

「目が！ 目がああああああ…！」

「喉が痛い！！！！ うえーん、ママー！！！」

「くそ！ ぶえつくしよん！！ あの看板はへつくし！！ 本当だつたのか！！」

「おのれつくしよん！！ うがああああ！！ 撤退だつくしよん！！」

催涙ガスとコショウが漂う空間から、20人の男達はなんとか逃げることに成功した。

グレートウォールの上に一定間隔で配置されているオート・メラ
ーラ76mmスーパ
ーラピッド砲。これらが目標にサツと狙いをつけて砲弾を発射した。

しかし、5基の

砲台から発射された砲弾はたったの5発だけだった。本来なら1分
間に120発の76mm

砲弾を敵にお見舞いすることができるが、今はまだそれを敵に知ら
れたくないのです

今回はこのような攻撃手段を使った。

グレートウォール内部にある指揮所で、ターミネーターが砲台をコントロールする
ジョイスティックから手を離してモニターを見つめる。そこには監視カメラの映像が
流れていて、くしゃみと鼻水と涙をまき散らしながら撤退してゆく
敵軍の姿が鮮明に
映しだされていた。

「第1国境警備隊指揮所より本部。敵勢力の無力化に成功。敵は撤退中」

「ご苦労。引き続き警戒にあたれ」

いずれはこの警備も人間がやることになるだろう。それまでは彼らが国境を守るのだ。

続く…

第9話：国内整備：デクスター視点（後書き）

追加設定を。

新たに公務員となったゲルマニア国民には全員テストメント学習装置で必要な知識を記憶させています。なのでご心配なく。各省庁のトップにも

同じことをしています。

次回はウィリアム視点で。

では

第10話：国内整備：ウィリアム視点（前書き）

今回はウィル視点ですよ。

6 / 27 一部訂正しました

第10話：国内整備：ウィリアム視点

アメリカ合衆国防総省（United States Department of Defense, "DoD"）は、アメリカ合衆国の国防・軍事を統合する官庁である。アメリカ軍（五軍）のうち、沿岸警備隊を除く陸軍・海軍・空軍・海兵隊の四軍を傘下に収める。陸海空軍の各省の統括組織であるため、日本では「国防“総省”」と訳されることが多いが、単に「国防省」とされることもある。現在、同国の官庁の中で最大の規模を誇っている。

本庁舎は、五角形の形をしていることからペンタゴンと呼ばれている。アメリカ合衆国大統領の官邸がホワイトハウスと呼ばれるように、ペンタゴンという名称自体が国防総省を指す呼称となっている。

…とまあ、これは現実のお話。今からするのは小説の中のお話。

「デックス達が合同庁舎で会議をしている時、ゲルマニア王国国防総省、地下司令部」

俺が作ったこの建物もまた「ペンタゴン」と皆に呼ばれている。やはりこの呼び方は
どんなところでも一緒なんだね。そんなことを考えながら俺は会議をしていた。
もちろん議題は、常設軍設立の件である。

集まっているのは、俺、陸軍参謀総長のクレイドル大将、国内各地の諸侯軍を
取りまとめるために任命した腕のいい軍人が多数、国防技術開発局のエメリツヒ局長、
そしてゲルマニア王家とウィンドボナ城の警備を昔から担当してきた魔法近衛隊、
通称「ケルベロス隊」の隊長、パーキンス大佐。彼は首都防衛部隊の指揮官でもある。

「お忙しい中集まってくれて感謝します。では早速始めましょう。まず最初は
陸軍について。クレイドル大将、訓練の方はどうですか？」

「はっ！ 殿k、いえ失礼しました、長官が配備された訓練教官と
学習装置テストメントのおかげで

訓練スピードがかなり上がっております。新型小銃にもだいぶ慣れてきて、射撃の腕も

上昇しているのです、あと1ヶ月ほどこの訓練を行い、その後専門分野の訓練を行う

予定であります。半年以内に首都防衛部隊と国境警備部隊が、1年後には全部隊の

配備が完了いたします。」

彼が言った”訓練教官”とは俺が作ったターミネーターである。中身のAIは例によって

”あの人”にしておいた。それはまたあとで。

「わかりました。次は海軍ですが、現在の保有戦力は以下の通りです」

そう言つて俺は皆に資料を手渡した。

ヴァリアント級ミサイル駆逐艦：30隻

タイベリアス級ミサイル巡洋艦（ベースはタイコンデロガ級ミサイ

ル巡洋艦）：20隻

アルブレヒト級航空母艦（ベースはジェラルド・R・フォード級航

空母艦）：4隻

シーライオン級原子力潜水艦（ベースはシーウルフ級原子力潜水艦）

：10隻

ハミルトン級高速戦闘支援艦（ベースはサプライ級高速戦闘支援艦）

：6隻

全部創造魔法で作つて保管してある。旧ソ連製の強力な弾道ミサイル原潜は

誰にも教えないで封印中。なお、これらの艦船は潜水艦以外、空でも行動が可能

である。ガリアの両用艦隊を現代風にした感じ、といえはおわかり

だろうか。

装甲は全部アダマンチウム。さらに、物理・魔法攻撃を完全に無効化することができる。「精霊の加護」防衛装置も搭載している。まあ4人の精霊に頼んだんだけどね。

「現在、これらの艦船の乗組員を募集し、訓練させています。1年後には完全に

運用可能になるでしょう。それまではグレートウォールのみで国境を守ります。

最後に空軍ですが、こちらも現在パイロットを育成中ですので、やはり1年後

からの運用になります。次のページをご覧ください」

次のページには空軍の保有戦力が書かれていた。

・輸送機

C - 130J スーパーハーキュリーズ：300機

MC - 130W コンバット・スピアー：20機

An - 225 ムリヤ：30機

・攻撃機

A - 10C：400機

AC - 130U スプーキー？50機

・戦闘機

F - 15C イーグル：300機

・空中早期警戒管制機

E - 3C セントリーAWACS：30機

・給油機

KC - 135R ストラトタンカー：500機

・ヘリコプター

HH - 60G ペイブ・ホーク：150機

MH - 60G ペイブ・ホーク：100機

・テイルローター機

CV - 22B オスプレイ：50機

・無人機

RQ - 4 グローバルホーク：50機

MQ - 9 リーパー：100機

なぜ戦闘機の数より対地攻撃機のA - 10のほうが多いのかという、敵が戦闘機を

実戦配備していないことを偵察衛星で確認したからだ。周りの国は全部中世だからね。

それにA - 10は7トン以上のペイロードを持っていて、爆弾やらミサイルをたくさん
のせられるから俺は大好きだ！

あと主力戦闘機にF - 15を選んだ理由は整備性がいいから。昔の偉い人はこう言った、

「F - 4は技術と時間そして強引さを要求され、設計に整備のことは全く考えられていない。」

それに比すとF - 15はバカでも整備できる」

と。

上にかくの忘れてたけど、陸軍の兵力はこんな感じ。

・主力戦車

メルカバ Mk4：1500輜

・歩兵戦闘車

M2/M3ブラッドレー：それなりに

・装甲兵員輸送車

M113：まあまあ

ストライカー：色々な種類のをたくさん
クーガー：いっぱい

・装甲車

M1117：まあまあ

・自走砲

PzH2000：いっぱい

M270 MLRS：大量に

HIMARS：もつと大量に

・自走対空砲

ゲパルト自走対空砲：いっぱい

・多用途装輪車

ハンヴェー：必要なだけ

M R A P : 上と同じ

・ヘリコプター

U H - 6 0 L ブラックホーク：600機

A H - 6 4 D アパッチ・ロングボウ：350機

A H / M H - 6 M M E L B : 200機

O H - 5 8 D (I) カイオワ：200機

U H - 7 2 ラコタ：150機

C H - 4 7 F チヌーク：400機

・無人機

M Q - 8 ファイアスカウト 100機

R Q - 7 シャドー 100機

主力戦車はメルカバで決まりだね。かつこいいし搭乗員の生存性を第一に考え設計されているのもいいことだと思う。兵器は造れば出来るけど、優れた人材はそう一朝にできるものではない。人材こそ宝なのだから。あとの兵器は全部西側諸国製のでいいや。中国製だと爆発するし、ロシア製はおそロシアだし。共産主義の連中が造るものは信用できん。使えないゴミが変態兵器しかない。

とか言っているけどA n - 2 2 5 ムリーヤは例外。クソでかい6発大型輸送機なのに、

戦闘機並の機動が可能なのだ。だから採用した。

一瞬、ほんの一瞬だけどイギリス製の武器も採用しようと思った。でも、あの国は

あの国で珍兵器ばかり作っているからやめておいた。ロケット推進式の陸上爆雷を作ったり、ばねで対戦車擲弾を発射する兵器を作ったり、軽巡洋艦に訳のわからない理由で45・7cm砲をのせたり、氷山空母をマジで作ろうとしたり、複葉機に何故か対水上レーダーと3インチロケット弾をのせたり、鉄道会社が戦車作ってたり、飛行機乗りへの心理的圧迫のために対空火炎放射器を作ったりなどなど。数えたらキリがない。

…話を戻そう。それで海軍の空母に載せる搭載機は以下の通り。空母1隻につき、

F - 35C : 60機

E A - 18G グラウラー : 6機

C - 2 グレイハウンド : 2機

S H - 60F オーシャンホーク : 4機

H H - 60H レスキューホーク : 3機

を載せる。

なんで対潜ヘリコプターまであるのかというと、いずれは海を渡ってこの世界を完全に

勢力下に：ゲフンゲフン、まあとにかくもしかしたら使うときが来るかもしれないしね。

電子戦機なんて絶対に使わないだろ、という意見もあると思う。でも、ロマリアの連中が

密かに集めている「場違いな工芸品」の中に戦闘機がある”かも”

しれない。タイガー
戦車やAK-47、それにドイツ製8.8 cm Flak 18
/36/37高射砲を持っているのだから、
戦闘機を持っていないとは限らない。タルブ村にあるゼロ戦とかが
他にもある”かも”
しれない。

「可能性がほんの少しでもある場合、それに対応すべく行動せよ
と俺は前世で
親父に教わった。違い世界にいてもそれだけは忘れないでいる。」

「とまあこんなところですかね。なにか質問ある人は？」
するとパーキンス大佐が手を上げて発言する。

「長官、首都の防衛体制について少し意見があります。現在の兵力
では充分ではないと
私は思います。この地図をご覧ください」

そう言っ壁に貼ってある首都近辺の地図を皆に見せる。ゲルマ
ニアの首都である
ウィンドボナは一言で言えば「平野」である。なので壁になっく
れる山はないし、
大きな川が1つしかない。

「地形的な問題がありますのでもし敵軍に侵攻された場合、首都を
守るのはかなり

難しいです。ですがそう簡単に放棄するわけにもいきません。そ

こで1つ提案が」

彼はペンでウィンドボナ中心部を囲むように円を描いた。

「この円の部分に大きな堀を造るのです。近くの川から水を引いてくれば、

敵軍の侵攻を遅らせることが可能です」

「なるほど。しかしその堀の建設予定地に住んでいる人々への対処はどうするんです?」

「ご安心を。既に下調べをしておきました。建設予定地に住んでいる人々は、現在

デクスター殿下麾下の土メイジ部隊が建設中の大型マンションへの移住が決定

しているのです。なので彼らが引越したあとにそこを取り壊して堀にしても

問題はありません。どうでしょうか?」

俺はちよつと考えた。確かに掘って有効だよな。日本の城の周りにも堀がいっぱい

あったし。でもコストの問題も…あ、それはいいか。俺がやればいいし。

「…実に素晴らしいです、大佐。ここまで良く調べてくれるとは。私は賛成ですが、

皆さんはどうですか?」

他の参加者も異議なしだった。

「ではウィンドボナ防衛用の堀を建設しましょう。えー、マンションが完成するのが…」

俺は手元の資料の中から予定表を引っ張り出す。

「…来月の頭ですか。じゃあ建設予定地に住んでいる人々が全て引っ越しを終えた後に

建設を開始しましょう。大佐、調査ご苦労様でした」

「いえ、ありがとうございます」

その時、クレイドル大将の補佐官が会議室に入ってきて大将にメモを渡す。すると

彼は血相を変えて俺に報告した。

「長官、旧ツエルプストー領のゲルマニア・トリステイン国境付近でトリステイン軍と

思われる集団を確認しました！ 武装して馬に乗っており、グレートウォールに

接近中です。現在のスピードですと、あと7分で第2防衛ラインに侵入します」

「なんだと？」

「モニターに出します」

すると壁のモニターに偵察衛星からの映像が映し出された。この偵察衛星は実に

優秀で、やろうと思えば新聞記事も読めるし、ヌーディストビーチで寝そべっている
美女の乳首が立っているか陥没しているかまでわかる。ともかく、画面に第2防衛
ラインと連中の予想到着時刻が表示された。

第2防衛ラインとは、グレートウォールから5km圏内のエリアのことである。第2がある
なら第1もあり、第1防衛エリアはグレートウォールから10km圏内のエリアである。あ、
言い忘れていたがゲルマニアではすでにメートル法に移行したのでリーグとかいう単位は
もう無い。お金に関してはそのままだけど。

「ったくあのくそつたれどもめ。看板の文字も読めないのか?…とてもぶっ殺したい、
ぶっ殺したいんだが…今はまずいな」

「そうですね、まだ軍備が整っておりませんから」

「仕方ないな…第1国境警備部隊に通達。例の”追い払え”砲弾を撃ちこんで敵勢力を
無力化せよ。でも速射機能は使っな。あれはまだ敵に知られたくはないからな」

「了解しました」

すると1人の中佐が手を上げて質問してきた。

「失礼ですが長官、”追い払え”砲弾とは一体…」

「ああ、みんなに言ってなかったね。これこれ」

俺はモニターに砲弾の構造図を出した。

「高性能爆薬の代わりにコシヨウと催涙ガスをたっぷり詰め込んだ非殺傷砲弾です。」

近接信管により敵の頭上で爆発する仕組みです」

「これは…きついですな」

質問した中佐は顔をひきつらせながらそう言う。

「これを食らえば連中もトンスラするでしょう」

〈5分後〉

偵察衛星からの映像では、煙に包まれた敵が逃げていく様子が見えた。現地の指揮所から通信が入る。

「第1国境警備隊指揮所より本部。敵勢力の無力化に成功。敵は撤退中」

「ご苦労。引き続き警戒にあたれ」

ターミネーターはみんないい子だからきちんと仕事をしてくれる。

「あっけなかつたですな」

同じく映像を見ていたクレイドル大将がつぶやく。

「こんなものでしょう、トリステインの連中なら。所詮我々の敵ではありませんよ」

「そうですね。ガリアと同盟を組んでいる我々はこの大陸で最強の存在ですから」

「そうそう。あ、ガリアで思い出した。彼らへの武器輸出の方はどうですか？」

ゲルマニア・ガリア軍事同盟に従い、ガリアはゲルマニアに魔法技術を、ゲルマニアはガリアに兵器の輸出を行っている。まあ、最新兵器ではないけどね。

「順調です、長官。既に輸送部隊がガリア国内へと入りました。売却する兵器はこれです」

と言つて紙を渡された。

「なになに、歩兵用にFN FALを25、000丁、両用艦隊用にポフォースノブレダ40mm
連装機関砲を50基、なるほどなるほど」

「それでこちらが……」

そんなこんなで他にも色々確認やら指示やらをしていたら、いつの間にか日が暮れていた。

「あー疲れた。今日もいっぱい仕事したな〜って、よく考えたら俺ってまだ3歳だよな？」

なんでこんなに仕事してんだろ…あ、手紙書かないと」

今更だがそんなことを考えながら車に乗って城に帰る。以前作戦室だった場所は、今や完全に俺達兄弟の根城になっていた。そこに入って扉をロックしてから、部屋の端っこに

置いてある質素な机に向かう。そして引き出しから和紙を取り出し、イザベラへの手紙を

書き始めた。今はとても忙しいので、こうして手紙でのやりとりが普通になっていた。

ジヨゼフ経由で電子メールを送る、という手もあったんだが、やはり気持ちのこもった

手書きの方がイザベラも喜ぶだろう。俺も手紙の方が貰った時嬉し
いしね。

「なるべく早めに会いに行きたいな〜ってか。それに他のヒロイン達との接点も

早めに…へっへっへ」

そんなことを呟きながら万年筆を走らせる俺であった。

「」

そう、訓練教官のAIは映画「フルメタル・ジャケット」で有名なハートマン軍曹にしたのだった。「訓練教官「ハートマン軍曹」という公式は絶対だからだ。

その隣で、今日から訓練が始まる新兵たちを前に訓示をたれていた。

「いいか！ ここでは人種差別は許さん！ 人間、翼人、エルフを俺は見下さん！

すべて…平等に価値がない！ わかったか！」

「」

「

隣のアスレチックでは。

「何をもたもたしているんだこの臆病マラ…！ クビ切り落としてクソ流し込むぞ…！」

「サー、イエッサー…！」

反対側にある射撃訓練場ではひっきりなしに銃声が鳴り響いてい

た。

「なんでこの距離で当てられないんだ!! お前の目はなんのためについているんだ？」

女を見るためか？ 答えてみる！」

「違います、サー!!!」

「貴様の弟も酷い有様だった！ 今すぐお前等のタマを切り取ってクズの家系を

絶つてやる！ さあズボンを下ろせ!!!」

「そ、それは嫌です、サー!!!」

「ならとつとと残りの弾をあの標的に撃ち込め!! さあ撃て撃て撃てっ!!!」

「さ、サー、イエツサー!!!」

新しく採用された新型小銃とは、セルビア共和国のツアスタバ・アームズ社製の

ツアスタバM21。AK-47をベースに設計した新世代のアサルトライフルである。AKの

基本構造を受け継ぎつつもより西側陣営の設計思想を取り入れた新型アサルトライフル

なので、AKの頑丈さは健在である。使用する弾薬を従来の7.62x39mm弾から5.56mm

NATO弾へ変更することで反動を低減し、銃身内側をクロムでメッキすることで、

耐久性を向上するなどの特徴がある。

なんでこれなのかって？ とある国防長官がAK大好きだからに決まっているじゃない！

他の制式武器についてははおいおい説明しますよ。

そんなこんなで毎日訓練は続いている。日が暮れる頃には、今日の朝取り替えた

ばかりの新品の標的もぼろぼろである。まあ、日が暮れても夜の8時まで訓練は

続くんだけどね。ちなみに射撃の的になっていた標的には、某国のアホな姫様と

とある宗教の一番偉い人の顔写真が張ってあった…

第10話：国内整備：ウィリアム視点（後書き）

今回色々書いた兵器の数は全て初期の配備数です。なのでこれから

必要に応じてどんどん増える可能性もあります。ていうか増やします。

過剰戦力？ 何それ？ 美味しいの？

新型小銃をツアスタバM21にした理由は本文に書いたとおり作者が

AK好きだからです。決して銃の名前を読んで「札束？お金じゃん！」

と思ったからではありません、ええ。

訓練スピードが異常なのは…お察し下さい。

次はちょっと時間を開けてから国内査察（という名の観光）か
ついに「ラピユタ」訪問？
では

第11話：それは突然に（前書き）

ちよつと考えなおしてこれ書きます。

PVが20万を超えました！ みなさんありがとうございます！

第11話：それは突然に

どうも、ウィリアムとデクスターだよ。

「ゲルマニア政変」から6ヶ月が経った。当初の予定通り、首都防衛部隊及び国境警備部隊の配備が完了した。これで一安心だね。陸海空3軍が完全に整うまであと6ヶ月。そうすればゲルマニアはこの世界で唯一、最たる、そして最強の国家となるだろう。

あとパーキンス大佐が言っていた堀も完成した。俺が現地まで行って久しぶりに魔法を使ったらあつという間に終わっちゃったよ、ははは。みんなびっくりしてたけどね。ウィンドボナはきちんと区画整理されて、立派な道路もでき、鉄道も走り、インフラ整備が完了した。2年ちよつとでゲルマニア全域の整備が完了する。

そうそう、ガリアもずいぶんと発展した。俺達が様々な技術を提供した結果、ガリアの王都リュティスは高層ビルが立ち並ぶ大都市へと変貌した。人口も増えて、今では45万人を突破したそう。ゲルマニア大使館もきちんと造ってある。そしてリュティス郊外には広大な空軍基地がある。このガリア最大の空軍

基地には、俺達が売ったF-14Dトムキャットが配備されている。

また、ガリア両用艦隊の大規模な基地があるサン・マロン。ここにも手を加えた。

まず基地の外周防御を大量の対空砲で固め、さらにMk45 Mod2 5インチ砲を

6基設置した。これで敵が船で来ようが戦車で来ようがへっちゃらである。

そして艦隊の船には以前売ったボフォースノブレダ40mm連装機関砲を載せて、

火力を大幅に上げている。例えアルビオンの艦隊とタイマンはっても余裕で

勝てるだろう。

さらにガリアへハートマン教官(ターミネーター仕様)、略してハートネーターを

派遣して、彼らの訓練も行っている。これまた以前売ったFN FALの射撃指導や分解、

掃除方法などなど。

それと、以前会議でツエルプストー国土安全保障長官が発案して採用された、

アルビオンの関所。交渉はうまくまとまり、こちらの技術を多少提供する代わりに

関所を置いてもいいと許可をもらった。まあ、彼らに提供した技術は農業関連の

ものがほとんどだったがね。なんでも去年不作だったらしくて。その関所の

おかげで、敵国からのスパイの水際防止が成功している。これによっしー。

さて、若干暇になった俺達は何をしているのでしょうか？

「昼時、ウィンドボナ商店街、「ラピス食堂」

「…うまい。やはりこれだな」

「ああ、まったくだなウィル。来てよかったよ」

この食堂は政変後に出来たもので、今ではウィンドボナで、いや
ゲルマニアで

知らない人は居ないほどの人気っぷりである。最近になって各地に
チエーン展開を

始めてさらに稼いでいるそう。そして今俺達兄弟は少しばかりの

護衛を引き連れて
ここで日替わり定食を食べている。値段はなんと4ドニエ。日本円
になおすと約
400円といったところだろうか。そして味も素晴らしい。なので
俺達もこの店の
常連になった。

「米っていいな」

「ほんとそうだな。パンもいいけどご飯もいい」

「俺はご飯派だな。デルコ、君はどっち派？」

俺は隣で一緒にご飯を食べている護衛チーム指揮官のデルコ・レ
イガン大尉に
聞いてみた。

「はっ、私はこの米がとても好きになりました。これを昔は牛に与
えていたなんて…」

そう、ハルケギニアでは米を牛の餌に使っていたのだった。それ
を知った俺達は
農家に突撃して米を分けてもらい、そのおいしさをみんなに教えた
結果、国中で
米が普及した。

「もったいない話だよな、ほんと」

するとデルコ大尉の携帯電話がなり、彼は箸を止めて電話に出た。
しばらく先方の

話を聞いてから、大尉は俺に携帯電話を差し出した。

「長官、国王陛下から至急とのことですよ」

「わかった」

親父は滅多に電話で俺を呼び出さないのに、何かまずいことでも起きたんだろう。

とにかく俺は受け取った携帯電話を耳に当てた。

「はい、こちらウィリアムです。どうされました、陛下？」

するといつもより落ち込んだ親父の声が聞こえてきた。

「國務長官、残念なニュースがある」

親父が俺のことを職名で呼ぶということは、これは仕事かな？ それも対外的な。

「つい先ほど、ガリアのジョゼフ殿下から連絡があった。ガリア国王である」

ロベスピエール4世陛下が…お隠れになったそうだ」

「…そうですか、ついに…」

彼の容態が悪化していた事は知っていたが、ついにお亡くなりになったか…残念だ。

そして俺は知らなければならぬ大事なことを聞いた。

「それで、次のガリア国王は誰ですか？」

もしジョゼフだったら、原作みたいにシャルル暗殺&オルレアン夫人精神破壊&

シャルロット タバサ化になってしまふ。それだけは避けたい、うん。でもシャルルが王になつたらどうなるんだろう？

「それなんだがな…まだ決まっておらんのだ。で、ジョゼフ殿下がお前を呼んでいる。」

今すぐにガリアに来て欲しいそうだ」

「私に、ですか？」

「そうだ。なので今やっている仕事は全部他の者に押し付けるなりなんなりして

大至急ガリアへ向かえ。わかったな？」

「了解しました、陛下。直ちに」

そして電話を切り、残りのご飯を平らげて料金をテーブルの上においた。

「ごちそうさん！ また来るよ！」

「毎度あり！ いつもありがとうございます、長官！」

食堂のオーナーのフランク・ラピスが笑顔で返す。

「デックス、ちょっとガリアへ行ってくる」

「何かあったのか？」

俺はデックスの耳にそっとささやいた。

「ロベスピエール4世が崩御あらせられたそうさ。で、何故かジョゼフが俺を

呼んでいる」

「そうか、わかった。こっちは任せてくれ」

「あいよ。デルコ、デックスについている。俺は大丈夫だから」

そう言い残して俺は店を出る。商店街の外の人目のつかないところまで歩いてから

転送魔法を起動した。原理は「リリなの」と同じである。

「さて、ガリアへれっつら〜」

〈ガリア、リュティス、ヴェルサルテイル宮殿、
「グラン・トロワ」
、国王の寝室〉

そこにはジョゼフとシャルルが椅子に座って父親の亡骸を見つめていた。ついさつきまで生きていたのに、今はもう動かない。魂の抜けた、ただの冷たい肉の塊になってしまった。しかもロベスピエール4世は、次の王を誰にするかを決めること無く亡くなってしまった。残されたのは1つの封筒だけだった。

「兄さん…一体どういう事なんだろうね？」

シャルルは兄に尋ねるが、ジョゼフも訳がわからないといった表情を浮かべた。

「俺にも分からんよ、シャルル。こんなことは前代未聞だろう」

2人はそばの机に置いてある手紙を見つめた。その封筒の表には次のように書かれていた。

「この手紙は、ゲルマニア王国副王兼国防長官兼國務長官、ウイリアム・タイベリアス・

フォン・ゲルマニア同席のもと読むこと」

そして裏には「ロベスピエール4世」と書いてある。

すると、ドアがノックされ使用人の1人が入ってきた。

「失礼します。ゲルマニア王国からウィリアム・タイベリアス・フオン・ゲルマニア
国務長官が参られました」

「もう来たのか!？」

思わずジョゼフは立ち上がって尋ねる。ゲルマニアに電話したのは
10分前なのに!

「はい。衛兵の話によりますと、正門前に突然現れたとか何とか
…」

「そ、そうか。ここに案内してくれ。それとお茶を」

「かしこまりました」

転移魔法でガリアへ飛んできた俺。宮殿の入口にいきなり現れた
ので、警備をして
いた兵士が腰を抜かしていた。まあそんなことはともかく、俺はジ
ョゼフとシャルルが
いる部屋に案内された。

「こんにちはジョゼフ殿下、シャルル殿下。こんな形でお会いする
とは実に残念です」

「ああ、全くだな長官。急な要請に応じてもらって感謝するよ。か
けてくれ」

俺はジョゼフに促されて椅子に座る。使用人がお茶を出して、部屋を出てから話し始めた。

「それで、どのようなご用件ですか？」

するとシャルルが黙って例の封筒を差し出す。俺は表を読んでびっくりした。思わず

敬語を忘れて返事をしてしまう。

「…なんで俺同席のもとじゃないとあけちゃ駄目なんだ？」

それを合図に2人も敬語をやめた。

「それがわからんのだ。父上はウィルのことをかなり評価していたからではないか？」

「でもさすがに遺言状まで同席させる？ 普通じゃありえないよ、兄さん」

「…ともかく、開けてみましょうか？」

このままでは話が進まないと思ったので俺が促す。

「そうだな、ウィル、開けちゃってくれ」

「りょーかい」

そして封を切り、中から手紙を取り出す。するとその手紙の冒頭にも不思議なことが書いてあった。

「…あの、この手紙も俺が読めって書いてあるんだけど？」
するとシャルルは思わず頭を抱えてしまった。

「父上、なにがしたいんですか？」

「とにかく読んでくれ、ウィル」

ジョゼフに促されるまま、俺は読み始めた。

「愛する息子たちよ、そしてウィリアム殿下、君達がこの手紙を読む時には、私はもう

君達の側にはいないだろう…」

私が好んで使っているこの紙は、他の紙より薄いのでインクの染みができやすい。それに私の腕もうまく動かない。なのでいつもよりもゆっくりに、慎重に手紙を書かなければならなかった。

私はもう長くない。起き上がることもできず、話をするのも重労働だ。なのでこの手紙を残そうと思う。

ジョゼフ、シャルル、2人ともよくここまで育てくれた。父親として嬉しい。

まだ妻が生きていればよかったのだが……。さて、私が死んだ後、このガリアを

統治する王になるのはお前たち2人から選ばなくてはならない。

シャルルは民からの

信頼も厚く、魔法の腕も素晴らしい。王になる資格は充分にある。だがジョゼフも

虚無という偉大な魔法を扱うことができる。そして何より頭の回転がいい。お前に

チエスで勝つのは本当に難しかったよ。だから2人とも王になる資格はあるということだ。

だが、私は選べなかった。決めることができないのだ。2人も優秀だからな。

我ながら情けない。自分の跡取りすら決められないとはな。

そこで、ウィリアム殿下、貴殿にお願いがある。差し出がましい、そしてあまり

にもふざけているのは承知で、だ。

次のガリア国王を貴殿が選んでくれ。貴殿とデクスター殿下は信頼できる。だから

こそ頼みたい。全てを貴殿に託す。もし貴殿が決めたことに反発する、もしくは

決定に満足せずに兄妹喧嘩など起こしたら承知しないと伝えてくれ。この手紙を

読んだ瞬間、貴殿はガリア国王の名代（ある人の代わりを務めること、代理）と

なる。君の決定は絶対的なものとなるのだ。

そしてジョセフにシャルル。決して、決してゲルマニアを裏切るな。どちらが

王になったとしても、だ。彼らはこの大陸で一番信頼できる人々だからな。これが

父からの最期の言葉だ。末永く幸せに、そして強く生きる。ガリアを頼む。

ロベスピエール4世。

そして現在。俺は手紙をきちんとたたんで封筒にしまい、机に戻した。

「いやいや」

そうつぶやくとジョゼフも。

「いやいやいや」

それにシャルルも合わせて。

「いやいやいやいや」

「」「」「どうしてこうなったっ！！？？」

3人の悲鳴に近い大声が部屋中に響き渡った。

「なんで？　ねえなんで俺なの？　ていうかなんで他の国の王子に次期国王決めさせるの？」

「まったくわけがわからないよ」

「父上…最期の最期になんてことを…」

俺は頭を抱え、シャルルは呆れて、ジョゼフは呆然としている。

5分ほどしてから3人は落ち着きを取り戻した。お茶を飲んでから考える。

「さて、今の私は謎の理由でガリア国王の名代であるので、これから次期ガリア国王を決めます」

「「はっ」「」

すると2人はこちらを向いて跪いた。

「…では私の質問に素直に答えてください」

「「わかりました」「」

「「ほん、では…」

ガリア国王になりたい人、手を上げて！」

「…は？」

「すみません、ちょっとふざけました。では気を取り直して」

そして自分の意見を話し始めた。

「本音を言うと、俺も決められない。非常にデリケートな問題だからね。そこで、

2人には腹を割って話し合ってもらいたい。お互いの気持を知るとはいい機会だ。

本心で話し合って、2人で次期国王を決めてくれ。じゃあ俺はちよっと散歩してくる。

20分ぐらいしたら戻るよ」

そう言って俺は部屋を後にした。扉を閉めて廊下の壁によりかかってつぶやく。

「こんな重大な役割は勘弁してくれよ…さて、きれいな庭でも散歩するか」

S i d e シャルル

「ウィルめ、めんどくさいから俺達に押し付けたな」

部屋に残された兄さんはそうつぶやく。

「でも、僕がゲルマニアの次期国王を選べと言われたら、同じ手を
使うよ」

僕も苦笑いしながらそう話す。そして沈黙。本心で話せと言われ
ても何を話せば
いいのだろう？ 兄さんを追い落として王位を得るべく血の滲むよ
うな努力を重ねて
能力を高めていたことか？ それとも裏金を使って家臣を味方に付
けていたことか？
そんな事話せないよ…でもとりあえず話をしないと。

「兄さん、僕は…」

だが兄さんは僕の言葉を遮って強い口調でこう言った。

「シャルル、お前が次の国王になれ。俺はお前を補佐する役割でい

い
「

一瞬兄さんの言っていることがわからなかった。なぜ自ら次期国王の座を放棄するんだ？

「シャルル、お前が今まで必死に頑張ってきたのは俺が一番分かっている。だからこそ、

お前が国王になるんだ。俺は興味ないからな」

「に、兄さんでも…」

「でもな、もう裏金を使うのはやめておけ」

「っ!？」

僕は顔面の血の気が引くのを感じた。兄さんは知っていたのか！
？ バレないように
こっそりとやっていたはずのに！

「ど、どうしてそれを…」

「俺はお前の兄だぞ？ 知らないことはないさ」

「…なんでもお見通しだね、兄さん」

すると急に僕は涙が出てきた。そして自然と口から本心が出ていた。

「…僕は愚かだよ。裏金も使って、家臣たちを味方にして、一生懸

命魔法の特訓もして、

そこまでして王になりたかった。僕はとても欲深い人間だよ、兄さん……」

すると兄さんは僕のことを優しく抱きしめてくれた。

「人間誰でも欲はあるさ。欲する心がない人間はつまらないからな。魔法の腕だって

お前のほうが上だ。俺は虚無を使えるが、爆発させるか高速移動するだけだ。

あれのどこが伝説なのか理解できん。実用性のある魔法を使えるお前のほうが

王になるにはふさわしい。だからお前が王になれ。な？」

「兄さん……」

「俺達兄弟で、このガリアをもっと豊かにしていこうじゃないか。ゲルマニアという

素晴らしいパートナーもいるんだ。絶対にできるぞ」

「…うん！」

こうして僕は次期国王になったのだった。

Side out

「やめてくれ、身震いするほどおぞましい」

なんとか誤解を解いた2人はさつきより清々しい表情を浮かべている。

「それで決まったようだね？」

「ああ、次期国王は…」

「僕がやる」

シャルルが胸をはって宣言する。

「で、俺はシャルルの補佐だ。出来れば外交の仕事がしたいな」

とジョゼフ。これで原作の悲劇は避けられたわけだ。ふー…

「じゃあ決まりだな。シャルル、貴殿を次期ガリア国王に任命する
！」

「ははっ」

「んで、ジョゼフは外交大臣としてシャルルの補佐を頼む」

「はっ」

「じゃあこれでガリア国王は正式にシャルルになったわけだし、俺の役目はおしまいっ」と

やっと俺は解放された。そしてシャルルは父親の手に握られてた土のルビーを
自分の指にはめた。

「では国王としても最初の仕事をやらないとね。父上の葬儀を…」

「そうだな、シャルル。早速手配しよう。ウィル、しばらくガリアにいても平気か？」

「大丈夫だ、問題ない。デックスがいるからな。葬儀にはきちんと参列するよ。服とかは

輸送させれば大丈夫だし」

「そうか、ならイザベラと会ったらどうだ？ サプライズってやつだ」

「それもいいね。じゃあ行ってくる」

イザベラと直に会うのは久しぶりだからとても楽しみだ。

く「プチ・トロワ」く

大きな部屋でイザベラは手紙を読んでいた。シャルロットは隣の部屋でお昼寝中。

「ウィル…会いたいな…」

「呼んだ？」

「うっひええええいいっ！！！！」

後ろから俺が声をかけると、イザベラは変な大声をあげながら飛び上がった。そして

声の主が俺だとわかると、満面の笑みを浮かべながら抱きついてきた。

「ウィル！ 会いたかった！」

「俺もだよ、イザベラ。調子はどう？」

「ばっちりだよ。魔法もできるし！」

そう、イザベラは原作と違いきちんと魔法が使えるのだ。イザベラからの手紙によると、

属性は風と土。おそらく風はトライアングル、土はラインまで成長するだろう。

そのおかげで、彼女は原作よりも性格が素直に、そして元気に育っている。

「それはよかった。これからも頑張ってな」

「うん！ でもなんでガリアに？」

「ちょっとね。ロベスピエール4世陛下の葬儀に出席するために来たんだ」

「お祖父様の…」

先王の名前を聞くとイザベラも悲しそうな表情を浮かべる。

「お祖父様は色々と教えてくれたから大好きだった。シャルロットもそう。あの子、

知らせを聞いた時大声で泣いちゃったんだ」

「そうだったのか…」

その時になって、イザベラの目が少し潤んでいることに俺は気がついた。ならば

俺がやるべきことは1つ。そっとイザベラを抱き寄せることだ。

「うい、ウィル!? なななにを…」

「イザベラ、泣きたいときは泣けばいい。我慢する必要なんか無いよ」

多分シャルロットの前では泣けなかったんだろうな。年上だし。

「うっ…」

するとイザベラは肩を震わせて静かに泣き始めた。

「ウィル…しばらくこのままでいさせて…」

「ああ、もちろんだよ」

2人はしばらく抱き合っていた…

1週間後、ロベスピエール4世陛下の葬儀がひっそりと行われ、次の国王がシャルル

1世に、外交大臣にジョゼフが就任したことが正式に発表された。

そして葬儀の後、俺はデックスにメールを送った。5分後に彼はゲルマニアと

ガリアの国境付近に建設されたアルデラ空軍基地へと転移し、待機していた

CV-22Bに乗り込んで飛び立った。

第11話：それは突然に（後書き）

めちゃくちゃ？ 気にしない、気にしないwいつものことですから。

原作と違いシャルルが国王になりました。お互い話しあった結果なので

いいことだと思います。これでシャルロットはクーデレ化しないし、イザベラも優しい子に育つ予定です。クーデレタバサが好きな人はごめんなさい。

あと確かアルピオンのモード大公が粛清されるのって、原作開始の4、5年前でしたよね？一応確認しとこうと思ひまして。

次回はデックスは何処へ行くのか？ とその他。
では

第12話：姉妹、再開。（前書き）

なんかエヴァっぽいタイトルになりましたね。

第12話：姉妹、再開。

「ロベスピエール4世の葬儀の翌日の朝、「グラン・トロワ」の国王の部屋」

昔ならロマリアのクソ神官がもったいぶって戴冠式とかやっていたが、ガリアでも

「ロマリア教死ね運動」が流行っているので、戴冠式は行わずシャルルは国王になった。

そして俺は今シャルルとジョゼフの前にいる。

「それで話とは？」

葬儀が終わったばかりのシャルルが尋ねる。

「…その前に人払いをお願いします、陛下」

もうシャルルは国王なので、一応敬語で話すことにした。

「わかった。皆の者、下がっておれ」

そう言っつてシャルルは部屋にいた護衛の兵士や使用人たちを外に出した。それを

確認した俺はさらにサイレントとロックを厳重にかけた。

「そこまでするということはとても重要な話なんだろう？」

懐に杖をしまうとジョゼフが聞いてきた。

「ええ、とても重要な話です。陛下、実はジョゼット姫殿下のこと
でございます」

「なっ!?!? なんて、あの子のことを…」

まさか俺がジョゼットのことを知っているとは思っていなかった
らしく、

シャルルは顎が外れるくらい口を大きく開けていた。

「ゲルマニアの情報収集能力が素晴らしい、とだけ言っておきます。
それで、

許可がいただければ今すぐ彼女をここへお連れしますが、どうで
しょう?」

シャルルはしばらく無言になった。彼の頭の中では、もう1人の
娘に会いたい、

という気持ちと、でもどんな顔をして会えばいいのかわからない、
といった

気持ちが混ざり合っていた。

「ウィル、なぜ今すぐなんだ?」

そこでジョゼフが素朴な疑問を投げた。

「なぜなら、彼女がロマリアに利用される可能性が非常に高いから
です」

「「ロマリアだって!?!?」」

2人は甲高い声で叫ぶ。

「ええ、これを御覧ください」

俺は持っていたかばんからノートパソコンを取り出し、RQ-4
グローバルホーク

無人偵察機から撮影した画像を見せた。

「ここがジヨゼット姫殿下がおられるセント・マルガリタ修道院で
す。ここへ行く

には竜籠などの空路しか方法はありません。故に滅多に外部の人
間が立ち入る

ことはないはずなんです。ところが…」

俺は次の画像を見せる。そこには修道院の入り口に立派な風竜が写
っていた。

「ほう、立派な風竜だな。で、これは？」

「これに乗っていたのはこの人物です」

「ん？ なんだこのイケメンは？」

画面にはでかでかとある人物の顔が。

「ロマリアの助祭枢機卿、及び聖歌隊指揮者のジュリオ・チェザー
レです。こいつが

度々この施設を訪れていることが判明しました。ちなみにジュリ
オ・チェザーレと

いうのは偽名で、真の正体は幻獣を操る虚無の使い魔『神の右手・
ヴィンダールヴ』。

ロマリアの虚無の担い手であるヴィットーリオの使い魔です。まあ今はそんな事
どうでもいい事ですけど」

画像を幾つも見せていく。日付を見ると確かに何回も訪れていることがわかった。
どうやらグレートウォールを大きく迂回し、海側から飛んできたものと思われる。

「なぜこんな場所に何回も来るのか不思議だったのですが、その理由はある人物と
会ったためだったのです」

「おい、まさか…」

ジョゼフが気がついたようだがスルーして続ける。

「こいつがいつも会っていたのはジョゼット姫殿下なのです」

そう言っただけ最後の画像を見せる。そこにはジュリオと話しているジョゼットの姿が
くつきりと写っていた。無人偵察機の写真って真上から撮るから顔まで分かんねえだろ、
とデックスに言われたが、

「無人偵察機を遠くに移動させて、できるだけ低いアングルから撮影した」

と説明したらなんか納得したようになかったような。

「…えっ」

シャルルがポカンとした表情を浮かべる。理解できなかったからだ。なんでロマリアのクソツタレがうちの娘と何回も会っているのか、を。

「理由はこうでしょう。陛下が国王になったので、次のガリア国王は間違いない」

シャルロット姫殿下になるでしょう」

「「そっだな」「」

「で、シャルロット姫殿下とジョゼット姫殿下は双子であり、顔もそっくりです」

「「ああ」「」

「もし、ロマリアの連中がジョゼット姫殿下の考え方を”ロマリア風”にしてしまい、

シャルロット姫殿下とすり替えてガリア王女となった場合、この国はどうなって

しまうのでしょうか?」

「「っ!?!」「」

ようやく事態の深刻さに気がついた2人は背筋を伸ばした。

「まあ、しばらく先の話ですが、早いうちに対処したほうがよろしいかと」

「私の娘が、この国がロマリアにいいように使われてしまうのか…しかも」

「王女にすり替えだと…」

呆然としているシャルルにジョゼフが声をかける。

「シャルル、これはまずい。とつとと連れ戻したほうがいいぞ！」

兄の言葉を受けてシャルルは決断する。

「…わかった。ジョゼットを今すぐに連れ戻そう」

「よいご決断です、陛下」

そしてシャルルは紙を取り出して修道院宛の手紙を書いた。そこには、今すぐ
ジョゼットを引き取る、異論は認めない、あとこれ報酬ね、と書いてあった。

「これでよし！ あとはこれを送れば…」

「いえ、それには及びません」

「えっ？」

すると庭にクソうるさい音と共にデックスが乗っているCV-22

B オスプレイが着陸した。

「あれはデクスター殿下じゃないか！」

オスプレイの後部から降りてきた人物を見てシャルルが驚く。

「ええ、我が弟が今からあれでジョゼット姫殿下を迎えに行きますので、その手紙も

彼に預けてもらえますか？」

「あ、ああ、ではそうしよう」

「じゃあ頼んだぞ、デックス」

「あいよ〜」

外に出て俺がデックスに手紙を渡しているとシャルルも出てきた。

「デクスター殿下。娘を…娘を頼む！」

「ご心配なく、陛下。すぐに連れ戻しますよ」

笑顔で返したデックスはオスプレイに乗り込んで飛び立った。途中でガリア空軍の

KC-130J空中給油機から燃料を分けてもらい、目的地へと向かった。

Side デックス

「あれだな、よく刑事もののドラマで犯人とかが追い詰められる崖に似てるな」

セント・マルガリタ修道院が見えてくると、俺の口からそんな言葉が漏れた。

それはどうでもいいとして、エンジンが垂直方向に回転し、オスプレイは垂直離着陸モードに移った。飛行機はその辺に転がっていた小石などを吹き飛ばしながらそっと降りた。わずか10m先に断崖があり、その下に海がある。

オスプレイのエンジン音に驚いたのか、修道院の扉が開いて妙齢の女性が現れた。
見た目からして多分この責任者だろう。

「あの、どちらさまですか？」

子供の姿のままだと怪しまれるので、機内で変身魔法を使いガリア軍の兵士の格好になった。これでよし。

「私はガリア国王シャルル1世陛下の使者である。これは陛下からの親書だ」

俺は自分の名前を言わずに手紙を渡した。それを呼んだ女性は渡された手紙を読んで、
びっくりしながらも指示に従うことにした。

「わかりました。国王陛下のご命令と有らば。すぐに連れてまいります」

5分もしないうちに彼女は小さな女の子を連れて来た。

「いい、ジョゼット？　これからあなたは家に帰るのよ？」

「いえ？　ほんと？」

「ええ。では、この子をどうかよろしくお願い致します」

「分かっています。さあ、行こう」

そう言って俺はジョゼットを飛行機に案内して飛び立った。

「すごい！　そらとんでいる！」

「空を飛ぶのは初めて？」

「うん！　あれ？」

ジヨゼットは俺がいつの間にか元の姿に戻っているのを見て驚いた。

「ああ、これは魔法で姿を変えていたんだよ。俺はデックス。よろしくね。」

君がジヨゼットで間違いないね？」

「うん、よろしく！」

よし！ このまま仲良く出来ればいつの日か姉妹丼も夢じゃない！

でも、シャルロットには全然似てないな……ってそれもそうか。彼女がガリア王家の

人間だとバレないように、イヤリングがマジックアイテムになっているんだ。だから

顔や髪の毛が変化しているのか。まずはそれを元に戻そう。

「ジヨゼット、実はね君には魔法がかかっているんだ」

「まほう？」

「ああ、姿が変わっちゃ魔法なんだ。今からそれを解除するからしばらく目を閉じて

いてくれないかな？」

「わかった！」

素直なジヨゼットは目を閉じる。この隙に俺は、声に出さないうで虚無魔法の1つ、

「忘却」を発動させた。と同時に彼女の耳からイヤリングを気付か

れないように

取り去った。するとあら不思議。あっという間に彼女の顔がシャルロットと

そっくりに。これには護衛も驚いていた。

「…はい、終わったよ。これがジョゼットの本当の顔だよ」

そう言っただけは手鏡を差し出す。それを受け取ってじっくりと自分の顔を眺める
シャルロット。

「これが…わたしのかお…」

「うん、きれいな顔だよ」

「あ、ありがとう…」

若干顔を赤くさせながらお礼を言う。だが彼女は耳を見て不思議に思った。

「あれ？ イヤリングがないよ？」

「ああ、さっき魔法を解いたら消えてなくなっちゃったんだ」

「そっかあ」

そして俺は肝心なことを聞いてみることに。

「ところでジョゼット、この人知ってる？」

かばんからジュリオの写真を取り出して見せてみると、彼女は首を横に振った。

「ううん、知らないよ?」

「そっか、ならいいんだ。もうすぐお父さんとお姉ちゃんに会えるからね?」

「やったあ! ありがとう、デックス!」

これで姉妹井確定だぜ! ありがとうウィル! 今回の任務を俺に譲ってくれて!

そしてはいばい、ジュリオ! お前なんかヴィットーリオとホモつてろ!

Side out

そして場所は再び「グラン・トロワ」の国王の部屋。

帰還したデックスと並んでジョゼットが立っていた。やっぱりシャルロットにくりそつ

だ。そして可愛い、うん。デックスは大喜びだろう。どうせ姉妹井とか考えているだろうな。

「陛下、ジョゼット姫殿下をお連れしました」

「おお、助かったよ！」

シャルルは嬉しそうな顔をしたが、すぐに真剣な表情に戻ってジョゼットと話し始める。

「ジョゼット、私がお前の父だ。いや、父としては失格かも知れん」

「おとうさん？」

「お前をあの孤児院へ送った理由を話さねばならんな…」

そしてシャルルは、ガリアにおいて双子は忌むべきものとされていたため、生まれてすぐに孤児院に預けたことを話した。

「くだらないことでお前を辛い目にあわせてしまった…すまなかった！」

そしてシャルルはなんと土下座した。

「お、おいシャルル!？」

ジョゼフは、さすがに弟がここまでするとは思っていなかったらしく声が裏返った。

ジヨゼットはずっと黙って聞いていたが、やがて父のところまで歩いていった。

「おとうさん、かおをあげてよ」

シャルルが顔を上げると、ジヨゼットが泣きながらで抱きついた。

「やっと…やっとあえた…おとうさん、もう1人ぼつちは嫌だよ…」
「ジヨゼット…！もちろんだよ、これからはみんなと一緒に暮らそう！」

そして「プチ・トロワ」にいるシャルロットとイザベラ、それに奥さんであるオルレアン公夫人を呼んできた。ジヨゼットを見るな否や、夫人は一瞬啞然として、直後に泣きながら猛ダツシユで彼女に抱きついた。一方、シャルロットは自分とそっくりな少女を見て不思議がっていた。

「ジヨゼット！ ああ、ごめんなさい！！ 私を許して頂戴！！」

「お、おかあさん？」

「わたしがいる…あれれ？」

「え、エレエヌが2人いる!？」

上からオルレアン公夫人、ジョゼット、シャルロット、イザベラである。

その後シャルル一家はみんな揃って暮らすことに。めでたしめでたし。

「じゃあそろそろ帰るか、デックス」

「ちよ！ まだシャルロットとあまり話せていないのに！」

「また今度な。それに仕事があるだろ？ ほら帰るぞ」

「ぬわああああ！！！」

俺はぶーたれているデックスの襟を掴んでオスプレイに引きずっていった。

「「デックス！」」

そこにシャルロットとジョゼットがやってきた。

「「デックス、ありがとう！」」

べっぢららお礼を言いに来たらしい。

「「いやあ、それほどでも」」（クレヨンしんちゃん風）

「お前、やっぱりフラグ立てたか」

「おつよ!」

「「ふらぐ?」

「ああ、いずれわかるよ。それじゃあまたね!」

「「ばいばい!」

美しい双子が手を振る中、オスプレイは空に舞い上がり故郷へ針路を向けた。

帰りの機内にて。

「これでガリアはなんとかなるかね」

「そうだな。俺達からの技術を使ってガリアは発展していくんじゃないかな、うん」

「じゃあ俺達はとつと国内の整備を終わらせますか!」

「ああ。フェイズ1を完了させて、他の国へちよっかいを出そうじ

やないか。ふふふ、
楽しみだ、実に楽しみだよ」

俺が笑いながらそう言つと、デックスは若干引いていた。

「ウイル、その笑みはやめとけ…怖い」

「そうか？」

「それなりに。でもちよつかい出すつて、どうやって？」

「幾つか考えがあるんだが、まだまとまっていけないんだ。パズルの大きなピースが

1、2個欠けている状態だ」

喋りながらも、俺は頭の中でシュミレートをしていた。対トリステイン戦略と

対アルビオン戦略についてを。べ、別にアルビオンは占領するつもりなんて無いんだからねっ！

え、ロマリアはどこにいったつて？ あいつらはごく普通に戦車とか戦闘機とかで
ヒーハーするから戦略はいらないお。それに最後に潰す予定だから今のところは放置で。

順番としてはトリステイン アルビオン またトリステイン ロマリアかな。

「作戦を練るには現地の偵察が欠かせないと思うのだが、デックス、どう思うっ？」

「え？ まあ、そうかな？」

あまり軍事に詳しくないデックスは曖昧に返事をする。

「だからフェイズ1が完了したら俺はアルビオンに行ってみる。会いたい人もいるし。」

そしてトリステインにも…行きたくないけど行かなきゃならないんだよな。はあ…」

「なんでトリステインに行くんだ？」

「え？ まずマルトーさんの確保だろ？ それにタルブ村のシエスタにも会いたいし、

才人が召喚されたら救出するし。だから何回かは絶対に行かなきゃならないんだ」

「なるほどね、大変だな」

「お前だって忙しくなるぞ、フェイズ1が終わったらな」

「えっ、なにそれ聞いてないんだけど」

「そりゃ言っていないからな」

そんなことを話しながらゲルマニアへと帰っていった…

第12話：姉妹、再開。（後書き）

ガリアから帰ります、はい。

次回はフェイズ1完了。そして次のステップへ。
では

第13話：Phrase 1 complete and . . . (前書き)

ちよつと時が飛びますよ。

第13話：Phase 1 complete and . . .

やあみんな、俺だよ。え、誰だつて？ だから俺だつて、俺。そう
そう、ウィリアムだよ。

：今流行のとある詐欺の真似を試みたけどよくこれでダメされる
よね。こういうのに
ダメされる人はみんなクs

さて、んなことはどうでもいいとして、改めてウィリアムとデック
スだよ。

ジョゼット救出作戦から2年と6ヶ月が過ぎました。シャルロツ

トとイザベラの

3人で仲良く元気に過ごしているとのこと。いいことだ。救出してから2週間くらい

経った頃にジュリオが修道院にまたやってきているのを偵察衛星が確認した。

ジョゼットが引き取られたことを知ったジュリオの顔といたらもう面白かったね。

あのイケメンが目を丸くして口を大きく開けているんだもん。親父も爆笑して

いたよ。ジョゼフとシャルルは「イケメンさまあwww」って言うてたな。

またシャルルとジョゼフと一緒に仕事をしているので、ガリアそのものも大きく成長

している。例えばロマリアとの国境に位置する火竜山脈。ここの地下深くには風石が腐る

ほど溜まっている。それを放置したままだとで原作みたいに浮き上がってしまうので、

半分は掘削し、もう半分は我が国が提供した風石発電システムにつないで発電している。

これでガリア全域の電気供給量の半分以上をまかなえる。他にも十数箇所に発電所を建設中

なので、ガリアの全ての家庭で電気が使えるようになるのも時間の問題である。

あと、土の精霊「グラント」にお願いして、地下の風石を移動してもらった。

具体的に言うと、火竜山脈のロマリア側にある風石を全部ガリア側へ。少しでも

奴らの資源を奪うのだ、はっはっは。

そうそう思い出した。ゲルマニアとガリアが国境封鎖した影響で、トリスティンとロマリアの交易が途絶しているんだった。元々食料自給率がそこまですぐで高くないトリスティンとロマリアはえらいことに。

だがアルビオン経由ならいけるんじゃないかね！　と思ったロマリアの人、残念でした。アルビオンからロマリアへフネで行くためには、どうしてもガリア領空を通過する必要があります。ちなみにゲルマニアとガリアの領空を通過しようとしたら、哨戒中の戦闘機に問答無用で吹き飛ばされるよ。まあ通過しなくても行けないことはないけど、時間と金が無駄にかかるので商人たちは諦めている。

結果、ロマリアは現在進行形でかなり厳しい状況に陥っている。だがその一方トリスティンはというと、アルビオンに泣きついて支援を取り付けたようである。まだ余裕ぶっている。潜入させているゲルマニア中央情報局（G CIA）のスパイによると、「貴族の分の」食料などは確保しているものの、「平民達の分」は後回し。まあ、いつものことだね。ほんと、死ねばいいのに。

ちなみにグルデンホルフは大丈夫だよ。国境閉鎖前に長持ちする食料をいっぱい送っておいたから。それに今でも取引しているし。

というわけで、周辺諸国は落ち込んでいるけど私達は元気です。

国内のインフラ

整備が完了し、常設軍も完成。国民は自分の家を持ち、自分の仕事に誇りを持っている。

レアメタルなどの地下資源が豊富なゲルマニアでは、現在穴掘りブームが。それに

どでかい油田とガス田を発見したので、国営企業を立ち上げて国の物にした。

油田はゲルマニア沿岸部に近いところにあり、南北300km弱、東西60km弱という

広大な面積に広がっている。推定可採埋蔵量は1,000億バレルほどあるとのことだ。

現地に行ってみたところ、なんか普通に地面から原油が自噴していてそこらじゅう

真っ黒だったのが印象的だったね。ガス田は海底にあるので、現在洋上プラットフォーム

フォームを大急ぎで建設中である。1年後から採掘可能になるとのことだ。

なお国民の生活調査をしてみると、なんと99%の国民が今の生活に満足しており、

100%がロマリア滅びると思っているそう。政権の支持率も100%だった。

素晴らしい。これで「新たな日の出」作戦のフェイズ1は完了したと言えるだろう。

ただ戦争について聞くと2つに分かれた。「今すぐ戦争だ」とい

う意見が半分と

「あいつらとは戦争する価値もない」というのが半分。確かにトリステインには

あまり価値がないんだよね。地下資源も豊富とは言えないし。ロマリアには

まあまあ資源があるからいいんじゃないかな、うん。

あと今やっているのは敵地での非合法作戦、いわゆるブラック・オペレーション。

任務内容はシンプルなものから複雑極まりないものまで様々である。例えば貴族の

商隊を襲撃して積荷を燃やしたり、貴族の屋敷に侵入して金目の物をかっぱらったり、

レジスタンスを作ったり。ある意味一番大変だったのは、トリステインの王城に

侵入してこっそり水のルビーと始祖の祈祷書を偽物とすり替える作戦だったかな。

祈祷書は真っ白だからいいとして、水のルビーのイミテーションを作るのは大変

だった。アルビオン王家が持っている風のルビーとくっつけると、共鳴して虹色に

輝くのだ。知恵を絞って考えた解決策は、

「なんでもいいから他のルビーとくっつけると虹色に輝くイミテーションを作る」

だった。これならバレないんじゃないかと。まあバレたところで「盗まれた！」なんて

大声では言わないだろう。むしろそういった事実は隠すはずである。

なお作戦の遂行には陸海空3軍が連携して行っている。潜入及び撤退時には空軍か海軍が、実際に潜入するのは陸軍や海軍の特殊部隊かG C I Aのエンジニアント。今まで1度もバレていない。あいつらには対空レーダーもナイトビジョンもスナイパーライフルもないからね。

え、ヘリとか飛行機の音がうるさくてバレないのかだって？ ご心配なく、対策はきちんと立てている。特殊作戦用のヘリコプターや飛行機のエンジンのところに歩いていって「サイレント」の魔法をかければあら不思議、音は全くしなくなりました。それに航空機が起こす風。これも風の精霊「ストーム」のおかげで発生しないようになりましたとさ。めでたしめでたし。

そういう作戦と並行して行っているのが引つ越し作戦。敵地で暮らしている民間人に、

「今の生活嫌でしょ？ うちくる？」と声をかけてゲルマニアへの移住を提案する。

50%の人は二つ返事で承諾し、残りの50%は「ちょっと考えさせてくれ」と言って

数日後に承諾してくれるパターンが多い。これをトリスティン、ロマリア、そして

アルビオンで行っている。

もちろんそんなことを続けていたらいずれはバレるだろう。なので、引越す時にちよつとしたトリックを。まず必要最低限の荷物を夜のうちにこっそり運びだして

もらい、家の中にゲルマニア軍が持ってきた死体もどきを置く。この死体もどきは

「鋼の錬 術師」で某マ タング大佐が作っていた人間っぽい人形である。それに油を
まいて時限発火装置をセットしておしまい。ヘリで脱出する頃には家は焼け落ちている。

焼け跡からは誰かはわからないけど、ここに住んでいた人数分の焼死体が出てくる

ので偽装も完璧。向こうの貴族達は平民が火事で焼け死んでも気にしないから問題なし。

時限発火装置も高熱で溶けるので解析不能になる。あれ、これ完璧じゃね？

最後に、俺とデックスが以前作ったゲルマニア軍総司令部オペレーター ショーンズ・センター。

周辺を地雷と電流鉄条網フェンスで囲っており、陸軍部隊が戦車と攻撃ヘリで警備し、

対空兵器が空を見上げていることから、関係者はここを「ハリネズミ」と呼んでいる。

その「ハリネズミ」の運用も開始された。軌道上にある偵察衛星網を使ってこの惑星

全体の地図の作成、及び各国の動向などを細かくチェックしている。

そして常設軍の指揮もここから行うことができる。兵力などは以前のままで、それをきちんと分けて各地に配備している。

例えば陸軍。ガリア・ロマリア国境地域へ派遣されている第4軍団は88,000名の兵員と

4個機械化歩兵師団からなる。ガリアの許可をもらって現地に基地を設営し、対ロマリア

戦に備えている。そして対トリスティン戦に備えている第3軍団、緊急展開部隊の第1

軍団、予備役の召集訓練と運用等を統括している第5軍団、砂漠方面に銃身を向けて

いる対エルフ戦用の第2軍団に分かれている。まあエルフと翼人とは敵ではない。

むしろゲルマニアはそういった差別をやめて、彼らと共に暮らそうという政策をとっている。

「人間とは違って背中に翼が付いたり、耳がとんがっていたりするけれど、彼らにも

意思があるのだからそれを蔑ろにするのはいかなものかと」

デックスが議会でこう発言すると、他の議員たちも納得してくれた。親父も賛成して、

その日の記者会見で国民に「差別やめようぜ」と言った。すると国民も支持してくれた

ので、ウィンドボナを歩いていると翼人やエルフが人間と一緒に仕事をしていたり、

仲良く談笑している光景を見ることができるよう。国内各地、及びガリアでも同じことが

起きている。

ただそれに納得していないのが色々と遅れている周辺諸国とエルフの国「ネフテス」。

トリステインとロマリアは「頭おかしんじゃないやねえの?」と批判し、クルデンホルフ

大公国からは「トリステインのアホがいつてことは全部無視してくれ」という電話が

あり、アルビオンは無言だった。だがサウスゴータの太守から何故か使者がやってきて

「それってマジですか」と聞いてきたので、「大マジです」と答えたらこれまた何故か

喜んで帰っていった。なんでだろーねー(棒)。

そんなある日、俺達兄弟は仕事中にウィンドボナ城の国王執務室に呼び出された。

そこでは親父とヴィンセントが待っていた。

「仕事中に悪いな、2人とも。ちょっと見て欲しいものがある」

「この手紙は砂漠方面グレートウォール、エリア24の第1防衛ライン付近に置かれていた

そうです。宛先は『ゲルマニア王国』、差出人は『ネフテス』としか書いてありません」

「ネフテス…確かエルフの国の首都だったな。見せてくれ」

ヴィンスから受け取った手紙を2人で読んでみると。

長ったらしくて読むのが疲れたので、誰にでもわかりやすい表現に直すと、

「蛮人の言うことなんか信用するか！ お前等なんかみんな死んじやえ！」

というなかなか攻撃的な内容であった。これを読んで俺は。

「よろしい、ならば戦s」

「」「待てやこら」「」

デックスと親父とヴィンスに止められた。

「どうやってエルフと戦うんだよ？ あいつらカウンタックだかなんだかできるんだろ？」

「それは車だ。カウンターだよ。確かあらゆる物理攻撃、魔法を跳ね返すんだったかな」

それを聞いて親父とヴィンスは大慌て。

「おいウィル！ そんなのにどうやって勝つのだ？ 銃で撃っても意味ないではないか」

「そうですね、殿下。やるからにはきちんと対抗手段を考えなければ……」

「もちろん策はある」

俺はニヤリと笑ってパソコンを操作して画面を見せる。そこには棒人間がいて、その上に矢印で「えるふ」と書いてあった。

「…ウィル、お前絵は下手なんだな」

「うるせえ！ で、こいつらはさっき言ったとおり、あらゆる物理攻撃、魔法を跳ね返す」

キーボードを操作するとスライドショーが始まり、銃で撃たれても魔法で攻撃されても平気な顔をしているエルフの画像が映し出された。

「でも、こいつらが反射していない物がある。ヴィンス、それは何だと思う？」

「え、ええと……」

しばらく考えてヴィンスは答えを導き出した。

「ああ！ 空気とか光、あるいは彼らが『攻撃』だと思わない物では？」

「大正解。エルフも人間と同じく空気が必要だからな。それに光がないと何も見えないし」

やはりヴィンスは頭の回転が良い。

「ここで重要なのは『彼らが「攻撃」だと思わない物』だ。例えば無色無臭の毒ガスとか

ウイルス兵器とかなら有効ではないかと考えていたんだが…」

そこで俺は前世のことを思い出しながら話を続けた。

「極力そういう生物・化学兵器は使いたくない。扱いや保管、製造がとても大変だからな。

それにデックス、お前も知ってるだろうけど地球には様々な国際条約があつただろ？

BWCやCWC、PTBT、CTBT、NPTにSTART？、
？、？…」

「うがあああ！！ ウィル、そんな略語で言われても分かんねえっつーのー！！」

そこでデックスが頭を抱えながら叫んだ。

「これくらい常識だろ？ 毎日何のためにニュース見てたんだよ」

「決まってるだろ、アニメだ！」

「はあ…まあいい。じゃあわからない人に説明するよ」

BWC II 生物兵器禁止条約

CWC II 化学兵器禁止条約

PTBT II 部分的核実験禁止条約

(正式名：大気圏内、宇宙空間及び水中における核兵器
実験を禁止する条約)

CTBT II 包括的核実験禁止条約

NPT II 核拡散防止条約

START?、?、? II 第一次、二次、四次戦略兵器削減条約

「とまあこういうことだ。詳しくはぐぐってくれ」

「…はあ…」

大量破壊兵器 (Weapons of mass destruction) に関する国際条約は有名なだけでも

これだけある。しかし前世ではこれだけあってもあまり効果がなかったのも事実。現に

包括的核実験禁止条約は1996年に国連総会で採択されたにも関わらず、今だに未発効である。何やってんだかね。

「で、こんなに色々とあるのはややっこしいしめんどくさいから、
初めからそういう

兵器は保有しないほうがいいと思う」

「…異議なし」

俺の意見に皆同意。だがデックスの奴が俺に質問をした。それも一

番答えたくない質問を。

「じゃああの核ミサイルしこたま積んである原潜はどうすんだ？
海に沈めるか？」

「……………」

そうなんだよね、あれどうしようか？ 最初はトリスティン沖と
ロマリア沖で1発ずつ

起爆して「これがゲルマニアの力だけどそれでも戦争するかい？」
という感じに脅そう

かなと考えていたのだが、水の精霊「アクエリア」が反対したため
使い道が無くなって

しまった。かと言って敵国の首都に撃ち込んだりしたら放射能がこ
っちまで漂ってきそう

だし…でもせつかく苦勞して見つけたのを廃棄処分にするのもね…

「…今まで通り保管しておこう。いつの日か使う日が来るかも知れ
んからな」

「りよ〜かい」

合計核出力が16メガトン（TNT爆薬16、000、000ト
ン分）の核兵器を使う日なんて

本当に来るのかどうかは疑問だが、使ってみたらさぞかし派手な爆
発をするに違い

ないだろう。それはそれで面白そうだと思った今日この頃である。
そんなことを

考えながら俺とデックスはウィンドボナ城を後にして次の目的地へ
と向かった。

くゲルマニア、ウィンドボナ空軍基地B滑走路、午前1時32分く

ニア新幹線が
超発展した首都ウィンドボナ。高速道路もあり、電車が走り、リ

国内を高速で行き来する、そんな街になった。その街から20km
ほど離れた場所にある

ウィンドボナ空軍基地。総面積は約25.5km²。4,000m
の滑走路2本と3,000mの滑走路

1本を有し、300機近くの軍用機が常駐するゲルマニア最大の空
軍基地である。

ここを建設するに当たって気をつけたのは騒音。日本でも嘉手納
や普天間で

現地の住民が「音がうるさい!」と騒ぎ立てている。こうするのは
嫌なので、

最初から基地周辺を立入禁止区域に指定した。こうすれば基地の近くに住むことなどできないので、音がうるさいという人もいなくなる。

その滑走路で俺とデックスは缶コーヒーを飲みながら航空機を待っている。今日引越してくる人の中に超重要な人がいるからだ。

「来たな、あれだ」

飛んできたのは真つ黒のMC-130W コンバット・スピアー。なんでヘリじゃないのかというと、今日は引越す人が多かった&近くに平らで広い草原があったからである。C-130シリーズは基本的に離陸滑走距離が短いことで有名なのだ。

着陸して機体が完全に止まった後、後部扉が大きく開き、中から薄汚れた人々がぞろぞろと降りてきた。報告によると、最初は皆げっそりと痩せていて元気がなかった。そうだが、機内で簡単な食事を出したところ皆元気になったそうだが、やはりお腹が減っているのは元気になれないよね。食事はとても大事だということだ。

「ようこそゲルマニア王国へ！ 我々はあなた方を歓迎いたします！ こちらへどうぞ！」

案内役の兵士が大声で誘導する。その人々の中に俺とデックスは目

的の人物を見つけた。

「失礼ですが、ミスター・マルトーですね？」

そう、原作やアニメではトリステイン魔法学院アルヴィーズ食堂のコック長を務めていたマルトーである。気さくで豪快な平民の中年男性で、魔法が使えるだけで傲慢に振る舞う貴族が大嫌いだそうな。先週まではとある貴族のご飯を作っていたが、引越しを提案したところ、素直に応じてくれた。

「お、おう、そうだがあんたたちは？」

いきなり声をかけてきた子供2人に戸惑いながらも返事をする。そういや俺達まだ6歳だったっけ。

「失礼、私はウィリアム・タイベリアス・フォン・ゲルマニア。ゲルマニア王国

国防長官と國務長官を兼任しております」

「私は弟のデクスター・ハミルトン・フォン・ゲルマニアです。財務長官と

エネルギー長官やっています」

「あ、あの天才兄弟！？ こりゃ失礼しました！」

「いえいえ、そんな気にしないでください。敬語とかもいいですよ。それより、

ちょっと話があるのですがよろしいですか？」

そう言っただけ俺達はマルトーさんを建物の中の一室へ案内する。

「で、いきなりなんですけど、ウィンドボナでお店開いてみませんか？ 初期費用は全部こつちが持ちますので」

「ええっ！？」

本当にいきなりだったのでマルトーは心底驚いた。だが同時に興奮した。トリストインでは叶えることができなかった長年の夢である「自分の店を持つ」、それが実現できるのだから。

「ですg「敬語はいいですって」…でもよ、なんでそんなことをしてくれるんだ？」

「マルトーさんの料理を是非ゲルマニアの人々に食べていただきたいのですよ。その

素晴らしい腕前で人々を笑顔にしてみませんか？」

するとマルトーは笑顔になった。

「よーしわかった！ その話乗ったぜ！」

「交渉成立だ！」

しっかりと握手して俺達は笑顔で部屋を出た。

1ヶ月後にウィンドボナでオープンした「キッチン・マルトー」は瞬く間に人気店になった。厨房では笑顔で鍋を振るうマルトーの姿が。俺達もよく足を運んで美味しい食事を楽しんでいる。あと「ラピス食堂」とは違ってチエーン展開はしないそうなの。

続く！

普天間について。あの辺って元々空軍基地しかなかったのに、後から住み着いた住民がうるさいとか基地反対っていう権利あるんです

かね？音が嫌なら他の場所に引っ越せばいいのに。

デヴィ夫人も言っていたように、「住民たちが他の土地に引っ越しを

する」のが一番の解決策だと思います。基地をなくすより確実に安上がり

だし、引っ越し料金を政府が出せば完璧なんじゃないか？

まあ引っ越さない理由は、原住民共が軍用地の利権を手放したくないから

だと思えますけどw

次回は超大型不沈空母：ゲフンゲフン。アルピオンへ行きます。
では

第14話：いざラピュタへ

「ある日のこと」

「そつだ、アルビオンへ行こう」

「「「は？」」「」」

俺がそう言つと、デックスと親父、ヴィンセントは変な声で返事をした。

「いやまだあの国に行ったこと無いし、見ておきたいなうなんて」

「それはそつだが仕事とかはいいのか？」

親父がそう聞いてきたが俺には考えがあった。

「副長官に任せることにしますよ」

「ちよつと待て！..！」

それに異を唱えたのがデックス。

「国務副長官は俺じゃないか！俺もアルビオンへ行きたいんですけど..！」

「諦める」

「ちくしょおおおおお..!!..!!..!!」

ということでは俺はデックスに仕事を押し付けてアルビオンに行くことに。まずはアルビオン政府に事前に知らせないといけない。そこで手紙を書いた。

「2週間後にそっちいくからよろ」と。

2週間後、ゲルマニア沿岸部最大の都市「サン＝ヘント」にある海軍基地には大艦隊が集結していた。それを見ようと多くの人々が押し寄せていた。

「では行くとしましょうか、マーシャル司令官」

「了解です、長官！」

俺は海軍第1空母戦闘群旗艦、アルブレヒト級航空母艦1番艦「アルブレヒト」の

艦橋に陣取っていた。第1空母戦闘群は空母1、巡洋艦4、駆逐艦7、潜水艦2、高速戦闘支援艦1隻で構成されている。ぶっちゃけこれだけでアルビオン軍を殲滅できる。空母戦闘群を率いるのはジュリアス・マーシャル中将。彼は帝政ゲルマニア時代から空海軍の中心的人物だった。

「全艦、出撃！ 目標、アルビオンのロサイス港！」

マーシャルが大声で命令を下すと、優秀な部下たちが素早く作業を開始した。

空母がゆっくりと港外に進む。すでに2隻の駆逐艦が空に上がっていて

敵がいなかどうか、進路上に問題はないかを調べている。あと、今回は

潜水艦はおやすみである。だって空飛べないし。

「司令官、ロサイスへの到着予定時刻は？」

「はっ、24時間後になります」

「そうか、わかった」

俺は艦橋をあとにして部屋に戻り、アルビオンでやるべき事を考えた。

まずアルビオン王家に会いに行って、サウスゴータに行ってモード大公に

会って、帰ると。これでいいな。

「暇だし艦内をうろつくか」

その後、アルビオンに着くまで甲板や格納庫の兵士達の仕事ぶりを見てたり、非番の

兵士達と共に食堂で飯を食ったり、トランプとか談笑をしていた。

兵士たちは皆

士気が高く、優秀だった。

そして。

「これが…ラピュテ、いやアルビオンか…って寒っ」

俺は目の前の絶景に心を奪われた。まさかこの目で本物の浮遊大陸が見れるとは。

雲の合間にその巨大な大陸はあった。地上から約3、000mの高度を一定のコースで

周回浮遊するアルビオンは、かつての風石の暴走による”大隆起”の名残だそうな。

「長官、ロサイスを目視しました。そろそろ移動の準備を…」

ただ、ロサイスは一応軍港としても使われているが、スペース的な問題で第1空母

戦闘群全艦はともじやないが入港できない。従って、一番小さいヴァリアント級

ミサイル駆逐艦1隻のみが入港することになった。他の艦はロサイス郊外の広い平野に

降下することに。

「わかった、では」

俺は返事をしようとしたが、CIC（戦闘情報センター）からの通信で邪魔された。

「艦長、前方に空間反応！ ロサイスから上昇中の物体15！ 大型生命体。おそらく

アルビオン竜騎士団だと思われます！」

「なに？ 聞いてないぞ？」

艦橋にいた俺とマーシャルは双眼鏡を持ち上げて前を見た。

「ん〜、あ、いたいた。確かにあれはアルビオンの竜騎士団だ」

竜騎士団としては質量ともにハルケギニアでは最強のアルビオン竜騎士団。風竜や

火竜を多数擁し、その数は100を超える。ともかく、その竜騎士団が俺達の艦隊の目の前までやってきて曲芸飛行を始めた。

「ほう、すごいな！」

「全くですな、長官」

アルビオン、気に入ったぜ。俺は心のなかでそう呟いた。

無事に入港した駆逐艦から降り立つと、先程の竜騎士団が待っていた。

「ようこそ、アルビオンへ！ 私はハーレイ・クロウ、アルビオン竜騎士団の団長で

あります」

「これはどうも。私はウィリアム・タイベルアス・フォン・ゲルマニアです。先程は

大変素晴らしいものを見させていただいて感動しました。どうぞよろしくお願

いします」

「こちらこそ、よろしくお願いたします！」

王都ロンディニウムまでは馬で2日の距離なので、空母に搭載されている

SH-60F オーシャンホークでひとつ飛び。武装はGAU-17/A ミニガン2基

だけだが、これだけでも十分な威力である。護衛が乗った2機のヘリと共に

ロンディニウムまで飛んでいった。ヘリのアートをクロウ団長以下15名の

竜騎士団が一生懸命追いかけていったのは気のせいである。

くロンディニウム、ハヴィランド宮殿く

ガリアのヴェルサルテイル宮殿ほどではないが、それなりに手入れがされている庭に
3機のヘリは着陸し（事前に許可は貰ってある）、アルビオン軍兵士に国王のところまで案内された。現アルビオン国王のジェームズ1世は、先代のトリステイン国王フィリップ3世の実の兄なので、トリステインとはそれなりに仲良しだそうなので今はゲルマニアとガリアが国境を封鎖しているため、トリステインが「食べ物下さい！」とアルビオンに泣きついている状態である。

「初めまして、陛下。ゲルマニア王国國務長官、ウィリアム・タイベリアス・フォン・ゲルマニアです」

「君があ的那天兄弟の兄か…私がジェームズ1世だ。よく来てくれた長官。とりあえず

お茶でもいかがかな？」

「ではいただきます」

俺達は庭がよく見えるテラスに行つて紅茶を飲みつつ、今のハルケギニアのことに

ついて話し合った。さっきも書いたとおり、アルビオンはトリステインに食料を

いつもより多めに提供している。確かにアルビオンはトリステインよりも自給率が高いが、

他国に供給できるほど大量に食料があるわけではない。ゲルマニア

から入手した農業

技術で小麦などの穀物の生産は順調だが、魚類などは輸入するしか無い。だがトリス

ティンでは魚が獲れなくなっている…誰かさんのせいで。なのでゲルマニアやガリアから

高い金を払って輸入するしか無いのである。ゲルマニアやガリアは大儲け。その一方、

アルピオンの貿易収支は必然的に赤字になる。そのため、やむを得ずトリスティンに

提供する食料の値段を上げるしかない。結果、トリスティンの国庫はどんどん減っていく。

これも作戦の一環である。

「…それでトリスティンの奴ら、もっと安くしろだとか、もっとよこせとかうるさい

のだよ。いい加減私モイライラしてきてな」

どうやらジェームズ1世はトリスティンに不満を持っているご様子。

「元はといえば、我が国とガリアの国境封鎖が原因ですからね。貴国にここまで

負担がかかるとは考えておりませんでした。申し訳ございません」

実を言うと、こうなることは予測済みだった。アルピオンの人々の心に

トリスティンへの嫌悪感を植えつける。これもまた、作戦通りになっている。

「いや、貴国からは素晴らしい農業技術を提供してもらったのだ。そのおかげで

ここ2年は国中で豊作になった。聞いたところによると、農民は皆笑顔で

仕事をし、飢える者も全くなかったそうだ。感謝しているよ、長官」

「こちらこそ関所建設の許可を頂いて感謝しております、陛下。ロマリアや

トリステインからスパイの潜入を阻止することが出来ているのでするとジエームズ1世はゆっくりとした口調で、しかし力のこもった声で話し始めた。

「長官、確か君はゲルマニア王国の国防長官も務めていると聞いたのだが」

「はい。その通りですが、何か？」

「では、国防長官に質問したい。ゲルマニアはロマリアやトリステインと戦争でもする気なのかね？ 仮にそうではないとしても、なぜここまで彼らを追い詰めるのだ？」

Side ジェームス1世

私は知りたかった。何故ゲルマニアはガリアと手を組んでトリス
テインとロマリアを
追い詰めているのかを。まさかとは思うが、野蛮人と言われ続けて
ついに堪忍袋の
緒が切れたから、という理由ではないだろう。

「戦争、ですか……」

長官はそつつぶやくとゆっくりと紅茶を飲み干した。そして。

「これはオフレコな話ですが」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。おふれこ、とはなんだ？」

お、おふれこ？ いきなり私の知らない単語が出てきたぞ？

「ああ、失礼しました。オフレコとは談話などを公表しないこと、
もしくは非公式なものと
することを指す用語です」

「なるほど。つまりこの会話はなかったことにして欲しい、そうい

う事かね」

「その通りです」

「ではそのオフレコで話をしようではないか」

うむ、便利な言葉だな、オフレコとは。

「では、オフレコな話を。我が国と同盟関係にあるガリア王国。この2カ国が本気を

出せば、ハルケギニア大陸を1週間以内に制圧することができま
す。我々には

それを可能にする軍事力を保有しております」

「なっ……………」

私は開いた口が塞がらなかつた。聞き間違いであつて欲しいとも
思つた。

1週間で制圧できるだど!? このハルケギニア全体を!?

「仮に戦争をしたら、攻撃対象はもちろんトリスティンとロ
マリア。ですが

ご安心ください。アルビオンを攻撃するつもりは全くありません
…今のところは」

「…今のところは、というのは置いといて、何故我が国には攻撃し
ないのだ?」

それが一番気になったことだつた。トリスティンとロマリアは攻
撃して、我が国には

攻撃しない理由とは一体なんなのだろうか。すると長官は即座にこう答えた。

「何故か。それは攻撃する理由がないからですよ。現在貴国と我が国はそれなりに良い

関係を築いていると考えています。これからもっと仲良くなることができたなら、それは

素晴らしいことでしょう。お互いに情報や技術を交換して共に成長する。いいこと

ではありませんか」

「確かにそれはそうだが…」

「我々が提供できる技術は、例えば貴国が現在取り組んでいる新型マスキット銃や防具と

いったものからマジックアイテム等の製造技術など様々です」

「ななななんでそのことを知っているのだ!？」

思わず立ち上がって叫ぶ。あれは我が国の極秘計画のはずなのに!!

「アルビオンに住んでいる友人から教えてもらったことでして。これ以上はお教え

できません。ともかく、必要ならばそういった技術を我が国は提供いたします。

もっと仲良くなることができれば、の話ですが…」

そう言って長官は紅茶のおかわりを自分で注いで飲み始めた。そこで私はようやく

理解した。まだ6歳だというのに外交と国防のトップに君臨してい

るのは、この頭脳のおかげなのか、と。

「ま、ご心配なく。しばらくの間は戦争をするつもりはありませんよ。このことは

トリスティンにもお話ししても構いません。オフレコの話はここまでです」

「そ、そうか、わかった」

いやはや、ウェールズもこれくらい頭が良くなってほしいものだな。あ、そうだ！

この後ウェールズに会わせてちょっと話してもらおう！　もしかしたら何か学ぶかもしれないからな！

S i d e o u t

さて、俺は今ジェームズ1世に案内されてどこかに向かっている。
にしてもこの城
でかいな。うちよりでかいんじゃないか。

「ウエルズ、入るぞ」

そう言っただけで彼はある部屋に入った。そこには俺より幾つか年上っ
ぽい少年がいて
何やら勉強をしていた。なるほど、彼がああ「プリンス・オブ・ウ
エルズ」か。

「父上、そちらは…?」

「こちらはゲルマニア王国からお越しの…」

「初めましてウエルズ殿下。ゲルマニア王国国務長官、ウィリア
ム・タイベリアス・

フォン・ゲルマニアでございます」

「あのゲルマニアの！ 私はウエルズ・テューダーです。どうぞ
よろしくお願いします」

「こちらこそ、殿下」

しっかりと握手をすると、ジェームズ1世は何かを思い出したかの
ように手を叩いた。

「ああ、そうだ。長官、実はこれから仕事なのでちょっと席を外さ

せてもらおうよ。

ウェールズと話していてくれないか？」

「わかりました、陛下」

そして部屋には俺とウェールズだけになった。

「それで殿下……」

俺が話をしようとしたが、ウェールズはそれを遮った。

「その、堅苦しいのはやめにしないか？ 見たところ年齢も近そうだし、敬語は話していて

疲れるからね」

ほう、俺と同じことを考えていたとは。さすがだな。

「……わかった。じゃあそうしよう」

そして2人でいろいろなことを話した。まあ主に俺がウェールズからの質問に答えていたけどね。ゲルマニアで馬車は時代遅れだと言ったらびっくりしてたな。まあ当然だろう。

それにどうやってあれ（ヘリ）は飛ぶのと聞かれたので、少なくとも魔法の力ではないよ

と言っておいた。ここで俺がペラペラ喋っちまうとウェールズから父親のジエームズ1世に、

そこから他国へと情報が流出してしまう可能性もあるし。

「ウィル、今日はここに泊まるんだろう？ 明日はどつするんだい？」

「明日はサウスゴータを訪れる予定だよ。ここに来る時は上空を通過しただけだった

からね」

「そうか。あそこにはモード叔父上がいるし、いい街だよ」

「それは楽しみだよ、ウェールズ」

その日の夜は盛大なパーティーになってしまった。俺こついうのあまり好きじゃない

んだけどな。それに残念なことに料理がおいしくなかった。アルビオンよ、こんな

ところまでイギリスにそつくりとはね。見た目はまともだったので騙されてしまった。

宴の途中で、俺の食事に毒を盛ろうとしたトリスティンとロマリアの間者がいたような

気がしたが、なに、気にすることはない。護衛のみんなが静かに、手早く、そして

スムーズに”お片づけ”してくれた。まあ予測済みだったとはいえ、むかついたから

国に帰つたらまた別の嫌がらせを考えよう。例えば王城に火をつけるとか…主要な

道路に地雷を仕掛けるとか…火の精霊「マッチ」をお願いして山火事起こさせるとか…

そんなこんなでアルビオン滞在1日目は無事に終わった。明日はサウスゴータに行くぞ。モード大公と色々な”お話”するんだ！

じゃあおやすみ…zzz…

次回に続く…

第14話：いざラピュタへ（後書き）

ロサイスの場所が原作では

「ロンディニウム郊外」

「ロンディニウムから馬で2日」

「ロンディニウムから南へ300リーグ」などはっきりしていないので、

私が勝手に決めました。

次回はモード大公とマチルダとご対面。そして…？
では

第15話・ウィリアムとモードとヘルフト（前書き）

すみません、ちょっと疲れました…いろいろとでは続きをどうぞ。

第15話：ウィリアムとモードとエルフと

さて次の日。俺はウェールズとジエームズ1世に別れを言ってへりに乗り込み、サウスゴータへと向かった。本当ならもう少し早めに出発する予定だったんだが、大幅に遅れてしまった。ヘリコプターのパイロットはコレクティブピッチレバーの先端のスロットルグリップをさらに回して、2基のゼネラル・エレクトリック製T-700ターボシャフト・エンジンから、もっと馬力を搾り出そうとした。

なぜ予定より遅れているのかというと、へりに興味を持ったウェールズとその父ジエームズ1世にあった。

〈2時間前〉

「長官、それがヘリコプターという乗り物かね？」

俺がへりに乗り込もうとすると、ジェームズ1世とウェールズがやってきた。

「ええ、そうです。魔法ではなく、科学技術で飛ぶ飛行機械です」

「すごかつこいいですね、父上！」

ウェールズの目がキラキラしている。ありやまるで誕生日の日におもちゃをもらった

子供みたいだ。一方ジェームズ1世は真剣な声で聞いてきた。

「魔法を使わない、か。確かガリアもこれを持っているそうだね？」

まあ、これくらいなら話しても平気か。

「はい、その通りです。我が国の同盟国であるガリアにもヘリコプターは大量にあります」

するとジェームズ1世がとんでもないことを。

「ほう…乗ってみたいな」

「えっ？」

結局、アルビオン親子をへりに乗せてハヴィランド宮殿の周りを周回飛行した。

2人とも大変喜んでくれたのでよかった。なお、ミニガンにはカバ

―を掛けてあり
触らないように、言っておいた。何故なら、この世界の銃は全て先
込め式で
あり、連射可能な銃はゲルマニアとガリアにしかないから、まだ見
せたくない
のである。ああ、ロマリアにAK47とか自動拳銃があつたっけ。
まあいいや、
とにかく実戦で初めて敵を思い知らせたいと思っている。

トリステインやロマリアの連中には

「何だあの銃は!?! 連射してるぞ!?! ぎゃあああああ!」
つて感じに死んでいただきたい。

まあ、そんなこんなで遅れたわけですよ、はい。あ、それと途中
でガリアから
電話が入って、2日前にジョゼフが使い魔を召喚したそう。例に
よって召喚した
のは「神の頭脳・ミヨズニトニルン」のルーンを額に刻んだシエフ
イールドだった。
ここは原作通りだね。よかったよかった。

ただジョゼフいわく幾つか問題があるそう。例えば

? 召喚されて契約のキスをされたシェフィールドがジョゼフに一目
惚れ。

これはまだいいとして、

？「私の全てを捧げます！」とか言いながら寢室のジヨゼフを襲撃
兵士に捕まる

？寢室襲撃を断念したシエフィールドは

「なんで私の愛を受け取ってくれないのかしら？」

「ま、まさか、ジヨゼフ様には私以外の女がいるの!？」

「あの女ね…よし殺そう！」

という考えに達したらしく、使用人の1人を襲撃 兵士に（ry。

などということがあったそう。うんなんか色々壊れてるね。
とりあえず

ジヨゼフには、諦めて彼女の愛を受け入れろ！ と言っておいた。

しばらく空の旅を楽しんで、サウスゴータの中心都市「シティオ
ブサウスゴータ」へ
到着した。さすがに街の中にヘリを駐機する場所はなかったので、
俺と護衛を下ろした

ヘリは一旦空母へ帰投した。見事な城壁の写真を撮ってから街に入

り、大通りを歩き

ながら親父達やイザベラ達のお土産何にしようかなと考えつつ、モード大公の屋敷へと

向かう。何でも「是非会って話したいことがある」とか。

↳モード大公の屋敷↳

「ようこそサウスゴータへ。私はこのサウスゴータの太守のエドワード・オブ・

サウスゴータです。こちらは私の娘のマチルダです」

「…初めまして、長官。マチルダ・オブ・サウスゴータです」

「私がモードです。どうぞよろしくお願いします」

「こんにちは、皆さん。私がウィリアム・タイベリアス・フォン・ゲルマニア、

ゲルマニア王国国務長官兼国防長官です。それにしてもここはいい街ですね」

屋敷に入って案内されたのは広い部屋。そこにはサウスゴータ家の当主、エドワード・

オブ・サウスゴータとその娘マチルダ、そしてモード大公がいた。緑色の髪の毛を長く

伸ばした少女が父親の横に立っており、もじもじしながら俺のことをちらちらと見ていた。

「さて、早速ですが本題に入りましょう。そちらからの手紙には」

是非会って

話したいことがある』とありましたが、どのような話でしょうか？」

「ええ、それなのですが…長官、今日この部屋で話したことは他言無用でお願い

したいのですがよろしいですか？」

いきなりオフレコ宣言っすか。となると話の内容は明らかだな。

「話にも内容にもよりますね。仮に今日の話が我が国と貴国にマイナスとなるような

話でしたら、私は今すぐ帰らせていただきます」

「そ、それは…」

そう言われると口ごもる大公。すると…

「長官、お願いだよ！ あの子を…あの子を助けておくれよ！」

突然マチルダが俺の前に出てきて頭を深々と下げた。

「へ…？」

俺もぼかんとしてしまった。まさかこうくるとはね。

「こら、マチルダ！」

エドワードはマチルダを後ろに下がられてから俺に謝る。

「すみません、長官、うちの娘が…」

「いや、そんなことはいいとして、あの子って誰のことかな？」

「…それも含めて今から全てお話いたします」

そしてモードは、こっそりエルフの妾と子供をつくってしまった、それが兄である
ジエームズ1世にバレてしまい、彼女たちを追放しろと言われてい
る、と話した。

しかし、モードは彼女たちを追放する気など全く無く、大公家に忠
誠を誓っている
サウスゴータ家が、現在そのエルフ母子を自らの領地に匿っている
とも話した。

そして、俺を今日ここに呼んだ理由だが…モードの発言でそれがわ
かった。

「ゲルマニアとガリアでは翼人やエルフが人間と共に仕事をして、
家庭を持ち、まともな

生活を送ることができると聞いていますが、それは事実でしょう
か？」

なるほど、そういうことか。俺はモード大公達が何を求めているか
がわかった。

「ええ、紛れもない事実ですよ、大公殿下。背中から翼が生えてい
たり、耳がちよっと

とんがっている位で差別するなど、愚か者がすることですから。

我々はそうだった

差別をなくすことを目的としています」

そこで俺は間を置いて続ける。

「それに、もし私が大公殿下の立場にいたとしたら、必要最低限の荷物と愛する家族を

連れてすぐにも引越しますね。もしあなたにその気があるのであれば、これで

私に連絡してください。まあ、無理には言いません。じっくりと考えてください」

そう言って、俺はポケットから俺の携帯電話にしか繋がらない電話をテーブルに置いた。

ついでにクリアファイルに挟んだ資料も置く。

「あと、これは私の独り言ですが、ゲルマニアの首都ウィンドボナの郊外にいい屋敷が

あるんですよ。新築で誰も住んでおらず、大勢で引越すにはちょうどいい広さだと

思いますよ。その屋敷の資料なんですけど、あれおっかしいな、どこにやったかな…

どこかで落としたっばいな…ま、いいか」

()(え、テーブルの上のこれじゃないの?)()

モード達3人は同じことを考えたが、何も言わないでおいた。

「それでは私はこれで失礼いたします」

そう言っつて俺は椅子から立ち上がる。もうここには特に用はない。

「そ、そうですか。今日はわざわざ来てくださってありがとうございます
いました」

「いえいえ、そんな。私も美しい娘さんに出会えたのでよかったですよ」

「な、何言っつてるんですか！」

と言いながらも顔を赤くするマチルダ…年上も悪くないな！

「事実を述べたまでですよ。ではまたいつかお会いしましょう」

俺が帰ると3人はクリアファイルの資料を読み始めた。

「…広いな、この家は」

「そうですね、これなら…」

「みんなで暮らせるね」

その後、街でお土産をいっぱい買って、迎えのヘリに乗って空母へ飛んだ。いや、こっちにしかないお酒とか食べ物とかあったから親父も喜ぶだろうな。イザベラにはエクレール・ダムールの花を買った。アニメ見てていいなーって思ってたんだよね、綺麗だし。

しかしそんないい気分も、機長の言葉で吹っ飛んだ。

「レーダーに反応あり！ 大型生命体、数は5！」

「なんだと？」

護衛チーム指揮官のデルコ・レイガン大尉が、コクピットに身を乗り出して確認する。

「間違いないな、確かに何かが接近中だ」

すると俺の脳内にストームの声が響いた。

（ウィル、グリフォンが5匹接近中だぞ。メイジが乗っている。お前を狙っているようだ、

アルビオンの者ではなさそうだ）

（なんでわかるんだ？）

(グリフォンとメイジの体からトリステインの空気が感じられるからだ)

(…さすがは風の精霊。そこまで出来るのか)

(お茶の子さいさいってやつだな)

(そうか、感謝する)

はあ…まったく、そりゃないぜアホリエッタちゃんよ。そんなに俺を殺したいのかよ。国外に出ているこのタイミングで襲ってくるとは、なかなかやるな。

……………いや待て、それはおかしい。これはアンリエッタが命令したことはないな。

なぜかって？ あの頭の中がお花畑のアンポンタンにこんな高度な計画を立てられるわけがない！ 多分王城で働いていてそれなりの地位にいる奴が組んだんだろうな。

「デルコ、どうやら連中の目的は俺のようだ。だから俺が片付ける」

「っ！？ 危険です、長官！」

「なに、心配するなって。ここから動かないで仕留めるから」

ドアを開け放って杖を取り出す。ていうかも杖って時代遅れだ

な。いちいち構えるのも
ダルいし。何か別の方法を考えよう。そんなことを考えつつ、スト
ームが教えてくれた
敵の方向に杖を向ける。

「アイシクル・フレッシュト」

この魔法は風と水の合成魔法であり、風2つと水2つのスクウエ
アスペルである。
まず空気中の水分を大きな氷の塊にしてから敵に向かって高速で飛
ばす。そして
途中で氷の塊が分裂し、たくさんの細かい氷の矢となって敵を殺傷
するのである。

それを5発ほどぶつ放すと、レーダーからグリフォンの反応が消
えた。そりゃ
いきなり前から氷の矢の嵐が飛んできたら避けられないわな。でも
まだ生きてる
奴がいるかも。

「護衛のヘリを1機調査に向かわせろ。もし生き残りがいたら空母
まで連れてこい。」

色々と聞かなきゃならんからな。他の死体とかは全部燃やしちま
え」

「…りよ、了解」

あっという間に終わり、しかも凄い魔法を見ていたデルコは驚きな
がらも指示に従った。

空母に戻ってしばらくすると、生存者を確保したヘリが帰ってきた。1人だけ生きていた。そうだが、氷の矢の嵐で右腕と右足の肉がえぐれており、地面に落ちた衝撃で腰の骨も複雑骨折していた。よく生きていたな、と思わず感心した。話が聞きたいので、怪我をばぱつと治した。骨も肉も元通り、ただ痛みはしばらくしないと取れないようにしておいた。

「やほー、調子どうよ？」

「…何故、俺を助けた？」

痛くてベッドから動けない男は、顔をしかめながら言葉を発した。

「だって、殺したら何もわからないじゃん？ 死人に口なしてやつだね。それで、

お前はトリステインの人間なんだろ？ 誰に言われて俺を襲おうとした？」

「……………」

男はそっぽを向いて口を閉じた。

「話しておいたほうが身のためだと思え。もし素直に吐かなかったら…そうだな、

今すぐこの艦から落としてやる。3,000M下の地面に叩きつ

けられるのはきつと
とてつもなく痛いだろうな」

それを聞くと、男は何故か涙を流しながら話し始めた。

「わかった、全部話す！　だが家族を人質に取られているんだ！
こうするしかなかった！」

「ふうん、で、誰の命令だ？」

「それは…わからない。俺はケインっていうんだが、あの4人とは
2年前までグリフォン隊で
チームを組んでいたんだ。だけどもある日、やってもいない強盗の
濡れ衣を着せられて

全員投獄された。家族や隊長も抗議したんだが結局牢屋行きにな
った。1週間くらい前に

いきなり牢屋から引き摺り出されて、黒いローブを着た男のいる
部屋に案内された。

そこであんたを殺すように言われた。成功したら罪を帳消しにし
て、その上褒美が出る

と言われたが、失敗したら家族を殺すと…」

ペラペラと喋る男を観察したが、嘘は言っていないようだった。

「なるほど。」男”って言うのは確かなんだな？」

「ああ。部屋は暗くて、ローブのせいで顔は見えなかったが、あの
声、体格から見て

間違い無く男だ」

「それで、お前の家族はどこに？」

「昔はトリスタニアに住んでいたんだが、俺が投獄された後、妻と子供はラ・ロシエールに

引越したそうさ。手紙のやりとりは許可されていたから……」

「わかった、感謝する。素直に吐いたご褒美をやるさ」

「ご褒美って何を……？」

男はよくわかっていない様子。

「何、じきに分かるさ。そこでじっと待っている」

俺は医務室を出て、1本の電話をかけた。

数時間後、ラ・ロシエール

ラ・ロシエール。トリステインの南側にある一都市である。山あいの町ながら浮遊大陸

アルビオンが定期的に接近するので空飛ぶフネの港町となっている。

古代の世界樹の

枯れ木をくり抜いた立体型の栈橋に多数のフネを係留できる。スクウェアクラスのメイジが岩から切り出して作った建物群が特徴である。

そこへやってきたのは5機のヘリから成る航空部隊だった。アパッチ・ロングボウ2機とブラックホーク3機で構成されている。ブラックホークには特殊部隊が乗り込んでおり、隊員達はサイレンサー付きのツアスタバ M21を持っている。アパッチは念のためのおまけである。

ちなみに地上にいるトリステイン市民は一切ヘリに気がついていない。何故なら、エンジン音をサイレントで消して、機体には光学迷彩装置が付いているからである。

国防総省の中に設置されている陸軍特殊部隊司令部で、ラ・ロシエール上空を

飛んでいる無人偵察機を使って街全体を調査した。すると街から少し離れたところに

ある小さな小屋が目にとまった。小屋の中には4人の反応があり、うち2人は部屋の隅で

抱き合っているように見える。そして何故かその小屋の周りに10人近くの男がいて、

全員が武装していた。おまけにメイジ特有の魔力反応があったため、この小屋が

監禁場所だと断定した。

まあ、もし間違っていたとしても、トリステインの連中が死んでも気にしないよね？

ということでゴーサインが出た。3機のブラックホークからファストロープで隊員達が次々と降下した。

地上のメイジ達は、何も無い空中から太い強靱なロープが現れるのを見てびっくりした。そのロープを使い、紐を伝う油のように一直線に下りてくる隊員達を見てさらに驚いた。

最初の隊員が着地し、一回転してから30mも離れていないところから屈んだ姿勢での射撃体勢を取った。あわててメイジ達は杖に手を伸ばしたが、隊員達の格好を見て攻撃を

ためらった。その行為の報いで、メイジ達の体をそれぞれ3発の銃弾が貫いた。

胸に2発、頭に1発　いわゆるモザンビーク・スタイルである。

10秒もしないうちに外のメイジを排除した部隊は、小屋の窓に2発のスタングレナードを放り込んだ。数秒後に爆発し、5万ワットの明るさが視力を、耳をつんざく轟音が聴力を奪い去った。ドアを蹴り破り、中にいたメイジ2名を射殺。

そして部屋の隅で抱き合っている女性と少女を確認すると、武器を下ろした。

「あ、あの…あなたたちは…？」

少女をかばうようにしながら、母親らしき女性が尋ねる。部隊長がそれに応じた。

「我々はゲルマニア陸軍特殊部隊です。ケインさんの奥さんですね？ ご主人を保護して

おります。どうかご同行願います」

「えっ！？ あの人はまだ投獄中じゃ…？」

「アルビオンにて負傷していたあなたのご主人を我が軍が発見して保護しました。

怪我も治療し、現在ゲルマニアに向かっているのご安心ください。ですがあなた方は

トリステインの上層部に目をつけられています。そこで相談なのですが、皆さんで

我が国に引越しませんか？」

すると母親の腕の中の少女が部隊長に話しかけた。

「おじさん、おとうさんにあえるの？」

「ああ、そうだよ。だからおじさん達と一緒に行くっつ？」

「うん！」

「…わかりました。行きましょう」

ケインの妻は、夫が濡れ衣で投獄されたので今のトリステインに

はうんざりしていた。
なのでゲルマニアへ喜んで移住することにした。

母子と隊員達は着陸したヘリに乗り込んでラ・ロシエールを後にした。12人の男の死体は小屋に押し込まれ、アパッチから発射されたAGM-114 ヘルファイア空対地ミサイルによって小屋ごと吹き飛ばされた。轟音と黒煙に気づいた住民が駆けつける頃にはヘリ部隊は陰も形もなかった。

（17時間後）

サン＝ヘント海軍基地に帰還した第1空母戦闘群。行きよりも速く帰れたのは、アルビオン大陸がゲルマニアに近づいたからである。空母の飛行甲板で車椅子に座っているケインと一緒にコーヒーを飲んでいると、遠くからUH-72 ラコタがやってきて着陸した。ドアがひらくと、そこからケインの妻と子供が降りてきた。

「リーネ！ メイ！」

「あなたっ！」

「ばばー！」

ケインは痛みを無視して車椅子から立ち上がり、家族のもとへと走った。

「すまない、2人とも。怖い思いをさせてしまった…」

「いいのよ、あなた。こうしてまた会えたんだから！」

「ばば、さびしかったよ」

「ごめんな、メイ」

そしてケインは俺に声をかけた。

「ありがとう長官。でもなんでここまでしてくれたんだ？」

「なに、お前が素直に話してくれた”ご褒美”だよ。それ以上でもそれ以下でもない。

あと君達家族の新しい家も用意してあるからご心配なく。軍曹、彼らを丁重に案内してやってくれ」

「はっ！」

後ろに控えていた兵士にそう告げると、俺はそこを後にした。

「…ありがとうございます…！」

後ろからケインの声が聞こえたが、俺は振り返らずに右手を上げてそれに応えた。

「ただいまー」

お土産を引きずりながらウィンドボナ城に帰ったのは2時間後だった。

「おお、ウィリアム。どうだった、アルビオンは？」

「いいところでしたね、飯以外は。ですが、評判の地酒を買ってきましたよ。これは

美味しいそうです。それと酒のつまみも幾つか」

「おお！ 素晴らしい！ 早速飲ま」

「いけません、陛下。まだ仕事がありますので」

「ぬわあああああ！！」

親父は酒とつまみを持って自室に逃げようとしたが、ヴェンセントがその襟を掴んで

執務室まで引きずっていった。

「いつもと変わらん…あれ、デックスは？」

「……死ぬ……たすけ……て……」

デスクスは国防総省の俺のデスクで頭から煙を出しながらぶっ倒れていた。

デスクの上には大量の書類が山積みになっており、床にも散らばっていた。

「ウィル…お前こんなに大量の書類…どうやってさばいていたんだ？…がくっ」

続く…

第15話：ウィリアムとモードとエルフト（後書き）

「なんでトリスティン軍人を助けちゃってんですか？」
という文句は言わないでください。きちんと考えてやっている
ことですので。

次回は主人公達は出てきません。その代わりに…
では

第16話：一方…（前書き）

今回ウィルとデックスは出てきません。まあ名前くらいは出てくるけど。

第16話：一方…

「夜、トリステイン王国、王都トリスタニア、チクトンネ街」

ここトリスタニアは、王城をはじめ白い石造りの建物が目立つ美しい街である。

ただ残念なことに下水道などの設備がないため、一言で言えば「臭い」。それも

強烈に。某小 製薬の「ト レその後」を使ってもこの匂いは消えないだろう。

そして、裏通りにあるチクトンネ街には多数の酒場や賭博場がある。連日この

辺りでは、酔っ払ってハイになっている人や、なけなしの金を賭博で膨らまそうと

する人や、その賭博に負けて一文無しになって途方にくれている人などがある。

その一画にある大衆酒場兼宿場「魅惑の妖精」亭。その店のおんな、いや

男店長は今日もせっせと働いていた。名はスカロン。2年前に妻に先立たれ、

1人残された娘のジェシカを1人で育てている。

今晚の営業も無事に終わり、客は皆家に帰るか、2階の部屋のベッドへと向かった。

「お先に失礼します、ミ・マドモワゼル！」

「はあゝい、また明日ね？」

最後まで残っていた従業員が帰ると、スカロンは店内の見回りをし、入り口の鍵をきちんと閉めて、ジェシカのいる部屋に向かった。彼女はもう寝ていて、スカロンはジェシカの頬をしばらく撫でてから、部屋の明かりを消してゆっくりと戸を閉めた。

普段なら、この後自室で今日の売上を計算してから寝るのだが、今日は違った。

自室に戻ったスカロンは、ドアの鍵を二重にかけたあと、単なる壁にしか見えない場所に指紋を。右手の人差し指で小さな一画を軽くなぞると、読み取り、パネルが滑るように後退した。そこには極めて現代的なキーパッドが設置されており、暗記していた7ケタの暗証番号を入力する。すると、隣にある本棚が音をたてずに横にスライドし、下へと続く階段が現れた。そこにスカロンは入っていき、本棚はすぐに元通りの位置に戻った。

電球で照らされた階段を降りて、コンクリートでできている通路をしばらく進むと、重厚なドアが現れ、その前には武装した男が2人立っていた。

「百聞は？」

2人は持っていたサイレンサー付きの銃　AK-101をスカロンに向けた。銃の安全装置はすでに解除されている。

「一見にしかず」

普段のオカマっぽい声ではなく、普通の男の声で合言葉を言う。

「どうぞお通りください」

ドアが内側に開くと、そこでは多くの人がそれぞれの作業をしていた。ある者は書類をまとめていたり、ある者はキーボードを叩いていたりと忙しそうである。

それもそのはず、ここはゲルマニアが全面支援しているトリステイン国内唯一のレジスタンス組織、「トリステイン解放人民戦線（PFLT）」の本部なのだ。そしてスカロンはPFLTのサブリーダーを務めている。彼がこの組織の一員になつた理由は、彼の妻の死因にあつた。

2年前、高額な水の秘薬がないと死んでしまう病気にかかった妻のために、スカロンは借金までして医者から秘薬を購入した。そこに貴族がやってきて、彼が持っていた

秘薬を寄越せ、と脅した。当然のごとくスカロンは拒否した。妻が

死にかかっている、
とも訴えた。しかし、貴族は「平民が1人死のうが、私の知った事
ではない！」と言い、
貴族の護衛がスカロンに暴行を加え、秘薬を奪い取っていった。そ
れでもスカロンは
諦めず、秘薬を手に入れて家に帰った。だがすでに彼の妻は亡くな
っていた。

あの時、あの貴族がいなければっ！…そんな思いをずっと胸に抱
きながらも、
男手1つでジェシカを育ててきたスカロン。当然のごとく貴族にい
い感情を
持っているわけがない。そんな時ある人と出会い、今に至るとい
うわけだ。

一番奥の会議室に入ると、既に他のメンバーは揃っていた。

「遅いじゃないか、スカロン」

「すまない、ベイツ」

「では始めよう。まずは報告を」

PFLTのリーダー、ベイツが静かに告げる。彼は昔、王軍の凄
腕連隊長だったが、
当時付き合っていた恋人が、あの「ダングルテールの虐殺」に巻き
込まれて

死亡したため、やる気が無くなり除隊した。彼女は新教徒ではなか

ったのだが、
ダンゲルテールに住む親戚を訪れていたため亡くなった。軍を除隊
した後、
彼は田舎町に引越し農業をしていたが、そこにやってきたのはG
CIA、つまり
ゲルマニア中央情報局のエージェントだった。ダンゲルテールの事
件が、疫病の
被害を防ぐために焼き払われたのではなく、ロマリアとトリステイ
ンとの間に
交わされた密約の下で行われた大規模な異教徒狩りだったことを知
ったベイツは、
トリステイン政府に復讐を誓った。そしてこの組織をゲルマニア支
援の下立ち
上げたのだった。スカロンを勧誘したのも彼である。

「現在のPFLTの戦力ですが、全作戦地域を合計すると34、0
00人となっております。
それにプラスして6、300人が『キャンプ』で訓練中です。2
カ月後には各地に配属
されるとのことです」

PFLTの兵士になるためには、厳しい身元調査をクリアしなけ
ればならない。兵士の
ほとんどは平民である。皆、今のトリステインや貴族を嫌っている。
そして戦闘訓練は、
トリステイン国内に数ヶ所ある「キャンプ」と呼ばれる場所で行わ
れる。この「キャンプ」
とは地下に建造されており、宿泊施設や完全防音仕様の射撃場など

を完備している。
地上での狙撃訓練や、森林での訓練も行われる。訓練はゲルマニア軍の指導の下行われる。

「わかった。次は？」

「はい。現政府の主要施設の警備に当たっている衛兵の買収に成功しました。それと

魔法学院の衛兵と使用人も買収し、内部構造の調査を行わせています。ですが

王城にはまだ我々の手の者は潜入できていません」

「まあ、あそこは嚴重だからな。慎重に事を進めよう。次はスカロندان」

「ああ。私の従業員が集めた情報なのだが、徴税官のチュレンヌとアカデミー評議会

議長のゴンドラン。この2名が3日後にトリスタニアを離れるそうだ。チュレンヌは

休暇でアルピオンに、ゴンドランはシュルピスに向かうそうだ。2人を消す絶好の

チャンスだと思うのだが、ベイツ、どうだろうか？」

「…仮にやるとしたら、どうやる？」

すると作戦部長のレイランドが口を開いた。

「それなら既に考えてある。チュレンヌの方はラ・ロシエールに向かうところを

狙撃する。ゴンドランは、通過予定の道に地雷を設置して吹き飛

ばす。至って

シンプルだ。既に俺の部隊が準備にかかっている」

レイランド直属の部隊はいわば特殊部隊であり、狙撃から暗殺、爆破、潜入、妨害工作などの様々な作戦行動を行うことができる。

「素晴らしい。そのまま実行してくれ」

「了解」

「最後に私から。つい先程本国から命令が届いた。この資料を読めばわかると思うが、

命令は『各地でこの噂を若干いじって広げる』とのことだ。尚、

これはゲルマニア

王国国防長官直々の命令だ」

配られた資料には、2日前に救助された元グリフォン隊のケインとその家族の身に起こったことが詳細に書かれていた。

「あいつら、こんなことをしていたのか！」

「くそつたれ共め……」

読み終えたメンバーは皆イライラしていた。

「もちろん、これをそのまま噂として広げはしない。ここをこつして……こつすると、

あら不思議、こつなる」

「おお！ これならゲルマニアにも我々にも疑いがかけられないです
すね」

「さすがリーダー！ そこにシビれるあこがれるう！」

「よし、これでいこう。それと明日から合言葉が変更される。『犬
も歩けば？』と

警備員が聞いてくるので、『棒に当たる』と答えてくれ。間違え
ると射殺される

からくれぐれも忘れるな？ では解散」

「「「「了解！」「」「」

そこで会議は終了し、メンバーはそれぞれ仕事をするべく、会議
室を後にした。

部屋に残っているのはベイツとスカロンだけだった。

「なあスカロン。いつになったら我々は全ての貴族共を蹴散らすこ
とができるの
だろうか？」

「まだ先の話だろうよ、ベイツ。何、我々は今まで辛抱強く待つて
いたではないか。

あと数年待ったとしても、どうということはないさ」

スカロンはそう言ってニヤリと笑った。それは普段従業員の前で
は決して見せること
のない、凄みのある笑みだった。

次の日からトリステイン各地である噂が広がり始めた。

「おい、聞いたか？ あの話？」

「ああ、アルビオンの話だろ？ 聞いたよ。まったくひでえ話だよな」

「でもホントなのかな？」

「生き残りの証言があるんだから間違いねえだろ」

「まあ、それもそうか」

「姫様もえげつないことをするな」

どついう噂かというど。

・トリステイン魔法衛士隊の1つ、グリフォン隊の元メンバー5人が2年前から投獄されて

いたが、何故かアルビオン王国に着の身着のまま放り出された。

・杖も食料もなかったなのでそのうち4人が死亡した。

・唯一生き残った1人はアルビオンで保護され、何故こうなったの

かを詳細に話した。

・彼曰く、ある日他の4人とともに牢屋から引き摺り出されて、アンリエッタ王女に人殺しを依頼された、従わないとお前等の家族を殺すと脅されたそう。

・5人は、自分達は元グリフォン隊の隊員だ、そんなことはできない、と拒否した。

さらに、お前はなんて卑怯な奴なんだ、あんたみたいなクズに忠誠を誓っていたなんて人生の汚点だ、とも言った。

・すると暴行を加えられ、簀巻きにされてアルビオンに放り出された。

一般市民は、あのアンリエッタ王女がそんなことをしたのか、と驚きながらも、噂の内容がすっかりしていたので信じていった。それはどんどん広がっていき、その日のうちに本人も知ることになった。

王女の部屋にはアンリエッタとその母マリアンヌ、そしてマザリーニ枢機卿がいた。

「マザリーニ、一体どういう事なんですか？ 私の娘が人殺しの依頼をしたなどという

ふざけた噂が王都に広がっていますが」

マリアン又は静かに、だが怒りを顕にしながら話していた。

「それが…何故このような噂が流れだしたのか検討もつきません。アルビオンに使者を

送って事実の確認を急ぐとともに、この噂を流した人物の特定をしています」

「最優先でやりなさい。他のことは放っておいてもらって結構です」

「わかりました。ですが…」

そこでマザリーニは言いづらそうな表情を浮かべた。

「なんです、マザリーニ？」

そこで初めてアンリエッタが口を開いた。

「ええ、実は彼ら5人が拘留されていた牢獄に、姫様直筆のサインが入った書類が

保管されていました。内容は5人の釈放を要求するものでした」

「なんですって！？ 普通そういう事はリッシュモンが担当するはずでしょう？」

「その通りです。しかしそのリッシュモンが、書類は上から、つま

マザリーニに呼ばれてやってきたリツシュモン。彼はトリスティン王国の司法権を担う

「高等法院」の長であり、30年に渡って王家に仕える政治家でもある。しかし彼は裏で

自らの職権を乱用して賄賂を貪欲に集め、莫大な財を成していた。

その上用心深い

性格で、悪事の証拠を決して残さない人間で、頭が良く（悪事的な意味で）

なかなかやる人である。

「リツシュモン。近頃王都で噂になっている件ですが、書類にアンリエッタのサインが

あったというのは本当ですか？」

「もちろんでございます。ここに」

そう言っただけ彼は囚人釈放の許可証をマリアンヌに手渡した。確かに署名欄には

アンリエッタの筆跡でサインが書かれていた。

「…間違いありませんね、アンリエッタの筆跡です。ですがリツシュモン、何故私達に

報告をしなかったのですか？」

「その書類の右上に書いてある通り、大至急ということでしたので…。それに姫様

直々のサインが書かれた書類の内容を疑うことはできません」

と言ったが、実際は嘘である。ウィルの暗殺依頼をしたのは他にもない、リツシュモン

だったのだ。だが彼の考えたことではなく、ロマリアからの要請であつた。いつかの

「ダングルテールの虐殺」の時と同じように。書類の偽装は、ロマリアから送られてきた

「カーボン紙」という不思議な紙を使った。これをはさんでアンリエッタのサインを

ペンでなぞるとあら不思議！ 簡単にサインのコピーができたではありませんか！

そんなわけで、リツシュモンは全ての罪をアンリエッタになすりつけようとしたのだつた。

（それにしてもあの役立たず共め！ 任務に失敗してこんな噂まで流されるとは！

だがまあ、私個人への疑いはかからないからよしとするか…）

リツシュモンは心の中であの5人へ悪態をついていた。

結局リツシュモンへの疑いはなくなった。そしてマザリーニはその後調査を続けて

いたが、あまり成果はなかつた。しかもアルビオン政府からは、

「保護？ 何それ聞いてないんだけど？ そんな事実はねえよ」

と言われた。その間にも噂はどんどん広がり、しかも悪化していった。例の書類の事が

どこからか漏れて、噂になっていたのだ。これが決め手となつてしまった。

「姫様のサイン入りだって!?　じゃあ、やっぱりあの噂は本当だったんだ!」

「ああ、信じられないけど、直筆のサイン入りじゃあねえ…」

とまあ、こんな感じに皆が信じてしまい、王家への批判が相次いだ。おまけに

「もうこんな王家のために働くのやーめた」

と言って王軍を辞める人も増えた。もちろんアンリエッタは全てを否定したが、その言葉を信じる者は多くなかった。

「…もういや……そとにでたくないよお………」

王城の使用人達も裏でアンリエッタの事を噂していたため、とうとう彼女は部屋に引きこもりがちになってしまったとき。あーかわいそうな子(棒)。

2日後、トリスタニア〜ラ・ロシエール間の道路

それなりに立派な馬車が、護衛を伴いラ・ロシエールへと向かっていた。馬車に

乗っているのはチュレンヌ。久々の休暇をアルビオンで過ごすようにしていた。

だが突然馬車が止まってしまった。

「おいっ！ 何が起きたんだ！」

扉を開け放って怒鳴り散らすと、護衛の1人が慌ててやってきた。

「申し訳ありません、チュレンヌ様。この先の道路がひどく荒れていまして馬車が

通れません。すぐに土メイジが修復致しますので、今しばらくお待ちを」

「なんだと？」

前を見ると変に抉れている道路があった。

「全く…急いでくれよ！ せつかくの休暇なんだ、アルビオン行き
のフネにおk」

きっと彼は「遅れてしまっじゃないか！」と言いたかったのだろう。だがそれは

出来なかった。何故なら、彼の頭と胸に7・62mm NATO弾
がほぼ同時に1発ずつ

撃ちこまれたからだ。

チュレンヌが撃たれる30分前。道路から600m離れた茂みの中に、3人の男が伏せており、ギリースーツを着込んでいた。そのうちの1人は、狙撃手を狙撃に専念させる為に、周囲の状況把握や命令伝達、場合によっては接近する敵の排除などを受け持つ観測手スポッターで、もう2人はサイレンサー付きのイズマツシユ社ボルトアクションライフル、SV-98を構えていた。このスナイパーライフルは、1000m級の長距離精密射撃が可能なよう設計されている。

彼らはPFLT作戦部長レイランド直属の部下であり、優秀な狙撃チームでもある。今回の任務は徴税官チュレンヌの殺害である。そのためこの場所に今日の朝から配置にしていた。

そして馬車が来る。

「馬車を確認：ポイント・チャーリーまで3…2…1…ストップした」

スポッターが双眼鏡を覗き込みながら狙撃手に囁く。ポイント・チャーリーとは、

前日の夜にシャベルで道路を荒らしておいた場所のことである。

「チャンスは1度きりだ。確実に始末しろ」

「了解」

そして馬車の扉が開き、ターゲットが見えた。

「ターゲットを確認…風に注意しろ」

2人の狙撃手は息をゆっくりと吐いてから呼吸を止める。スコ―プに映っている

ターゲットと、スポッターの声に全ての集中力を向けた。

「スタンバイ……スタンバイ……撃て」

サイレンサーで抑えられた銃声が響いた。

「ビューティフォー見事だ…ターゲットの死亡を確認。任務完了。撤収するぞ」

3人は素早く装備をまとめて消えていった。

一方馬車では。

「なっ!?! チュレン又様!?!」

いきなり目の前で護衛対象が頭を吹き飛ばされ、ついでに胸にもどでかい風穴が

開くのを見て、護衛はびっくりした。慌てて駆け寄るが、死んでい

るのは明白だった。
他の護衛を大声で呼びながら周囲を見わたすが、誰もいない。それに何の音もしなかった。
ではチュレン又は一体誰に、どうやって殺されたのか？ 護衛にはその疑問を解決することとは出来なかった。

同時刻、トリスタニア〜シュルピス間の道路

道路から少し離れた場所にある小さな丘。その上に、長らく使われていなかった小屋があった。そして小屋の中には、土埃に覆われた床にしゃがんでいるPFLLT
特殊部隊の爆発物専門家とその護衛の2人がいた。彼らはドアに開いた穴から道路を観察していた。2人は時計を取り出して時間を確認した。奴らは間

もなく来るはずだ。
2人は見張りを再開した。

そして10分後に双眼鏡に馬車が映ると、2人は注意深くその馬車を観察した。
護衛が無言で1枚の写真を取り出す。そこには今朝トリスタニアを出発した時に撮影された馬車が写っており、近づいてくる馬車と比べると瓜二つだった。

馬車が2人に気付かぬままこちらに向かってくる間に、爆破担当の兵士は戸枠のそばの割れかけた日干し煉瓦と土くれを両手でこじって外した。そこにあったのは電線だった。ベルトから手回し式の電気発火機を取り出して、電線を端子につないだ。
その電線は、昨夜のうちに敷設した遠隔操作で起爆する対戦車地雷につながっている。
最初は地雷をポンと置いて馬車がそれを踏んづけるのを見守るといふ作戦だったが、
確実に期すために変更された。

準備は整った。あとは時が来るのを待つのみ。

馬車に乗っているのはゴンドラン。トリステイン王立魔法研究所、通称アカデミーの評議会議長である。銀髪で整った口ひげをした老紳士だが、覇気が感じられない顔立ちと

気弱そうな性格から、人に与える印象を薄いものにしてている。

「が、実は”超”が付くほどの女好きであり、今も高級娼婦とよろしくやっっている。」

一段落ついたところで、彼は窓のカーテンを少し開けて外の景色を眺めた。

すると大きな櫛の木が見えてきた。

「ふむ、見事な木だな」

「あら、ゴンドラン様もお見事なモノをお持ちですわよ?」

「はっはっは！ そうかね？ ではもう一回だ！」

「ターゲットがポイント・ズールーに接近。スタンバイ」

護衛がそう言った時、爆破担当の兵士は発火機の安全ピンを抜いた。道路の脇には大きな櫛の木があり、それが目印だった。

チャンスは1度、それをやる余裕は1秒しかない。だが彼は爆発物のプロである。

櫛の木の影が馬車に重なった時、兵士は発火レバーをぎゅっと握った。

敷設されていたのは”そこそこ”威力のある対戦車地雷だったが、木造の馬車を吹き飛ばすには充分すぎる威力を持っていた。ゴンドランと娼婦を乗せた馬車は、文字通り木っ端微塵となり、周囲の護衛まで巻き込んだ大爆発を引き起こした。

「完璧だな。ターゲットの死亡を確認。撤収する」

発火機をきちんとベルトにしまってから、2人は小屋から飛び出して逃走した。

わずかに生き残った護衛は、爆発時の煙のせいで2人に気づかなかった。

こうして2人の暗殺は完了し、兵士達は英雄として帰還を果たした…

続く！

第16話：一方…（後書き）

ヒッキーなアホリエッタ、一丁上がりってね！

このまま人間不信に…ふふふ。

次回はまた時間が飛ぶかもしれないし、主人公ズのセリフがまたなしになるかもしれません。
では

第17話：キングダムソンの能力では（以下略）前書き（

また時がジャンプします。

第17話：キングクリムゾンの能力では（以下略）

ウィリアムです！

デックスです！

2人揃って！ ふたりはプリク

ごめんなさい嘘です。改めましてウィリアムとデックスです。ついに俺達は9歳になつてしまいました。誕生日パーティーでは多くの人に来てくれて楽しかったぜ。

イザベラ、シャルロット、ジョゼットの3人も来てくれてとても嬉しかった。前世では

誕生日パーティーとかなかったしさ…ケーキもプレゼントもなかったな…ぐすつ。

俺はイザベラから手作りのマフラーを、デックスはシャルロット・ジョゼットの双子

から、これまた手作りのオルゴールをもらった。いやあ、手作りっていいね。

そして原作キャラの1人、キュルケ・アウグスタ（中略）ツェルプストーに

会うことができた！ 俺達より1つ年上のキュルケは、この時からすでに胸がでか

かった。え、感想？ もう、なんというか、わーお！ って感じ。

じーっと見て

いたらイザベラ達に殴られたけどね。俺やイザベラ達が見ていない間に、早速
デックスが彼女とお話してフラグを立てていたらしい。女性と話すのは実に楽しい
とか言ってたな。デックスいわく、

「最初キュルケはおどおどしながら敬語で話していたけど、次第に打ち解けて
タメ口で話すようになった」

だと。夜遅くにパーティーが終わり、キュルケは郊外の別荘に帰っていったが、
まだ話し足りないといった表情を浮かべていた。デックスの奴め、もう
フラグたてやがった。

ちなみにイザベラ達がなんでゲルマニアにいるかということ、彼女たちは現在
国立ウインドボナ魔法学院（小中一貫校）の初等部に留学中なのである。ガリアにも
リュティス魔法学院があるが、イザベラ達の強い希望があり留学することに。今は
王城の開いている部屋に住んでいる。彼女たちは学校が終わったら俺とデックスの
仕事場に来て、その仕事ぶりを見ている。そして夕食を食べべ一緒に寝る。
なんかもう同棲みたいだね、うん。

次に他の国のお話。まずはトリステイン。PFLTの作戦により、政府高官が次々と暗殺されているので、貴族達は基本的に外出しないようになった。それでひと安心、とはならなかった。今度は貴族の屋敷が襲撃を受けるようになった。襲撃を受けた屋敷は100%の確立で全壊、しかも貴族と護衛も死亡。だが、屋敷で働いていた平民とその家族は、全員無傷で救出されゲルマニアに移住していた。このことはトリステイン王家は全く気付いていなかった。というか関心がなかった。だって平民だもの。

次はロマリア。奴らの食料もだんだんなくなりかけているのだが、そこで教皇のヴィットーリオが、

「みんな！ 米食おうぜ！」

と言い出したので、ロマリアでは家畜用の米を炊いて食べることになった。これを聞いた時、よく考えたな、と感心してしまった。多分教皇も食べるものがなくて、家畜小屋に行って餌の米を食べたらうまい！ って気が付いたんだろうな。また、税率を下げた 90%から80%に。その結果、農家がやる気を出し始めて自給率も

上昇。ロマリアは餓死しないで済みそうになった。

ちっ、つまらん。

で、次はガリア。同盟国であるガリアもまた、国内の近代化をほとんど終わらせた。

新たに作った国会は両院制であり、代議院（下院）と元老院（上院）に分かれている。

我が国が提供した銃火器で武装した常設軍も完成し、よく合同軍事演習を行っている。

それと我が国よりちょっと規模が小さいが、石炭鉱山（炭鉱）とタングステン鉱の

稼働が始まった。現地では我が国の鉱山会社の社員がオブザーバーとして派遣されている。

いる。こんなところか。

クルデンホルフ：「は特にないな、うん。強いて言えば、金払いのいい顧客、といった

ところか。すぐ支払ってくれるから取引などがスムーズに終わる。

いいことだ。早く

ベアトリスに会いたいな。」

あと、エルフの国「ネフテス国」。以前届いた手紙にはなかなか攻撃的なことが

書いてあったが、ここ最近砂漠方面のグレートウォールの警備隊から、

「エルフと思われる人影をよく見る」

という報告が上がっている。何をしようとしているのかサッパリだが、多分偵察とかじゃないかな。いつも対エルフ戦用の第2軍団がその辺で演習しているし。

あ、エルフで思い出した。ついに対エルフ兵器が完成したのだ。「カウンター」でも反射できない（と思う）その兵器とは…

名付けて「Neutron bomb - i」。日本語に直すと「中性子爆弾（エコ仕様）」
みたいな。中性子爆弾とは、核爆発の際のエネルギー放出において中性子線の割合を高め、生物の殺傷能力を高めたものであり、放射線強化型核爆弾とも呼ばれる。

要するに、街に落としても建造物やインフラ設備にはほとんど効果がないかわりに、そこにいる生物は皆殺しにできるといふ優れものである。なお、中性子線の発生にあたっては、核分裂よりも核融合の方が効率が良かったため、水素爆弾が用いられる。

ーから水爆を開発するのは面倒なので、封印していたヤンキー型原子力潜水艦に搭載

されていた潜水艦発射弾道ミサイル、R-27からいくつか弾頭を引っこ抜いてそれをベースに開発した。資源の有効活用ってやつだ。残った潜水艦は訓練艦として使おうかな。

そしてなんで「i」がついているのか。名前に「i」を入れると、皆がその兵器のことを

「ああ、これは環境にやさしい兵器なんだな」

と勘違いする。そしてこの兵器は安全なんだな、と納得する。それが狙いだ。どこかの車番組の司会者も言っていたように、

「エコ崇拜者は馬鹿だから騙される」のだ。

また、通常の中性子爆弾とは異なり、残留放射能を限りなくゼロになるように設計されている。大変だったよ…なにせ旧ソ連製のお粗末な核弾頭を改造して作ったもんだから…ともかくこれを落としても、3日後には綺麗サツパリ放射能はなくなつて

いる。これは…完璧DA！いくらエルフでも中性子線までは防げまい。そもそも彼ら

は中性子線なんて知らない。そして知らないものを反射することは

できない…はず。

これを第2軍団が7発管理している。いざとなったら俺の命令で第2軍団戦略爆撃部隊のB-52Hから投下される。そんな時が来ないことを心から願うが…

ちなみに余った弾道ミサイルは地上に置いておく訳にもいかないので、射程距離を伸ばしたあと月の裏側まで飛ばして起爆させた。邪魔だし。

最後にアルビオンだが、大きな動きが。ついにあのジェームズ1世がブチギレました。

理由は主に2つあった。1つはトリステイン。毎回毎回食べ物くれ、安くしろと言われ続けたので、怒ったジェームズ1世は手紙に、いい加減にしないと国交断絶するぞコラ、と書いてアンリエッタに送りつけた。さすがにアンリエッタもやばいと思っただらしく、そちらの言い値で買わせて頂きます、という返事をしたのでなんとか収まったものの、アルビオン国民の頭の中には、「トリステイン「くそつたれ」という公式がしっかりと記憶されることになった。いえーい。

もう1つの理由は弟のモードの事だった。何度もエルフの母子を

追放しろと言いつけて

きたのに、彼はそれをガン無視。おまけにモードに忠誠を誓っているサウスゴータ家の

領地に匿っているときた。堪忍袋の緒が切れたジェームズは、ついに軍隊を派遣して

モードとエルフの母子、サウスゴータ家の取り潰しを行うことに。

しかし軍隊が到着する頃には、モードとエルフの母子、それにサウスゴータ家は

姿を消していた。住民にも聞き取り調査をしたが、昨日までいたことしかわからな

かった。ではどこに消えたのだろうか？ 話は4日前まで遡る。

4日前、深夜、シテイオブサウスゴータ、モード大公の屋敷。

今ここにはモード大公、サウスゴータ家の当主、エドワード・オブ・サウスゴータ、

そしてその娘のマチルダがいた。テーブルの上には、以前ウィルがきた時に置いて

いった携帯電話があった。

「…エドワード、率直な意見が聞きたい。我々はそろそろ限界かな？」

モードが悲しげな口調で問いかける。

「…ええ、そうだと思います。近々軍が派遣されるそうですし…」

エドワードがそう言うと、マチルダは大声で叫ぶ。

「じゃあテファが連れてかれちゃうじゃない！ お父様、それはだめだよ！」

「わかっているよ、マチルダ。だからこれで…」

エドワードは携帯電話を持ち上げボタンを押す…前にモードを確認をする。

「大公、よろしいですね？」

「ああ、構わんよ。それよりも君の家族は納得しているのかね？」

亡命する時はテファとその母だけを連れて行く、とモードは前から

決めていた。

「妻は納得してくれましたよ。それに娘はあの子と大変仲が良いですから」

エドワードはニッコリと笑うと、ボタンを押して携帯を耳に当てた。

『こちら国防長官のウィリアムです』

初めて使った携帯にびっくりしてエドワードは若干上ずった声で返事をした。

「こ、こちらエドワード・オブ・サウスゴータです。お久しぶりです、国防長官」

『そうですね。ところで、この電話を使ったということは我が国に引越しをされる、

ということですか？』

「その通りです。近々王都から軍がやってくるとの情報を受けて決意致しました」

『なるほど、わかりました。すぐにそちらに向かいます。ちなみにあとどれくらいで

軍が来るかわかりますか？』

「残念ながらそこまでは…申し訳ありません」

しかしエドワードに聞こえてきたのは、ウィルの笑い声だった。

『はっはっは、ご心配なく！　すぐに特定致しますので、しばらくお待ち下さい。』

あと、携帯電話の横の青色のボタンを押して、テーブルの上に置いていただけ
ますか？』

「あ、はい、わかりました」

エドワードは言われた通りにボタンを押してからテーブルの上に携帯電話を置いた。すると

携帯電話から空中にモニターが現れて、ウィリアムが映しだされた。

「なんと！　これはすごい！」

モードはびっくり仰天。マチルダも口を大きく開けてぼかんとしている。

『モード大公、お久しぶりです。ミス・マチルダも相変わらずお美しいですね』

「な、何言ってるんだい……」

と小さな声で言いながら顔を赤くするマチルダ。可愛いですね。

「長官、色々と迷惑をかけてしまっって申し訳ない」

『そんなことはありませんよ、大公殿下。耳がとんがっているだけで追放とか言う方が』

おかしいのですから。おっと失礼』

ウィルはパソコンのモニターを見つめてから、真剣な眼差しでモニター達を見た。

『現在アルピオン軍はシティオブサウスゴータから徒歩で4日の位置まで来ていますね。』

なので、我々は2日後の深夜にそちらにお伺いします。それまでに最低限の貴重品を

まとめておいてください。それとこの電話の後に、我が国の情報部員がそちらの

屋敷を訪れます。彼女は変装のプロフェッショナルですので、エルフの母子を誰にも

気付かれること無く、今住んでいる場所からその屋敷まで連れてくる事が

できます。聞きたいことがありましたら彼女に聞いてください。』

「わかりました。それでどうやって住民たちに知られないようにここから脱出する

のですか？」

3人が一番聞きたかったことはそれだった。深夜といえど、街には多くの人がいる。

そんな中、姿を見られずにこっそりと引越など出来るのだろうか。そんな疑問が

3人の頭の中にブカブカと浮かんでいた。

『ご心配には及びません。確実に皆さんをゲルマニアまでご案内しましょう。では

2日後にまたお会いしましょう。』

それで電話は終わった。3分後に屋敷に1人の女性がやってきたので、3人は「ゲルマニア人は約束を必ず守る」という噂は本当だったんだと思っただ。

その女性、G C I A エージェントのエレナ・バーンスタイン大尉は非常に優秀な人物で、かつ変装のプロフェッショナルだった。ある時は王城の警備兵に化け、ある時は露店商人に化け、ある時はとある貴族に化けて、様々な任務をこなしてきた。ちなみに今日は街の衛兵に化けていた。そんな彼女は、ティファニア母子がいる場所だけを聞いて、

「あとはお任せ下さい。深夜までに必ずお連れいたします」

と言いつ残してさっさと出掛けてしまった。大丈夫なのかな、と3人は思っていたが、その日の深夜、本当に連れてきたので、この人は只者ではない、と考えなおした。

「マチルダ姉さん！」

「テファア！」

久しぶりにあった2人は仲良く抱き合って遊んでいる。その隣のテーブルでは、ティファニアの母親、シャジャルを含めた4人の大人が話している。

「これで第1段階は完了です。大公殿下、準備はどれくらいできますか？」

バーンスタインはモードに聞くと、彼はすぐに答えた。

「もうできている。シャジャルとティファニア、この2人以外は何もいらんよ」

「あなた……」

シャジャルは頬をぽつと染める。それを無視してバーンスタインはエドワードに同じ事を聞いた。

「こっちは明日の昼までには終わる。マチルダの準備も終わっているし、あとは私と妻の準備だけだ」

「分かりました。では明日の夜10時にまた来ます。何かトラブルがありましたらこの番号までお電話ください。では失礼します」

そう言ってサツと敬礼をしてから、バーンスタインはモード達目の前で姿を消した。

「……………」

部屋に沈黙が流れる。

「…ねえ、お母さん」

「…なに、テファ？」

「今の人って、人間？」

「……………」

娘の質問にシャジャルは答えられなかった。

その頃ウィリアムは、ゲルマニア海軍で一番早い軍艦であるヴァリアント級ミサイル駆逐艦に飛び乗って、全速力でアルピオンに向かっていった。

で、いよいよ引越しの日。時間通りに現れたバーンスタイン大尉は、昨日とは違って真っ黒の戦闘服を着込んでいた。

「皆さん、あと2時間後に長官が到着致しますので、忘れ物などがないように荷物のチェックをしておいてください」

「……………はい……………」

モード、サウスゴータ夫妻、マチルダ、ティファニア母子の6人は揃って返事をする。

ちなみにウエストウッド村の孤児達も一緒である。ティファニアたつてのお願いだった

ので、バーンスタインが連れてきたのだ。子供達は隣の部屋で遊んでいる。

そして2時間後。バーンスタインが耳につけていたインカムに通信が入る。それを

聞いた彼女は全員に告げる。

「皆さん、迎えのフネが来ました。庭に出ましょう」

「フネ!？」

外に出てみるが、空には何も見えない。

「あー、どこにも船が見えないんですけど…」

マチルダがそう言うと、初めてバーンスタインが笑顔になる。

「まあ当たり前でしょうね。そういう魔法を使っているから」

彼女は、引越しメンバーを広い庭の端っこに集めさせていた。何故なら開いている

空間に2機のMH-60R シーホークが音もなく着陸したからだ。

もちろん気付かれないように、着陸してから光学迷彩を解除している。

「さあ乗りましょう！ 急いで！」

バーンスタインは皆を急ぎ立ててへりに乗せる。あとはテファアだけだったが。

「おい！ そこで何をしている！！！」

なんと門の外で警備をしていた王軍の兵士がこっちに向かって走ってきたではないか。

「ちっ！」

取るべき手段は1つしかなかった。バーンスタインはテファアをへりに押し込んでから、腰のホルスターに収まっているサイレンサー付き拳銃を抜いて、躊躇なく兵士の頭に銃弾を撃ち込んだ。

「ぐえっ！！」「あふんっ！」

糸が切れた操り人形みたいにぶっ倒れるのを確認してから、彼女もへりに乗って

パイロットに大声で離陸の指示を与えた。へりは再び光学迷彩を起動して夜空に

向かって上昇し、上空で待機していたヴァリアント級ミサイル駆逐

艦の飛行甲板に
着陸した。

俺は飛行甲板にヘリが着陸し、機内からぞろぞろと出てくる人達を眺めていた。

あ、テファにマチルダ、それにあの綺麗なエルフの人はテファのお母さんか。

彼らの脱出を指揮したG C I Aのバーンスタイン大尉が俺の前までやってきて敬礼をした。

「エレナ・バーンスタイン大尉、任務を完了致しました。死傷者ゼロです」

俺も敬礼する。

「よくやってくれた、大尉。何か問題はなかったか？」

「はっ、脱出時に2名の兵士に気付かれましたが、強化催眠弾を使用しました」

「そうか、なら思い出せないだろうな」

強化催眠弾とは、G C I Aのエージェントなら誰でも持っている特殊拳銃弾で、

中には24時間分の記憶がすっ飛ばす効果のある薬品が詰まっている。

「よかった…あの兵士さん生きてたんだ…」

と後ろのほうでテファとマチルダがつぶやいていたが気にしない。
そしてテファの

母親のシャジャルとモード、サウスゴータ夫妻もやってきた。

「長官、この度は本当にありがとうございました。これで妻と娘と一緒にゆっくりと

暮らすことができます…」

なんとモード大公は泣いているではないか。嬉し泣きってやつかね？　そして

エドワード・オブ・サウスゴータも頭を下げてきた。

「私からもお礼を言わせてください。ありがとうございます」

「いやいや、皆さんお顔を上げてください」

なんとというか、大勢の人に目の前で頭を下げられるとちょっと居心地悪いというか、

なんか、ねえ？　わかるでしょ？

「あの、長官。一つお聞きしたいことあるのですが…」

と、シャジャルさんが言ってきた。

「これから娘はどうなるのですか？」

「そうですね…他の子供達と一緒に学校に行ってもらおう、というの

はどろでしょっ。」

「学校？ トリスティンの魔法学院みたいなの？」

マチルダがそう聞いてきた。

「まああんな感じかな。そこで文字の読み書きとか色々なことを勉強するんだ。」

友達もいっぱいできるし、あとエルフや翼人の子もいるよ。」

「……ほんと（ですか）！？」「……」

マチルダと大人達は、本当にエルフや翼人が人間と共存しているのか、とびっくり仰天。

「お母さん、私も学校に行きたい！」

テファもものすごく学校に行きたそうだし。

「じゃあ手続きとかしておきますね。とりあえず今は艦内でゆっくりとしてください。」

ゲルマニアに到着しましたら例の屋敷の方までご案内致します。」

誰にも気付かれること無く、駆逐艦は祖国へ針路を向けた……

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

とまあこんなことがあったわけだ。今どうなっているかというところからテファは  
国立ウィンドボナ魔法学院へ通い始めた。すぐにイザベラ達と仲良  
くなって、同じ  
クラスのエルフ達とも良好な関係を築いているとか。マチルダは土  
系統の魔法に  
優れているメイジだったので、学院の教師として働くことに。「若  
いのには優秀な先生」  
として意外と人気である。

そしてウエストウッド村の孤児達はテファ達の家の近くの孤児院  
に入ることに。最初は  
テファとマチルダと別れるのを嫌がっていたが、その孤児院でシャ  
ジャルさんが働く  
ことになること大喜び。夫のモードと一緒に子供達に絵本をきかせた  
り、文字の読み  
書きを教えている。数年したら魔法学院に入学することになるだろ  
う。

サウスゴータ夫妻は苗字を変えることに。もう自分達はサウスゴータの間人間ではないから、と言っていた。そして新しい苗字「アシュトン」となったエドワードとその妻アンナは、財務省でデックスの部下として働くことになった。仕事の効率が上がってデックスも大喜びしている。

ちなみに、アルビオンから「モード大公とサウスゴータ一家知らない？」と手紙がきたけど、「知るかボケ」と適当に返事しておいた。

で俺とデックスは今何をしているかというところ…



「いてええええ!!!」

「ひひひひひ!!!」

ゲルマニア王国の王都、ウィンドボナ。その中心部から近い場所に大きな建物があつた。てっぺんには地球ではおなじみの赤十字のマークがでかかとかいてあつた。

そう、ここは国立ウィンドボナ中央病院。開院してから数多くの人々の命を救つて

きた病院であり、定床数は1、500床（一般1250床、精神250床）で、従業員数は

医師が431名、看護師は1、480名、医療技術者671名、事務・その他は529名と、

ゲルマニア最大級の規模を誇る。

今までゲルマニアに、いやハルケギニアにはここまで大規模な医療施設は存在していなかった。従来の例だと、病気にかかったり怪我をしたら、貴族達は高名な水メイジに来てもらい魔法で治してもらおう。一方平民達は町医者に頭を下げて治してもらおう……  
もともと町医者がいればの話だが。水のスクウェアメイジの貴族で、医療に詳しい  
ワッペン保健福祉長官は、就任直後に王城に突撃し、

「この現状は良くない！ なんとかしてプリーズ！」

と国王に懇願した。すると1年後にはウインドボナ中央病院が開院し、その後

国内各地に多くの医療施設が建設された。今の病院総数は民間・公立を合わせて、

361施設ある。国土の広さの割に少ないと思うかもしれないが、人口が750万人

しかないなのでこれで充分である。まあこれから人口は増えていく予定だから

場合によっては増やすかもしれない。

で、その病院から王城に派遣されている医者に、俺とデックスは血を抜かれていた。

要は定期健康診断だった。

「くそ、やっぱ注射は苦手だ……」

「同感だ。BBCだかなんだかのほうがまだましだったな」

「それは英国放送協会の略だ。お前が言いたいのはBCGだろ」

「それぞれ。あの針が9本付いてるやつ」

そう、俺達2人は大の注射嫌いである。

「なんかこう、塗る麻酔薬みたいの開発してほしいよな。注射じゃなくてさ」

「それいいな。で、次は？」

「次は胸部レントゲンです。外にレントゲン車が待機していますので」

「わかった」

2人は医者についていった。

同時刻、国王の寝室。アルブレヒト3世が医者から診察結果を聞いていた。

「閣下のお体に特に異常は見られませんでした」

「そうか！ よかったよかった」

「ただ、血圧が若干上がっており、肝臓の機能も若干低下している

ので、お酒は

程々にしてください。薬も出しておきますので」

「う…酒は駄目か…わかった」

「ということでお酒は没収です」

そう言いながら部屋に入ってきたのはヴィンセント。

「げえっ、ヴィンス！」

「関羽みたいに言わないでください。さて、閣下がこっそり隠しているお酒は

全部没収っ」と

タンスの中やベッドの下からお酒を引っ張り出してカートに詰め込む。

「あああああ、それは一級品のお酒なのに…ていつかなんで場所わかるんだよ」

「なにも飲むなどとは言いません。こっそり飲まないでください。食事の時には

軽く1杯くらいは出ますから。それでは失礼します」

秘蔵のお酒を全部取られたアルブレヒト3世は、その日の仕事を全部サボった。

「別にお酒がないと仕事ができないわけじゃない、ただお酒を取ら  
れたのが嫌なんだ」

そんなことをブツブツとつぶやきなが部屋でふて寝をしていた…

続く…

第17話：キングクリムソンの能力では（以下略（後書き））

テファ達救出完了。原作より早いって？ 気にしない気にしない。核兵器は使わないと言いましたが、中性子爆弾に改造しました。めちやくちな改造ですが、そこはまあご都合主義といいますが、適当といいますが、お察し下さい。

今回はこの小説初の番外編でも書く予定です。内容はイザベラ達中心で、学校の生活をちらりほらりと。

まあ、あくまで予定ですけど。

なにかご意見・ご感想がありましたら遠慮なくお願いします。  
では

**番外編 1：学園での日常（前書き）**

初の番外編といきますか。

今回はイザベラ中心で進めていきます。

## 番外編1：学園での日常

ある日の朝、国立ウィンドボナ魔法学院正門

「ほら、遅刻しちゃうよ！ 2人とも走って！」

私は今大急ぎで正門を走り抜けたところだ。いつもなら遅刻なんてしないはずのに、

昨日の夜遅くまでウィル達とお話していたらこの有様だよ！ まあ走るっていったって

正門まで車で送ってもらっているから問題ないけどさ！

「まつへほ、おへいはま！（待つてよ、お姉様！）」

「ジョゼット、何言ってるか分かんないけど急いで！」

車の中でもらったトーストをかじりながらジョゼットがエレーナを追いかけている。

相変わらずジョゼットは食べるのが遅いねえ。

なんとか校舎に突入して階段を駆け上り、担任が来る前に自分のクラスの自分の席に

つくことができた。エレーナとジョゼットとは玄関で別れて他の階に走っていったよ。

2歳年下だから学年もクラスも違うからね。

「ふいふ、なんとかセーフ……」



「イザベラ、珍しく遅かったね？」

そう聞いてきたのは隣の席のティファニア、通称テファ。ちょっと前にアルビオンから

引越してきてすぐに仲良くなったよ。なんでもここで働いているマチルダ先生の家族と

テファの両親をウイルに助けてもらったんだって。

ウイル…また女の子助けて…いったい幾つフラグを立てれば気が済むんだい…

まあ今はそんな事どうでもいいか。

「いや、昨日はちょっと夜遅くまでウイル達とお話ししててさ、あっはっは」

「ウイルさんと？ いいな、私もお話ししたいのに」

「じゃあ今日遊びに来る？」

「いいの！？ お父さんとお母さんに許可もらおうと」

その時鐘がなり担任が教室に入ってきた。いつも時間ぴつたりだね。ああ、この学院では「時間厳守」が1番重要でね、遅刻したらひどい目に合わされるんだ。

この前遅刻した男子は放課後まで校庭走らされていたっけ…。なんで時間を

重視するかというと、教育長官のマルモって人とウイルとデックスが、

「時間を守れない奴は信頼できん。5分前行動は当たり前だろ」  
と云ってたからだ。確かに時間にルーズな人ってなんか信用出来ないね。

「皆さんおはようございます。今日も仲良く、しっかりと勉強しましょう」

「……………はい……………」

1時間目は算数だったけど、私には簡単だった。ガリアで少し習っていたからね。  
一方隣のテファは頭から煙が上がってる。算数、苦手なんだよね、テファって。

「おい、テファー。しっかりしてよ」

「うーん、やっぱり難しいよ…」

「1年後にはスラスラ出来るようになるって。次の教室行く?」

「うー、わかった…次は化学だっけ?」

「そっだよ、早く移動しよ?」

「うん!」

そんなこんなで無事に午前の授業は無事に終わったよ。化学の実験中に先生がアルコールランプを落としてカーテンが丸焼けになったり、その次の授業の生物の時間に解剖中のカエルが何故か生き返って、内蔵はみ出したまま生物室を逃げ回ったりなんてことはなかったよ、決して。

「「「「「いただきまーす!!!」」」」」

そしていつも通り4人で学食でお昼ご飯。私が注文したのは日替わり定食Aセット。

今日は鯖の味噌煮と味噌汁、お新香に白米だった。味噌ってこの国に来てから初めて食べたけど、本当においしいね！ お父様も喜んでいたっけ。テフアはオムライス  
定食で、ジョゼットはチャーハン。エレー又は…みんな嫌いなはしばみ草だらけの  
サラダ定食。なんでこんなメニューがあるんだろう？ エレー又はじゃないか。でも本人は

「おいしい」

と言いながらどんどん食べている。口が膨らんでまるでハムスターみたいだよ。

「おいしいね！」

「うん！」

なんて言いながらご飯を食べてたら。

「ねえねえ、そこの彼女たち。俺達とデートしない？」

…なんかチャライ格好をした男がやってきた。またか、と私は心の中で呟いた。何故か

わからないんだけど、よくこの手の男どもに声をかけられるんだよね。全く嫌になるよ。

いつも通りに私が相手をする。

「興味ないね、さあ帰った帰った」

「そんな事言わないでさ。そっちの彼女もそう思うでしょ？」

「いや、その…」

声をかけられたジョゼットはエレーヌの背中に隠れちゃった。すると今度はエレーヌが、

「みんな嫌がっているの見てわからない？ あっち行って！」

と大きめの声で拒絶した。

その後、男どもは言ってはいけないことを口にした。

「おい、そんな”まな板”に構うなって。あのエルフの女の子の方がすげえじゃんか」

「おお！ それもそうだな」

説明しよう！ テファは私より1つ年下の9歳だけど、胸はあたしよりあるのである！

試しに洋服屋で（強引に）測ってみたら、既にDカップ…だと…？ムキーツ！

それに比べてエレー又は…その、一言で言うと「ストンツ」なんだ。これ以上は彼女の尊厳に関わることだから言わないでおくよ。随分と気にしてるみたいだからさ。

まあ、そんなわけでエレー又の前で貧乳とかそれに類する単語を口にした男どもは、一瞬でカチンコチンになっていた。いやあ、エレー又は魔法が上手だね。

「天誅…さてごはんごはん」

最初から男どももなんかいなかったかのように、エレー又は椅子に座ってはしばみ草を

食べ始めた。周りにいた生徒達も「また被害者が増えた」なんてことを思いながら

氷漬けになった男たちに黙禱を捧げた。脳内で。そして”タイミン  
グよく”やってきた  
掃除のおばさんが氷の塊を引きずって消えていった。まあ、女の子  
の胸をからかった  
んだからこれくらいは当然だよな。

そして午後の授業。テファのお姉さんのポジションにいるマチルダ  
さんが先生だ。

「はい、それじゃあ始めるよー。今日は…」

そこに遅刻してきた学生が2人やってきた。

「すみません！遅刻しました！」

するとさつきまでニコニコしていたマチルダ先生から笑顔が一瞬  
で消えた。

さつきも説明したけど、ここでは「時間厳守」が1番重要なんだよ。  
遅刻なんか

した日には…地獄を見るね。今みたいに。

「グラウンドを20周。全速力で。サボったらゴーレムで潰す」

「えっ」

ちなみにここのグラウンドは1周が400mある。だから20周

だと…8、000m。つまり…

8kmだね。昼ご飯のあとにこれはないわ、うん。

「もたもたするんじゃないよ！ さあ行っただ行っただ！」

「イエス、ママ！！」

教室からすっ飛んでいく2人、それを追いかけるゴーレム…うんカオスだね。

「さて、それじゃあ改めて今日の授業を始めましょう」

「……………はい！！！！」

「うん、やっぱりマチルダ先生も授業はわかりやすいね！」

全部の授業が終わってから教室でテファと話す。他のクラスメイ  
トは帰ったり部活に

出たりしてて、教室には誰もいない。今日は5時間目で授業が終  
りなので楽だった。

水曜日の7時間目なんかもう眠気MAXの状態だよ。

「マチルダ姉さんも楽しそうだし、本当にゲルマニアに来てよかつ  
たわ」

「ほんと、そうだよね」

声が聞こえたので振り返ると、そこにはマチルダ先生がいた。

「マチルダ姉さん！ お仕事は？」

「まだあるよ。今は休憩中。それよりも」

え？　なんで私を見るのさ？

「イザベラちゃん、あんた、国防長官のウィルさんに惚れてるんだ  
って？」





「ただ私には大きなアドバンテージがある！ それは…」

「でもこの中で一番ウィルとの付き合いが長いのは私なんだよ！」

「「な、なんだってー！？」「」

私は胸を張って言った。なにせ4歳の時からの付き合いだからね！ 手紙もいっぱい

書いたし、誕生日の時にはお互いにプレゼントを贈りあったし！

結局私たちはエレーヌとジョゼットが来るまでずっとウィルのことを話していた。

いやはや、集中していると時間ってあっという間に過ぎるんだね。

マチルダ先生は

このあとも仕事なので、私達4人は街中のショッピングセンターで時間を潰してから

ウィンドボナ城に帰った。テファの両親が許可を出したのでテファも一緒だ。

「お帰りなさいませ、イザベラ様。ウィリアム長官は20時頃に帰宅するとのことですよ」

「そうですか、いつもありがとうございます」

今や自分の部屋となっている客室に着くと、メイドの1人がウィルのことを教えてくれた。

ウィルはまだ9歳なのにこの国の国防と外交のトップなんだよね。

もう尊敬するよ、ほんと。

お父様もシャルル陛下も感心していたし。

それじゃ、ウィルが帰ってくるまでテファと一緒に今日の授業の復習でもしようかね。

メイドが言った通り、20時ちょっと過ぎにウィルとデックスが帰ってきた。2人が

帰ってきた、聞いた途端にエレヌとジヨゼットが走って迎えに行つた。私も慌てて

2人を追いかける。後ろをチラッと見るとテファも付いてくるのが見えた。

玄関に着くと、デックスが2人を抱きしめていた。

「おかえり、デックス！」

「ただいま、シャルロット、ジヨゼット」

それを隣でからかうウィル。

「おーおー、愛されちゃってるねえ弟よ」

「何言つてやがる、お前もじゃねえか。ほら」

「「ウイル(さん)!!!」」

私とテファが駆け寄ってくるのを見て、ウイルも笑顔になった。

「ま、そうだな。ただいま!」

その後、みんなで夕ご飯を食べてまたお話をしてから一緒に寝ることに。ウイルの

ベッドは大きいので3人でも普通に寝ることができるんだ!

「おやすみ、イザベラ、テファ」

「うん、おやすみ」

「ウイルさん、おやすみなさい」

今日もいい1日だったなあ。この先もずっと今日みたいな日が続く  
といいな...

続  
く  
…

番外編1：学園での日常（後書き）

書いていてちよつとつまんなかったかなとは思いましたが、まあ書かないよりはましか、と自分の中で勝手に考えました。

主人公ズの年齢はルイズと同じということなので、主人公ズが9歳だとイザベラは10歳、シャルロット・ジョゼットは8歳、テファは9歳、ということになる…のかな？

書いていてなんかイラツとしたことが。アホリエツタが主人公ズより

年上ってどういうことだよ！ 無性に腹が立つ今日この頃。そして就活もうまくいかずにいららする今日この頃。誰か俺のストレスをふっ飛ばしてくれ！

次回は…そろそろお待ちかね（？）の戦争への準備やらなんやらを。では

第18話：作戦名はどろじよじか？（前書き）

今回よりフェイズ2に入ります。

## 第18話：作戦名はどうしようか？

どうもみなさん、デックスです。現状の報告をしましょうか。

テファ&マチルダ家族がゲルマニアに引っ越しをしてから半年が経過した。テファは既に多くの友達ができて、一緒に勉学に励んでいる。マチルダ曰く、昔より笑顔を浮かべる回数が格段に増えたそう。いいことじゃないの。

イザベラは相変わらずウィルにベタぼれ。学校が終わったらすぐに仕事場までやってきて、ウィルの仕事を見学している。まあ、国家機密に関わるものは見せてないけど。一応イザベラは「同盟国の王族」だからね。周りからは「夫婦みたい」等と言われている。

しかし、つい最近わかったことだが、イザベラの欠点が判明した。ずばり、

「飯がまずい」

である。ある日イザベラがサンドイッチを作った。それを食べたウィルがぶっ倒れて3日間寝込んでしまった。あのチート人間でもこうなるとは…恐ろしい。その後、城の厨房で料理長に料理を教えてもらっているイザベラの姿をメイド達が見たとか



見なかったとか。

俺の嫁（の予定）のシャルロットとジョゼットは、料理の腕はそこそこ良い。ただ、シャルロットのはしばみ草料理は勘弁願いたい。あれはかなり苦しいやほんとに。でも食べないとシャルロットがかわいそうなので、仕方なく食べるしかない。どうにかして苦味を抑えようと、シャルロットが見ていない間に砂糖をふりかけて食べてみたが、更にまずくなったのは言うまでもない。

あとキュルケ。彼女もシャルロット達と同じく国立ウィンドボナ魔法学院に通っている。俺達双子より2つ年上のキュルケは頭も良くて人柄もいいので学院では有名である。シャルロット達とも仲良くしているそうだ。俺もよくメールするし、仕事が無い日はデートしたりもする。

とまあ女の子紹介はこれくらいにして、他のことも報告をしないとね。

まずはトリステイン。スパイからの報告によると、なんとロマリアから使者がやってきて米の食べ方を教えたそう。なのでトリステインでも米

料理を食べる

習慣が。一体全体どうやって使者はロマリアからやってきたんだろ  
うね。

ウィルに聞いたら、

「恐らく危険を承知でガリア沖を超迂回しながらフネで行ったんだ  
ろう。それ以外に

考えられない。砂漠方面のルートは考えられない。第2軍団が展  
開中だし、そもそも

我が国とガリアの国境を超えないとトリステインに行けないから  
な。あの遅れた

国のフネじゃグレートウォールを突破することなど100%不可  
能だよ。それに

そんなことが起きたら俺達のところに報告が来ているはずだ」

と言っていた。でもガリア沖を迂回って…地図見るとかなり距離  
があるんですけど。

絶対に途中で風石不足で墜落or食糧不足で餓死するだろ…まあと  
もかくそのせいで

トリステインは少し食糧問題がちょっと解決してしまった。無念。

そしてアルビオンとの関係。

以前ジェームズ1世がキレたので、例のあのアホ（誰のことかは  
お察し下さい）は

アルビオンの言い値で食料を買うことに同意した。が、それでも値  
段が高いと

トリステインの一部の貴族は感じていた。

そこで貴族達はなんと傭兵を雇ってアルビオンの商人を襲うよう  
になった。皆殺しに

して物資を奪って逃走。どう見ても強盗殺人です。本当にありがとうございます。

で、アルビオン政府は商人の護衛のために、我が国の技術提供の元、開発に成功した

新型銃の「リー・エンフィールド No.4 MK ?」を装備した王軍兵士を商人の護衛に

回した。

そしてまた強盗が襲ってきたが今度は逆に返り討ちにされた。従来の先込め式の

マスケット銃とは違い、ボルトアクションライフルを装備した兵士には、剣や弓で

武装した傭兵は勝てなかった。まあ当然だよね。そして生き残りから事情を聞いて

それを上に報告すると、またもやジェームズ1世がキレた。前回と違って今度は国民も

キレた。後にゲルマニアに届いたウェールズ皇太子からの手紙には当時のことがこう書かれていた。

『父上が報告を聞くと、今まで聞いたことがないようなひどい罵り言葉を口に

したよ。それも大声で。それから暫くの間、ウィルからもらったストレス発散用の

サンドバックを殴り続けていたよ。しかも小さい声で「トリステイン死ね…」とか

「さて戦争でもするか…」とか不穏な言葉を呟きながらね。隣で見えていたけど

あれは怖かった、ホントに』

で、ジェームズ1世はまた手紙を書いてトリスティンに送りつけた。その内容を要約すると、

「せっかく食料売ってやってるのにこっちの商人殺して強奪？ もう売るのはやめっぴ。

ていうか…攻めていい？（戦争的な意味で）」

という感じ。すると電光石火の如くマザリーニがアルビオンへと向かい全力で謝罪。

そしてどうか食料を売ってくださいと懇願。それに対してジェームズ1世は、

「なんでそっちのトップが来ないんだよ、ふざけるな！」

そして、

「でもまあ、今までの”2倍”の値段でなら、売ってあげないこともないんだけど、どうする？」

と提案した。スパイによると、その時ジェームズ1世は悪魔のような笑みを浮かべていた

そうな。あれだな、普段怒らない人を怒らすと大変ってやつだね。

結局その提案を受け入れることに。トリスティンの王城で行われた会議では、

そのような提案は受け入れられない！ という意見が多く出たが、マザリーニ、

ラ・ヴァリエール公爵、グラモン伯爵らが賛成した。なのでアルビ

オンは  
お財布がホクホクに、トリステインはかつかつになった。実に素晴らしい。

そしてこの好機（？）を見逃さないわけがない俺達である。すぐさま俺とウィルは  
王城にすっ飛んでいき、親父とヴィンスと部屋に閉じこもった。

「そうか、アルビオンもなかなかやるな、あっはっはっは！」

俺達が説明を終えると親父は大爆笑。

「そこで陛下、ちょうどいいタイミングなので我々も動きましょう」

「というと…『新たなる日の出』作戦か？」

「ええ」

と、ウィルが話し始めた。ということは多分軍事的な話になるだろうから任せることに。

「現在トリステインの国庫はすっからかん、とまではいかないでしょうが、それでも  
かなり減っているものと思われませう。なのでそれをもっと減らすうじやないですか」

「しかし、どうやって？ まさか相手の王城に忍び込んでかつさう気ですか！？」

と驚くのはヴェンス。それは難しいんじゃないか？

「それは難しいでしょうね、いくら我が国の諜報員や兵士が優秀であつたとしても」

「ではどうするのだ？」

「何、簡単な話です」

するとウィルは悪巧みをする時の笑みを浮かべた。

「国庫の金を使わざるを得ない状況を作ればいいのです」

「使わざるを得ない状況？」

俺と親父は首をかしげた。ただヴェンスはなるほど、といった表情を浮かべた。

「それは例えば…戦争をする場合、ですか？」

「その通り。それにトリスティンの場合、王軍の規模はそれほど大きなものではないので

必然的に傭兵を雇ったりします。それらの金は国庫から支払われるでしょう」

「そしてもっと金がなくなる、か」

でもそこで俺に疑問が浮かんだ。

「それは確かにそうだけだよ、どうやって戦争させるんだ？ まさかいきなりこっちから

攻撃するわけじゃないだろ？」

「当たり前だ。それはさすがに對内的にも對外的にもよろしくない」

そこで一度言葉を切ったウィルは、次にとんでもないことを口にした。

「従って作戦のフェイズ2はトリステイン軍に我が国、ゲルマニアを攻撃させることが

重要となる。これならこちらは正当防衛という形で応戦が可能だ」

その言葉に俺と親父とヴィンスは呆気に取られた。

「いやいやいやいや、ウィルよ、それは無理だ！ どうすればトリステインのバカどもが

我が国に侵攻するというのだ？ アイツは既にグレートウォールの防衛力を少しは

知っているはずだ。それを承知の上で国軍を動かすというのは考えにくい！」

ショックから立ち直った親父が立ち上がって大声を出した。おれもその意見に賛成だ。

もし俺がトリステインのトップだったならそんな愚かなことはしないね。だって、我が国と

トリステインの兵力差を考えたら、ってトリステインは我が軍の総兵力を知らないか。

でもグレートウォールのことは知ってるはずだからねえ…

「まあ普通に考えたらどんなバカでもそんな事はしないでしょうね。なので…」

そしてウィルはこの作戦の最も重要な部分を話してくれた。

「…いいね」 俺

「…いい考えですね」 ヴィンス

「…いかすな」 親父

「でしよう？」 ウィル

親父はウィルの案を採用した。そしてこのフェイズ2の作戦名は何にしようか、と考えたが、ウィルに部屋から叩き出されてしまった。おい！ 俺のネーミングセンスは少しは直ったぞ！ 今回の作戦名だっけきちんと考えたんだから！ 名付けて！

「トリステイン弱すぎざまあWWW」作戦！ どうよ、完璧じゃね？



はあ…デックスの奴、また変な作戦名でも考えているんだろうな。  
まあいいや。

「で、作戦名ですが…スチール・トラップ鋼鉄の罠作戦でいかがでしょうか？」

鋼鉄とはもちろんグレイトウォールのことである。鋼鉄製じゃない  
けど。

「いいな。連中を鋼鉄の罠に誘い出して殲滅する…気に入った！  
早速実行に移して

くれ、長官。作戦に必要なあらゆる資源・人材を自由に使うこと  
を許可する」

「了解しました、陛下」

俺は部屋を出て外で待っていたデックスを捕まえて車に乗り込ん  
だ。まず行くところは

G C I A本部。また彼らに一仕事やってもらおうかね…

「もしもし、ウィルさん。なんかとても怖い笑みを浮かべてる  
んですけどー」

「え、何言ってるんだよ。そんなことないって。ふふふ…」

「いや、その顔は悪巧みをする時の顔だ、間違いない！」

なんかデックスに色々と言われたけど気にしない。最近平和だったからそろそろ派手に

なんかやりたいんだよね。てなわけでトリスティンの諸君、色々  
とひどい目にあって

くれたまえ、ぬっはっはっはっは！！

くそれからしばらくたったある日、トリステイン王都トリスタニア、  
王城の会議室にてく

「なんですって?」

久しぶりに部屋の外に出たアンリエッタは、高等法院長リツシュ  
モンの言葉を聞いて  
思わず声が裏返った。

「ですから、アルビオン経由でロマリアから来た情報によりますと、  
例の鉄の壁の

警備の詳細が判明したとことです。それによりますと、5ヶ月  
後に大規模な、

えー、壁の点検作業があるので、その時だけ1週間ほどに警備が  
解除される、と

書いてあります」

その言葉に他の参加者からも声上がる。

「ちょうどいいタイミングではないか！ このチャンスを利用してあの野蛮人共を

皆殺しにしてやれ！」

「そうだそうだ！ 我が国の優秀な兵士ならばきつと勝てるだろう！」

そんな中、ラ・ヴァリエール公爵とグラモン伯爵は慎重な意見を述べる。

「敵の兵力もわかっていないのにいきなり攻撃というのはどうかとそれに攻撃する

にはそれなりの理由がなければ……」

「グラモン伯爵の言う通りだ。宣戦布告なしに攻撃するのは貴族らしくない」

マザリーニも2人の意見に賛成した。だが、周りの貴族達は。

「何を言うか！ 交易を妨害されて我が国の食糧不足は深刻化しているではないか！」

「そうだ。それにアルビオンの一件もあつたからさらに値段が高くなっている。そろそろ

何らかの手を打たなければならない！」

「その解決策が戦争だというのはか？ 馬鹿馬鹿しい！」

ダンッ！！

このままでは埒があかないと判断したマザリーニはテーブルを叩いて静かにさせる。

「静かに！ 確かにこの状況を早急に解決する必要があります。しかしいきなり戦争と

いうのは良くないと私は考えています。そこで皆さん、ちょっと休憩を取りましょう。

30分後に頭をすっきりさせてから再開するということでしょうか、姫様？」

「マザリーニの言う通りです。一度休憩にしましょう」

別室に戻ったアンリエッタはマザリーニと相談する。

「マザリーニ、どうしたらいいのかしら？ 私は…戦争は嫌です」

「私もです、姫様。ですが…」

そう言いながら彼は外を見る。

「食糧不足で餓死する平民の数は増え続けています。ロマリアからの使者のおかげで

米を食べるようにしてはありますが、根本的な問題解決にはなりません」

ここ数年で餓死する人の数がどんどん増え続けているのは誰もが知っている事実で

ある。が、トリスティン人は知らなかった。餓死したと言われている人々は隣国で

生きており、トリスティンで発見された死体は偽物だということを…

(…他にもう解決策はないのでしょうか)

彼女は元々少ない脳みそをフルに使って考えたが、結局何も浮かばなかった。

30分後に会議が再開した。まず最初に口を開いたのはアンリエッタ。

「リツシュモン、ロマリアからの情報は確かだと断言できますか？」

「もちろんでございます、姫様。これをご覧ください。教皇猊下の印がしっかりとあります。」

それに、この情報を得るために多くの人員が犠牲になったとも書いてあり、故にこれは

正確な情報であると断言します」

そう言って彼は書類を渡した。確かにそこには教皇の印が押されていた。

「わかりました。次に皆さんにお聞きします。もしゲルマニアと戦争をすることになった

場合、我が国は勝てますか？」

それがアンリエッタが一番聞きたいことだった。何故なら、彼女はゲルマニアの軍事力を

全く知らないからだ。グレートウォールのことは聞いていたが、「ただの鉄の壁」としか考えていない。さすがアホ。

その質問に答えたのは陸軍元帥のグラモン伯爵。

「正直に申しまして、わかりません。国境封鎖前のゲルマニア軍はガリアほどの軍事力は

ありませんでしたが、それでも我が国より強力でした。それが今はどうなっているのか、

あの壁を超えた先にどんな敵が待ち構えているかはさっぱりわかりません。ですので、

私は確実に勝てる、とは思いません」

「私もグラモン元帥に同意見です。敵戦力が判明しないにもかかわらず兵力を送り込む

のは間違っています。我が国の兵力はそれほど多くありませんので、下手に突っ込むと

全滅しかねません」

ラ・ヴァリエール公爵もそう述べる。するとリッシュモンがらしくないことを言った。

「では民が飢えて死んでいくのをただ見ているのか！？ 冗談もほどほどにして

いただきたい！ そう言うなら何らかの解決策を出してもらおう

「！」

その言葉に他の参加者も賛成する。そして参加者の視線はアンリエッタに向けられた。

「…皆さんの考えは充分にわかりました。では私の意見を言わせてもらいます」

ゆっくりと息をしてから話し始めた。

「正直、私は戦争に反対です。戦闘によって多くの戦死者が出てしまうかもしれないと

思うと怖いですが、このままではこの国が滅んでしまうかもしれません。それを

黙って見ているようなことは絶対にしたくありません。なので、今回は非常にやむを

得ないことですが、ゲルマニアへの攻撃を許可します」

「……姫様、それは！」「」

マザリーニ、グラモン元帥、ラ・ヴァリエール候爵が大声を上げるが、アンリエッタはそれを遮る声で言った。

「では、皆さんはこの状況をどうやって解決しようというのですか

！？ 何か他にいい

考えがあるなら言ってください！」

そう言われると何も言えない。



「…グラモン元帥、作戦の立案をよろしくお願いします」

「…わかりました、姫様」

こうしてゲルマニア侵攻作戦の立案、及び王軍、諸侯軍の編成が開始された。戦争への  
カウントダウンはゆっくりとだが始まった…

「なんてことになっているんだろうな、今頃」

俺は国防総省のデスクで仕事をしながら呟いた。G C I Aの優秀なスパイ達のおかげで

トリステイン側の情報は全部筒抜けである。しかも偵察衛星から全てを見ることができ

るので、どこに敵軍が配備されているか、どれほどの兵力か、ということもすぐにわかる。

ハイテク万歳だね。

あの日、王城からG C I Aに行って何を頼んだのかというと、

「ちょっと書類偽造してトリステインに送りつけたいんだけど」

ということである。お安い御用だと、G C I Aの科学技術本部の技術者達が返事をして

その日のうちに出来上がった。内容はグレートウォール関連の嘘情報である。

そりゃそつだ、国境警備の要であるグレートウォールの機能を完全停止することなんて

ありえないからね。で、出来上がった書類をまずアルビオンのロマ



続  
く  
…

第18話：作戦名はどうしようか？（後書き）

なんか無理やり感があるんだよね〜でもまあいいか。お腹が減っているトリストイン人はまともな考えができないということ。

ドイツ製のKarr98kや旧ソ連製のモシン・ナガンM1891  
/30の

方が性能とかいいと思うのですが、アルビオンだしこれでいいかという適当な理由でリー・エンフィールドにしました。

ご意見・ご感想等がありましたらお気軽にどうぞ。

次回は早速戦闘かな？ まだ決めてません。  
では

第19話：きちんと準備、それから実行（前書き）

何事も準備が大事です。料理するにも、戦争するにも。

「8月の予定が全然ないよ！」

「やったね作者！ これで二トマっしぐらだよー！」

…よくないです

## 第19話：きちんと準備、それから実行

「ああやあ諸君、ウイリアムだ。フェイズ2を開始してから4ヶ月が経った。時が過ぎる

のは早いものだね。スチール・トラップ鋼鉄の罠作戦の開始まで1ヶ月を切ったので、

今俺は国防総省の

地下司令部でクレイドル陸軍参謀総長からトリスティン関連の報告を受けている。」

「長官、トリスティン空海軍が本格的に動き出しました。ここ数年は風石不足で

週に3回ほどしか訓練を行っておりませんでした。ここ数週間は連続して

訓練をしているようです」

「そうか、連中何気に本気だな。勝てる確立は限り無くゼロに近いのに。それで、

第3軍団の司令官にはきちんと作戦を説明したか？」

「既に済んでいますので問題はありません」

「そうか、ありがとう」

現地の司令官には今のうちに本当のことを知らせておく。当日になつてから第3軍団

全部隊に作戦が言い渡されるようにしておいた。ちなみに第3軍団は2個機甲師団（第4

騎兵師団、第3機甲師団）と2個機械化歩兵師団（第9、第12歩兵師団）、1個装甲騎兵

連隊、及び軍団砲兵隊によって構成されており、ゲルマニア陸軍最有力の打撃兵力である。

え、オーバーキルだって？ 気にしない気にしない。

この他にも作戦当日には空軍からE-3C セントリーAWAC Sが1機、A-10C サンダー

ボルト？が45機、F-15C イーグルが24機やってくる。海軍はトリステイン沖から第1

空母戦闘群が艦載機と巡航ミサイルによる攻撃を行う。主な目標は有名所の貴族の

屋敷だったり、王都トリスタニア近辺だったりする。もちろん平民に死者が出ない

ような場所しか狙わない。非戦闘員を殺してはいけないからね。

そして隣国のガリア軍も準備を整えつつある。陸軍兵力を中心に構成したガリア軍の

派遣兵力は3万ほど。トリステイン軍の殆どはこっちに目が向いているからガリア軍の

攻撃を食い止めるすべはないだろう。

「ああそうだ、当日は私と弟も現地に行くからな」

遠足に行くぞみたいなノリで言ったら、クレイドルはびっくりしていた。

「ええっ！？ お2人ともですか！？ 危険です、おやめください

！」

「何、これも作戦のうちだ。いいか、国防長官と財務長官が”現地部隊の視察”をして



いるところをいきなり攻撃してきたトリステイン。これを知った他の人々はどう思うだろうか？」

「…なるほど、そういうことですか。そこまで考えているとは、恐れ入りました」

しかも俺達は現国王の息子でもある。そんな重要人物がいる場所を攻撃した国はとて嫌われるだろうね、うん。

すると携帯電話が鳴った。

「はい、こち」

「おいウィル！ 俺だ！」

相手はジョゼフであった。

「ジョゼフか、どうした？」

「頼む、助けてくれ！」

あのジョゼフが助けてくれ、だと？ 尋常ではないな。

「落ち着け！ いったいそこで何が起きているんだ？」

「私の使い魔が…」

「使い魔？ シェフィールドがどうかしたのか？」

ジョゼフLOVEのシェフィールド。以前暴れた時には「グラン・トロワ」の一部が  
木っ端微塵に吹き飛んだとか。今度は何をやらかしたんだろうか。

「毎晩私に迫ってきて大変なんだ！」

「……………は？」

俺は電話を落としそうになってしまった。

「なんでも『私とジョゼフ様の愛の結晶が欲しい！』とか言って来るんだ！ なんとか  
してくれええええ！！」

「……………」

シェフィールドさん、ほんとジョゼフのことが好きなんですわ、わかります（棒）

「…前にも言ったように全てを受け入れるしかないと思うよ？」

「そ、そんな！ なんとかならな」ジヨゼフ様！ こちらにいらしたのですね！」げえっ！

シエフィールド！」

「あらまあ、ずいぶん面白いことになってるじゃないの」

「これのどこが面白いん」さあ私と今すぐベッドに行きましょう！  
！』ま、待ってくれ！

ウィル！ 助けっブツツ！ プー、プー、プー」

「……………グッドラック」

俺は携帯をポケットに仕舞った。ジヨゼフよ、幸運を祈るぜ！

「で、他に何か報告はあるか？」

隣で放置されていたクレイドルに声をかける。

「いえ、今のところは「大将！ 長官！」なんだ？」

話の途中でいきなりクレイドルの補佐官がやってきた。

「報告します！ 約44,000のトリステイン軍が国境方面への移動を開始しました！」

「なんだと？ 見せてくれ」

「はい、こちらがその映像です」

補佐官が指示すると、目の前のスクリーンに偵察衛星と無人偵察機からのリアルタイムの映像が映し出された。それなりに大きな道をぞろぞろと移動しているのがよく見える。さらに大小それぞれ12隻のフネも上空を移動している。

「ほう、よくここまで集めたものですな。雇った傭兵の数もかなりの数になるでしょう」

昔トリステイン軍と戦火を交えたことがあるクレイドルは、敵軍には多くの傭兵が雇われていることを知っていた。

「フネをご覧ください、かなり老朽化が進んでおります。G C I Aからの情報と一致します」

補佐官がレーザーポインターでフネを指しながら説明をする。確かにところどころ船体にヒビが入っていたり、大砲の数が左右非対称だったりするな。

「また全体の指揮をグラモン元帥が行っており、各諸侯軍はその指揮下にいるそうです。」

この短期間でそれなりに統制が取れているのはグラモン元帥が優秀であるからだと思えます」

「なるほど。ラ・ヴァリエール公爵は参戦しないのか？」

「はい。どうやら派兵命令を拒否し、軍役免除金を支払った模様で

す

「そうか、残念だ。烈風のカリンを見たかったんだけどな」

ラ・ヴァリエール公爵夫人であるカリヌ・デジレ・ド・マイヤールは、トリステイン

魔法衛士隊の1つ、マンティコア隊の隊長として数多くの武勲を立てた人物であり、魔法の腕もかなりのものであるそうだ。

「失礼します。これを」

「…ありがとうございます。長官、追加情報です」

部屋に入ってきた職員が補佐官に追加の書類を手渡した。

「その烈風のカリンことカリヌ・デジレ・ド・マイヤールですが、グラモン元帥の

護衛という形で参戦することです。たった今ラ・ヴァリエール公爵の屋敷から

部下50人を率いて出発したのを、無人偵察機が確認しました」

「ほう、来るのか！ いいねえ、1度戦ってみたいと思ってたんだ、魔法で！」

「あの、長官？ それは冗談ですよね？」

クレイドルが冷や汗をかきながら聞いてきた。

「もちろん 本気だ！（キリッ）」

「……………」

クレイドルとその補佐官は黙りこんでしまった。

「どした？」

「いえ、その失礼ですが…あの烈風のカリンを魔法で倒すことできるのしょうか？」

「あれも俺達と同じ人間だ。不死身の化物じゃあるまいし。それに勝算はある。あいつは

風系統のスクウェアだが、俺と弟は全系統のスクウェアだ。魔力も質もあいつより

上だからな。絶対に勝てる、とは言わないが負けはしないだろう」

「おお！ さすが天才兄弟！ そこにシビれるあこがれるウ！！」

「

「なんでそれ知ってるの！？」

「「いえ、どこからか電波が飛んできました」」

「そ、そうか…」

そんなこんなで俺は作戦の準備を整えていった。

そして作戦当日を迎える。

「7月15日深夜、トリステイン・ゲルマニア国境、グレートウォール」

普段ならグレートウォールの主兵装であるオート・メララ76mmスーパーピッド

砲がトリステイン方面に狙いを付けているが、今は真横を向いている。"定期点検中"

なので仕方ないね。俺とデックスは首から暗視双眼鏡をぶら下げ、迷彩服の上から

防弾チョッキを着て、ヘルメットを被った状態でグレートウォール

の上から第3軍団を  
見ていた。

「おお、素晴らしい光景だな」

「全くだ！」

主力戦車であるメルカバ Mk4がずらつと並んでいたり、M1  
126ストライカーICV  
(Mk19 40mm自動擲弾発射器搭載型)に兵士達が乗り込ん  
でいたり、M3A3ブラッドレー  
騎兵戦闘車がエンジンを温めていたり、AH-64D アパッチ・  
ロングボウが発進準備を  
整えていたりするのがよく見えた。また、ここからは見えないが、  
PZH2000自走  
榴弾砲12輜が離れた場所の丘の上に陣取っているし、さらにML  
RS1個大隊がMG M-140  
ATACMS Block Iを装填してかなり後方で扇状に展開  
している。A-10などの空軍機も  
こちらに接近中で、海軍とガリア軍もすでに配置についている。全  
てが作戦通りに  
進んでいて俺達は安心した。

「それに比べて…なんということでしょう(棒)」

「ほんとそうだよねえ…」

俺とデックスは180度体を反転させてトリスティン側をしてみる。  
そこには馬に乗った  
騎士やら、土メイジが作り出したと思われるゴーレムやらが接近し



つつあった。

あ、先頭にいる連中は全員平民みたいだな。しかもマッチロック式（火縄式）のマスケット銃持ってる。ちょうどいいや。あとおんぼろのフネ12隻もゆっくりと接近中だ。

きつとトリステインの連中は

「俺達の軍隊マジカッチョイイ!!」

と思っっているんだろうけど、ゲルマニア・ガリア基準で見るとそれらは全て化石レベルの

代物であり、隣にいた第3軍団司令官ヴァルター・ホイス中将は、

「時代遅れの旧式兵器のバーゲンセールですな」

と笑いながら言った。

「全くその通りだな、中将。だが油断は禁物だぞ？ あれでも人を殺せるのだからな」

「承知しております、長官」

今トリステイン軍は第1防衛エリア、すなわちグレートウォールから10km圏内を

進軍中であり、まもなくグレートウォールから5km圏内の第2防衛エリアに入る。

敵がグレートウォールから500m圏内に入ったら作戦開始となる。近すぎじゃね？

なんて言わないでね。だってこの戦いで最も重要なのは

「敵に先に攻撃させる」

ことなのだから。そうしないとこちらは反撃できない。敵を殺傷する武力を自衛のため以外に行使してはならないという決まりごとがあるのだ。

（まあ今まで数えきれないほどたくさんの非合法作戦ブラック・オペレーションの許可を出した人間が言うことではないけどね）

しかし、俺はそのジレンマの解決策を見つけていた。味方を無用の危険にさらすような交戦規則がある場合、抜け目なく工夫を凝らさないといけない。

有り体に言うなら、騙すのだ。

「報告します！ 敵軍、第2防衛エリアに侵入しました！」

「わかった。長官、ご命令を」

「全部隊配置につけ。グレートウォール警備部隊には落ち着いて行動させるように」

「了解！」

ホイス中將は敬礼をしてからM1130ストライカーCV指揮車に戻っていった。俺も準備をしないとイケない。腰につけていた無線機を持ち上げてスイッチを入れる。

「作戦区域内の全部隊に告げる。こちらはフォース1だ」

この通信は空軍と海軍にもつながっている。あとフォース1は俺のコールサインである。ちなみにデックスはフォース2である。

「いよいよだ、始まるぞ諸君。哨戒任務や訓練、準備、待機でさぞや諸君は力を持って

余していたことだろう。だがそれももう終わりだ。諸君の持つ技量、技術、そして

資質。全て最高だ。私はそれを知っている、そしてそれを誇りに思っている」

一度言葉を切ってから続けた。

「さあ仕事だ、始めよう紳士淑女諸君。敵を懲らしめ、仲間を救い、自らの正義に恥じぬ

戦いを。最高の兵隊達で

最高の戦いを見せてやろう!!」

『うおおおおおおおおお!!!!!!!!!!』

次の瞬間、兵士達からとてつもなく大きな歓声が上がった。それ

はもう凄いのなんの。

敵に聞かれると非常にまずいので、グレートウォールの向こうまで音が届かないような

シールドをデックスが咄嗟に張ってくれた。ナイスタイミングだぜ、弟よ！

「デックス、わかっているな？」

「ああ、もちろんだとも」

↳トリスティン軍司令部↳

ここには烈風のカリン率いる50人の護衛があり、周囲を警戒している。彼女自ら訓練

した部下は皆優秀なので、軍を指揮するグラモン元帥も安心していた。

「それで、連中に何か動きはあったか？」

「いえ、まったくありません。既に壁から5リーグの領域に侵入しましたが、特に

攻撃を受けることもなく前進しております」

「そうか。ならばこのまま続行だ。土メイジ達による壁の破壊後、すみやかに突入しろ」

「はっ！」

命令された兵士はテントから出ていった。グラモンは誰にも聞かれないように小さくため息をついた。

(この戦いは間違っている。敵の戦力もわからないのに戦いを挑むなんて…)

だがアンリエッタの命令なので仕方ない。彼は重い腰を上げてテントから出ていった。

くグレートウォール

「まもなく敵が作戦ポイントに到達します！」

「わかった。グレートウォール警備部隊、スタンバイ」

「スタンバイ、了解！」

そして敵がグレートウォールから500mまで近づいた。

「作戦開始！ グレートウォール警備部隊、照明弾発射！！」

その瞬間、グレートウォールの警備部隊は照明弾ロケットを次々と発射した。

ただし、普通は空に向かって垂直に撃つところを、トリステイン軍に向けて水平に発射した。

赤、黄、オレンジ、白。その様々な色の火の玉は、周囲を明るくするだけの何の害も

ないものだが、トリステイン軍の歩兵には、得体の知れない火の玉がまっしぐらに自分

達の方に飛んで来るように見える。実に恐ろしいはずだ。それにトリステイン軍の先頭を

行く平民部隊は、初めての实战を経験する者が多く、中でも1番若い男は震える手を抑えながら常にマスケット銃を壁の方に向けて、引き金に指をかけていた。まあ要するに超緊張していた。そこに飛んでくる火の玉の雨。彼は反射的に引き金を引いてしまった。

ターンッ！……………

戦場に響く1発の銃声、それは長々と響いた。他のトリステイン兵にも、ゲルマニア兵にも、そして後方にいたグラモンにも聞こえた。普通、マスケット銃の射程距離は100m前後なので、グレートウォールまで届くことは絶対にありえない。ただ、それは水平射撃をした場合の話であり、曲射をすれば放物線軌道によって飛距離が伸びる。従ってグレートウォールまで弾丸が届く可能性もあるかもしれない。まあ、そんなことが起きる可能性は数億分の1くらいだろう。

しかし、その数億分の1の可能性が現実となった。グレートウォールにいたデックスが突然悲鳴をあげながら後ろに倒れたのだ。

「ぐわっ!!」

「デックス!?!」

「長官!!」

いつの間にか俺達の専属護衛になっていたデルコ・レイガン大尉が慌ててデックスに駆け寄ると、防弾チョッキでは防ぐことができない左腕から血が出ていた。

「くそっ! 撃たれた! めちゃくちゃ痛え! あんのクソ野郎どもめ!」

「騒ぐなデックス! しっかりしろ! ステイク 衛生兵を呼べ!」

俺はそう言ってから無線機に向かって叫んだ。

「全部隊へ、こちらフォース1! フォース2が撃たれた! 繰り返す、フォース2が

撃たれた! 我々は攻撃されている! 全部隊、命令があるまで全力で反撃せよ!

自由射撃を許可する! エンゲージ 交戦! エンゲージ 交戦! エンゲージ 交戦!」



続  
く  
…

第19話：きちんと準備、それから実行（後書き）

ウィリアムの演説（？）は、とある漫画のとある米陸軍少佐のお言葉をお借りしました。最初はデブの少佐の演説にしようかと思いましたがやめにしました。

ゲルマニア軍の兵器がわからなかったらウィキペディアで調べてください。すぐに出てきますよ。

次回は…まさにつ！ 圧倒的っ……！ みたいな  
では

第20話：状況を開始すr…えっ、もう終わったの？（前書き）

ついに始まってしまった戦い。

果たしてトリスティン軍はどうなるのかっ!？

頭のいい皆さんのことです、結果はもうお分かりですよねwww  
つまらないかもしれませんがどうぞ。

## 第20話：状況を開始する…えっ、もう終わったの？

「グレートウォール」

「全部隊へ、こちらフォーエス1！ フォーエス2が撃たれた！ 繰り返す、フォーエス2が

撃たれた！ 我々は攻撃されている！ 全部隊、命令があるまで全力で反撃せよ！

自由射撃を許可する！ 交戦！ 交戦！ 交戦！ 交戦！」

国防長官の命令を受けた各部隊は素早く作戦を開始した。まず動いたのはグレート

ウォールから20km後方に展開していた第4機甲師団第1旅団戦闘団野戦砲兵大隊

所属のPZH2000自走榴弾砲12輜だった。各車両の砲手がほぼ同時に発射スイッチを

押し、大音響と共に155mm榴弾が砲口から飛び出た。GPSを利用した正確な照準

システムにより、12発の榴弾はトリステイン軍のと真ん中に次々と着弾する。

爆炎と共に兵士達の体の一部が宙を舞った。その後も3分間に20発の射撃速度で

砲撃は続けられた。

砲撃と同時に自走砲部隊よりも後ろから36発のミサイルが夜空に躍り出た。MLRSの

1個大隊18輜からMGM-140 ATACMSが一斉に発射されたのだ。ATACMSは発射後に

操舵翼を作動させて指定された目標に向け飛行を続けた。

数十秒後に目標上空に到達したミサイル群は、それぞれ搭載している950個のM74子爆弾を広範囲にばらまいた。突然数千もの小さな灰色の円筒が空から雨よろしく降ってきたので、トリステイン軍はびっくりして進軍を止めた。本来ならその場から逃げるべきだが、たいがいはそうせず、中には興味を覚えて何の動きもないように見える小さな円筒を拾う者さえいた。

数千ものマイクロチップ信管のカウントダウンが、全て同時にゼ口に達したのはそんな時だった。

グレートウォールの監視システムは、敵軍の中心部で長く連なつた稲妻がひらめき、青みがかつた白光が迸るのを確認した。そしてくすんだ茶色の煙が敵軍から四方に吹き出し、しばらく立ち上ってからまた沈んで、敵軍全体を包み込んでいった。それを見た俺は、ATACMSの攻撃はうまくいったのだと確信した。

グレートウォール前にいたトリステインマスケット部隊は、既にグレートウォール警備部隊によって全員射殺された。するとグレートウォール下部に設置されている

大型ゲートが次々と開き、戦車やらストライカーやらがぞろぞろと出てきた。また  
第9歩兵師団戦闘航空旅団航空大隊所属のA H - 64 D アパッチ・ロングボウも飛び立った。”定期点検中”のオート・メラーラ76mmスーパー・ラピッド砲も、砲塔を素早く旋回しトリステイン軍への射撃用意を終えた。今まで見たことのない兵器を目の当たりにしたトリステイン軍部隊は、回れ右して逃げるか呆然と立ち尽くすしか出来なかった。それも生きていければの話だが。俺が前を見ると空軍機が攻撃を開始したのが見えた。

空からやってきたのはA - 10 C サンダーボルト?だった。そのうちの12機が敵軍の左右と後方にMark 77爆弾をばんばん投下して退路を絶った。Mark 77爆弾は燃料などの混合物110ガロン(415リットル)を内蔵している750ポンド(340kg)焼夷爆弾であり、アメリカ軍でナパーム弾の代替品として開発された。普通の火メイジが出すファイヤー・ボールなんかとは比べものにならないくらいの火力にさらされた兵士達は、あっという間に炭化するか、火達磨になって地面をたうちまわるはめになった。

逃げようにも焼夷弾は炎の壁を作り出しており、それを消さないことには

どうしようもなかった。そんなトリステイン軍に今度は残りのA-10が襲いかかった。

あるパイロットはAGM-65 マーベリック空対地ミサイルを撃ち込み、またある

パイロットはGAU-8 アヴェンジャー30mmガトリング砲をぶっぱなした。地上で

まだ生きていた人間はミサイルで吹き飛ばされ、30mm弾を食らってミンチになった。

その上ではF-15C イーグルが空を舞い、敵の竜騎士部隊に向けてAIM-9X サイド

ワインダー短距離空対空ミサイルをお見舞いしていた。いくら竜とはいえ、9,4kgの

破砕性弾頭を食らえばひとたまりもない。先頭を行くトリステイン軍のフネは、

追加の竜騎士を出撃させようとしていた。だが、マツハ4で飛んできたAIM-120

AMRAAM中距離空対空ミサイルが何発も命中して木っ端微塵になった。他のフネも

同じように空中で汚い花火となっていた。

地上ではメルカバ Mk 4の120mm滑空砲が火を吹き、敵のゴーレムを粉々にした。

ストライカーからは40mm擲弾が一定の間隔で撃ち出され、M3A3ブラッドレー騎兵

戦闘車は25mm機関砲で目標を正確に打ち倒していった。アパッ

手攻撃へりは

戦場の空を蜂のように飛び回りながら、ハイドラ70ロケット弾と30mmチエーン

ガンの弾幕を張った。グレートウォールからも76mm砲弾が1分間に120発という

あり得ない射撃速度で撃ちこまれる。スーパー・ラピッド（超速射）砲の名に

ふさわしい攻撃である。そんな大砲が1つではなく幾つもあるのだから、敵から

して見ればたまったものではない。わかりやすく言うと、

「もうやめて！とつくにトリステイン軍（笑）のライフはゼロよ！」

と言われてもおおかしくない状況である。

そんな訳でトリステイン軍は反撃をする間もなく次々と撃破されていった。

戦車や装甲車の後を歩兵が付いて行って、いるとは思わないが一応生存者の確認を

行った。そしてトリステイン軍司令部へと極めて早いスピードで進軍していった。

遠く離れた場所でも戦闘が開始されたいた。ガリア軍侵攻部隊は俺の声を聞いて

すぐさま侵攻を開始した。とは言っても敵の姿は全くなかったのであつという間に



ラグドリアン湖を制圧した。そしてド・モンモランシ家に攻撃を開始。少ない護衛を排除して屋敷内に突入し、寝ぼけているド・モンモランシ伯爵とその家族を捕まえた。周辺防御を固めて後は待機することに。ガリア軍の姿を見た平民が驚いて逃げていったが、特に気にしなかった。トリステインに動かせる軍はもうどこにもないし、仮に軍が来ても容赦なく叩き潰せるからである。

そしてもう1箇所、トリステイン沖に展開していた第1空母戦闘群からも攻撃が開始された。緊密な縦隊をなしていた4隻の巡洋艦と7隻の駆逐艦から警報が鳴り響いた。そして垂直発射機のハッチがさつと開き、ブースターが点火される。第1波の巡航ミサイルが夜空へ向けて斉射され、おのおのが金色の炎のカーテンを引いて飛んでいった。更に射撃は続き、ミサイルが発射される時のバリバリという轟音が空を震わせた。

5分ほど続いた射撃はようやく終わり、切り離されたブースターがバラバラと海に落ちると、再び海に暗闇が戻った。既にミサイル群は水平線の彼方へと飛んでいき見えなくなった。

次に艦載機が出撃準備を始めた。F-35Cが電磁式カタパルトから甲高い音と共に発射される。それらの航空機は巡航ミサイルの後を追うように飛んでいった。

巡航ミサイルの一群は、空飛ぶフネの港町として有名なラ・ロシエールに狙いを付けていた。古代の世界樹（ユグドラシル）の枯れ木をくり抜いた立体型の棧橋にはこの時間、誰もいなかった。そこにやってきたミサイルは見事棧橋に直撃し、500kgの高性能爆薬の爆発によって棧橋は消滅した。他のミサイルも係留されていたフネに命中して大爆発を起こした。世界樹は炎上し、街は大混乱に陥った。

他にもミサイルはシュルピス近郊の主要街道に大穴を開け、チェルノボークの監獄を木っ端微塵にし、王立魔法研究所（アカデミー）を地図上から消し飛ばし、トリスタニアの貴族の屋敷が集まっている区画をそっくりそのまま消滅させた。

艦載機はアルビオンからやってくる輸送船を撃墜するために、胴体内兵器倉に4発のAIM-120 AMRAAM中距離空対空ミサイルを、左右3カ所ずつある翼下パイロンには、GAU-22/A 25mm機関砲ポッド2基、更に2基の

A M R A A M、そしてA I M - 9 X  
サイドワインダー短距離空対空ミサイル2基を装備していた。

やがてレーダーに輸送船の反応があったがまだ撃たない。そのフネがアルビオンのフネではなくトリステインのフネだという確実な証拠が必要だった。幸い、アルビオンのロサイスト、トリステインのラ・ロシエールにG C I Aのエージェントが潜入しており、現地のフネの写真を撮っていたので、識別が楽になった。

そしてレーダー上のフネがトリステインのフネだとわかると、早速ミサイルを放った。フネは空中で木っ端微塵となり、残骸が地面に向かって燃えながら落ちていった。

その後も輸送船刈りは続いて、合計で15隻の輸送船を撃墜して帰艦した。

トリスティン軍司令部

「な…何事だ!！」

グラモン元帥は、最初の砲撃の着弾音を聞いて地面から5cmほど飛び上がった。

深夜にも関わらず自軍のど真ん中に大きな爆炎が上がっているのがよく見えた。

そしてそこから中で爆発音が響き兵士達が倒れていく。

「何だ!?! 何をされている!?!」

グラモンは大声で尋ねたが、それに答えることができる物は1人もいなかった。

わかっていることは、目の前の自軍が次々と撃破されているという事実だけである。

呆然としていたグラモンだったが、いきなり護衛の「烈風のカリン」が彼の首を

つかんでその場から逃げた。一体何をするのか、と聞こうとした瞬間、先ほどまで

自分がいた場所から爆風が飛んできた。恐る恐る振り返ると、そこには炎の壁がそそり立っていた。

「助かったよ、カリン殿！」

「いえ、護衛として当然のことをしたまです。それにしても……」

そう言っただけでカリンはゲルマニア軍の猛攻撃を観察する。なんとか持ってきたフネも見たことのない鉄の鳥に撃破され、その残骸が地面で燃えている。メイジ部隊も魔法を放つ前に雨のように飛んでくる銃弾になぎ倒され、数少ないマスケット銃で武装した部隊はどこにも見えない。本来負傷兵を治療するはずの水メイジ達は血溜まりの中で永遠の眠りにについている。

「我々はゲルマニアを甘く見過ぎていたようですね」

「……返す言葉もない。だからやめたほうが良いと言っただが」

トリスティン軍は既に戦列が崩壊しており、兵士達は生き残ることを最優先に行動していた。指揮もへったくれもない状況である。そしてグラモンは重大な決断をする。

「……全軍に撤退命令を出せ。すみやかに戦場から離脱するように、と」

「りよ、了解！」

この状況下で最善の判断であった。この命令が各部隊まで届くのは疑問だが。

ただ、撤退するにはまずこの炎の壁を何とかしないといけない。するとカリンが前に出て、

「ストーム！」

と言って竜巻を作り出した。これで火を消そうとした。

が。

「なっ！？」

「そんな！？」

カリンとグラモンは呆然とした。それなりのパワーを持ったストームを受けても尚、

炎は消えなかったのだから。何故か？



まさか精霊が手を貸しているなど全く知らないカリンは、なんとか火を消そうと

躍起になっていたがどうやっても消えず、やがてそこにゲルマニア軍がやってきて

完全に包囲された。

「トリステイン軍に告ぐ！ 無駄な抵抗はやめて武器と杖を捨てる！」

「フォース1、応答願います！ 敵司令官および烈風のカリンと思しき人物を包囲

しました！ 今部下が降伏勧告を行っております！」

カリン達を包囲している戦車部隊の司令官がウィリアムに無線でそう告げると、

「いかん！ そいつには手を出すな！ 包囲したまま後退！ 歩兵は装甲車の車内に退避！

すぐにそちらに向かう！」

という返事があった。慌てて部下に命令を伝えようとしたが、次の瞬間周囲から

兵士達の悲鳴が聞こえた。何が起きているかを確認する前に、自



分の乗っている  
戦車が強烈な風でひっくり返った。その車内で彼は頭を強く打って  
気絶してしまった。

くグレートウォールく

「どうした？ 応答せよ！ クソッ！」

「どうした、ウィル？」

衛生兵に手当てをしてもらっているデックスが俺に聞いてきた。

「烈風のカリンを包囲したとの報告があったんだが、直後に連絡が  
途絶えた。多分

カリンが抵抗しているんだろう。だから俺が行ってくる」

「そうか頑張れー、いてっ！」

「おいおい、しっかりしろよ」

「無茶言っなし。さすがにこの痛さは想定外だよ」

俺はデックスと話しながら風の精霊「ストーム」にテレパシーで礼を言う。

（サンキュー、ストーム。これで完璧だ）

（なに、簡単な仕事だったよ。ただの弾丸を最大射程の外まで飛ばすことなど）

俺とデックスは、トリスティンのマスケット銃から放たれた弾丸を、グレートウォールのデックスまで飛ばして欲しい、とストームをお願いした。本当なら絶対に届かない弾丸は、風の精霊の力によってあり得ない軌道を描いてデックスまで飛んでいった、というわけだ。

ちなみにマスケット銃の弾丸はデックスの左腕をかすって後ろの壁にぶつかってひしゃげていた。

「それじゃあ、ちょっとカリン潰してくる」

俺は笑いながらそう言って現地まで”跳んだ”。それを見ていた衛生兵とデルコは、

「…長官が消えた」

「…あれも魔法なのかな？」

とつぶやいていた。

現地に着くと、そこではカリンが絶賛大暴れ中だった。近くのメルカバを

見るとひっくり返っていたり、砲身がちょんぎれたりしていた。：

おかしいな、

一応これにも小型だけど「精霊の加護」防衛装置（第10話参照）を積んでおいた

はずなんだが：カリンさん、マジパネエっす。

「状況は？」

近くにいた戦車部隊の副司令官に声をかける。彼の上司は今だに気絶中である。

「はっ。降伏勧告を行ったところ、それを拒否し攻撃してきました。戦車3輦が主砲を

切られ、4輦が風でひっくり返ってしまい戦闘不能に。それと4名の重軽傷者が

出ました」

そう言いながら2人で負傷者が治療を受けている場所を見してみる。

「うあああああっっ！ 目が見えない、もう殺してくれっ！！」

「何言つてやがる！ 必ず助けるから落ち着け！ おい、もつと鎮痛剤を！」

「腕が…あのクソ女めっ！！！」

「誰かB型の輸血パックを！ 早くしないと死んじまうんだ！」

「水メイジをこっちにもよこしてくれ！」

…カリンめ、なかなかやってくれるじゃないか。俺は負傷者の所まで走って行き

能力を使って怪我を治すことに。

「衛生兵、こいつを飲ませろ！」

「こ、これは…？」

「俺が作った『改良型水の秘薬』だ。半端ない回復力を持っている。例え腕や足が

吹っ飛んでいようが、目がなかるうが、問答無用で全回復できるぞ！」

この「改良型水の秘薬」は、実はFF11に出てくる回復アイテム、ラストエリクサーである。こんなこともあるのかと！ ということで大量に創造魔法で作っておいた。

そしてその効果は？

「あ、あれ？ 痛くない、って！ 目が見えるぞ！」

「腕が、俺の腕が生えてきた！ うっ、気持ちわる…おええええええ！！」

「傷跡が消えちまった！？ すごいなこれ！」

傷ついた兵士達はあつという間に全回復した。ただ、気持ち悪いくらいの速度で怪我が治ったのでみんな引いていた。考えてみて欲しい。仮に肘から先の腕がちぎれたとしよう。その状態でラストエリクサーを飲む。すると、まず骨がぐんぐん伸びていき、手の形になる。そしてその骨に筋肉やら神経やら血管やら皮膚やらが肉付けされていく。それを生で見るのは精神衛生上良いとは言えない。

「これで問題の1つは解決したな。それで？」

「はっ、現在包囲網を広げながら銃撃を続けています。カリンと敵司令官以外は全員射殺しました。肝心のカリンには全く効果がないようです…本当に人間なのですか、

あれは？」

「…残念ながら」

銃弾も防げるんかい。カリンチートすぎワロタWWW

「後は俺がやるから、直ちに射撃を中止して全力で後方に退避しろ。いいか、必ず1km

以上逃げろよ？ じゃないと君達も巻き込んでしまつかもしれんからな」

「わかりました。幸運を祈ります、長官！」

サツと敬礼してから副司令官は無線で命令を下した。そして俺は烈風のカリンの元へと歩いていった。

S i d e 烈風のカリン

「あれは…子供？」

突然攻撃が止んで敵が後退したと思ったら今度は子供がやってきた。ゲルマニアは子供まで戦場に出しているのですか？ なんとということでしょう…さすが野蛮人の国ですね。その子供は私の近くまで歩いてきてから口を開いた。

「初めまして、烈風のカリン殿。私はウィリアム・タイベリアス・フォン・ゲルマニア。」

ゲルマニア軍の最高司令官です」

「なっ!？」

「こんな子供が…笑顔を浮かべているこの子供が軍の最高司令官! ? 見たところルイズと同じくらいじゃない!」

ん？ ちょっと待った。あの名前に聞き覚えがある…もやし…いや、もしや!

「例の天才兄弟…」

「そう呼ばれていますね。ちなみに私は兄です。さて、本題に入りましょう。どうか

降伏してくれませんか？ これ以上お互いに無駄な犠牲は出した

くないでしょう?」

「だが断る!」

ここで引く訳にはいかない。貴族である以上降伏など屈辱の極みだ!

「そうですか…実に残念です」

そう言うと、彼は杖を取り出して構えた。

「本当に残念です…あなたを殺さなくてはならなくなってしまった」

その瞬間、彼は20人に増えた。偏在か! しかも無詠唱で!?

「…参る!」

そして彼は一気に魔法を放ってきた…

S i d e o u t



手始めに俺は偏在を出して20人になった。そしてそれぞれ4人グループ5つに別れて

違う系統の魔法で攻撃することにした。4人は火、4人は水、4人は虚無、といった感じに。

本物の俺がいるのは虚無系統グループである。まず4系統の色々な魔法をぶつけて

みようと思ったので、虚無の4人は下がって残りの16人が前に出た。

「カッター・トルネード!!」

(改良藤田スケール EFスケール で表すとEF5並の威力)

「アイシクル・フレッシュト!!」

(第15話参照)

「グラウンド・スパーク!!」

(土のスクウェアスベル。錬金したアダマンチウム製の槍を地面から幾つも出現させて

敵を刺す魔法)

「グラビーム!!」

(言わずもがなだけどモン○ンのアレ。多分火系統じゃね?)

「えっ」

と、カリンは驚きながらも俺の魔法に対処した。まず横に飛んでグラビームを回避しつつ、大量の細かい氷の矢を風魔法で吹き飛ばす。そして、地面から無数に飛び出てきた槍を破壊しようとした。しかし、忘れてはいけないのだがこの槍はアダマンチウム製。世界最硬の金属だ。なので、杖に魔力を絡みつかせて刃にする魔法、ブライドでも傷1つつけることはできない。いくらあのカリンでも。

「何っ！ 壊れない!？」

驚く間もなく4つのカッター・トルネードが四方からカリンを飲み込んだ。これで終わって欲しいと思い偏在を解除したが、突然俺のカッター・トルネードが消えてしまい、その中心からカリンが歩いてきた。そう簡単には終わらせはくれないようだ。

「なかなか…強力な魔法ですね。やられるかと思いましたよ」

そう言いながらカリンは杖を構える。が、さすがの彼女も無傷では済まなかった

ようだ。服がかなりボロボロになっていて、左腕には血が滲んでいる。その後ろで

グラモンが小便漏らしている。

(こっちは殺る気満々だったんだけどな…)

そんなことを考えていたらカリンが反撃を開始する。手始めに彼女は4つの偏在を出した。俺はそれらに狙いをつけようとしたが。

「速い!？」

さっきより動きが格段に上がっているのを見て俺は驚いた。だがその理由はごく簡単なものだった。

(なるほど…ライトネスか)

ライトネス(軽量)とは、風系統魔法の1つで身体を軽くする呪文である。これを

利用してカリンは動く速度を上げながら攻撃してきた。

「ウインド・ブレイク!」

「エア・ハンマー!」

「エア・カッター!」

「うおお!?!」

俺は見えない攻撃を次々と回避した。どうやって見えない攻撃を避けてるって？

ストームが教えてくれるのさ。攻撃が来る方向をテレパシーでね。

( ! ! ! ! A ! B ! )

「AとBってなんだよ!?! 遊 王かよ!?!」

「なんで当たらない!?!」

カリンがいらついている。

「当たってたまるか!?! うおおおおっ!?!」

俺は虚無魔法「加速」を使って偏在カリン4人をブレイドで切り捨てた。そして

カリンに突進しようとしたが。

「カッター・トルネード!?!?!」

「えー!?!」

俺に向かってくるのは、高さ300mほどの高さがあるカッター・トルネードだった。

何かアクションを起こす前に俺はそれに飲み込まれた。

S i d e 烈風のカリン

精神力を使い切って放ったカッター・トルネード…これならあの  
子供も防げない、

と私は思った。久しぶりに全力で魔法を使ったので、膝について息  
を整えた。

さて、あとはグラモン元帥を連れてこの包囲網を突破しなければな  
らない。

だが立ち上がった瞬間に急に体全体が燃えるように熱くなった。

これはいったい!?

体をチエックしようとしたが…そこで私は動きを止めてしまった。

なぜなら、両腕と

両足の皮膚が凍っていたからだ。怪我をしていた左腕についていた

血もカチンコチンに

なっている。しかも足元の草も、土も真っ白に! でも体が凍って  
いるにもかかわらず

熱くてたまらない。これはいったいどういづこと!?

と、とにかく動かなければ。体を動かし続けないと…

そこで私の意識はなくなった…

S i d e  
o u t

「今度こそやったな」

俺は空中からゆっくりと地面に降りてきた。カリンがカッター・トルネードを放った

時、俺は瞬間移動で上空に退避した。そして自分を不可視にしてから、昔見た映画を

思い出し、こんな感じだったかな〜と考えながら魔法を放った。

俺が使った魔法は、空気の温度を一瞬で変える魔法だった。それを使って俺は、

カリンから半径30cm圏内の空気温度をマイナス150度に変えた。人間の五感、つまり

視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚は、あまりに寒いと麻痺する。実際、彼女は超低温の

空気にさらされていたにも関わらず、とても熱いと感じていたのはそれが理由である。

この優れた魔法の名前は…そうだな、「サーマル・チェンジ」にしよう。そのままとか

言うなよ！ 絶対にそのままとか言うなよ！

コチコチに凍りついたカリンの死体は、戦場を通り抜ける風に煽られて後ろへと

よるめいた。呆然としていたグラモンの目の前で地面にたたきつけられた死体は、

ガラスのように砕け散ってしまった。時間が経てば解凍されるだろう 胴体と頭部が

バラバラになった死体に。

「さて。残りはおんただけだ、グラモン元帥」

「ひいっ！」

グラモンは完全に怯えていた。自分の杖は逃げる時に落としてしまい、戦うことができない。いや、仮に杖を持っていてもこの子供には勝てない、そう考えていた。

「ああ、誤解しないでください、グラモン元帥。あなたはまだ生きなければならぬ」

「……………見逃すと、言うのか？」

俺は懐から手紙を取り出してグラモンに放り投げた。

「これをあのアホ姫に渡していただけますか？ 一応どんな馬鹿にでも理解できるように」

簡単な言葉で書いたのですが……」

「……………他に何かしなくてもいいのか？」

「そうですね…これからお金をいっぱい使うことになると思うので、その辺の準備でも

したほうがよいかと。ではまた会いましょう、グラモン元帥」

グラモンが返事をする前に、俺は彼をトリスタニアの王城まで転送魔法で飛ばした。



「…終わったかな？」

すると無線から俺を呼ぶ声が聞こえた。

「こちらガリア軍司令官です。全任務目標を完遂。重要人物の捕縛に成功しました。」

負傷者は極少数で、戦死者はゼロです」

「第1空母戦闘群司令官マーシャル中将からフォース1へ。出撃した全艦載機は

無事に任務を完了し、着艦しました。巡航ミサイル群も全て目標に着弾しました。」

作戦は成功です」

それを聞いて俺は笑いたくなるのを必死で抑えながら返事をした。

「了解した。全部隊へ、こちらフォース1。グレートウォール付近に展開していた敵軍と

『烈風の力リン』<sup>イムライン</sup>を撃破した。全ての任務目標を完遂。鋼鉄の畏精<sup>スチール・トラップ</sup>密進行表終了！

よくやった！！」

その瞬間、第3軍団、第1空母戦闘群、ガリア軍の全ての兵士から歓声が上がった。

戦場に叫び声や口笛が広がり、男も女もみな拳を打ちあわせたり、抱き合ったりしている。

「さあみんな！ 家に帰るぞー！！」

『サー、イエツサー！！』

帰る前に、俺は烈風のカリンの亡骸を集めて、砲撃でできた穴に  
放り込み土を

かぶせた。仕上げにその辺で死んでいたトリスティン軍の兵士が持  
っていた剣を

拾ってきて、それを十字架替わりにした。

「ま、これでいいだろ。安らかになんまんだぶー」

そしてデックスのいるグレートウォールに戻った。

スチール・トラップ  
鋼鉄の罫作戦最終報告書

1、被害

ゲルマニア軍

- ・メルカバ Mk 4 7輛
- ・負傷者、戦死者ゼロ

ガリア軍

- ・負傷者13名、戦死者ゼロ

2、戦果

グレートウォールに攻撃をしたトリステイン軍（兵力44,000）のうち、43,999を撃破。フネ12隻を撃沈。ガリア軍によりラグドリアン湖周辺及びド・モンモランシ家を制圧。モンモランシ伯爵とその家族を捕獲。トリステイン沖から発射された巡航ミサイルにより、ラ・ロシエールの棧橋等国内各所の重要施設を破壊。また、航行中のトリステイン輸送船15隻を艦載機が撃墜。

作成者：ウィリアム・タイベリアス・フォン・ゲルマニア国防長官

~~~~~  
~~~~~

続く  
…

第20話：状況を開始すr…えっ、もう終わったの？（後書き）

長文だぜ。

火の精霊マッチのセリフはもちろんあの方です。

「サーマル・チェンジ」は、映画「デイ・アフター・トゥモロー」を見て考えました。

カリンの話し方とか変だったらすみません。適当です。

次回は会談…まで行けるかな？  
では

第21話：各国の反応　ただしロマリア、ためーはダメだ（前書き）

今回はいろいろな人の視点の話があったり、時系列が狂っていたりするのですが、読みにくいかもしれません。ご了承ください。作者の力不足です。

あと『』は肉声ではなく、無線機からの声だったり、テレビの声だったりします。

8月…終わっちゃいましたね。結局内定はもらえず…はあ。

あと気がついたら650,000アクセスを超えていました！  
総合評価も

そろそろ2,000ptになりそうです。皆さんどうもありがとうございます！  
ごぞいます…！

## 第21話：各国の反応　ただしロマリア、ためーはダメだ

「深夜、トリステイン王国、トリスタニア、王城にて」

私、ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルドはとてつもなく不機嫌だった。

ついさつき仕事が終わりに、ベッドに入ってようやく眠れると思っていた。しかし、

あと少しで眠れる、と思っていた時にいきなり外から爆発音が聞こえてきた。

何事かと思いい外を見ると、貴族の屋敷が集中している区画から火の手が上がって

いた。どこのどいつだ、あんな事しかした奴は。

そのため、王都全体に厳重警戒体勢が敷かれた。私の部隊、グリフォン隊も

例外ではなく、今こうして王城の警備に当たっている。マザリーニ枢機卿に報告を

終えて、私は王城の見回りを行うことにした。特に異常もなく、正門の方へ行こう

とした。すると、正門の方から何か落ちる音と悲鳴が聞こえた。敵かと思いい杖を

構え走っていくと、そこには正門の警備をしていた部下2名と、ゲルマニア侵攻

部隊の指揮官であるグラモン元帥がいた。何故こんなところに元帥が？　元帥は

部下に体を支えられてこちらに歩いてきた。

「グラモン元帥閣下！　どうされました!？」

「君は…ワルド君だったか。姫様はどこだ!? 急いで姫様に会わなければならぬ!」

「緊急なんだ!」

ただならぬ雰囲気を感じた私はすぐさま部下に、マザリーニ枢機卿と姫様に

このことを伝えるように命じた。

「アホの部屋」

「ぜ、全滅!?!」

「。。。ポカーン」

「…その通りでございます」

上からマザリーニ、アホ、グラモンの順番である。

「我々はゲルマニア軍を甘く見ていました。連中の軍事力はとても強力です。何も

「反撃できないままやられてしまいました…」

「だがこちらには烈風のカリン殿がいたのでは!?!」

アンリエッタがそう尋ねると、グラモンは顔を青くしながら話した。





されているマスケット銃から発射された弾丸により負傷したので、私は現地部隊に  
応戦を指示、そちらの部隊を殲滅致しました。これは正当防衛によるものであり、  
グラモン元帥に聞いていただければ、全て真実であることが証明できます。それに  
こちらの監視カメラに一部始終が全て写っておりますので。

これを受けて、ゲルマニア王国はトリステイン王国に対し、謝罪と賠償を要求  
致します。もしこれが受け入れられない場合は、ゲルマニア王国及びガリア王国は  
トリステイン王国に宣戦布告を致します。

さらにこの攻撃は同盟国であるガリア王国も知っており、安全保障同盟に基づき  
ガリア軍はトリステイン王国への侵攻を開始しました。既にラグドリアン湖  
周辺とド・モンモランシ家を制圧下に置いています。あなた方の今後の行動に  
よっては、彼らは残念なことになるかもしれません。

もし謝罪と賠償に応じるのであれば、合図として24時間以内に王城の上空で  
誰でもいいので白い旗を振り回してください。そして2週間後にクルデンホルフ  
大公国で行われる会議に参加してください。既に大公国には話を付けてあります。  
なお、開始時刻は正午ですので遅れないようにしてください。この件では中立国で

ある、アルビオン王国のジェームズ1世陛下が議長を務めます。また議場を提供してくださったクルデンホルフ大公国の大公殿下も参加致します。ロマリアは…お察しください。

懸命な判断を期待致します。

~~~~~

「なんとということだ…」

マザリーニは手紙を読み終えてため息をついた。

「グラモン元帥、こちらから最初に攻撃したというのは確かなのか？」

「…はい。突然空が明るくなり、その直後に銃声が。あの銃声は確かに我が軍で

使っているマスケット銃のものです。そしてあとは我々は一方的にやられました」

「そうか…姫様、我々にはこれを拒否することはできません。もう

連中に立ち向かう

「軍隊がないのですから」

「…負けを認めろ、と言うのですか？」

マザリーニがそう言うと、アンリエッタは悔しそうな表情を浮かべた。

「それ以外ありません。もう我が国には彼らに対抗できる軍隊がありません…」

グラモンもがっかりしながら発言する。

次の日の会議では紛糾したものの、結果的にはゲルマニアの要求を呑む以外に選択肢がなかった。その日の昼、ワルドがグリフォンに乗って「俺なんでこんな事しているんだろう？」と思いながら王城の真上で白旗をパタパタと降っているのを、PFLTのリーダー、ベイツが自宅の窓から見ながら笑っていた。

「はっはっは！ やっぱり要求を呑んだか…早速知らせなければ」

彼はベッドの下の床板を外して、中からゲルマニア軍で使われている超高性能

ノートパソコン「トカゲ」を取り出して起動した。軌道上の軍用通信衛星とリンクしてから、ベイツは短いメールを作成し国防長官の極秘アドレスに送信した。内容は

「ホトトギスからフォース1へ。白旗を確認。敵は要求を呑んだ模様」

だった。その5分後に返信があった。

「フォース1よりホトトギスへ。ご苦労。これで第1段階完了だ」

く　ラ・ヴァリエール公爵の馬車く

王都での会議が終わった後、ヴァリエール公爵は馬車に乗って屋敷に帰った。

その表情はとても暗い。それもそのはず、先の戦闘で妻が戦死し、おまけに長女の

エレオノールも大怪我を負ったのだから。彼女は王立魔法研究所の
研究員として

働いていたが、その研究所が爆発・炎上・倒壊してしまった。調査の結果は未だはつきりとしていないが、おそらく実験中の事故ではないかとみられている。

本当はゲルマニア海軍の巡洋艦から発射されたステルス巡航ミサイルが直撃したからなのだが、そのことを知っているのはトリスティンではPFLTの幹部だけだった。

奇跡的にエレオノールは助かった。事故発生時、研究所の外の倉庫で1人荷物の整理をしていたからだ。しかし爆風で倉庫も崩れてしまい、彼女は右腕上腕部の複雑骨折、左肩の脱臼、右足首の開放骨折、重度の脳震盪…とかなりの重症を負った。

それでも、まだ生きている。それだけでも感謝しなければ。ヴァリエール公爵は馬車の中でブリミルに祈りを捧げつつ、妻を殺したゲルマニアの国防長官とやらを憎んだ。

（だがグラモンの話によると相手は子供だったそうじゃないか…あのカーリヌが子供に負けるなんて…）

くアルビオン王国、ロンディニウム、ハヴィランド宮殿く

国王の部屋にはジェームズ1世とその息子、ウェールズがいた。

「父上、2週間後の会議に私も同行させていただけないでしょうか？」

「うっむ…」

ジェームズは悩んでいた。勉強のために同行させるのもありだが、まだ年齢的に早く

ないか、と。だがよく考えたらゲルマニアの国防のトップだってウェールズとそう

年は離れていないし…いいか！ と考えた。

「そうだな、では一緒に行こう。会議の3日前にゲルマニアから迎えが来るから

それまでに準備をしておくんだぞ」

「わかりました父上！　ありがとうございます！」

ウェールズは嬉しそうに部屋に戻り準備を始めた。

（そう言えばウィルと会うのも久しぶりだな…楽しみだ！）

くクルデンホルフ大公国、大公の屋敷く

その日、屋敷から大きな歓声が上がった。

「キタ　。　+　・　く　）　（　ノ　・　+　。　　ツ　！」

と超喜んでいるのはもちろん大公である。それもそのはず、数年前にゲルマニアから提案された計画が、あともう少しで実現するのだから。

「お、お父様！？ どうしたんですか？」

その娘、ベアトリス・イヴオンヌ・フォン・クルデンホルフは、部屋の中で

飛び回りながら喜んでいる父親の姿を見てびっくりした。

「おお、ベアトリスか！ もう少しでとても嬉しいことが起こるぞ！ イヤッホー！！」

さてこうしてはいられないな。早速会議とお祝いの準備だ！」

そう言い残して大公は部屋から飛び出していった。

「…まったくわけがわからないわよ」

部屋には何のこともかさっぱりわからないベアトリスが残された。

「今日の深夜ごろだとか。ウィリアム殿下とデクスター殿下が現地を視察していた

そうですが…あ、ほらまた始まりましたよ！」

テレビを見ると、キャスターが映っていた。

『それでは再び当時の様子をVTRで確認してみましよう。この映像はゲルマニア軍

広報部が撮影したものです』

そこに映っていたのは軍隊を視察する2人の姿だった。

「あ、ウィルだ！」

「「デックス！」」

そして2人はグレートウォールの上に行く。

『いやあ、ここからの眺めは絶景だな！』

『そうだな。でもちょっと暗くないか？』

『それもそうだな…あ、ちょうどいいところに暗視双眼鏡が。これで…って

見えねえし』

『すみません長官、それは壊れておりまして…』

『そうか…じゃあ照明弾ぶっぱなしてくれ。ぱーっと明るくしようぜ』

『了解しました。照明弾、撃てっ！！』

パシューッ…ポツ！ 照明弾を撃った音

『おお、ずいぶん明るくなった』

『そうだな。これで見やすく「ターンッ！」っ！？ 銃声か！ 誰が撃った！？』

『我が軍ではありません！ トリステイン方向からです！』

『おい、あいつらトリステイン軍じゃないか！？』

『マジで？ ぐわっ！！』

『デックス！？』

『長官！！』

『くそっ！ 撃たれた！ めちゃくちゃ痛え！ あんの「ピー」野郎どもめ！』

『騒ぐなデックス！ しっかりしろ！ 衛生兵を呼べ！ 全部隊へ、
こちらフォース1！』

フォース2が撃たれた！ 繰り返す、フォース2が撃たれた！

我々は攻撃されている！

全部隊、命令があるまで全力で反撃せよ！ 自由射撃を許可する

エンゲージ
！ 交戦！

エンゲージ
交戦！ 交戦！

「デックス…血が出てたよ…」

シャルロットはデックスが撃たれるのを見て泣きそうである。

「大丈夫だよ、お姉様…」

そういうジョゼットも半泣き状態である。テレビからはキャスターの声が続く。

『これが今日未明に起きた事件の映像です。このあと我が軍は反撃をし、およそ4万の

トリステイン軍を撃破しました。またこの事件を受けて、同盟国であるガリアも

トリステインへの越境作戦を開始しました。現時点でラグドリアン湖周辺を

制圧したとのことです』

「やっぱりゲルマニア軍は凄いな。そんな軍隊を創ったウィルも凄
いけどね！」

イザベラは自分の愛する人が傷つかずに済んでほっとしていた。

『あつ、たつた今追加情報が入りました！ その戦闘の最中に、国防長官のウィリアム』

殿下が、トリスティンでは有名なあの「烈風のカリン」と戦い、見事勝利を収めたとのことです！』

それを聞いた食堂の人々は歓声をあげた。

「さすが長官！ かつこ良すぎるぜ！」

「俺も頑張つて訓練して長官のようになりたいな！」

「あんな長官のお嫁に行きたいわ！」

「あたしも！」

それを見ていたイザベラは。

「むむむ…ライバルが増えそうだ」

と警戒。

「早くデックス帰って来ないかな」

「お見舞いに行こうよー！」

シャルロットとジョゼットはそんなイザベラを放置してデックスのことを考えていた。

学院に行ったイザベラのところにも、ニュースを見てびっくりしたテファとマチルダが
すっ飛んできたのはまた別の話。

〈国内を移動中の2人〉

ゲルマニアで国王専用機として採用されたVC-25は大空をゆつたりと飛んでいた。

今回は国王ではなくその家族（ウィリアムとデックス）が乗っているため、コール

サインは「エアフォースワン」ではなく「エグゼクティブワン・フォックスロット」

になっている。ちなみに、フォックスロット（Fox Trot）はF（family）の頭文字を示すフォネティックコードである。

その機内でウィリアムとデックスは、ファーストクラス並に快適な座席に座りながら
ガリアのシャルル1世とジョゼフ外務大臣とのテレビ電話をしていた。

「デクスター長官、怪我は大丈夫なのか？」

シャルルが心配そうな表情で聞いてきた。というのも、ニュースでも流されたあの
映像はガリアでも放送されており、それをシャルルは見ていたのである。

「なに、ちよつとしたかすり傷ですよ」

包帯に巻かれた腕を軽く上げながらデックスは返す。

「それにしてもそつちは圧倒的だったそうじゃないか。まあこつちもあつという間に
終わつたんだがな！ はっはっはっは！」

ジョゼフが豪快に笑いながらガリア軍の戦闘の様子を説明する。

「まず国境超えてすぐラグドリアン湖を占領したんだ。それでモン
モランシの屋敷に

突撃したらちよいとばかり抵抗されてさ、こつちにもちよつと負傷者が出たんだ。

だから待機させていた戦車で攻撃したよ。そしたら5分と立たな
いうちに屋敷は

穴だらけになって、あいつら全員降参してきたよ」

「そっか、それはよかったな」

ガリア陸軍の主力戦車は、ウィリアムとデックスのチート脳に記憶されたいた

世界各国の戦車の中から選ばれた。ただ、「どれにしようかな」と2人が考えて

いたのは、仕事ではなく朝起きてまだ寝ぼけている時だった。なので2人は

「これでいーや」と、適当に決めてしまった。そのことをガリア組は知らなかった。

世の中には知らなくてもいいことがあるのだから…

で、2人が適当に選んだガリア軍の主力戦車は…アメリカと西ドイツが共同で

開発に着手したけど、考えとかが合わなくて開発中止に追い込まれたK P z 70

(アメリカではM B T - 70と呼ばれていた)というすごいマイナーな戦車に

なった。主砲は120mm滑空砲で、副武装は遠隔操作式の20mm対空機関砲と主砲

同軸の7.62mm機関銃である。オリジナルとは違い、20mm機関砲には高度な

火器管制装置をつけてあるのできちんと使えるし、対地用としても使用する

ことができ、「至近距離の目標を狙い辛い」という問題も解決した。

これをガリアは500輜以上配備させており、今回の作戦にも1

5輻が参加して
いたそう。シャルルさん、それはオーバーキルだよ。

今「お前が言うな！」って思った人は腕立て伏せ200回だぞ

「それで、会議ではどれくらいトリステインから搾り取る気なんだ？」

ジョゼフがそう聞いてくると、ウィリアムは例の笑み（悪巧みをする時の）を
浮かべた。

「最初は作戦通りにやろうと思いますけど…相手の対応によっては
もしかすると

『倍プッシュだ…！』をするかもしれませぬ」

「えっ、作戦予定の倍取る気なのかよ！？」

デックスもそれは聞いていなかったらしく驚いていた。

「いいじゃねえか。今回の作戦の目的は『トリステインの国力低下』
なんだから。

今すぐ潰すってわけじゃない」

「私としては今すぐ叩き潰したいんだがな」

「そう言っなってジョゼフ、それじゃつまらないだろ？」

「ふっ、確かにその通りだな！」

「じゃあ会議で会いましょう。2人とも来るのですよね？」

「ええ、そうです。貴国はジョゼフ外相が来るんですけどっけ？」

「そうだ。現地で会つのを楽しみにしているぞ！」

「こっちもだよ。それじゃあね〜」

電話を終えたウィリアムとデックスは少し仮眠を取ることにした。
寝る前に

デックスはシャルロットとジョゼットのことを考えていた。ウィリアムもまた、

イザベラのことを考えていた。

そして運命の日を迎える。

続く
⋮

第21話：各国の反応　ただしロマリア、ためーはダメだ（後書き）

K P Z　70ですけど、M G S P Wで登場しましたよね。見た目がかっこ

よかったし、なかなか強かったので今回採用しました。

ロマリアを省いた理由は地理的な問題で来れないからです。当初はゲルマニアの駆逐艦にエスコートさせながら領空を通過させようと考えていました。

次回こそ会議を！　トリスティンから搾れるだけ搾り取ります。では

第22話：ゲ・ガ「ようトリちゃん、ちょっとジャンプしてみ？」トリ「えっ」

ゲ「ゲルマニア

ガ「ガリア

トリ「トリステインです。まあすぐにわかりますよね。」

さて、どれだけ絞りますかね。

どうぞ。

第22話：ゲ・ガ「ようトリちゃん、ちょっとジャンプしてみ？」トリ「えっ」

「戦闘から2週間後、クルデンホルフ大公国に向かう馬車」

のろのろと進んでいるのはトリステインの馬車の列だった。護衛を担っている

のはトリステイン魔法衛士隊の1つ「グリフォン隊」である。隊長のワルドが例の

アホが乗っている馬車を護衛しつつ、自慢の口髭をいじっていた。

馬車にはアホリエッタとマザリーニが乗っており、今日行われる会議について

話し合っていた…のだが。

「ですから姫様、今回の件は全て我が軍の不手際が原因ですので、そこははっきりと

謝罪しなければなりません」

「そんな〜負けを認めるなんて嫌ですわ」

「（いまさら何言ってるんだこのアホは）ですが彼らに対抗できる軍隊など我が国には

ありません。先日もおっしゃいましたように、我が国軍のほぼ全てが先の戦闘で

壊滅しました。残っているのは魔法衛士隊とヴァリエール公爵領の諸侯軍のみです」

「ならそれらをひとまとめにすれば」

「できません。ヴァリエール公爵は妻を亡くしたばかりか長女も大怪我をしており、

とても軍を率いることなどできません。現に彼から当分の間は屋敷にこもる

という書状を頂いております」

「えーと、うーんと…（空っぽの頭で必死に考え中）」

そんなアホを見ていてマザリーニは「もう引退してもいいよね？」と考えていた。

その頃会議場　クルデンホルフで1番大きな建物であるエシユテルト宮殿　の隣の

部屋では、ゲルマニアの代表であるウィルとテックス、ガリアの代表である

ジヨゼフ、そしてクルデンホルフ大公の4人が今日の会議がどんなことになるかを

話し合っていた。当然盗み聞きされないように、サイレントを重ねがけして、

部屋の扉や窓にもロックを掛けてある。

ちなみにアルビオンの2人はここにいない。なぜならまだ「新たな日の出」

作戦のことを知らないからだ。アルビオンがこの計画を知ることが当然無いだろう。

「…とまあこんな感じになるかと。連中の態度によっては数字が変化するでしょう」

ウィルが説明を終えると、大公はつきつきした表情を浮かべた。

「ウィリアム長官、やっとこの時が来ましたね！」

「そうですけど大公、ばれないようにしっかりとした表情でいてくださいよ？」

「ああ、そうだな。気をつけるよ、デクスター長官」

デックスからの指摘を受けて真面目な顔に戻った大公。

「何より重要なのは、これは始まりにすぎないということだな！」

ジョゼフがそう言うと他の3人も頷く。

「長い時間をかけた作戦ですから失敗するわけには行きません。これからも皆さんの

ご協力をよろしくお願い致します」

「もちろんだ。おつ、そろそろトリステインの連中が来る頃だな。行くこうか」

「そうだね、じゃあ搾り取るとしますか！」

↳エシユテルト宮殿、大会議場↳

ウィル達4人が会議場に入ると、アルビオンのジェームズ1世とウェールズ皇太子は既に着席していた。

「おはようございます、陛下」

「おお、おはようウィリアム殿下、デクスター殿下！」

ジェームズはニコニコしながら握手してきた。

「この前貴国に提供してもらった機関銃！ 素晴らしい性能だった！ あれは凄いな、連射できるんだから！」

「確かにそうですけど、持ち運びが大変ですよ父上」
ウェールズに欠点を言われるとジェームズは唸った。

「ううむ、確かに1挺使うのに6〜8人も必要なのはちょっとな…だがそれを

カバーするだけの火力があるのも事実だ」

俺達がアルビオンに提供したのはヴィッカーズ重機関銃。 30
3ブリティッシュ弾を

使用するイギリス製の水冷式重機関銃である。使っている弾丸はアルビオン軍正式

小銃「リー・エンフィールド No.4 MK ?」と同じである。
ちなみに小銃用の

303ブリティッシュ弾はMark 7弾で、機関銃はMark
8弾である。

「ご満足いただけて何よりです、陛下。それよりも、本日の会議進行の方、大変かと

思います。よろしくお願いします」

「まあ我が国とクルデンホルフ大公国のみが今回の件では中立国だからな。きちんと

やるぞ」

「それを聞いてほっとしました」

そして会議の開始時刻、正午となった。

しかし。

「……………なあ、デックス」

「……………なんだ、ウイル？」

「……………俺の目がおかしくなったのかな？　そうでなきゃこの状況を説明できない」

「……………奇遇だなウイル。俺の目もイカれているようだ」

すると隣のジョゼフも。

「……………ウイル、デックス。これはいったいどういうことなのだ？」

「見当もつかんよ、ジョゼフ。これは想定の外だ」

ウイルは肩をすくめた。

「俺も知りたいね。トリスティンのクソ野郎どもはいったいどこに……………いるのかを」

そう。信じられないことにトリスティンの代表が時間になっても来なかったのだ。

おかしいな、手紙でちゃんと説明したのに。

「さて、それじゃあ戦争の準備でも」

「待てよウイル。デルコ、トリスティンの代表団が今どこにいるのか調べてくれ」

「はっ！」

彼は無線で二言三言話した。すぐに返事が帰ってきたようだが、それを聞いたデルコは困惑の表情を浮かべた。

「長官、その、なんと言いますか…トリスティンの馬車はすでに到着しているとの

ことです。宮殿の正面入口で警備している護衛がアンリエッタ姫とマザリーニ

枢機卿の姿を確認しております」

「…じゃあなんでここに来ないんだ？ 迷子にでもなったのかな？」

「それはないと思う、長官」

冗談交じりでデックスがそう言ったが、クルデンホルフ大公がそれを否定する。

「すぐに使用人がここまで案内することになっておる。だから間違っても迷子になど

ならんよ」

「じゃあ、あいつらはいったいどこに？」

「…さあ？ とにかくこちらで探させよう」

大公は近くにいた兵士に声をかけてトリスティン代表団を探すように命じた。

5分もしないうちに兵士が戻ってきたが、彼が連れてきたのはマザリーニだけだった。ではアンリエッタはどこに？

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

兵士の言葉を聞いて会議室の人々は驚き、そして呆れた。

「はい。食堂で見つけましたのですが、既に昼食中でありまして…」するとマザリーニが深々と頭を下げた。

「大変申し訳ありません！！ 到着後はすぐに会議だと繰り返して言っておいたのですが、着いた途端にお腹が空いたと我儘を…必死に説得したのです」

駄目でした。誠に申し訳ない…」

もはや文句を言う気力も失せたので軽食を取ることにした。用意されたのはおいしいサンドイッチと紅茶。それらを胃の中に放り込みながら談笑すること40分。やっと例のアホが姿を現した。

「どうもこんにちわ。それじゃあはじめましょうか？」

（ちょっと待てやゴリアー！！）

と言いたいのを必死で我慢ながら、この会議の議長であるジエー

ムズ1世に
頷いて見せる。それを見たジェームズは会議を始めた。

「では、これよりゲルマニア・トリステイン国境付近における戦闘
事件の

会議を行う。まず攻撃を受けたゲルマニア王国、並びにその同盟
国である

ガリア王国に発言を許可する」

「ありがとうございます、陛下」

そう言ってからウィルは立ち上がり、会議の参加者をひとしきり
眺めてから
話し始めた。

「トリステインのアンリエッタ姫、そしてマザリーニ枢機卿、初め
まして。私は

ゲルマニア王国国防長官兼國務長官のウィリアム・タイベリアス・
フォン・

ゲルマニアと申します。お見知りおきを。では本題に入ります。
2週間前の

7月15日午前0時12分に、我が弟のデクスターと共に国境警
備隊の視察を行って

いたところ、いきなりトリステイン側から発砲を受けデクスター
の左腕に銃弾が
命中しました」

ウィルはビー玉サイズの弾丸をポケットから出して皆に見せる。

「この弾丸です。調べたところ、トリステインで採掘されている鉱石の成分と一致しました。それはともかく、副王であるデクスターがトリステイン軍に撃たれたので、私は国境警備隊に反撃命令を出しました。そしてあなた方の軍隊は1人を除いて壊滅しました。これは明確な越境攻撃であり、我が国が取った行動は正当防衛であります。よって我が国はトリステインに対し謝罪と賠償を求めます。これが認められない場合、我がゲルマニア王国はトリステイン王国に宣戦布告します」

するとジョゼフも立ち上がり説明した。

「我がガリア王国は同盟国ゲルマニアがトリステインに攻撃されていると報告を

受けたので、安全保障同盟に基づきトリステインに侵攻を開始した。そして

現時点でラグドリアン湖周辺を制圧し、モンモランシ伯爵一家の身柄を預かって

いる。ゲルマニアの要求を呑むのなら、我が軍は即時撤退し人質も解放しよう。

だが、もし要求を受け入れられなかった場合は、我が国もトリステインに攻め

込むことになる。私からは以上だ」

それを聞いた議長のジエームズ1世はびっくり。まさかここまで

事態が悪化して
いるとは思っていなかったようだ。その息子ウェールズは話についていけない。
クルデンホルフ大公はポーカーフェイスを貫き、マザリーニは真つ青。なんとか
アホに謝罪させようとした。しかし当の本人は。

「……………(ぼ〜)」

「……………っ!?!」

なんと頬を染めながらウェールズを見つめていてこっちの話なんか全然
聞いちゃいなかった。見つめられているウェールズは寒気がしたかのように
ブルツと震えていた。

(おい、聞けよ、そのアホ…)

と言いたくなかったが、その前にデックスがキレたようだ。

「どうやらアンリエッタ姫は我々よりも男の方に興味がありそうですな。ならば
とつと帰って戦争の準備でもしましょう。ウィル、ジョゼフ、
帰ろっぜ」

「そうだな、こんなところにいるのは時間の無駄だ」

「同感だ。さうて、ガリア軍の全兵力をトリステインに送り込むとするか…」

そう言いながら3人が帰ろうとすると、マザリーニによって現実に戻された

アホが慌てて尋ねてきた。

「ま、待ってください！ どこへ行くこうというのですか!？」

「どっつて…」

その言葉にウィルは苦笑しながら答える。

「もちろん戦争の準備のために帰国するんですよ。さっきからあなたが全然話を聞いて

くれないので、このままではいつまでたっても謝罪と賠償はしてくれないと判断

しました。故に我々はトリステインへの侵攻作戦の準備をしよう」と…」

ウィルがそこまで言った時、マザリーニがスライディング土下座をしながら

一生懸命謝罪してきた。すげえな、生まれて始めてみたよ。しょうがないな〜

という事で再び会議が始まった。

「で、我が国が求める賠償ですが…」

指を一本ずつ立てながらウィルが話した。

「まず1つ、トリステイン王家はゲルマニア及びガリア政府にそれぞれ賠償金と

して150万エキューずつ支払うこと。支払期限は1ヶ月以内とします。2つ、その

賠償金を集める際に、お金が足りないからといって平民から巻き上げたり重税を

課さないこと。3つ、ラグドリアン湖にいとされるとされる水の精霊と話をさせること。

4つ、クルデンホルフから完全に手を引いて独立国として認めること。以上です。

これらの条件を今すぐ承諾していただきたい」

お金に関する1つ目と2つ目の条件は問題ない。3つ目の条件は、水の精霊を

合法的にゲルマニアに引越させるためのものである。トリステイン王家の

目の前で水の精霊「アクエリア」に

「お前ら嫌い。だから引越す。じゃね〜」

と言わせるためだ。精霊の言葉に王家は逆らえないだろう。すでにアクエリアと

話をつけてあるし、ラグドリアン湖よりも綺麗で広い湖も確保してある。そして

4つ目の条件、クルデンホルフの完全独立。これが認められればフェイス2は

完了する。さあ、どうするのかな？

「…ちょっと待ってください」

アンリエッタはそう言つとマザリーニと小声で話し始めた。

S i d e マザリーニ

「ど、どうしましょうマザリーニ？　このまま彼らの言つことを聞くしかないのですか？」

私は姫様の質問を聞きつつ、ゲルマニアとガリアが提示した条件の意味を考えていた。

1つ目は理解できる。ゲルマニアの副王を怪我させたのだから当然だ。2つ目の条件は、

要するに我々王家と貴族が支払えということだろう。関係のない平民から金を巻き

上げるなどあつてはならないことだ。これもいい。問題は3つ目と4つ目だ。なぜ水の精霊と話したがる？ それがいまいち理解出来ない。それにクルデンホルフを完全な独立国にする理由：なんだろうか。もしかしたらクルデンホルフの豊かな財力が狙いなのか…

だがまあ、どのみち我々に拒否権など存在しないのだ。私は姫様に率直な意見を申し上げた。

「姫様、全ての条件を認めるしかありません。残念ですが…」

「そう、ですか…わかりました」

これで合計300万エキューの損失が上乘せされるか…ただでさえ国庫が空になりかけているというのに…なんということだ…

Side out

「えーと長官、トリスティンは全ての条件を認めます」

そうアンリエッタが言った瞬間、ウィルとデックス、ジョゼフは内心ほっとして

いた。ここであのアホが「やあよ！ やあよ！ やあよ！ やあよっ！」とか言い出したらもっと面倒くさくなっていたからだ。

「懸命な判断ですな、アンリエッタ姫。それではこの書類にサインを」

そう言っただックスが書類を滑らせた。わからないところをマザリーニに聞きながらきちんとサインを終えた。それを確かめると、ウィルが立ち上がりクルデンホルフ大公としっかりと握手をした。

「おめでとうございます、大公殿下。これで貴国は立派な独立国です」

「いやいや、ありがとう長官」

ニコニコしながら握手に応じる大公。すると突然何かを思い出したような表情を

浮かべる。

「ああ、しまった！ 長官、ちょっと相談に乗ってくれないかね？」

「なんででしょうか、大公殿下」

「実は我が国にはまともな軍隊が存在しないのだよ。空中装甲騎士団はあるものの、

それ以外がちょっとな…そこで貴国とガリア王国と同盟を結びたいのだが…」

それを聞いたジョゼフは待つてましたとばかりに書類を鞆から取り出した。

「ちょうどいいところに書類がありますよ、大公殿下。それにゲルマニアの

代表もいる。今ここで同盟を結ぼうではありませんか！」

「それはいい考えだなジョゼフ！ そうしよう！」

驚いて何も言えないトリステインとアルビオンの目の前で、クルデンホルフは

ゲルマニア・ガリア通商／安全保障同盟の一員となった。

「ありがとう！ これで我が国も安全だ！」

「ゲルマニア・ガリア・クルデンホルフ三国同盟って名前に変えねえか？」

珍しくデックスがいい名前を考えた。

「いいけど長いな、その名前。あ、そうそう大公殿下、貴国の軍備が整うまで」

我が国とガリアの軍隊が貴国の防衛にあたりましょう」

「それがいい。タイミングよく国境を越えたところで合同軍事演習を行っている

部隊がいるしな！ 30分以内に最初の歩兵大隊は来れるだろう」

「おお、それは大変ありがたいです！ 感謝致します！」

「いや〜それほどでも〜」 クレヨンし ちゃん風に

「「「はっはっはっはっは！！！！」」」」

ひとしきり笑った後、クルデンホルフ大公はアンリエッタに話しかけた。

「そうそう、大事な事を言うのを忘れていましたよ、アンリエッタ姫」

「は、はい？ なんですか？」

そして大公は驚きの言葉を口にした…

後半へ続く！

第22話：ゲ・ガ「よつとりちゃん、ちょっとジャンプしてみ？」「トリ」「えっ」

クルデンホルフの宮殿の名前は適当な地名を組み合わせて作ったので突っ込まないでください。

これで終わり？ とんでもない、もっと絞ります。

長くなりそうなので次回に続きます。
では

第23話：ゲ・ガ「ようトリちゃん、ちょっとジャンプしてみ?」「トリ」「えっ」

前回からの続きです。

クルデンホルフ大公は何を言うのでしょうか？

すでにわかっている人もいると思いますがどうぞ。

White Seal様からご指摘を受けまして、主人公とデックスの

名前にある「ド」を「フォン」に訂正致します。今まで書いた分全部を直します。ゲルマニアは地球で言うドイツ辺りなので、家名の前に「フォン」が付くそうです。それを全く知らずに適当に書いていました。大変申し訳ございませんでした。

他にも「ここ違くない?」と思った箇所がございましたら遠慮無くご指摘ください。

第23話：ゲ・ガ「よづトリちゃん、ちょっとジャンプしてみ？」トリ「えっ」

～前回のあらすじ～

ロマリア以外の国の代表が集まった講和会議。その席でゲルマニアとガリアは
トリステインに4つの賠償を認めさせた。これによってクルデンホルフ大公国は
完全に独立国となる。更にウィリアム達は「ゲルマニア・ガリア・クルデンホルフ
三国同盟」（デクスター命名）を締結した。比較的この3ヶ国と良好な関係にある
アルビオンはともかく、トリステインとロマリアはかなりまずい状況に追い込まれた。

そしてクルデンホルフ大公はトリステインのアンリエッタ姫に驚きの言葉を…

～あらすじおしまい～

くクルデンホルフ大公国、エシユテルト宮殿、大会議場く

「そうそう、大事な事を言うのを忘れていましたよ、アンリエッタ姫」

大公は笑顔のままアンリエッタに話しかけた。

「は、はい？ なんですか？」

「アンリエッタ姫、我が国は独立して間もないので資金が不足しております。」

そこで、我が国が貴国の貴族に貸し付けている全………金を直ちに返済して

いただきたい。利子も合計すると、ええと……総額2985万6754エキユー、93スウ、

10ドニエになります。端数は邪魔なので切り捨てます。従って2985万6755

エキユーを半年以内に返して下さい。返せない貴族がいる場合はもちろん王家が

肩代わりしてください。貴国の貴族なのですから当然の事です。

そしてもし、

仮に、そんなことはあつて欲しくないのですが、期間内に返済が
できなかった

場合、我が国はトリステインに宣戦布告をします。あまりやりた
くないのですが、

力尽くで借金を回収させて頂きます」

「そうなった場合は我がゲルマニアも同盟に基づき宣戦布告を」
ウイル

「右に同じく」 ジョゼフ

それを聞いたジェームズ1世は顎が外れるくらい口を大きく開いて
いた。

(えっ、トリステインってそんなに借金してたのか？ マジないわ
www)

ウエールズも金額の大きさにびっくり。

(にせんきゅうひゃくはちじゅうごまんろくせんなんひゃくじゅう
ごえきゅう…)

アルビオンでも国が傾くレベルなのに、トリステインの場合じゃ
傾くどころか

ひっくり返るレベルだね、これ)

アンリエッタより頭が良い彼はトリステインの事を一瞬だけ可哀
想に思った。

が、今までのトリステインのしでかしたこと（食料の催促や商人の
襲撃）を
思い出してその考えを一蹴した。

ちなみに、アルビオンはゲルマニアの農業技術のおかげで大量生
産した食料を、
トリステインに超高値で売りさばきまくったので、国庫はホクホク、
みんな幸せに
なっていた。今まで使っていた金庫が金貨で満杯になるくらい儲か
ったので、
新しく大きな金庫を作ることになった。

そんなことはさておき、当のトリステインはというと。

「」

アンリエッタは動作不良になり、マザリーニは今にも死にそうな表
情を浮かべていた。

「は、は、半年以内、ですか！？ それはいくら何でも不可能です
！ どうか、

どうかもう少し期限を延ばしていただけないでしょうか！？」

現実の世界に舞い戻ったマザリーニは懇願する。それを聞いた大公

は、ちょっと
考えさせて欲しいと言い、”メモ用紙”に何やら書き始めた。

だがそれはメモ用紙ではなく、事前にウィルから渡されていたタブレットPCだった。
付属のペンで文字を書くそれが文章化される。そしてネットワー
ク上で共有される
という仕組みである。つまり大公が書いた文章をウィル達は自分の
タブレットPCで
見ることができるのだ。

そして大公が書いた文章はこうだった。

『どうでしょうか？ 作戦通りに？ それとも他に何か良い考え
が？』

それを読んでウィル達は悩んだ。これ以上に連中にダメージを与
えることができ、
かつ面白いことなんてあるだろうか。

その時ウィルは、前世でやったことがあるゲームの金貸しのこと
を思い出した。
これは使える。そう思ったウィルは自分のタブレットPCにこう書
いた。

『大公殿下、「複利」という言葉をご存知ですか?』

5分後、大公はマザリーニに笑顔で話しかけた。

「マザリーニ枢機卿、確かにあなたの言うとおりですね。ちょっと期限が短すぎ

ました。なので返済期限を伸ばしましょう。そうですね…10年後までに返して

いただければ結構です」

「10年ですか…それはありがたい」

それを聞いてマザリーニはほっとした。10年もあればなんとか返せるはずだと彼は考えた。

「ただし」

と、大公は続けた。

「返済が完了するまで利子だけは必ず返済して頂きます。それくらいは当然のこと

ですから。それとその利子ですが今日付けで変更します」

「「利子を変更!?!」」

アホとマザリーニがハモった。

「ええ。今までは年利1割の単利でしたが、これからは週利2割の複利とします。

あ、利子の回収は1ヶ月に1回行います。毎週やるのは面倒なので」

「「「複利?」」」

アホとマザリーニ、それにジエームズ1世とウエールズも初めて聞くその単語の

意味を大公は丁寧に説明してあげた。詳しくはウィキペディアで調べらんだ!

要するに1週間で20%の利子がついて、しかも複利なので雪だるま式に利子が

増えていくことになる。例えば100エキューを上と同じ条件で借

りた場合、
1週間後には120エキューに、2週間後には144エキューになる。それ以降も
173、208、250…という感じにどんどん増えていく(端数は切り上げ)。

まさに「十一っていうレベルじゃねえぞ！」状態である。

そして「利子は必ず返済すること」という条件がある。もし最初の1ヶ月間、
トリスティンが全く返済をしなかった場合、借金はどうなるのか。
計算式に
まとめると、

$$A \left[(元金 \times 1.2) \times 1.2 \right] \times 1.2 \times 1.2$$

となる。これに数字を当てはめて計算し、端数をどうにかすると
4週間後、
つまり1ヶ月後の借金の総額が判明する。さあみんなも電卓を叩いてみよう。
すると6191万とんで967エキューとなるはずだ。ここから元金を引けば、
トリスティンが支払うべき利子の金額が出る。

その答えは3205万4212エキューとなる。

「あれ？ 元金超えてね？」

と思った人、それは錯覚です。きつと目と電卓が疲れているのでしよう。

「とまあこんな感じになりますので、返済の方よろしくお願い致します」

ニコツと笑いながら大公が言い終わると、アンリエッタがついに喚きはじめた。

「そ、そんなこと認められませんか！　あまりにも利子が高すぎ」

「それが嫌ならば半年で全額の返済をしてもらうしかありませんな、アンリエッタ姫。」

もし半年以内に返すのであれば利子は以前と同じとなります。さあ、どうしますか？

選択肢は2つに1つです」

((うわぁ…))

と思っていたのはアルビオン組の2人。ジエームズ1世は今まで見たことがない大公の姿を見て、ウエールズは笑顔でとんでもない選択を迫る大公を見て引いていた。

(これが外交なのか…難しいけどきちんと学ばないと！)

そんな中でもしっかりと考えているウエールズ。やはりどこかのアホとは違う。

「お願いです、もっと利子を減らしてはもらえないでしょうか？」
ついにアンリエッタが頭を下げ始めた。が、それを3カ国の代表は冷めた目で見える。

「残念ですが、これ以上下げることにはできませんな」

と大公。

「半年から10年に伸ばしてもらったのにまだ何か譲歩しろって…
ないわー」

とデックス。

「とつと決めてくれないか？ こっちも忙しいのでな」

とジョゼフ。

そしてとどめの一撃となる言葉をウィルが言った。

「自分じゃ何も決められないんだから早くマザリーニ枢機卿に決めてもらって

くださいよ。それにしてもよくそれで国のトップになれましたね、
ある意味

すごいですよ」

グサッ！

おや？ 今何かアンリエッタの心にぶっ刺さるような音がしたよう
な気が……

「……………うっ……………うっ……………うっ……………！！！」

ア

ホ、号泣 エヴァのタイトルっぽく

「えー……」

「ひ、姫様！？」

なんとアホが泣き出してしまった。マザリーニも予想外だったらしく
くびつくりしている。

大公は呆れ顔を浮かべており、ジェームズ1世は頭を抱え、ウエー
ルズは「これも外交

なのか？」と勘違いをし、ジョゼフは笑いそうになるのを必死に我
慢しているし、

デックスに至っては書類で顔を隠しながら声を殺して笑っている。

ただ、ウィルは笑っていなかった。よく「男は女の涙に弱い」と
言うが、あのアホを

見ているとそれは間違っているんじゃないか、とウィルは考えてい
た。ぜんっぜん

可哀想に見えない、っていうかむしろイライラしてきた。

「泣いても変わんねえだろうが！ いいからとつと決めんかい！」
気が付くとウィルはそう怒鳴っていた。デックスとジョゼフは慌ててウィルの
口を塞いだ。それを聞いたアホが更に大泣き。

「…もう勘弁してくれ」

ジェームズ1世がそう呟いたが、それを聞いていたのはウェールズと大公だけだった…

結局アホが泣き止むまで待つてから会議は再開され、トリステインは今まで
借りていた金を半年以内に返済することに同意した。さすがに利子を上げられては
困るらしい。そして一行はそのままクルデンホルフから、現在ガリア軍が占領して
いるラグドリアン湖へ向かった。

アホはorz状態に。

「そもそもここは汚いしお前等うるさいしモンモランシがクソだし

…(ブツブツ)」

「えっ？」

(ちょ！ アクエリア、本音が漏れとる！)

(っ！ しまった、ついうっかり)

なんとかデックスがテレパシーでアクエリアの暴走を止めた。

そしてウィルは用意してあったペットボトルにアクエリアの分身を入れた。

本当はこんな事する必要ないんだけど、こつやって見せたほうが連中も信用

するだろう、とアクエリアに言われたのでやった。ちなみにアクエリアは

とつくの昔にゲルマニアに引っ越していたりする。

それって違法だろ、だって？ 今こつして合法的に引っ越しているから問題ない！

「では我々はこれで失礼します。賠償金の方よろしくお願いします。では」

ウィルはアンリエッタとマザリーニにお別れの挨拶をした。彼らとその護衛達は、ガリア軍兵士に先導されてトリスティン国境まで送られた。

そしてアルビオン組にも挨拶をした。

「ジエームズ1世陛下、本日はどうもありがとうございました」

「いやいや、面白いものが見れてよかったよ。しかし1つ思ったことがある」

「と、言いますと？」

デックスが聞くと、彼は疲れきった表情を浮かべながら、しかし笑みを浮かべながら言った。

「もう二度とこんな会議の議長はやりたくないね！ あっはっはっは！」

「同感ですな！ はっはっはっは！」

ジョゼフも笑い始めたのでまたみんなで大笑いした。その後ろではガリア軍が素早く撤退を開始していた。約束はきちんと守らなければ、ね？

「ウィル、今日は実に勉強になったよ！ 外交とは難しいものだね。」

それで、

「今度はいつ会えるかな？」

アルビオンへ帰る前にウェールズはウィルにそう聞いてきた。

「そうだな、年に1回ぐらいは会いたいところだね。色々と話もしたいし」

「そうか！　じゃあ楽しみにしてるよ」

「俺もだ、ウェールズ！　じゃあな！」

ジエームズ親子はアルビオン空軍の大型戦艦「ロイヤル・ソヴリン」に乗って

帰っていった。ちなみにフネを動かすための風石はゲルマニアが提供した。

議長やつてもらったんだし当然だよな。

その後ウィル、デックス、ジョゼフ、大公はささやかな祝杯を上げることになった。

しかしその前に大公は国民の前で演説をした。なんでも今日のこと

を早速伝えるそうな。

「諸君！ 今日からクルデンホルフは完全な独立国となる！ もう
トリスティンの

連中に振り回されることはない！ 自分達の国は自分達で管理・
運営されるべき

である！」

パチパチパチパチッ！！

国民からは盛大な拍手が送られた。そしてクルデンホルフがゲルマ
ニア・ガリア

通商／安全保障同盟に加入したことを明らかにすると、その拍手は
更に大きくなった。

なんだかんだ言っただけで国民はトリスティンの連中にうんざりしていた
のである。

上から目線だし、融通聞かないし、納期守らないし、金払い悪いし
… などなど。

それに比べてゲルマニアとガリアの人々は交易をする際も納期を
きちんと守るし、

金払いもきちんとしているし、人柄もいいし… などと高評価だった。
最初のうちは

エルフや翼人に怯えてはいたが、しばらくすると打ち解けて一緒に
酒を飲んだり

して仲良くなっていった。今ではクルデンホルフでエルフや翼人へ
の差別は全くと

言っていないほどなくなっている。素晴らしいことである。

演説後大公の屋敷に行き、4人で乾杯をした。ウィルとデックスは子供なので、コーラで乾杯をした。しばらくおつまみを食べながら談笑していると、部屋に小さな少女が入ってきた。

「お父様、うるさいです！」

「おお、ベアトリス。ちょうどいいところに来た。こっちに来なさい」

「は、はい」

大公はとてとて歩いてきた娘を紹介した。

「私の娘のベアトリスです。ほら、挨拶しなさい」

「はい、お父様」

すると彼女は礼儀正しく挨拶をした。

「お、お初にお目にかかります。ベアトリス・イヴォンヌ・フォン・クルデンホルフと申しましゅっ!？」

あ、囁んだ。

「う、うううう…」

トマトみたいに真っ赤になったベアトリスを見て、ウィルは。

(っべー、マジっべーわ。めっちゃ可愛いんですけど！)

原作で彼女はどこの魔法少女みたいな金髪ツインテールだったが、まだそこまで髪が伸びていないらしく、髪はそのままおろしていた。それがまたいいー！

ウィルは周りの人に見えないくらい素早くベアトリスの前に行った。

「初めまして。ベアトリス姫。ゲルマニアの国防と外交を取り仕切っている

ウィリアム・タイベリアス・フォン・ゲルマニアと申します。私のことは

”ウィリアムお兄様”と呼んでください」

「っっ早っ！！　ってか何言わせようとしてんだよ！！」「っ」

周りがるさかったが、素直で可愛いベアトリスは首をかしげながら、

「っい、ウィリアムお兄様？」

と言ってくれた。

「くくくはあつ!!」「くくく」

それを聞いた4人は吐血しそうになった。

(いい！　これはいいぞ！　ベアトリスは俺の嫁にする！　絶対にだ！)　ウイル

(こ、この破壊力はやばい…シャルロットとジョゼットにやってもらおうかな)　デックス

(くそっ！　なんで俺には妹がないんだ！　弟じゃ駄目なんだ！)　ジョゼフ

(長官、グツジョブです！　娘のこんな一面が見れるとは…生きていてよかった!)　大公

「？」

そんな4人を見てベアトリスはさらに首をかしげた。

その後ウイルは、デックス達を放置してベアトリスと一緒に色々と遊んでいた。

今ゲルマニアで流行っているあやとりを教えてあげたら大喜び。

「ここをこうすると…はいできた。これが4段梯子だよ」

「うわー！　凄いです、ウィリアムお兄様！」

「ベアトリスもすぐに出来るようになるよ。さあ一緒にやってみよう！」

「はい！」

その様子を見て大公は

（うんうん、仲良しになってるな。あの約束、きちんと果たしましたぞ、長官）

と考えながら、大好きなチータラをガツガツ食いつつビールを飲んでいた。

「はっ！」

「どうしたの、イザベラ？」

「…なんとなくウィルが女の子とイチャイチャしている気がした」

「まさか」

「気のせいでしょう？」

ゲルマニアのイザベラは、その時シャルロット、ジョゼット、テファ、マチルダと

共に繁華街を歩いていた。学院の帰り道である。

「むー、これ以上ウィルの奥さん候補が増えないといいんだけど…」

大公の隣ではジョゼフとデックスが話している。

「これでめでたくフェイズ2は完了したわけだが…次はどうする？」

「そうですね…」

デックスは口の中のさきイカを無理やり胃に押し込んだ。

「フェイズ3はまだ始めません。俺とウィルが12歳になる頃にこつそり動き出すとか。

それまでは国内でおとなしくするか、もしくは作戦以外のことに

集中しよう

考えています。既に幾つかのプロジェクトが進行中です。そちらは何を？」

「それなんだがな……」

ジョゼフは顔を曇らせる。

「私の使い魔のミューズが『ジョゼフ様の子供が欲しい！』とうるさくてな……」

もしかしたらまた子供ができるかも知れん」

「（……）ツマンネ、惚気話かよ。っていつか使い魔といつからデキてんの？」

「惚気言つな……この前のスチール・トラップ鋼鉄の罠作戦のちょっと前からだな。ウイ
ルに

電話して助けを求めんだが……だめだった。つい昨日も襲われて腰が痛くて……」

「ああ……襲われてやむなくってことか」

デックスは、将来俺もシャルロットとジョゼットに襲われるのかな、と考えていた。

結局その日は大公の屋敷に泊まることになった。ベアトリスはウイ
イルと一緒に

夜遅くまで話していたため、次の日は寝坊してしまった。あともち

ろんの事だが、
ベアトリスはウィルに惚れたのであった、まる。

（同日深夜、ゲルマニア中部の山岳地帯）

ここは昔から木々が生い茂り、たくさんの動物達が生活をしてきた場所である。

革命前には「ここを開拓しなイカ？」という案もあったが、コスト等の問題で

取り止めになった。なのでこの地に人間が立ち入ることはほとんど無く、今まで

ずっと自然が残されていた。

ところが2年前、人間達は方針を大きく変えこの地へとやってきた。それも大勢で。

そして木を切り倒し、重機で整地をし、超巨大な建物をいっぱい建設し、その中で

何かを作り始めた。森の住民達は別の地へと移り住むしかなかった。

2年経った今日、その建物での作業は完了した。建物の近くの木にとまっていた

カラスは、屋根がスライドして中からとてつもなく大きな気球が大量に出てくるのを眺めていた。そしてその気球に吊り下げられた大きな何かを見ると、びっくりして啞えていたねずみを落として飛び去っていった。カラスが消えた後、さらに5つの大きな何かは空中に浮かび上がった。

カラスにはわかるわけがなかったが、この大きな何かにはこれまた巨大なエンジンが幾つもついており、側面にはゲルマニアの国旗が描かれていた。それら6つは気球と共に夜空へと登っていき、やがて見えなくなった…

続く…

第23話：ゲ・ガ「よつトリちゃん、ちょっとジャンプしてみ？」トリ「えっ」

借金が異常に多いのは、先代のトリステイン王であるフィリップ3世の時代から貸していたので、その分の利子がめっちゃついた、という設定です。これで納得してください…

「ウィルが前世でやったことのあるゲーム」とは、作者が大好きだった貿易シミュレーションゲームです。そのゲームの金貸しが週利1〜3%の複利で金を貸していました。あれはひどかったです。

あと、この小説の中のマザリーニは原作よりちょっと頭の回転が悪いです。なぜなら原作よりもより残念なアホの面倒を見ているからです。

最後に出てくるのが何か知ってる人もいるでしょう。これらはじきに使うので書きました。わかったら答えを感想にでも書いてください。正解者にはもれなく何もあげません。

さて、フェイズ2がめでたく終了したのだが、フェイズ3までいっただい何が起こるのか？ 作者も考えていない

そこでアンケートを取りたいと思います。

- 1：ウィルとデックスが学校へ通う話
- 2：原作時期までキンクリ
- 3：その他

期限は敬老の日、19日までとさせて頂きます。より多くの人にアンケートを答えて欲しいなーなんて考えています。

では

第24話：時が経つのはやっぱり早いもんだね（前書き）

アンケートの結果、2のキンクリが一番多かったので
原作ら辺から始めます。あと、いつになるかわかりませんが
番外編としてウィルとデックスが学校に行った場合の話を
書くつもりです。お楽しみに！

更新が遅れた割には会話パートがかなり少ない
ですけど、どうぞ〜！

第24話：時が経つのはやっぱり早いもんだね

どうも、ウィリアムだ。例の戦闘、正式には「トリステインによるゲルマニアへの越境攻撃事件」からもうすぐ7年。つまり俺とデックスはもあとちよつとで16歳というわけだ。原作が始まるまであと2ヶ月を切っている。実に楽しみだ。

あの事件から半年後、マザリーニ枢機卿が以前よりもさらにガリガリに痩せた状態で賠償金を持ってきた。苦労しているんですね（棒）。スパイからの報告によると、トリステインは約束をきちんと守った。平民から資産を押し収したりとか、重税を課すとかの行為はしていないそうだ。レジスタンス組織「トリステイン解放人民戦線（PFLT）」からの報告書にもそう書いてあった。

で、その賠償金を国中の貴族が用意するはめになった。ほとんどの貴族がクルデンホルフからお金を借りていたからだ。比較的裕福な貴族、例えばラ・ヴァリエール公爵家とかはなんとかだったが、全ての貴族が裕福かつ言ったらそうでもなく、アニメに出ていたモットは支払えないとわかった。日に夜逃げしようとした。が、メイドや衛兵達（実はPFLTのメンバー）に

見つかって、

「お前何逃げようとしてんの？ 馬鹿なの？ 死ぬの？ ていうか死ね」

と言われて射殺されてしまった。モットは杖を構える暇さえなかったそうだ。

その後メイド達は屋敷に火をつけて跡形もなく焼いてしまいましたとさ。

これはまだマシな方で、ひどいケースだと、ある下級貴族はモットと同じく

夜逃げしようとしたが平民に見つかり、街の中心で生きたまま手足をもがれ、

拳句の果てにオーク鬼がよく出る森に放置された、なんてのがあある。あー怖い怖い。

また、借金を返す時になんとエキュー金貨を錬金して支払ったバカ貴族がいた。ドヤ顔で「これで借金はチャラだ（キリッ）」とか言いやがって。

本国に持ち帰った時に偽者だと判明したため、罰としてその日の夜、その貴族の屋敷に高性能爆薬がたっぷり詰まったトマホーク巡航ミサイルが着弾した。ま、当然の報いである。

そんなことがあった結果、払えなかった貴族の分をトリステイン王家が全部支払ったので、国庫がマジでほとんどすっからかんになったん

だと。

王城内部にあった王家の家具やらなんやらも全部売っぱらったそう
な。

なので、今のトリステインはアルピオンにいつぱい借金をしている
ハルケギニアで1番貧乏な国になってしまった。

次にさっきも出てきたPFLTだが、総兵力が50、000人を
越えた。練度も高く、

メイジ相手でも余裕のよっちゃんだそうだ。トリステインのあちこ
ちにPFLTの

極秘基地があり、合図があれば1日で全ての主要都市を制圧するこ
とが可能だ

とのことだ。非常に素晴らしい。

なお、PFLTには三国同盟の軍隊で使われているような戦車と
か戦闘機は

ひとつもない。そのような高価で扱いや整備が難しい兵器は使用し
ない方が

良い、とリーダーのベイツは考えているからだ。俺もその考えに賛
成である。

それにあくまでPFLTはレジスタンスだからね。あるのは大量の
基本的な

歩兵装備 自動小銃、分隊支援火器、グレネードランチャー、ロケ
ット

発射機、迫撃砲、無反動砲などである。それらの弾薬は豊富に保管
されて

あり、使用法をきちんと心得ている兵士に任されているので、トリ
ステイン

軍にとっては十分な脅威である。

で、その基地の1つがあのだルブ村にある。村の人全員がPFLTのメンバーであり、ベイツと俺が現地まで行って交渉した。村長や村人は、最近色々な物の値段が

急が上がって生活が苦しくなっており、王家に不満を持っていたので説得する

のに時間はかからなかった。その後俺はシエスタに会った。既に彼女はPFLTの

一員で、トリステイン魔法学院にメイドとして潜入してもらっている。普段は

笑顔が可愛い、料理の上手な巨乳の女の子だが、任務はしっかりとこなすし、

必要ならば人も殺せる立派な兵士である。原作どこ行ったし。

ついでにシエスタのおじいさんの佐々木武雄さんのお墓参りもやった。墓石に

書いてあった日本語を読んだら、原作通りにゼロ戦をもらった。そのお礼として、

トリステインが再び戦争をおっぱじめたら、タルブ村の村人全員をゲルマニアに

移住させることで合意した。ゲルマニア国内でワインの栽培に適した土地を

既に確保してあるので、移住後もワインを育てて欲しいと考えている。

あ、そうそう、PFLTにアニエスも参加しているそうだ。なん

とベイツが彼女の
ことを知っていたんだって。「ダングルテールの虐殺」に巻き込ま
れて死亡した
ベイツの彼女が、生前にアニエスのことを「近所に住んでいる元氣
で明るい
女の子」と話していたのを彼が覚えていたのだ。アニエスもまたベ
イツの彼女の
ことを覚えていた。「たまに遊びに来る近所の優しいお姉さん」だ
ったそうだ。
ダングルテールの真実を話したら、アニエスはすぐにPFTLに入
隊した。
彼女は物覚えがよく、あっという間に戦闘技術を取得した。特にナ
イフや
剣等の刃物の扱いに精通しているそうだ。

今彼女は王都トリスタニアに潜伏しており、「ダングルテールの
虐殺」を
命じた人物、リッシュモンの暗殺命令を待っているところである。
まだ彼女
には、実際にダングルテールを燃やした部隊の指揮官であるコルベ
ールの
ことを話していない。リッシュモンを消した後に教えるつもりだ。
当初の
予定ではコルベールをゲルマニアに引きこむつもりだったが、

「よく考えたら別にいなくてもいいんじゃないね？」
とデックスが言い出したので引きこみ作戦は白紙になった。ま、い
つか。

で、次は…三国同盟の話でしょうか。まず我がゲルマニア。6年前に第1段階が終了し、第2段階がその1年後に完了した。何がって？ゲルマニア中部の超大型建造施設で造らせていた「バンシー」が、だよ。バンバンジーじゃないからな？

ここで「バンシー」を知らない人に説明しよう。正式名称は「バンシー級

原子力空中空母」。OVA・小説作品『戦闘妖精・雪風』に登場する飛行航空

母艦である。全長687m、全幅1,400m、自重は9,650t、搭載機40機に達する

巨大航空機であり、16基の原子力推進ターボファンエンジンによって飛行する。

海上航行する実際の航空母艦と同様に、空中で艦載機の発着を行う。非常に

巨大なため、地上で建造したエンジンつきの外殻を気球で吊り上げた後に滑空

させ、空中で儀装を行うという特異な工法で完成されている。地表への着陸は

考慮されておらず、半永久的に遠心力で飛ぶ。

ね、すごいでしょ？もう充分なくらい凄いでしょ？だけど俺はデックスに

「魔改造してもいいぞ」と適当に言った。その結果、とんでもない

ことになった。

まず、大きさ。原作の1.5倍にしゃがった。なので搭載機が40機から60機に

増えた。そして武装。原作では対空砲と対空ミサイルだけだったが、デックスは

それにプラスして長距離攻撃兵器を載せた。航空機を出撃させる前に長距離から

敵勢力を叩く、という発想自体は悪くない。

ただし、デックスは「ACE COMBAT X Skies of Deception」に出てきた

架空の兵器である「SWBM (Shock Wave Ballistic Missile)」と、同じシリーズの

「ACE COMBAT 5 THE UNSUNG WAR」に出てきた架空の兵器、「散弾ミサイル」

の2つをチョイスした。あの鬼畜兵器を2つも搭載するなんて想定
の範囲外だった。

ていうかあのバンシーのどこに弾道ミサイル発射用のサイロを載せたんだらうか？

構造的にどう考えても無理じゃねえか、と突っ込んだが、デックスは涼しい顔で

「なに、ちょっと手間取っただけど何とかなったよ」

とか言いやがった。やっぱりチートってすげえ。

でもよく考えたら武器のチョイスはかなりいいんじゃないかと思

う。

S W B Mは特殊燃料気化爆弾を弾頭とする弾道ミサイルで、気化爆弾の燃料は

水平方向に広く拡散する様に指向性を持たせてある。つまり、水平方向

数十kmに及ぶ範囲で大気を瞬間的に熱膨張させ、非常に広範囲にわたり

航空機をその圧力で粉碎するのだ。この良い兵器の欠点、それは高・中高度の

空域制圧を目的として開発された為、大気の密度や温度の関係上、地表

付近では威力が大きく減退するという点である。この為、低空飛行をしている航空機には効果が低い、というか全くない。また山間部や

溪谷等、燃料や衝撃波の拡散に対する障害物が多い環境下でも、その威力が

制限される場合がある。

この欠点をカバーするのが散弾ミサイルである。制空と広域面制圧を目的と

するこの弾道ミサイルは、発射後弾道軌道で慣性飛行した後、高度4000フィート

前後で弾頭が炸裂し子爆弾を散布、起爆地点を中心とした広範囲の地上、水上目標

及び高度5000フィート以下の空中目標に相当の損害を与えるのだ。S W B Mと

違って、この兵器は中・低高度にある敵を叩くものなのだ。この2つを同時に

撃ち込んだら…考えただけでも恐ろしいね。

でも、完成してから親父が一言。

「弾道ミサイルって曲線を描いて飛んでいくんだろ？ 真っ直ぐ飛んでいく」

長射程の兵器も載せたほうがいいんじゃない？」

それを聞いたデックスは、なんとロワデッキの大型核融合炉区画の真下に

「ACE COMBAT 6 解放への戦火」に出てきた架空の兵器、「ニンバス」の

発射装置を押し込んだ。この特殊長射程巡航ミサイルは、特殊な炸裂弾頭を

搭載しており、連続発射による弾幕で遠距離からの戦域制圧を可能とする。

まあ「散弾ミサイル」の小型版といった感じかな。

あと原作のバンシーと違うところは、さっきも書いた通り、原子炉を

核融合炉に変えて、それに伴い16基の原子力推進ターボファンエンジンも

熱核バースト・反応タービンエンジンに。デックス曰く、

「やろうと思えば宇宙まで行けるぜ！ まあやることないけどな」

だそうだ。デックス、ちょっと自重しろ。

こんな化物空中空母を6機も作って何をしたのかというと、2機はゲルマニアと
ガリア、クルデンホルフをカバーするように飛んで空を守っている。残りの
4機は、新たな土地を開拓するための人員と物資を乗せて世界へと飛び立った。
人工衛星でこの惑星を隈なく調査した結果、地球にある大陸とほとんど同じ形の
大陸がある事がわかった。つまり、オーストラリアもあるし、日本つばい
でもある。人間が確認された大陸もあれば、まだ居ない大陸もある。そこで、
まずはアフリカ大陸、北アメリカ大陸、オーストラリア大陸、そしてロシアに
大規模な基地を建造し、そこを拠点にして現地人との交易を始めることにした。
また、人が居ない場所にある資源を見つけた場合、すぐさま発掘を開始し、
三国同盟のなかで4：3：3の比率で分けている。4はゲルマニアで、3がガリアと
クルデンホルフである。

で、開拓事業を始めて4年たった今はどうなったかというと、北アメリカ大陸に
いた先住民族とはかなり仲が良くなり、オーストラリアでは現地人に色々と教育を
させて国を作らせた。その国とも同盟を結び貿易も順調である。近い内に周辺の
島国との貿易も始める予定だ。アフリカ大陸では地球で言うエジプトあたりに

大きな基地を作って、今は貿易をせずに資源を確保している。ロシ
アはものすごく
寒いそうなので、こっちなかなか作業を進んでいないそう。ま
あ地道に
やるつや。

あと、ジョゼフの使い魔のシエフィールドの故郷も見つかった。
地球で言うと
中東の辺りにある「サルート王国」という国で、昔からエルフとよ
く争っている。

今から3年前にエルフが大侵攻をしかけてサルート王国が滅亡しか
かったので、
大急ぎで創造魔法を使って作り出したPGM-19ジュピター中距
離弾道ミサイルに
散弾ミサイルの弾頭を目一杯載せてエルフの侵攻軍に撃ち込んだ。
まあエルフは
誰も死ななかつたけど、驚いて撤退したからよしとしよう。で、俺
とジョゼフと
シエフィールドがその国に足を運ぶと、「助けてくれてどうもあり
がとう!」と
とても感謝され、シエフィールドは家族と涙の再開をした。

それと王国は長年エルフと戦ってきたので、エルフの技術の海賊
版がいっぱい
あった。なので、それを教えてもらう代わりに、サルート王国を三
国同盟が全力で
守る、という同盟を結んだ。そこでゲルマニア陸軍対エルフ戦用の
第2軍団の

半分をサルート王国近郊に建設した「ミドルイースト基地」に配備した。また航空戦力として、A - 10CとAC - 130U スプリーキー？も多数配備した。そして最悪の場合に備え、以前製造した「Neutron bomb - i」、中性子爆弾（エコ仕様）を3発基地に保管してある。いざとなったら基地に2機あるB - 52Hが投下するだろう。

できればエルフの国、ネフテスの連中とも仲良くやりたいところだけど、

あつちが俺達人間と話したからどうしようもないからどうしようもないんだよね。原作では

エルフのビダーシャルがジョゼフに会いに来ていたけど、俺とデックスが

グレートウォールを作ったせいで来れない。いやはやどうしたのか…

あと興味深い報告もあった。まず海外拠点でメイジが魔法を使ったところ、

かなり威力が落ちるといった現象が発生した。スクウェアクラスの土メイジが

全力でゴーレムを作っても、2mくらいのチビゴーレムしか作れなかったそうだ。

実際に俺とデックスも北アメリカ大陸最大の基地「ワシントン基地」に行つて

魔法を使ってみたが、報告通りの結果に終わった。そこでデックスがまた

チートを使って作った「魔力探知器」なるもので計測してみたところ

る、
ハルケギニアの2000分の1しかなかった。びっくりしたので世界中で計測したら、ゲルマニアに、というかハルケギニアに近づくと魔力は上がっていった。

それ以外にも、ハルケギニアにはよくいるオーク鬼とか、竜とか、マンティコアとか、そういった魔法チックな動物、そしてエルフとか翼人等のこれまたSFチックな生命体が、他の大陸では全く居ないのだ。

確認されたのは地球の動物園によくいる動物たちだけだった。

まとめてみると、

- ・ハルケギニアから離れるにつれて魔法の威力が薄まる。
- ・それと同じく、ハルケギニアから離れた場所には人間しかない。

ハルケギニアに魔力が集中しすぎているからエルフとかオーク鬼がいるんじゃない？

ということになった。なんでこうなったんだろうね？そこは今も調査中だ。

お次はガリア。めでたい話だが、2年前にジョゼフとシェフィールドの間に

子供ができた。女の子で名前はシャロンちゃん。ジョゼフも俺達の

親父みたいに
立派な親馬鹿になってしまい、仕事が終わった瞬間に虚無魔法の「
加速」を
使って自室のシャロンちゃんのところまで帰るそうだ。虚無の無駄
遣いだね。
また、イザベラも妹ができたので暇さえあればガリアに帰って一緒に
遊んであげている。

シャルルは国王としてうまく国をまとめている。最初は抵抗も多
かったが、
それでもめげずに国民と対話し、説得を続けていったので、国の支
持率は
ほぼ100%である。

次はクルデンホルフの話題。独立した直後にゲルマニアとガリア
の技術を
一気に流し込んだ結果、今では立派な国になっている。また、ハル
ケギニアで
1番大きな銀行があり、そこでは様々な顧客から資産をあずかって
いる。
そんな重要な場所だから、国境線にはグレートウォールを建設し、
また正式に
軍隊を発足させて国を守っている。

それと俺の嫁であるベアトリス。彼女もまた、ゲルマニアに留学
してきた。

ある日突然やってきて

「ウィリアムお兄様！ 来ちゃいました！」

と言いながら満面の笑みで駆け寄ってきたので、俺は危うく失血死するところ

だった。イザベラ達のメンバーにすっかり溶けこんでおり、有意義な学生生活を送っている。

どんどん行くよ、次はロマリア…なんだけど、なんか最近ゴーストタウンが

増えてきたなって感じ。マジで餓死しかけている街にはすでに神官は居ない。

最初に逃げたからだ。残された平民達はもう死ぬしかない状況だった。

そこにやってきたのは正義の味方、ゲルマニア軍！ タダで食料を配って

「ウチくる？」と言えば、みんな「行く行く！」と喋ってついてきてくれる。

「ロマリア教捨てる？」って聞けば、「ロマリア教はクソくらえ！」と

返してくれる。そんな感じでロマリアからの移民もかなり増えた。

平民が減る＝食料を作る人が減る＝神官の食事が減る＝（＾o＾）

／
となったので、ロマリアの国力と支持率はさらに落ちた。

そしてフェイズ3で1番重要なアルビオン。まず俺が水の精霊ア
クエリアに
お願いして、アンドバリの指輪の超劣化版を作った。一応これでも
死人を
操れるが、遠隔操作でその効力を失わせることができる。この指輪
とお金を
アルビオンにいたオリヴァー・クロムウェルにプレゼントした。原
作通り
シエフィールド（のスキルニル）が秘書としてサポートすることに。
こうして
「貴族連合レコン・キスタ」は生まれ、アルビオン内戦が始まった。

なんで仲良しのアルビオンで内戦起こさせようとしているのか、
だって？
それはだね、「もっとアルビオンと仲良くなるため」に決まってい
るじゃ
ないか。意味が分からない？ まあじきに分かるだろう。

ちなみにレコンキスタの戦力は王党派より数が多い。兵士の数は
王党派の
数倍あるし、原作通りアルビオン空海軍の大型戦艦だった「レキシ
ントン
（旧「ロイヤル・ソヴリン」）」をかつぱらって使っている。それに
対して王党派はフネは小さいのが3隻位しかなく、歩兵の数も少な
いが、

兵士達の練度、そして使用する銃火器の性能で優位に立っている。レコン
キスタの兵士は今だにマスケット銃を使っているので、ゲルマニア
から
輸入したヴィッカーズ重機関銃などの兵器で武装し、厳しい訓練を
受けて
きた王党派兵士に勝つことは出来なかった。

そして何よりアルビオン国王ジームズ1世の頭が良かった。レ
コンキスタが
蜂起した直後、彼はまず王都周辺の敵を竜騎士団と近衛兵に殲滅さ
せ、次に王家に
忠実な貴族と兵士を重要拠点に集結させて要塞化していった。特に
ロサイスと
サウスゴータ地方は王党派が完全に守りを固めており、レコンキス
タの攻撃を
何回も退けている。

しかし他所の国にはそこまで細かい情報は伝わっておらず、

「王党派は籠城戦ですか、どれだけ持ちこたえられるのか…」マ
ザリーニ

「このままではじきに王家は滅ぶでしょう」(キリツ) ヴィットー
リオ

とか言われている。まあ近い将来それは間違っていると思ひ知るだ
ろう。

最後になつたけど、俺とデックスの話を。デックスは今キュルケとシャル

ロット、そしてジョゼットと恋人関係になっている。付き合い始めたのが2年前。

まずジョゼットが告白 それを聞いていたシャルロットも負けじと告白

次の日にキュルケが自慢のパイオツを押し付けながら告白という流れだった。

まあ親も納得してるしいんじゃない？ ただマスコミがうざいか何とか。

で、俺はというと、例によってイザベラ、テファ、マチルダ、ベアトリスと

付き合い合っている。どういつ感じで付き合い始めたかというと、まずマチルダが

告白…してきたんだけど、すぐに押し倒されてしまった。しかも

「年下…いい…」

とかつぶやきながら。うわ、マチルダってシヨタだったのかよ、とか

思っていると、音に気づいてテファとイザベラがすっ飛んできた。2人に

よってマチルダがOHANASHIされている間に、今度はベアトリスが告白。

上目遣い×涙目の攻撃を食らった俺は、鼻血を出しながらそれを承諾した。

それを聞いたイザベラ&テファが襲いかかってきた。復活したマチルダと

ベアトリスも飛んできて…まあ、その、おいしく頂きました、はい。

まあそんなわけで将来の奥さんもできたし、仕事も楽しいし、毎日がとても

充実していて、俺とテックスは平和な日常をのんびりと過ごしている。

「ウィル、いつになったらわしは孫の顔が見れるんだ？」 親父

「そつだぞウィル。なるべく早めにな」 ジョゼフ

「そういうのは作戦が全部が終わってからの方がいいのだが…しかし孫の顔を

見たいのも事実…これは私の人生で一番難しい問題ですな」 大公

…ただ週に1回必ずこの3人が「早く孫が見たい」と言ってくるん

だよね。

ちよつと落ち着いてほしいよ、ほんと。第一、嫁は決まったけど誰を正室に

するかとか全然決めてないんだからさー。まあ多分イザベラになると思うけど。

なんだかんだ言って1番付き合いが長いからお互いのことは大抵わかる。

でもまあそついうのを考えるのは、大公が言ってたように全て終わってからに

なるだろう。イザベラ達には悪いけど、それまでは作戦に集中させてもらおう。

そして2ヶ月後、”彼”がこの世界へと召喚される…

続く！

第24話：時が経つのはやっぱり早いもんだね（後書き）

コルベールさんを引き入れるのはやめにします。決してどう引き入れるか考えるのが面倒くさくなったからではありません、ええ。

コルベールは犠牲になったのだ…いやまだ死んでないけど。作者はエスコン大好きです。だけど6は残念賞だね。

シェフィールドの故郷であるサルート王国の「サルート」ですが、英語だと「敬礼する」って意味です。なんとなく適当に考えたらこうなりました。それとミドルイースト基地はそのまま「中東」ですね。

いつの間にかハーレムになってるけど気にしたら負けです。

今回はトリステイン魔法学院からお送りいたします。あと更新速度を出来れば上げたいです。では

第25話：原作開始！（前書き）

やっと原作開始です。

第25話：原作開始！

（トリスティン魔法学院）

今日ここでは2年生の使い魔の召喚儀式が行われていた。生徒たちは

教師のエージェント・47…ではなくコルベールに1人ずつ呼ばれて、

魔法を唱え使い魔を召喚していた。

とある金髪ドリルヘアの女子生徒はカエルを。

とあるバラの形の杖を持っている男子生徒はでかいモグラを。

とある小太りの男子生徒はハリー・ッターみたいなフクロウを。

そして最後に召喚儀式を行うのはヴァリエール家が三女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールだった。ピンク髪の貧乳は他の生徒達に「ゼロのルイズ」と呼ばれている。名門貴族に生まれ

ながら幼少期から全く魔法が使えず、使うと何故か爆発を引き起こすからだ。

もちろんこの使い魔の召喚で使う魔法も例外ではなく、何度やっても大爆発。

すでに周囲は猛爆撃を受けたような状態になっていた。それでも彼女は諦め

なかった。使い魔の召喚と契約が出来なければ、彼女は実力不足と

して留年
させられるからだ。

（今度こそ……今度こそうまくいく！ 自分を信じるのよルイズ
！）

そう思いながら再び杖を構えて呪文を唱える。

「我が名は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァ
リエール。

宇宙のどこかにいる我が僕よ、この呼び出しに答え、ここに我が
使い魔と成せ！」

そして再び起こる大爆発。周りの生徒はゲホゲホ言いながらも、結
局何も召喚
出来なかったルイズをからかおうとした。

が。

「お、おい見る！ 何が召喚したみたいだぞ！」

「ホントだ、何か動いてる！」

数人の生徒がそう言ったので全員が見ていると、確かに爆心地に何
かが
もぞもぞと動いているのが見えた 煙でよく見えないが。

「うーん、よく見えないな…なんだろう？」

「わかんないよ…でもそこまで大きくなさそうだね」

だが召喚した当の本人、ルイズは周りの声など聞こえていなかった。

（やった！ ようやく成功したわ！ これで留年しなくても済む！
でも

いったい何を召喚したのかしら？）

ただ、彼女も自分が何を召喚したのかわからなかったため、煙が晴れるまで

待つしかなかった。

そして煙が晴れるとそこには。

「お、おい、マジかよ…」

「嘘でしょ！？」

「なんで人間が…」

「も、もしかしてメイジか！？」

見たこともない服装の若い男がいた。彼こそが平賀才人である。

「な、なんでこうなるの…!!???」

学院にルイズの絶叫が響き渡った…

その様子を遠くから見ている人物が1人いた。メイドのシエスタである。彼女は仕事の合間にこっそり儀式を観察していた。1週間前PFLT上層部からある命令がシエスタに下された。

「トリステイン魔法学院の使い魔の召喚儀式でこの人物が召喚された場合、

直ちに報告せよ」

という命令文と共にある少年の顔写真が彼女の携帯電話に送られてきた。その

写真に写っていたのは他でもない才人だった。その写真を見て

「あ、ちょっとかっこいい…」

と頬を赤く染めながら小さく呟いたのは内緒である。そして今、彼女は音の

出ないカメラが付いている携帯電話で才人を撮影してその場を後にした。

5分もしないうちに、王都トリスタニアのPFLT本部に彼女から才人が召喚されたと報告が入り、それを聞いたベイツはウィリアム国防長官に電話した。

「こちらホトトギスです。例の少年がヴァリエール家三女に召喚されました」

「そうか、ご苦労様。今後とも作戦通りに頼む」

「了解です。ホトトギス、交信終了」

電話を切ったベイツはシエスタにさらなる命令を下した。学院のシエスタはトイレでその命令を確認すると、小さくガッツポーズをした。

(やった…これで合法的にサイトさんに近づける！)

『さらなる命令があるまで、目標とできるだけ親密な関係を築いて信頼を得る』

というのが、シエスタに下されたさらなる命令だった。

(でも初日から近づくのは怪しまれるかも…様子を見て声をかけましょう)

そう考えながら彼女は仕事に戻っていった。

才人のことを見ている人物は他にも存在した シエスタのように直接ではなく

間接的に、だが。トリステイン魔法学院の真上、50、000フィート（15、200m）

という高高度を飛行しているのはゲルマニア空軍のRQ-4 グローバルホーク

無人偵察機だった。トリステインにリーダーなど存在しないので、

三国同盟は

いつでも好きな場所に偵察機を送り込むことができた。しかも7年前の戦闘で

トリステインのフネは全部撃沈されたので、空を守っているのは竜騎士だけ

であり、その竜騎士は高高度を飛ぶことはできない。故に発見されることは

ないのである。

普段はPFLTからの報告をもらった武器庫や、移動中の要人、再建中のフネ

などを偵察している。この偵察機はトリステイン国内の物流を偵察しており、

燃料が残り少なくなったので帰投する途中だった。が、国防総省からの緊急命令が下り、たまたま基地への帰還コースに魔法学院が重なっていたこの偵察機は、命令を受けて再び偵察機器の電源をオンにした。

そのグローバルホークが捉えているのは他でもない才人である。ベイツ

からの報告を受けたウィリアムが司令室に駆け込んで空軍に指示を出した

のであった。空軍参謀総長はそれを快諾し、すぐに作業を開始した。

そして今。国防総省にいるウィリアムと財務省にいるデクスター、ウィン

ドボナ城にいる国王アルブレヒト3世に国王首席補佐官のヴィンセントが

電話会議をしながら才人を見ていた。

「ほう、これがウィルとデックスの世界から来た少年か…」

アルブレヒト3世がそう呟くと、ヴィンセントが素早く彼の資料を差し出す。

「その通りです、陛下。召喚したのはヴァリエール家三女で、召喚されたのは

平賀才人、17歳。日本国出身の高校生だそうです」

「日本…久しぶりに聞いたな、それ」

ウィリアムがそう言うとデクスターも相槌をうつ。

「全くだな。そういえばこっちにも似たような形の列島があったっけ。あそこに

国を作る時は日本って名前にしようぜ」

「同感」

そして才人がルイズにキスされて左手にルーンが刻まれる。

「やっぱりそうなるのね」

デクスターが呟く。

「主人公補正つてやつかな？ まあ原作通りだな。めでたく彼はガンダールヴに

なりました〜、ってか」

「が、ガンダールヴですって！？ あの虚無の使い魔の！？」

ヴィンセントが驚いて聞き直した。

「ルイズがトリステインの虚無の担い手ですからね。当然の結果でしょう」

ウィリアムはニヤリとしながら続ける。

「まあご心配はいりませんよ。現在トリステイン王家が保有している2つの

『始祖の秘宝』は偽物にすり替えてありますから。連中は未だに盗まれた

ことに気付いていないので、彼女が虚無に目覚めることはないでしょう。

ちなみに本物はウィンドボナ城の俺の部屋の押し入れに放り込んであります」

それを聞いた国王は盛大に笑った。

「そうか、よくやった息子よ。にしても、偽物だということに気付いていない

だって？ そりゃ傑作だな！ あっはっはっはっは！！」

ひとしきり笑った後。

「で、この異世界の少年はどうするつもりだ？」

「もちろん救出いたします。彼は巻き込まれただけなのですから。ただ……

直ちに救出する、というわけではありません」

「ほう、なぜだ？」

「貴族のひどさ、ってやつを知ってもらってからの方が良いかと。そうすれば

彼も逃げ出したくなるでしょう。そこにサッと手を差し伸べるのが、貴族と

平民の差別が全くない我がゲルマニアです。彼が今いるのは今だけに差別が

残っている残念で愚かなトリステイン。さて、彼はどちらの国に残りたい

と考えるでしょうか？」

ヴィンセントはそれを聞いて感心した表情を浮かべた。

「…素晴らしい考えですね。実際に彼を救出するのはPFLTが行うのですか？」

「そうです。ついでに学院にいる貴族の連中にも嫌がらせをしようかと」

ウィリアムは救出作戦の概要をまとめたデータをそれぞれに送信した。

「これは……ですが大丈夫なのですか？」

「大丈夫です。すでに我が国に移住済みですから」

「なるほど」

「なら問題ないな」

「そうだな。よろしい、これで進めてくれ」

「了解です」

そして会議は終わった。

くその日の夜、ルイズの寝室く

Side 平賀才人

あ…ありのまま今日起こった事を話すぜ！

『俺は秋葉原で修理に出していたノートパソコンを受け取って家に帰ろうと

思ったら、いつのまにか異世界で使い魔になっていた』

な…何を言ってるのかわからねーと思うが俺も何をされたのかわからなかった…

頭がどうにかなりそうだった…超スピードだとか催眠術だとかそん

なチャチな

もんじゃあ断じてねえ…もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…

いきなりキスされたと思ったらとても痛くて気絶するし、さっき起きて

痛かった左手の甲を見るとなんか読めないけど文字っぽいのが刻んであるし、

隣のベッドでは俺にキスしたルイズとかいうチビの貧乳がグースカ寝ているし、

拳句の果てにこの女が俺のご主人様だつて？ 冗談も程々にしてくれよ！

なんで俺はこんなことに巻き込まれてんだ！？ ただ日本で普通に暮らして

いただけなのに！

「誰か………ここから助けてくれ………」

そんな俺の呟きは誰にも聞かれることはなかった…

S i d e o u t

続く！

第25話：原作開始！（後書き）

エージェント・47は「Hitmanシリーズ」でお馴染みの
バーコードハゲの暗殺者です。あのゲームは面白かったです。
特に「Blood Money」は良かった。

せっかく原作が始まったのにルイズと才人の台詞が少ない…
もっと増やさないと！
ていうか全体的に短い…申し訳ないです。

今回は才人がルイズと貴族を恨み始めます（予定）。
では

第26話：坊主憎けりや袈裟まで憎い（前書き）

「その人を憎むあまりに、その人に関係のある事物すべてを憎むこと」

という意味のことわざです。

第26話：坊主憎けりや袈裟まで憎い

鶏くコケコッコー！

今日もハルケギニアに朝が来る。朝食を食べて仕事へ行く人や、家に残り

自分の子供の面倒を見る人、夜勤を終えて自宅に戻りベッドに倒れこむ人

などがある。国や文化、宗教が異なっても、基本的にどの国でも見られる

光景であった。

そんな中、トリステインにいるある少年は、自分より年下の少女に叩き

起こされて、早朝にも関わらず彼女の洗濯物を洗わされていた。その少年は

いきなりこの世界に召喚され、本人の意志とは関係なしに使い魔にされた

なんとも不幸な少年であった。

その少年の名は、平賀才人という。

Side 才人

ゴシゴシゴシゴシ…

こんな朝っぱらから、俺は広場にある水汲み場でルイズの洗濯物を洗っている。

つたくあの貧乳は何様のつもりだよ…あ、俺のご主人様か…あああ
あ、もう！

全くいらいらするぜ！ 昨日もイライラしながら寝たし、今日も人がぐっすり
寝てるっていうのに叩き起こしやがって…本当にストレスが貯まるな。

まあ1つだけいいことがあった。この水汲み場に洗濯板があったことだ。あの
貧乳チビはそんなものくれなかったしな。誰が用意してくれたか知らないけど、

ほんと感謝だね。

「よし、これで終わったな」

ようやく洗濯が終わって俺は立ち上がるつもりとした。が、ずつとうんこ座りで

洗濯をしていたので足がしびれていたのを忘れていた。なので俺はそのまま

後ろに転びそうになった。

「うわっ！！」

だけど、尻餅をつく前に誰かが俺を支えてくれた。

「大丈夫ですか？」

振り向くと、そこにはどこかの断崖絶壁（胸囲的な意味で）とは違い、

素晴らしい女性の象徴を持ったメイドさんがいた。

「あ、ああ。大丈夫だ。ありがとな、えつと…」

「私はシエスタと申します。この学院でメイドをしています」

「俺は平賀才人、昨日ルイズとかいうやつに召喚されちゃった」

「そうなんですか！ 使用人達の間でもかなり噂になってますよ。貴族様が

平民の方を召喚されたって」

「そ、そうか、もう噂に…はあ」

ちなみに俺は知らなかったが、使用人達（全員PFLT）はルイズのことを

『民間人を召喚した爆発貴族娘クソワロスWWW』

と馬鹿にしていたのだった。

（しかし…）

俺はシエスタを、正確にはシエスタの胸を見ながら

（諸君 私は巨乳が好きだ

諸君 私は巨乳が好きだ

諸君 私は巨乳が好きだ

Eカップが好きだ

Fカップが好きだ

Gカップが好きだ

以下略）

ということをコンマ数秒で考えていた。煩惱マジパネエツス。

「えっと、才人さんって呼んでもいいですか？」

「え？ ああ、うんいいよ。その方が呼びやすいだろ？」

「はい！」

ああ…この世界に来て初めて綺麗な女の子の笑顔を見れた…ストレスだらけ

だった俺の心が癒されるぜ…そしてあの胸。完璧だ。シエスタが俺のご主人様
だったらよかったのに！

でもよく見るとシエスタってなんかこう…日本人っぽいんだよなあ。

もしかして…ダメもとで聞いてみるか。

「なあシエスタ。日本って国を知ってるか？」

「日本？ 確か私の祖父が酔っ払ってそんなことを…」

「な、なんだってー！？」

詳しく聞いたら、シエスタお爺さんは”竜の羽衣”っていう空を飛ぶ

ものに乗ってきたんだと。数年前に亡くなったらしい。

「そうか…生きてる間に会いたかったなあ。そうだ！ 今度シエスタの故郷に

連れて行ってくれよ！ その竜の羽衣つてのが見たいんだ！」

するとシエスタはなんか残念そうな表情を浮かべた。

「すみません、もうないんです。数年前に売ってしまっただけです。あ、でも祖父が

持っていた絵に写ってますよ。これです」

シエスタがポケットから大事に取り出したのは一枚の白黒写真。そこには。

「…これが竜の羽衣？」

「ええ、そうですね…才人さん、ご存知なのですか？」

「知ってるも何も…」

そこに写っていたのは零式艦上戦闘機、第二次世界大戦時の大日本帝国海軍の

主力戦闘機だった。軍事にはそこまで詳しくはなかった俺でもそれくらいは

知識として知っていた。写真に写っているまだ若いシエスタのお爺さんは、

愛機の隣にいて笑顔で敬礼をしていた。

「…なあシエスタ。お爺さんのお墓参りに行ってもいいかな？ 同じ国の

人間として挨拶しておかないと思ってね」

「…わかりました。今度必ずご案内します」

そしてシエスタは仕事があるといって校舎に消えていった。

「：おし！　なんか元気が出たな。じゃあそろそろクソ貧乳の部屋に戻りますかね」

朝起こされた時よりも心がすっきりした俺は、洗った洗濯物を持ち上げて部屋に戻っていった。

S i d e o u t

そんな才人を物陰から見ていたシエスタはフッフと笑いながら呟いた。

「ええ、必ずご案内しますわ才人さん。それも近いうちに、ね？」

「数時間後、ゲルマニア国防総省、地下司令部」

ここでは常に多くの軍人が仕事をしている。各地からの報告を受けたり、

警戒中のバンシーと交信したり、各軍の訓練状況を確認したり、三国同盟軍の合同演習計画をまとめたりなどなど。

そんな忙しい地下司令部の一画では、軍服を着た2人の軍曹が6つある

パソコンの液晶モニターとにらめっこをしていた。2人とも眼の下に隈が

できている。ここは無人偵察機から送られてきた映像を分析する区画である。

前の日の朝から仕事をしている2人は、絶えず襲いかかってくる凄まじい

眠気を気合で何とかしながら仕事をしていた。

「……………牛が153匹……………牛が154匹……………」

「ちょっと待て。牛の数え方って1頭、2頭じゃなかったか？」

「気にするな。ていうか俺のモニター牛だらけなんだけど。そっちはどうよ？」

「こつちも特にないな。1番機はアカデミーの上にいるし2番機は帰投中だ」

トリステインの王立魔法研究所、通称「アカデミー」は7年前にゲルマニア海軍の巡航ミサイルの直撃を受けて地図上から消滅したが数年後に再建された。もしまた戦争が始まったら間違いなくまた巡航ミサイルが撃ちこまれるだろうな、と2人は考えていた。

「んで…3番機は今魔法学院の上空を通過して…ん？」

「どうした？」

椅子を後ろに傾けながらモニターを見ていた男が急に真面目モードになった。

「長官が言ってた例の少年が貴族らしき男と戦ってるぞ！」

「マジで？ ヤバくねえかそれ？」

「だな。すぐに知らせよう」

そう言っつて男はそばにおいてあった電話を取り上げて上司に報告。その上司が

長官に知らせるとすぐさま分析区画まですっ飛んできた。

「ご苦労さん。早速見せてくれ」

「了解！」

そして隣のモニターに才人とギーシュが戦っている様子が映し出さ

れた。

「おお、やってるやってる」

「長官、彼が伝説の虚無の使い魔というのは…」

「事実だ。『武器であればどんな物でも自由自在に扱える』と言われている

『神の左手・ガンダールヴ』。それがあの少年だ」

「なるほど…ならこの少年は勝てますね！」

事実、才人は剣を振り回しギーシユのゴーレムを切り刻んでいた。

「…確かに彼はルーンのお陰でどんな武器も自在に扱えるだろう」

とウィリアム。

「だが彼は戦闘のプロではない。というか戦闘なんて人生で初めてだろう。」

それに対して相手は軍人一家のグラモン家の4男。それなりに戦闘訓練を

受けているはずだ。だからこの勝負はどちらかが体力切れになるまで

決まらないと俺は考えている」

そして5分後。その言葉が現実のものとなった。

「あーあ、少年が…」

原作とは異なり才人が体力切れを起こし気絶してしまったのだ。

「長官の仰った通りになりました、っておい、何してんだあいつ!？」

男が声を荒らげたのも無理も無い。なんとギーシュはゴーレムを使
つて

気絶した才人を蹴ったり殴ったりし始めたのだ。それに便乗して他の
生徒達も才人に攻撃を始めた。

「リンチかよ…ひでえことをしやがる…」

もう1人の男も呟く。

「本当にトリスティンは民度が低いな」

ウィリアムもうんざりした口調で言う。しばらくして生徒達を止め
るために

教師達がやってきて、ボロボロになった才人が医務室に運ばれてい
った。

ルイズは超不機嫌そうな顔で付いて行った。

「かわいそうに…腕が折れていましたね。顔もパンパンに腫れて
いたし」

「全くだな。軍曹、至急この映像のコピーをくれないか？ 暗号化
レベルは

5で頼む。陛下にもこれを見せたほうがいいと思ってな」

「了解、すぐに」

『暗号化レベル5』は暗号化してから2時間が経過すると自動的にデータが
消滅する仕組みになっている。機密保全のためには必要なことである。

もう1人の軍曹が先ほどの映像を高度に暗号化し、それをUSBメモリーに入れる。

「お待たせ致しました、長官」

「ありがとう。2人とも明日まで寝てていいぞ。上司には俺から伝えておく。じゃ」

そう言うとウィリアムは颯爽と立ち去った。

「…やった」

「…寝れる」

その後2人はすぐに自宅に帰って柔らかいベッドにダイビングしたのであった。

10分後、ウィンドボナ城の国王執務室にウィリアムが飛び込んで、父親である
アルブレヒト3世に先ほどの映像を見せた。

「これは…なんということを。それにしてもあの連中は腐っているな」

国王は怒りを顕にしながら机を叩く。

「長官、すぐに彼を助け出すんだ！ あのままでは死んでしまうぞ」

「しかし予定よりも早すぎませんか？」

隣に控えていたヴィンセントが反論する。

「確かにあの少年は可哀想ですし、早急に救助すべきだと私も思います。ですが

予定を早めた場合、想定外の事態が発生する可能性も否定できません」

「その通りだ、ヴィンセント」

アルブレヒト3世は立ち上がり窓の側まで歩いていった。そして外を眺めながら
ゆっくりと話を続けた。

「お前の言うことはとことん正しい。もしあの少年を今助けた場合、どのような

事が起きるか私には想像もつかない。我々にとって良くないことが起きるかも

知れん。だがしかし。助けられるのに手を差し伸べないのは非常に

良くないと思う。ここであの少年を助けなかったら、我々もトリステインの

連中と同じになってしまつ。それは許しがたいことだ。もう我々は奴らとは違つのだ。今や連中こそが野蛮人であり、我々三国同盟は常識人だ。私は

あの野蛮人共に殺されてしまつ前に彼を救出したいのだ！ ヴインセント、

ウィリアム、やってくれないか？ 頼む」

ウィリアムは少し考えてから話し始めた。

「陛下、私は陛下の息子であり、この国の軍事と外交を指揮している陛下の

部下です。だからお願いをするのではなく、命令をすればいいのです。

簡単なことでしょうか？」

「そうですね、陛下。私は補佐官ですからどのような状況でも陛下をサポートさせて頂きます」

2人の言葉を受けて国王はニヤリと笑うと、

「なるほど…そうだったな」

と言った。そしてすぐに真面目な表情に戻る。

「国防長官、直ちにトリステイン魔法学院に監禁されている異世界の民間人を

救出・保護しろ。最優先事項だ！ 首席補佐官は彼を救出した場合に発生する

かもしれない事を国防長官と一緒に考えて報告しろ！」

「了解しました。すぐに救出作戦を開始いたします、陛下」

ウィリアムは敬礼をしてからポケットの携帯電話を取り出しベイツにかけた。

「フォーサーよりホトトギスへ。予定より早いが直ちに救出作戦を開始しろ」

「え、今日ですか！？ わかりました、直ちに開始いたします！」

ウィリアムとの電話を終えたベイツはすぐに作戦室に駆け込んだ。そして

学院のPFLTメンバー全員に作戦を開始するように、との命令が下った。

その時シエスタは傷ついた才人の手当てを終えてベッドの横に座っていた。

腕の骨折と腫れた顔はすぐに治ったが、未だに意識が戻らない。主人である

ルイズはここにはいない。気絶している才人を放置して部屋に戻ったからだ。

医務室までは来たものの、医者話を聞いたらすぐに出て行ってしまった。

なんて薄情なチビ貧乳なクソツタレだろう、とシエスタは思った。

そこに作戦開始の連絡が入った。彼女は

（なんとというグッドタイミングー！）

と心の中で大喜びした。近いうちに必ずタルブの村を案内するといっただけ、

こんなに早いうちにいけるとは思っていなかったのだ。

S i d e ルイズ

「全くもう！ あの馬鹿で役立たずの犬！」

私は持っていた枕を思いつきり壁に叩きつけた。

「本当に使えないわね！ せっかく召喚したと思ったら平民だし、
礼儀が

なっていないし、何も出来ないし！」

使い魔があれだと私の評判はさらに落ちちゃう。どうしよう…

「あ…そうだ」

そして私の脳内に素晴らしい考えが浮かんだ。

今…の…使い魔…を…始末…して、…新…しい…使い魔…を…召喚…すれば…いい…じゃない！
なんて完璧な考えなの！ 使えないのはいらから捨てればいい
のよ！

「でもあれは今医務室にいるんだっけ…部屋に帰ってきたらご飯を
あげましょう。」

その中に毒でも仕込めば…でも毒なんてどこで…あ、医務室にき
つとあるはず

だわ！ 早速探しましょう！」

そして医務室に行くとメイドの1人が私の使い魔の面倒を見ていた。
物好きね。

するとそのメイドがこんなことを言ってきた。

「ヴァリエール様！ 才人さんの御見舞いに来たのですか？」

「……………は？ そんなわけないでしょ？ 医者はどこ？」

「…申し訳入りませんが今席を外しております。お怪我でもされたのですか？」

いないのか…ちょうどいいわね。

「いないの？ じゃあ勝手に使わせてもらっわ。ちょっと引っ掻いちゃって」

「そうですか。ならお手伝いいたします」

「い、いいの、自分でやるから。あんたは使い魔を見ててよ。あ、起きたら

部屋に来るようにつて伝えといて」

「…はい、わかりました」

メイドが見ていない隙に私は戸棚を開いて痛み止めの薬瓶をポケットにしまい

医務室を後にした。この薬はきちんと飲めばきちんとした効果を発揮するけど、

過剰摂取すると猛毒になってしまう。エレオノールお姉さまが前にそう教えてくれたの。

「これで…フフフフフフフ」

さあ早くあの使えないのを始末して新しい使い魔を呼ぼうと！
次は竜とか

なんかこう、かっこいいのがいいな！

でも私は気が付かなかった。使い魔が寝ているベッドの横に手鏡
が置いて

あって、メイドが私の行動の一部始終を見ていたことに…

S i d e o u t

（その日の夜）

Side 才人

体のあちこちが痛くて俺は起きた。ここは…保健室かな？ あれ、
なんで

俺こんな所に…そこまで考えた時、俺は全部思い出した。そっだ、
俺あの
いけ好かない金髪ナルシストと決闘をしたんだっけ…でも途中から
記憶が
ないな…

「才人さん、起きてますか？」

すると隣からシエスタの声が聞こえた。

「ああ、今起きたとこ、いてててて！」

上半身を起こそうとしたら右腕に激痛が走った。なんでこんなに痛いんだ？

「まだ動いちゃ駄目ですよ！ 治療したとはいえ折れてたんですから！」

「え？ 折れた？ 何のことだ？」

するとシエスタは悲しげな表情を浮かべながら話してくれた。まとめると

・体力切れでぶっ倒れた俺にギーシュって奴がゴーレムで攻撃した
・それに便乗した5、6人の生徒達も俺を殴ったり蹴ったり踏んづけたりした

・教師が駆けつける頃には俺の右腕は折れ、全身痣だらけ、顔面ボロボロ

・主人のルイズはそんな俺を無視してさっさと部屋に帰ってしまった

だそうだ。手鏡を貸してもらって顔を見てみると、あちこちに痣ができており、

まだ真っ赤に腫れているところもあった。すると俺は腹の中でどす黒い何かが

生まれるのをはつきりと感じた。気が付くと俺は、それほど痛くない左手の拳を

血が引くほど固く握り締めながら、今思っていることをそのまま口にしていた。

「…なんて奴らだ。別にあの金髪に負けたのはいいさ。それは俺の力不足

だから。ただ戦闘不能の、無抵抗の人間にこんな仕打ちをするな

んて…

ふざけやがって。貴族つてのは全員こうなのか？ 人間じゃねえよ。

しかもあのチビ貧乳は使い魔無視して部屋でくつろいでんのか…
くそつたれが…できることなら…」

そこから先は言えなかった。できることなら貴族のクソツタレ共を
全員…

「ぶつ殺してやりたい、ですか？」

「え？」

顔を上げるとそこにはいつもとは違い、冷たい表情を浮かべたシエスタがいた。

いつの間にか彼女はポケットから青色の丸い石を取り出していた。

「飛石」

じゃあなさそうだけどきれいだな。シエスタはそれを握りながら再び口を開く。

「言葉のアヤなどではなく、本心でそう言えますか？」

…本心で、か。俺はこの世界に来てからまともな扱いを受けてない。
例外は

このシエスタ等のメイドさん達や厨房の人達だけだ。他の人からは
ひどい

仕打ちしか受けていない。貴族と平民。それだけの差で奴らはひど
い差別を

しやがる。同じ人間なのに！ いや、あいつらは平民を人間として
見ている

いないんだ。そんな奴らは全員…

「俺は…あんなことをする貴族は全員死ねばいいと思う！ 貴族だからって

偉そうにしゃがって！ 俺はあいつらを絶対に許さない！」

するとシエスタは笑顔でこう言ってきた。

「そう言ってくれると思いましたよ、才人さん。なら私達がお手伝いします」

「私達？」

「ええ」

シエスタはニヤリとしながら誇らしげに言った。

「私達 P F L T、トリステイン解放人民戦線が」

…なんか似たような名前を地球で聞いたことがあるのは気のせいだろうか！

ともかく、俺は彼女の話を書くことにした。面白そうだし！

S i d e o u t

۱۱۱۱۱

第26話：坊主憎けりや袈裟まで憎い（後書き）

なんか変な感じで終わってしまいましたね。ていうか文章が変。

ルイズが最悪？ 才人が単純？ 気にしたら負けです。

ともかくこれで才人は完璧なアンチ貴族に。

全ては私のシナリオ通り（ニヤリ）

次回は大脱走！ そしてデルフ初登場！
では

第27話：才人「あゝばよあゝひぐんにゆゝう」(前書き)

誰のことを言っているかは誰にでもわかるでしょう。

あと今回デルフは出て来ません、すいません！

ではごいびねー！

第27話：才人「あゝばよゝゝひゝんにゆゝう」

「深夜、トリステイン魔法学院から2km離れた小さな森の中」

「マッドスキッパー（トビハゼ）よりシタデル（城塞）へ。最新の状況は？」

「こちらシタデル。状況に変化はない。作戦を続行せよ」

「了解した。マッドスキッパー通信終わり」

魔法学院の上空を飛行しているゲルマニア空軍のE-3C セント
リーAWACS、コール

サイン『シタデル』との交信を終えた男 コールサイン『マッドス
キッパー』は、

草むらからそつと立ち上がった。彼は真っ黒な戦闘服に身を包み完
全武装していた。

周りには彼と同じ格好をした男が11人いた。

「よし、作戦開始だ。行くぞ！」

12人の男達は闇に紛れながら魔法学院へ向かった。彼らは詳細な
地図と高性能な

コンピュータを使って、この動きを何度となく予行練習している。
今はただそれを

実行するだけだ。また彼ら PFLT特殊部隊 は、昔の厳しい訓
練を思い出しながら

進んでいた。訓練教官の怒鳴り声が今でも頭に残っている。

（体を低くしろ！ 遮蔽物を使い！ 背中を丸めて小走りに走れ！
蛇の

ように匍匐前進をしろ！ 銃の薬室に弾薬を送り込み、安全装置
を外せ！

引き金に指をかける！ 前の地面をそつと指先でなぞれ！地面に
仕掛けて

あるかもしれない罠をかすかに感じられないか？ 深く静かにゆ
っくりと

呼吸して、体から疲労の毒素を出し、五感を研ぎ澄ませ！ 最後
に決して

立ち止まるな！ 走り続ける！ 走れない戦士に勝利などない！

トリスティン魔法学院、医務室

暗い医務室の中で才人は1人ベッドで寝ていた。いや、寝ているふりをしていた。

その理由は数時間前のシエスタとの会話にあった。

)

))

)))

数時間前、医務室。

「ほ、本当に？」

「ええ、本当ですよ。ここから逃してさしあげます」

シエスタの言葉に才人は目をぱちくりした。

「な、なんで？ ていうかPFLTって？」

「まずはそこから説明しましょうか。PFLTとは…かくかくしかじか」

シエスタ説明中…

「なるほど、シカクイムーブってことか。で、なんで俺を助けてく

れるんだ？」

「それはわかりません。一隊員である私にはそこまでは…ですが本部からの

最優先命令、とだけ言っておきます。とにかく今日深夜に脱出します」

「ど、どうやって!?! 兵隊が警備してんじゃないのか？」

才人は勢い良く聞いた。

「落ち着いてください…この学院で働いている平民は全員味方ですのでご安心を。」

教師が深夜巡回することになっていますが、まともはその仕事をしているのは

1人しかいませんし、今日はその人ではありません。ですので簡単に抜け出せる

でしょう」

「そ、そっか。で、俺は何をすればいいんだ？」

「これを」

そう言ってシエスタが差し出したのは2粒の白い錠剤だった。

「短時間ではありますが、身体能力を高めることができます。それに

体の痛みも一時的に感じなくなりますので。深夜にドアが3回ノック

されたら、これを飲んで窓から外に出てください。私が待ってい

ます。

そして厨房まで行き、予め掘ってある地下トンネルを使い脱出、その後才人さんは私と他数名と共にタルブ村に向かいます」

「そこって、確かシエスタの故郷じゃ？」

「ええ。それと同時にPFLTの基地でもありません。隠れていますけどね。」

何か質問はありますか？」

「…いやない。じゃあ今夜だな。あ、でもルイズはどうするんだ？」

才人がルイズの名前を出すと、シエスタは目を鋭くした。

「才人さん、くれぐれもあの貧乳には気をつけて下さい。特に彼女が持つて

きた食事には絶対に手を付けないでください」

「なんでだ？　もしかして料理が下手とか？」

それなら良かったのですが、とシエスタは前置きして話した。

「…先程才人さんが寝ている時に彼女がここに来ました。そして布を探す

ふりをして痛み止めを瓶ごと掻っ攫っていくのを見ました」

「痛み止め？」

「ええ。正しく使えば痛み止めとして機能するのですが…過剰に摂取すると

死に至るものなのです。おそらく才人さんを殺そうとしているの
でしょう」

「な、なんで俺が殺されなきゃいけないんだ!？」

「恐らく自分の求めていた使い魔ではないからでしょう。才人さん
を殺して

新しい使い魔を召喚しようと考えているのではないかと」

「…なんて奴だ！ 命を何だと思っていやがる!」

「そついう連中なんですよ、この国の貴族共は。では夜に会いまし
ょう」

~~~~~

~~~~~

）

そして今に至るわけである。シエスタが言ってたようにルイズが1
度やってきた。

それも料理のお盆を持って。いらないうと怒り出し「食べる!

!」と言い

ながら詰め寄せられた。見かねた医者（PFLT）がルイズに

「彼は口の中がまだ切れていてご飯を食べられません。明日まで待つ
てください」

と言って追い返した。ナイス、先生！

そんなことを考えていたら、扉が3回ノックされた。すぐに俺は枕の下にしまつて

おいた錠剤を水なしで飲む。するとあら不思議、体の痛みが消えて力がみなぎって

くるではないですか。ベッドから飛び出て窓の外に出ると、そこにはシエスタと

7人のメイドさんがいた。

「行きましょう。くれぐれも静かに」

「わかった」

先導するシエスタ達メイド一個分隊におとなしくついていく才人であつた。

厨房に着くと床板が外されていて、中には大きな穴が開いていた。そして

いつもはコック服の料理人達や他のメイドさん達が完全武装して待機していた。

彼らが持っていた銃が地球製のそれと酷似していたので、才人はびつくりした。

その中から1人の男が才人に向かって歩いてきた。

「よし、君が平賀才人君だな？ 私はPFLT特殊部隊のキースだ。今回の救出作戦の指揮をしている。君はこれを持ってシエスタの後に付いていくんだ。それほど

広いトンネルではないが我慢してくれ。トンネルを出ると別働隊が待っている

から安心してくれ」

ちなみに彼が『マッドスキッパー』である。

「あ、はい、わかりましたキースさん」

受け取ったリュックには、才人がこの世界に召喚された時に持っていた大事なノートパソコンと、携帯食料に水のペットボトル、懐中電灯などが入っていた。

「では行きましょう、才人さん」

シエスタが声をかけたその時、外を警備していた1人の男が慌てながら無線で報告した。

「こちらレッド2！ 2時の方向から女がやって来る。おそらく巡回だ」

「何だと！？ 普段やってないくせに今日に限って…」

「いいから明かりを消せ！」

懐中電灯とランプの明かりが瞬時に消されて厨房は真っ暗になった。

「巡回つてこの中にも来るのか？」

才人はひそひそとシエスタに聞く。

「いいえ。いつも学園をぐるりと回つて宝物庫をチェックしてそれで終了です」

「どつやら今日の巡回当番は気が変わったらしいな」

と、キース。外をこつそり見ると女性がこつちに来るのが見えた。

「くそっ」

誰かが小さな声で毒づいた。それは全員が思っていることであった。

その女性 シュヴルーズは決して巡回を望んでやっているわけはなかった。

今日の教師会議でオスマン校長に「サボったら給料天引き」と言われたからで

ある。なのでこうして仕方なくランタン片手に夜の学院を歩いてい

るのであった。

厨房が見える辺りに来ると彼女はふと、お腹が減っていることに気が付いた。

夕食はきちんと食べたのだが、巡回をしたら少し小腹がすいてきたのだ。

もしかしたら厨房になにか食べられるものがあるかもしれない。そんなことを

考えながら彼女は厨房の扉をくぐった。誰もいない厨房の中をランタンを頼りに

倉庫まで行くと、りんごがいっぱい置いてあったので、彼女は3つほどポケットに

放り込み帰ろうとした。

しかし倉庫の扉を開くと、そこには黒い服に身を包んだ巨漢が立っていた。

「こんばんわ」

シュヴルーズが反応する前に、キースはテイザーを至近距離から発射した。

電撃を放つ金属の爪2本が彼女の服を貫いて刺さり、彼女は叫び声をあげる

間もなく崩れ倒れた。

「さてと、おいリック！ その辺の酒を持ってこい！」

キースは気絶した彼女を仰向けに寝かせてから部下の1人に命令し

た。

「酒？ これですね、ってこれ料理用ですけど…」

「いいからいいから」

わけも分からず、とりあえずリックは瓶に入っている料理用の酒をキースに渡した。

するとキースはそれをシュヴルーズに飲ませ始めた。だがなかなか飲めずに口から

こぼれて服が濡れていく。

「た、隊長！？ 何してんですか？」

「胃の中にアルコールを入れといて、服にも多少かけておく。そして仕上げに

麻酔薬を注射しておけば、立派な巡回サボリ犯&寝坊&酔っぱらいになる。

要はこいつに全部なすりつけようって話だ」

「なるほど！ 巡回をきちんとしていれば俺達の脱走を止められたのに、酒を

飲んで酔って寝ていて逃げられました、っていいことですか」

「そういうことだ。衛生兵、注射を頼む。じゃあ才人君、行こうか」

「は、はい！」

手際の良さに見とれていた才人はシエスタの後に付いて行った。その後を

他のメンバーも付いていく。最後にトンネルに入ったのはキースだった。

彼はトンネルの入り口付近で何かをしてから撤退した。

20分も歩いただろうか、トンネルを歩いていた才人の目にはしごが見えた。

それを登ると、そこは森のど真ん中だった。周りを見ると、キースのような服装をした男達がいた。

「君が才人君か。おめでとう、これで作戦の第1段階は成功だ。シエスタと

一緒にあの馬車に乗ってタルブまで行くんだ。そこに着いたら温かい

食事と風呂にありつけるぞ」

「ほんとうですか！ わかりまし、ウツグアアアアアアア！！！！！！！」

だが馬車に乗ろうとした瞬間、才人は突然胸を押さえながら地面に倒れた。

「才人さん！？」

「おい、しっかりしろ!!」

強靱な肉体を持つ男が3人がかりで暴れる才人を押さえ、叫び声を
出ないように

口を塞いだ。衛生兵がすつ飛んできて体を調べたが、心拍数が急上
昇している

ということ以外何もわからなかった。

「いったいどこが悪いんだ、つてん？」

衛生兵は才人の左手のルーンが強く光っていることに気付いた。

「そうか、これはルーンの洗脳効果が働いているんだ！ 才人君は
今の主人が

嫌で嫌で仕方がなくてここまで逃げてきたが、このルーンのせい
で逃げよう

とすると苦しんでしまうんだ」

「どうすれば治る？」

キースが語気鋭く尋ねると、衛生兵は悲しげに言った。

「才人君をこの苦しみから開放する方法は3つだけです。1つ、主
人の所へ戻ること。

2つ、主人が死ぬこと。もう1つは…才人君自身が死ぬことです。
使い魔の契約が

解除されない限り治せません」

「そんな…ひどい…」

「使い魔のルーンにはそんな効果があったのか…」

そうしている間も才人は苦しんでいる。どうすればいいか必死に考えていたが、

今ルイズを殺す事はできない、とキースは考えていた。というのも、今回の救出

作戦では『敵味方双方に死傷者を出さないこと』という条件があるからだ。

とりあえず衛生兵が鎮痛剤を打ったが、見たところ何の効果もなかった。

「どうしたらいいんでしょう…才さんを死なせるわけには…」

シエスタがそう呟いた。その時どこからともなく1人の女性が現れた。

「誰だ!？」

慌てて男達は銃を構えるが、女性の顔を見てすぐに警戒を解いた。

「ああ、あなたでしたか、バーンスタイン少佐殿」

「久しぶりだな、キース」

テファ達をアルピオンから脱出させるのに貢献したG C I A エージエント、

エレナ・バーンスタインがそこにいた。

「その少年だが、助けることができるぞ」

『なんですって!?!』

周りにいた全員が驚いて返事をする。

「いいか？ 才人君が死ねばルーンは消える。そうすれば苦しまなくて済む。

そこでこのG C I A印の仮死薬と蘇生薬のセットでなんとかするのはないか」

そう言いながら取り出したのは2本の注射器。片方には緑色の薬物が、もう

片方には茶色の薬剤が入っていた。

「まずは茶色の薬剤をぶすつと」

「グアアアアア…ア…アウ……………」

苦しんでいた才人は仮死薬のせいであつという間に心臓が止まった。

「才人さん！ 返事をしてください！ 才人さああああああん
!?!」

「いや死んでないから。で、この状態で1分待つ」

すると左手のルーンがだんだんと薄くなっていき、1分後にはルーンはかすかに見える程度まで消えた。

「おお…」

「ルーンが消えて行くぞ……」

「よし。で、これを打てば……いいはずだ」

そして緑色の薬剤を注射すると、才人は息を吹き返した。

「……う、うん……あれ、苦しくない!」

「調子はどうだ?」

「は、はい、大丈夫です」

「そうか、では質問だ。主人の元に戻りたいか?」

才人は首をマツハで横に振りながら答える。

「とんでもない! あんな奴死ねばいい!」

「よし、治ってるな。ではタルブで会おう。私は他の仕事があるのでな」

そう言い残してバーンスタインは姿を消した。まるで最初からそこに居なかったかのように。

「……キースさん」

「……なんだ、シエスタ」

「バーンスタイン少佐って…人間ですか？」

「…ああ。俺は少佐を訓練時代から知っているが、昔からあんな感じだったよ…」

その後才人は馬車に乗ってのんびりとタルブ村まで行った。薬の効果が切れて

しばらく痛みに悶えていたのは内緒である。

次の日の朝、トリステイン魔法学院は朝から大騒ぎになっていた。メイドも

居ない、衛兵も居ない、料理人も居ない。貴族の世話をするはずの平民の従業員が

全員姿を消してしまったのだ。おまけに昨日の巡回当番のシュヴルーズは、厨房で

酒にまみれてぐっすりと寝ているのを発見された。息も酒臭かったので、

オスマン校長は

「巡回をサボり酔っ払って寝ている間に従業員に逃げられるなど言語道断」

と言い、その日のうちに彼女を解雇した。シュヴルーズは「黒服の大男が」

などと言っていたが、酔って寝ていた人間の言葉に耳を傾ける人は誰も居なかった。

絶望した彼女はその日の夜自宅で首を吊って自殺した。

他にもいなくなった人がいた。ルイズの使い魔である才人もまた、医務室

から姿を消したのだ。教師達が学院の近くを搜索したが何の痕跡もなかった。

厨房の地下にトンネルがあるのを見つけたが、教師の1人であるギトーが

トンネルに入った瞬間、設置してあった赤外線センサーが作動した。そして

ゲルマニア陸軍制式プラスチック結合爆薬5kgに埋め込まれた起爆装置に
発火電流が一瞬にして流れた。このキースがこっそり仕掛けた罫に
より、
厨房は空高く吹き飛び、トンネルは崩壊し、ついでにギトーもミン
チになった。
この事件は王宮にも知られ、魔法学院は一時休校となり、オスマン
校長は
責任を取らされてクビになった。

それと、殺そうとしていた使い魔に逃げられてしまったルイズ（
笑）は
精神不安定になり、他の生徒の使い魔に八つ当たりをしたり、色々
と暴れた
ため学院を退学し実家に引き取られた。

その後、全ての調査は王家が引き継いだ。まず行ったのは、学院
で働いていた
平民の従業員の追跡調査である。早速彼らの家族や親戚を探したが、
誰一人として
見つからなかった。近所の人に聞くと、

「ずいぶん前に引っ越した。どこに行ったのかは知らない」

という答えが帰ってきた。ならまだ国内にいるだろうと、捜査の国
全体に広げたが

いつになっても見つからなかった。シエスタの故郷であるタルブ村にも調査員がやってきたが、彼女の家族もまた引越済みであった。なので調査は打ち切り。
厨房が吹っ飛んだ原因は「魔法の暴走」ということになった。

続く…

第27話：才人「あゝばよゝゝひゝんにゆゝう」（後書き）

領空侵犯？ いつものことです。

今回はゲルマニアからお送りいたします。内容は才人のこれから、などなど。デルフも登場します。が、デックスが”少し”いじってます。

では

第28話：ようこそゲルマニアへ！（前書き）

助けだされた才人がゲルマニアの地に。
前回の最後からの続きです。

第28話：ようこそゲルマニアへ！

「才人救出から12時間後、ゲルマニア国防総省、長官執務室」

Side ウィリアム

ここからは俺が話そう。トリステインの対応を予想していた俺は、学院に

従業員と潜入し働いていたPFLTのメンバーの家族・親戚を、予めゲルマニアに

移住させていた。だからトリステインの連中は見つけることが出来なかった。

学院にいたPFLTメンバーは再び地下に潜伏した。例外としてシエスタには

才人をゲルマニアまで護衛しろと命令しておいた。もうそろそろ着くはず

なんだが…

そんなことを考えているとインターコムが鳴り、秘書のサリーの声が聞こえた。

「長官、2人が到着しました」

「わかった、そっちに行く。それと車を準備しておいてくれ」

「わかりました」

上着を着てから執務室の隣の小部屋に入ると、そこにはシエスタと才人がいた。

彼女は俺を見るやいなやすぐさま立ち上がり敬礼した。

「シエスタ、任務ご苦労だった。問題はなかったか？」

「いえ、何もありませんでした、長官」

「それは何よりだ」

そして俺は才人に手を伸ばした。

「初めまして、平賀才人君。私はゲルマニア王国国防長官兼國務長官の

ウィリアム・タイベリアス・フォン・ゲルマニアだ。ようこそ我が国へ。

我々は君を歓迎するよ」

俺の手をしっかりと握った才人は緊張しているようだった。

「は、初めまして！ 平賀才人って言います。あの、あなたが俺を助けるように

命令したのですか？」

「その辺の話は後だ。今から陛下に会いに行くから2人とも付いてきてくれ」

部屋に設置してある地下駐車場までの直通エレベーターに乗り込み、用意して

あった装甲リムジンで3人はウィンドボナ城に向かった。

車の中で

「あの、陛下って?」

と才人が尋ねた。それにシエスタが答える。

「ゲルマニア王国の国王であり、国防長官のお父上でもあるアルブレヒト」

3世陛下のことですよ」

「えっ!? 今から国王に会うんですか!?!」

「そうだ。君の救出を命令したのは陛下だからな」

「えっ」

話のスケールのデカさに才人はしばらくフリーズしていた。そりゃそうか。

そして30分後、親父の前に俺達3人がいた。ヴィンセントとデックスもいる。

「ようこそゲルマニアへ! 私がこの国の国王、アルブレヒト3世だ」

「お、お初にお目にかかります! 平賀才人です!」

「ああ、そんなに緊張せんでも良い。とりあえずお茶でも飲みながら話そう」

テーブルに座って紅茶を飲みながら親父は話を始めた。

「さて、まずは君が無事でよかったよ、平賀君」

「あ、ありがとうございます。途中で死にかけましたけど…」

「ああ、使い魔のルーンか。話は聞いているよ。実に恐ろしいことだ。ルーンに

洗脳効果があるとはな…次の国会で『使い魔召喚魔法禁止法』みたいなものを

作るとしよう」

「それはいいですね。次回の閣議までに骨子をまとめておきます」

そう言いながらヴィンセントはメモ帳に何かを記入した。

「頼む、ヴィンス。さて平賀君。色々と聞きたいことがあるんじゃないかね？」

「はい。まずはこの世界のことを教えて下さい。地球じゃないってことしか

わからないので…」

「わかった。デックス、軽く説明をしてくれ」

「あいあい。ああ、俺はウィリアムの弟のデクスターだ。デックスって呼んでくれ。」

「一応財務長官とエネルギー長官をやってる。よろしくな。んで、まずは…」

そして20分ほどかけてハルケギニアのこと、魔法のことについて説明した。

「…とまあこんなところか。何かわからなかったところはあるか？」

「…1つだけ。何故三国同盟以外の国は中世みたいなんですか？ここはまるで

地球にある大都市と瓜二つです。それに銃だってマスキット銃じゃないくて

現代的な銃だし…技術格差がありすぎじゃないですか？」

やはりそこに気付いたか…これは話すべきか否か。俺はチラッとデスクスに目を向けると、彼はかすかに首を振った。親父とヴィンスも同じようにしていたので、俺達兄弟が元地球人である事は話さないことにした。なので適当にでっちあげをすることに。

「実はな、この世界にはたまに君がいた世界の武器やらなんやらがやってくる

ことがあるんだ。それを解析してその技術を三国同盟で分かち合った結果、

周辺国との技術格差が生まれたというわけだ。トリスティンや口マリアの

連中には何百年かかってでも解析できんだらうよ」「

「なるほど、それで…」

ふう、納得してくれたようだ。それから才人は難しそうな顔をしながら聞いてきた。

「それで…俺はこれからどうなるんですか？」

「そうだな。君には2つの選択肢がある。1つ、元の世界に戻る。2つ、ここに

留まって君の主人だったルイズと、君をリンチした貴族の連中を根絶やしに

する。さあどっちがいい？」

「ちよつと待ってください！ 元の世界について、俺帰れるんですか！？」

「ああ。虚無魔法の1つ『世界扉（ワールド・ドア）』を使えば、君の家に

扉を出現させることだって可能だ。住所さえ教えてくれればな」

「すごい…」

ただし一方通行なんだよね、この魔法って。

「だが、君はトリスティンで屈辱的な扱いを受けた、そうだろう？ 仕返しも

しないで家に帰るっていうのは、俺だったら嫌だね。どうだろう、奴らに

復讐してから家に帰ろうと思わないか？」

「…そうだ。俺はアイツらを…貴族の連中をぶっ殺してやりたい！
平民を
人間扱いしないクソ野郎共を！ あ、すみません、汚いこと言っ
てしまって」

才人は親父に謝った。原作と違ってこういうところはきっちりして
るな。

「気にするな、平賀君。ではこうしよう。君にはPFLTの一員と
して訓練を受けて

もらおう。君のルーン『ガンダールヴ』は非常に素晴らしいもの
だが、それ

以前に君には体力や戦闘技術がない。訓練をすれば、君も優秀な
兵士となる

だろう。そして共にトリスティンをやっつけようではないか！」

親父が熱弁すると、才人は少し考えてからそれを承諾した。

「わかりました！ よろしくお願いします！」

「うむ、その意気だ！ デックス、平賀君にあれを」

「はい」

そう言いながらデックスが取り出したのは細長い木の箱。

「なんですかこれ？」

「君の武器だ。相棒って呼んだほうがいいかな。開けてみてくれ」

よろしくな、相棒！」

「おう！俺は平賀才人っていうんだ、よろしく！」

<テテテテツテテーツ　才人はデルフリンガーを手に入れた！>

「ん？　なんか効果音が聞こえた気が…」

「気のせいだけ、相棒」

「そっか」

その後他愛もない話をしてから解散となった。才人は再びトリス
ティンに
戻り、PFLTのキャンプで3ヶ月間の訓練を受けることに。どん
な運動音痴や
素人でも3ヶ月後には立派な戦士になる素晴らしい訓練である。

そしてシエスタにはある永続命令を下した。「才人の護衛」であ
る。まだ

立派な兵士ではない才人につきつきりて護衛しろと言っておいた。
彼女は

満面の笑みでそれを受諾した。そりゃ惚れてるんだもんな、才人に。
このままうまくつついてくれ。

才人との会談のあと、デックスはシャルロットとジョゼットとキユルケの3人とデートするとか言い始めた。今日の仕事は終わったのか、と聞いたなら「明日から本気出してやる」とかほざいたので、デックスの専属メイドであるリーダに仕事をさせるように言っておいた。俺がウィンドボナ城を出る頃にデックスの悲鳴が聞こえてきた気がしたけど気のせいだな、うん。普段は穏やかな性格のリーダだが、怒らせると超怖かったりする。俺の専属メイドのマギーは優しいので安心だな！で、俺は国防総省に戻って仕事の続きを始めた。特に急ぎの仕事はないのだがとりあえず全部見ていこうかね。

まずは我が国の航空宇宙局からの報告で、2つある月にレアメタルやらが腐るほどあるのがわかったそう。なるほどね…できれば採掘したいところだけど、まだそれは技術的に難しいかな。いや待てよ…確かこの辺に…あった！先月の国防技術開発局から報告書にマストドライバーの開発に成功したって書いてあった！これ使えば月に行けるんじゃないか

？

明日にでも親父に相談してみよう。

次は：海外拠点の事で報告があがっているな。まずはオーストラリア大陸

から。現地人に色々と教育をさせて作られた国である「オセアニア共和国」が

あったのだが、周辺の島国 地球で言うニュージールランドとかインドネシアとか

フィリピンとかをひとまとめにした結果、「オセアニア合衆国」となった。

三国同盟とは非常に親密な関係を維持しているので特に問題ない、か。アルミ

ニウムの原料であるボーキサイトの取引も順調で何よりだ。

次はロシア方面からの報告。厳しい寒さに耐えながらモスクワ基地を中心に

活動しているが、つい2週間前にどでかいダイヤモンド鉱山を発見したそう。

素晴らしい。早速採掘を開始させようかね。

はい次。えっとこれは北アメリカ大陸からだな。ほう、北アメリカ大陸を

調べつくしたか。南アメリカ大陸への進出許可を求めてきている。かなり

速いペースだな。様々な資源も見つかっているし、いいことだらけだな。

閣議で許可は下りるだろう。そろそろ先住民族に国を作らせたほうがいい
もいい
かも知れん。

これは…中東、サルート王国近郊のミドリイースト基地からの報告か。

ほう、最近になってまたエルフがサルート王国への攻撃を散発的に行っている、か。カウンターがあるから歩兵の銃では対抗できない、もっと強力な武器をPlease！ という要望書付きだ。いやはや、

カウンターってずるいな。あらゆる物理攻撃・魔法を跳ね返すってどうしと。確か「カウンター」の限界以上の攻撃をぶつけるか、虚無の

デイスペルで解除可能」だったな。カウンターの限界…どれくらいなの

だろうか？ 3年前に散弾ミサイル撃ち込んだけどエルフには効果がなかったから、それ以上の威力の兵器か…それなら航空機にあれを搭載しようかな。「ACE COMBAT X Skies of Deception」に出てきた

架空の兵器である「LSWM (Long range Shock Wave Missile)」を。

射程距離が5、6kmと短いけどあれなら低空でも使える。試しにやってみよう。

もし駄目だったらMOABの雨を降らせようかね。

で、お次は周辺諸国の事か。まずはトリスティン。王立魔法研究所に

潜入しているスパイからの報告だが…マジかよ。以前の国境戦で海軍が

たくさん撃った巡航ミサイルの1つが、目標到達前に故障して墜落した

そうなの。それをトリステインが回収して現在解体・調査中だそうだ。自爆信号を送ったけど壊れてたらしい。ん〜、機密保持のために破壊させるか…いや、どうせ連中には解析できないだろう。ならば放置するに限る。

次はロマリアだが何やら不穏な動きを見せているな。フネを一気に10隻も作っつけていやる。それもかなりの大きさを全長が200mを超えている。武装は最低限に留めてあり、多くの人や物資を載せることができるような設計に
なっているそうだ。完成すればロマリアが保有するフネは大小合わせて全部で45隻になる。意外と多いけど、完全武装しているフネはそのうち25隻だけだからなんとかかな。もしかして痩せ衰えた今の国を捨てて新天地にレッツゴー！ みたいなことをしでかすのか？ ま、そんなことをしたら展開中のバンシーに攻撃させよう。一撃で粉砕できるだろう。

最後にアルビオン。レコンキスタと王党派の戦闘は未だに続いている。
王党派には我が国が極秘裏に武器・弾薬・食料を夜間に空中投下している
ので、やろうと思えばいつまでも立てこもることができる。それに対して
レコンキスタは備蓄弾薬が底を付きそうなんだと。なのでシェフィールドを

仲介役にしてレコンキスタにも弾薬を少し提供してあげた。今潰れると

駄目だからな、もうちょっと戦っていて欲しい。

気付いたら太陽が地平線に隠れかかっていた。集中しているとあつという

間に時間が過ぎるね。仕事が終わったので俺はスキップしながら街に出かけた。

何故なら今日はイザベラ達とデートするからだ！きちんと仕事を終わらせたから誰にも文句は言わせないぞ！

「おい、ウィル！」「イザベラ、マチルダ

「あ、ウィルさん！」 テファ

「ウィリアムお兄様！」 ベアトリス

「待たせたな！ じゃあ行こうか！」

「「「「はいつー！」「」「」

俺は将来の妻達と一緒に夜の街に消えていった。

その頃財務省では。

「うづう…デートなのに…」

「いいからがんばってくださいね、ご主人様」

リーダに監視されながらデスクスがべそをかきながら仕事をして
いた。

続
く
…

第28話：ようこそゲルマニアへ！（後書き）

デルフはPFLTが予め購入してゲルマニアに運ばれた、という設定です。あとLSWMの射程距離ですが、実際にゲームをやってみました。HUDに表示される目標との距離が3,500以下になるとロックするので、それを元に計算をしました。

目標との距離は1000分の1マイル単位で示している（攻略本参照）ので、

$$\begin{aligned} 3,500 \div 1,000 &= 3.5 \text{ マイル} \\ 3.5 \text{ マイル} &= 5,633 \text{ m} \end{aligned}$$

ということと5.6kmとなりました。ミサイルにははるばると短い射程距離ですが、気にしないでください。きっとLSWMは普通のミサイルよりも重いんです…多分。

書いていてエルフ強すぎじゃね？ と思いましたが、精霊と仲良しになって魔法使うくらいですのでこれくらい強くてもいい、と自分で納得しました。

才人は戦うことを決意しました。彼には強くなってもらい、いつかルイズ達に復讐をしましょう。

今回は面倒くさいのでアルビオン内戦を終わらせてフェイズ3を完了させよう、なんて思っています。
では

第29話：レコンキスタ終了のお知らせ 前半（前書き）

2回に分けてアルビオン内戦を終わらせませす。

第29話：レコンキスタ終了のお知らせ 前半

（ゲルマニア、国防総省、長官執務室）

Side ウィリアム

才人がルイズの元から逃げ出してから4カ月が経った。ベイツからの報告に

よると、訓練キャンプでものごく鍛えられた結果、彼は一人前の兵士となった。

デルフもうまく使いこなせるようになり、戦闘技術も身につけたので、戦いの時には最前線で頑張ってくれるだろう。

俺はその報告書をデスクに放り投げると、他の書類を片手に1人寂しくぬるく

なったコーヒーズをずると音を立てながら飲んだ。この仕事を始めてから
できた癖である。何かを飲みながらでないと集中できなくなってしまったのだ。

今はコーヒーズを毎日がぶがぶ飲んでいるが、昔はアルピオン産の紅茶を飲んで
いた。何故コーヒーズに鞍替えしたのかというと、単純に紅茶が飽きたからだ。

そんなことをしていると執務室の扉が開いて秘書のサリーの顔が現れた。

「長官、G C I Aのバーグストラム長官がお見えになりました。大至急報告したい」

「ことがあるそうです」

「わかった、通してくれ。あとコーヒーのおかわりも」

デスクの上の書類を片付けるとバーグストラムが入ってきた。

「おはようございます、閣下」

そして微笑を浮かべながら

「ウィル」

と言った。レナード・バーグストラムとはゲルマニア革命の時から
の付き合いだ。

なので彼は俺のことを「ウィル」と、俺は彼のことを「レイ」と呼ぶ。彼はまだ

25歳と非常に若い、頭の回転が早く、柔軟性にも優れている優秀な人間である。

「アポ無しで申し訳ない、だが急を要する内容なのだ」

「構わんよ、レイ。かけてくれ」

椅子をすすめてやってきたコーヒーを飲みながらバーグストラムは話し始めた。

「でだ。トリスタニア王宮に潜入しているスパイから先程緊急の報

告があつた。

トリステイン魔法衛士隊の1つ、グリフォン隊隊員10名が突然アルビオンへ

向かったとのことだ」

「アルビオンへ？ 10人で何をしに？ 仲が悪いのに」

「その理由なのだが：例によってまたアンリエッタ王女が原因だそうだ」

「あのアホが？ また何かしでかしたのか？」

「正確には”しでかし続けていた”だ、ウイル」

「はい？」

バーグストラムの話をまとめると、

マリアンヌ太后が娘のアンリエッタにそろそろ結婚相手を、ということでお見合いをセッティングしたそうなの

しかし、アンリエッタはいつかの講和会議に来ていたアルビオンのウェールズ皇太子に一目惚れしていたんだと

だが、二国間の関係悪化のせいもあり実際に会って話したことは一度もなかった

なので数年前からアンリエッタは月に1、2回手紙を書いてウエルズに送っていた

そこに今回のお見合いの話がやってきて、

「ウエルズ様以外の人と結婚した後に、ウエルズ様に送った手紙が

バレちゃったらどうしましょう!?!」

とアホは少ない頭をフルに使って考えた

「じゃあ結婚する前に誰かに取りに行かせればいいじゃない」

という名案（自分ではそう思っている）を思いつく。「自分で取りに行く」という

選択肢は一切頭になかった様子

「ワルド隊長、あなたの部下に私の手紙をここまで持ってこさせて！ よろしく!」

「かしこまりました、姫様。必ずや私の優秀な部下は任務を完遂します!」

とワルドは快諾し、部下に命令してアルビオンへ 今ここ

という流れらしい。ちなみにワルドは

(久しぶりの任務かと思ったら糞下らないことで呼びやがってあのアホ死ねば

いいのに)

と考えていたのだが、それはまた別の話。

バーグストラムの説明を聞き終わると俺は頭を抱えてしまった。

(原作と違うけど、結局アルビオンへ人を派遣するのね)

そしてさらに説明は続く。

「さらにグリフォン隊はアンリエッタ王女から書状を手渡されている、との

ことだ。内容まではわかっていないが…」

「そうか…可能性としてはいくつがあるな。ウェールズ皇太子への愛の手紙かも

しれないし、トリステインがアルビオン内戦に介入するといった内容かもしれない

ない。まあそれはないと思うけど」

「確かに…で、我々は何をするべきか？ もしトリステインが内戦に介入する

などと言い出したら面倒な事になるぞ？」

「わかっているよ、レイ。ま、とりあえず聞き取り調査だな」

俺は携帯電話を取り出してウェールズにかけた。バーグストラムにも聞こえる

ようにスピーカーにつないである。

『もしもし？』

「ウェールズか？ ウィルだ。そっちは大変そうだな」

『やあウィル！ 今ロサイスにいるんだ。君の国からの武器弾薬のお陰でなんとか

レコンキスタを追い払っているよ』

「それはなによりだ。それより、つかぬ事を聞くのだがいいか？」

『いいけど、なんだい？』

「トリステインのアンリエッタ王女から手紙をもらっていないか？」

『アンリエッタ王女？ ああ、数年前から毎月来てるよ』

「そうか。で、どんな内容なんだ？」

するとウェールズはため息をついた。

『…あつちからの一方的な愛の手紙、といえどどんな内容か検討はつくだろ？』

「あー…やっぱりそうか…で、もちろん返事は」

『もちろん書くわけじゃないじゃないか。そりゃ最初は書くことと思ったけど父上に』

そんな必要はない、お前はもつとまともな脳みそを持った女性と恋愛を

しろって言われてさ』

「その通りだな」

隣にいたバーグストラムがぼそつと呟いた。

『この前来た手紙はもう凄かったよ、色々』

「と、言うこと？」

『一枚の紙の裏表に小さな字でびっしりと「なんでお返事しないんですか」的な』

ことが書かれていてさ…読んでいて鳥肌が立ったよ』

「うわー…」

「…ご愁傷様」

俺もバーグストラムもマジでドン引きしていた。だがこれで一つわかったことがある。

アホは病んでいる。それもかなり。

「で、今まで届いた手紙はまだ持っていたりするの？」

『まさか。その手紙を呼んだ後全部暖炉に放り込んだよ。なんだか気持ち悪くなっちゃってね』

「ぶっ！」

レイ、笑うなら声を出さないで笑うんだ。俺だって笑いたい。

「そ、そうか…」

アンリエッタはすでに燃やされた手紙のためにグリフォン隊をアルビオンに行かせたのか…アホだな。

「ウェールズ、いい話をありがとう。また明日電話するよ。じゃね」

『えっ？ また明日ってどういうこと』

失礼なのは承知で電話を途中で切った俺はバーグストラムと話しながら、その辺に散乱していたアルビオン関係の資料を根こそぎ鞆に詰め込んだ。

「俺は今から一緒に王宮に行く。レイはグリフォン隊のアルビオン到着予想時間を

割り出してくれ」

「お安い御用だ。ではまたあとで」

部屋を飛び出た俺は携帯電話で親父にさっきのことを知らせ、緊急閣議を開いて欲しいと要請した。親父はすぐに許可し、首席補佐官のヴィンセントが閣僚を招集した。その閣議の席で俺は、友好国アルビオンの内戦の早期終結のため、我が軍が介入しレコンキスタという反乱軍の殲滅を提唱した。他の閣僚達は

「そこまでする必要があるのか」

と難色を示したが、財務長官のデックスが提出した資料を見て皆納得してくれた。

その資料に書かれていたことを簡単にまとめると、内戦が始まってから我が国の輸出入額が低下したり、物価が徐々に上がっていたりしている、みたいなことが書かれていた。こんなところにも影響が出ていたことを知らなかった閣僚達は、

「ならとつと内戦を終わらせよう!」

と次々と発言。翌日に緊急国会を開催することが満場一致で可決された。

閣議後に合同庁舎の休憩室でデックスと共にのんびりしているとエレベーター

からバーグストラムが出てくるのが見えた。

「ここにいたか、ウィル。それにデックスも」

「おお、レイ！ おひさ。ほい、これ」

デックスが缶コーヒーを投げるとバーグストラムはそれを片手で受け取った」

「ありがとう。それと、連中の行動予測が出たぞ」

休憩はどうでも良くなった。すぐに俺とデックス、バーグストラムは盗聴される心配のない部屋、すなわちデックスの執務室に引きこもった。地図を使いながらバーグストラムが説明をする。

「連中がトリスタニアを出発したのが今日の午前10時40分。PFLTに確認したところ

その時間帯にグリフォンが飛んでいたそう。少し前に偵察衛星と無人偵察機で

連中を補足した。今のスピードならラ・ロシエールに到着するのが今日の午後14時前後になる」

「へえ、グリフォンってもっと早そうなイメージがあったんだけどな」

「確かにグリフォンならもっと早く着いていてもおかしくない。だが、連中は

意図的にゆっくりと進んでいるようなのだ」

「意図的に？」

俺がおうむ返しに聞き返す。

「ああ。スパイから追加情報があつてな、グリフォン隊隊長のジャン・ジャック・

フランス・ド・ワルドは今回の任務をあまり快く思っていないらしい。何でも

出発前の隊員達に『誰も急いで取ってこいなんて言っていないから
のんびり行つて

来い。ちよつとした旅行だと思つてくれていい』などと言つていたそうだ」

「旅行つて…まあ任務が任務だしそう言いたくもなるか」

「しかも今回派遣された10名の隊員だが、全員入隊して間もない新人ばかり、

つまり若くて血の気が多い、ということも報告されている。そんな連中が

選ばれた理由は不明だが、おそらく『はじめてのにんむ』的な感じなのだろう」

「なるほど。これなら簡単な仕事だから新人だけでも大丈夫だろう、つてところか」

「おそろくな。それで、ラ・ロシエールで1泊してからアルビオンのロサイス行きの

貨物船に乗る。そしてロサイス到着は12時間後、ロンディニウムに到着するのは

1日後になる。従って3日後のこの時間にはウェールズ皇太子に会っているだろう」

「3日後か…かなり強行軍のスケジュールになるな。助かったよ、レイ。今度俺達の

おごりで飲みに行こうぜ」

「それは楽しみだ。では」

バーグストラムが帰った後、俺はアルビオンにあるゲルマニア大使館に電話をかけた。

電話に出たのはゲオルグ・ファルケンハイン大使であった。

「やあゲオルグ。こちら國務長官のウィリアムだ」

「ちょ、長官!? どうされましたか?」

「実は非常に重要な仕事があるのだ。今アルビオンで起こっている内戦を終わらせる

ために、是非とも君の力を貸して欲しい」

「わかりました。何をすればよろしいのでしょうか?」

「実はな…」

俺は大使にやってもらいたいことを言ってから電話を切った。

「さて。また戦争の時間だな、ウィル。国民にはどう説明するつもりだ？」

とデックスは聞いてきた。

「そうだな…『友好国であるアルビオンを助けるため、そしてアルビオンに滞在して

いる我が国民の安全を守るため』みたいな感じでいいんじゃないか？」

「なるほど…そこに内戦が原因で我が国の経済が悪化傾向にあることもプラスしよう」

「それでいこう。明日の国会でこれが認められれば、早速軍を派遣することにしよう」

Side out

そして次の日。緊急国会でアルビオン内戦への介入が全会一致で可決された。国民にも大々的に報道されたが、これといった批判はなく、むしろ賛成する声が多かった。

その日の夜にはサン＝ヘント海軍基地から第1空母戦闘群と、新型のゴライアス級大型車両貨物輸送艦2隻が、サン＝ヘントより南に位置するヒルデ

スブルク海軍基地

からもゴライアス級4隻が出港した。艦隊は全速力で空に上がった。
いった。

~~~~~

ゴライアス級大型車両貨物輸送艦とは全長316・24m、全幅38・9mで、排水量は

軽荷で38,000トン、満載だと80,675トンもある大型の輸送艦である。7層にわたる

車両甲板に488,600平方フィートの積載スペースを持ち、主力戦車であるメルカバ

Mk 4を含む1,500台程度の車両・装備を1度に運搬可能である。艦尾と両舷に設け

られたランブによって車両は自走しての揚搭が可能であり、艦尾ランブも弦側に

降ろすことが出来る。3基設けられた150トンクレーンも強力な荷役能力を与えて

いる。またシーステート3の状態でも荷役が可能である。艦橋前面にヘリコプター

発着甲板を持ち、大型ヘリコプターの発着が可能であるが、特別な整備・管制の

為の設備を持たないことから、強襲揚陸艦のようには使われない。

~~~~~

~~~~~  
また国内の空軍基地では、輸送機であるC-130Jスーパーハークキュリーズ20機、

対地攻撃用のAC-130Uスプリーキー?10機、空中早期警戒管制機のE-3C セントリー  
AWACS1機、給油機のKC-135R ストラトタンカー4機、  
そして護衛のF-15C イーグル  
24機が、出撃の準備をしていた。艦隊がアルビオンに到着する時  
間に合わせて  
航空機は出撃する。

同時刻、アルビオンのゲオルグ・ファルケンハイン大使は上司である  
国務長官  
との電話を終えて、目の前にある手紙を大事に金庫にしまった。その  
手紙には  
国王のサインが書かれていた。

その30分後、ロサイスにいたウェールズ皇太子は国防長官からの  
電話を切り、  
大急ぎでロンドン・ニウムへと戻った。

続く…

第29話：レコンキスタ終了のお知らせ 前半（後書き）

輸送機はAn-225 ムリーヤにしようと考えていたのですが、あれが着陸できる滑走路はアルビオンにないことに気づき、C-130にしました。

「シーステート」とは、日本語で海況（かいきょう）つまり海の状態のことを意味します。詳しくはWikiで。

今回はレコンキスタが消えます。  
では

第30話：レコンキスタ終了のお知らせ 後半（前書き）

前回の続きからです。

### 第30話：レコンキスタ終了のお知らせ 後半

ゲルマニア軍がアルビオンへ出撃してから3日後。

くアルビオン、ロンディニウム、ハヴィランド宮殿、国王執務室の外く

ここには12人の来客者が豪華な椅子に座って国王との面会を待っていた。

そのうちの10人はトリステインからやってきたグリフォン隊の隊員だった。

あとの2人はトリステインの人々とは違い、1人はビシツとしたスーツを、

もう1人は軍服を着ていた。その2人の事を、グリフォン隊の面々は時折

ちらちらと見ていた。

(いったいこいつらは何者なんだ？ 見たことの無い服を着ているし…)

10人のリーダーである、ジョルジュ・ド・ポーカン子爵はそんなことを

考えていた。彼はまだ24歳と非常に若い、魔法と剣術の腕がよいので、

今回の任務に選ばれた。とはいえ、まだまだ経験が不足しており、感情に

まかせて物事を判断してしまう時がある。

(ロマリアの神官：なわけないか。まあいい、考えても仕方のない

ことだな)

そうこうしていると兵士がやってきて、国王の執務室へと案内された。

ポーカンは自分達が最初に案内されるものと考えていたが、あの変な服を

着た2人組も一緒だった。

(なんでこいつらも?)

と思いつつながら、アルビオン国王ジェームズ1世、その息子であるウエルズ

皇太子がいる部屋に入った。

部屋に入った瞬間、ジェームズ1世が嬉しそうな声をあげた。

「ようこそ、ファルケンハイン大使にハーゼンクレーバー中将！  
2人とモ

お元気そうで何よりですな！」

スーツ姿の男は、ゲオルグ・ファルケンハイン駐アルビオン大使、  
軍服姿の男は  
駐在武官であるカール・フォン・ハーゼンクレーバー陸軍中将であった。

「ありがとうございます、陛下」

「ちょっと待っていてくれ。で、そちらは...?」

ジェームズ1世は残りの10人の方を見る。

「お初にお目にかかります、陛下。私はトリステイン魔法衛士隊のグリフォン隊

に所属しております、ジョルジュ・ド・ボークンと申します。本日我が国の

アンリエッタ王女からの命令により参上致しました」

「おお、そうか。私がジェームズ1世だ。それでどのような用件なのだ？」

「はい、実はアンリエッタ王女からウェールズ皇太子殿下宛の書状を預かって

きました。こちらになります」

「僕に？」

ジェームズ1世の隣に立っていたウェールズは凄く嫌な予感がしていた。また彼女

から”病んでる”手紙がきたのか、と。受け取って中身を読むと思わず笑って

しまいそうになった。そんな息子の様子を父親であるジェームズは見逃さなかった。

「どうした、ウェールズ？」

「…これを」

ウェールズから渡された手紙をジェームズが読む。その内容を要約

すると、

『今度結婚するかもしれないからウェールズ様に送った手紙を返して？』

であった。

「あはははははは！！」

こらえきれなかったジェームズは大笑いをした。

「今年読んだ手紙の中でも1番面白い内容だな、これは！」

「全くです、父上」

そしてウェールズはポーカンの方を向いた。

「ミスター・ポーカン。残念ながらこの手紙に書かれていた要望に答えることはできない」

「えっ…何故ですか？」

「彼女から送られてきたあの手紙の山はすでに焼却処分したからだ。どうでもいい」

内容だったし、邪魔だったのでね」

それを聞いたポーカンは啞然とした。まさか燃やされて灰になっていたなどは思ってもいなかったからだ。



「それに今我が国は反乱軍と戦争中なのだ。こんなくだらないことに付き合って

いる暇などない。悪いがお引取り願おう」

ジェームズ1世の言葉にボーカン達10人はかなりビビっていた。

そこに口を挟んだのはファルケンハイン大使であった。

「お待ちください、陛下。実は彼らに頼みたいことがありますので」

「頼みたいこと？ 聞かせてくれ」

「はい、その前に…中将」

「はっ。陛下、こちらを」

ハーゼンクレーバーはサツと立ち上がり、ジェームズ1世に手紙を渡した。それを

読んだジェームズはびっくり仰天した。

「なんと！？ ウェールズよ、これを読め！」

父親から渡された手紙を読んだウェールズもまた、びっくりしていた。

「中将、大使殿、これは本当ですか！？」

「もちろんです、殿下。あとトリステインの人も聞いてください。  
アンリエッタ

王女に伝えて欲しいので」

ファルケンハインは紅茶を飲み干してから堂々と宣言した。

「我がゲルマニア王国は、本日より友好国であるアルビオン王国の  
内戦に介入し、

『レコンキスタ』と称する反乱軍への攻撃を開始します」

『な、なんだってー！？』

そんなトリステイン組の悲鳴を無視して大使は続ける。

「そして内戦の終結後は戦闘によって被害を受けた建物・道路など  
の復旧作業、支援

第1空母戦闘群と

空軍攻撃機部隊が待機しております。陛下の許可がいただければ、  
直ちに反乱軍

への攻撃を開始いたしますが、いかがでしょうか？」

「…大変な難しいことだが、その対価として我が国は何を支払えば良  
いのかな？」

これだけの支援をしてくれるからには、それなりの対価が必要だと  
ジエームズは

考えた。その質問に答えたのはハーゼンクレーバー中将だった。

「はい、要求は全部で3つあります。1つはアルビオン国内にゲル

マニア軍の基地

建設許可と軍の駐留許可をいただきたいのです。上司である国防長官はこれを

強く望んでおります。また基地の建設場所ですが、できる限りアルビオン大陸の

外周部でなるべく人気のない場所がいいそうです」

そして2つ目の要求はファルケンハインが説明する。

「そして2つ目、これは『要求』ではなく『お願い』になりますが、アルビオン

王国にも是非三国同盟に加盟して欲しい、とのこと。これに関しては強制

できるものではありませんので、じっくりと話し合いの上で決定して下さい。

もし加盟していただいた場合、様々なメリットがありますので、貴国にとっても

決して悪い話ではないと思います。最後に3つ目ですが…」

そこで大使は言い淀んだ。

「誠に申し訳ないのですが、私にも中將にも詳細を知らされていないのです。

近いうちに國務長官、もしくはアルブレヒト3世陛下から直接説明があるそうです。

です。ただ、決して貴国の損になることではない、と言っておられました」

「そうか…」

ジェームズはうつむいて考えた。基地建設と軍の駐留はいい。三国同盟加盟も

強制ではないので是非とも検討したい。ただ3つ目の要求はなんだろうか？

損になることではない、と言われても…だが今のアルビオン軍では反乱軍の

連中を倒すことができないのも事実。腹を決める、ジェームズ！

10秒もしないうちに考えをまとめたジェームズは口を開いた。

「わかった。アルビオン王国は貴国の要求を全て呑もう」

「ちよっえっ」

「ありがとうございます、陛下。では早速…」

ポーカーの呟きを無視して、ハーゼンクレーバーは無線機を取り出してがなりたてた。

「全部隊へ、アイリーン！ 繰り返す、アイリーンだ！」

それを聞いていたのは、アルビオン大陸に密かに近づいていた第1空母戦闘群の司令官、マーシャル海軍中将だった。

「了解した。全艦へ告ぐ、ファツンアイリーンだ！ 攻撃開始！」

司令官の命令と共に巡洋艦と駆逐艦のVLSのハッチから元気よく巡航ミサイルが飛び出し、空母では電磁カタパルトが甲高い音を出しながらF-35Cを空に向かって打ち出していた。

「全機、突入開始！」

同時刻、ロサイスとシテイオブサウスゴータの上空に空軍部隊が到着して地上にいるレコンキスタ軍に向かって一斉に牙をむいた。A-10Cは破壊力抜群の30mm弾と爆弾の雨を振らせた。

運が良くA-10Cの攻撃で死ななかった兵士もいたが、A-10の通過後にAC-130Uスプーキー？がもつと上空から25mmガトリング砲、40mm機関砲、105mm榴弾砲を一斉に撃ち始めた。それにより、最前線にいたレコンキスタ地上軍はほぼ壊滅し、生き残った兵士は武器を捨てて撤退を始めた。数少ない竜などの航

空兵力は護衛の

F-15Cによって排除された。

後方で待機していたレコンキスタ軍の主力も前線の様子を見て戦慄していたが、

そこにもゲルマニア軍の手が急速に伸びてきた。超音速で低空飛行してきた巡航

ミサイル群は地上部隊に急降下していった。ただ、弾頭に搭載されていたのは

通常の高性能爆薬500kgではなく、対人殺傷能力に優れている燃料気化爆弾だった。

上空で戦場を監視しているRQ-4 グローバルホーク無人偵察機は、地上で小さな

きこの雲が次々と盛り上がる光景をきちんと録画して送信していた。

「わーお…」

「全ミサイル、着弾を確認。すごい威力ですね、あれは…」

「全くだな、少尉。あんなのを食らって生き残れるものはいないだろう。地面に

潜っていたのなら話は別だがな」

国防総省にいる無人機管制員はそんなことを話していた。

その頃こっそり王都ロンディニウムへと進軍していた大型戦艦レキシントン

(レコンキスタにパクられた) からなる数十隻の艦隊に襲いかかったのは、空母から出撃したF-35Cだった。胴体内兵器倉から次々と対空ミサイルが躍り出る。レコンキスタの艦隊も大砲を撃ち始めるが、高速で空を飛ぶジェット戦闘機に当たることがない。その報いとして艦隊は対空ミサイルの餌食となり、10分もしないうちに全てのフネが地上に墜落して炎上していた。

レコンキスタ軍がほぼ壊滅したロサイスとシティオブサウスゴータに、陸軍の上陸部隊と戦車やらが山ほど乗っているゴライアス級大型車両貨物輸送艦が到着した。その大きさにアルビオン軍の兵士達は顎が外れるくらい大きく口を開けていた。だが輸送艦から出てきた戦闘車両と兵士達がレコンキスタ軍に攻撃を始めるのを見ると、アルビオン軍兵士は歓声を上げながら自分達も攻撃を始めた。

「こちらロサイス・ベース。全戦闘部隊は作戦要項に従い行動せよ。後方支援部隊はそれぞれ作業を開始しろ」

街に残ったゲルマニア軍兵士は簡易司令部を設置し、各地との通信リンクを確立した。衛生兵は負傷したアルビオン軍兵士や一般市民の手当てを始

め、工兵部隊は  
街の損傷状態の確認を始めていた。

さてこちらはレコンキスタの総司令官であるオリヴァー・クロム  
ウエル。さつき  
まで大型戦艦レキシントンに乗っていたのだが、フネはあっけなく  
墜落。運良く  
生き残った彼は、燃えるフネの残骸から離れて近くの森に逃げ込ん  
だ。

「なんなんだ、あの鉄の鳥は！？ 我が軍がボロ負けではないか！」  
クロムウエルは一人でそんなことをわめきちらしていたが、後ろに  
人の気配を  
感じて振り返った。そこにいたのは彼の秘書のシェフィールドであ  
った。



「おお、シェフィールドよ！ 無事でよかつた」

だが彼が最期まで言う前に、シェフィールドは持っていたP S Mピストルの引き金を

躊躇うこと無く引いた。弾丸の芯にスチールを内蔵している5・4 5mmフルメタル

ジャケット弾がクロムウエルの額のと真ん中に命中した。地面に倒れる前に彼は

死んでいた。彼の指にはまっていたアンドバリの指輪（超劣化版）は既に効力を

失っており、シェフィールドはそれをポケットにしまい込んだ。

「素敵な風穴よ、あなた。さてと、ジョゼフ様の所へ帰りましょう  
つと」

彼女は転送用のマジックアイテムを取り出してガリアへと帰還した。

ゲルマニア国防総省では国王アルブレヒト3世、ヴィンセント国王首席補佐官、

ウィリアム国防長官、そしてデクスター財務長官が軍の戦いぶりを見ていた。

「なんと、呆気もない…これで終わりか」

アルブレヒト3世はどこか残念そうな口調である。

「まあレコンキスタなど所詮こんなものです、陛下。我が軍の優秀な兵士達には

朝飯前でしょう。死者達はもう動きませんし、生きている奴らを現在追撃中

ですが3時間以内に殲滅できます」

ウィリアムも残念そうにそう言った。

「これで内戦は終結、アルビオンは我が国に感謝してくれるし、経済も良くなるし、

基地も建設できるし、もしかしたら三国同盟加盟するかもしれない。いいこと

づくめだな！」

デクスターは喜びの声を上げる。

「そうですね。あとはトリステインとロマリアがどう動くか、ですね」

ヴィンセントの言葉に国王も頷く。

「そうだな。その辺もきちっと調査を頼むぞ、ウィル、デックス」

「はい！」

これでめでたしめでたし、となるはずだったのだが、クレイドル陸軍参謀総長が

慌てながらドタドタと部屋の向こうから走ってくるのが見えた。いつもはもつと冷静

なのにどうしたんだらう、と誰もが思っていた。

「ちよ、長官！ 緊急事態です！」

「どうした！？」

息を整えたクレイドルは一気にまくしたてた。

「たった今、ハヴィランド宮殿に潜入しているG C I Aのスパイから連絡がありました！」

ファルケンハイン大使とハーゼンクレーバー中将がトリステイン魔法衛士隊から

魔法攻撃を受けたとのことですよ！」

「なんだと！？」

それを聞いた人全員がびっくりした。アルブレヒト3世も例外ではなかった。

「なんでそんなことになったのだ！ 大使と中将は無事なのか！？」

「詳細はまだわかりません。ただ銃声が何度もしたそうです。おそらく中将が応戦

したのかと……」

「何たることだ……ウイル、すぐ大使達の無事を確認してくれ。ヴィンス、お前は

同盟国に連絡を。クレイドルは全軍の警戒レベルを最大にしろ。」

事によっては

トリステインと再び戦うことになるかも知れんからな。急げ！」

「わかりました、陛下！」

ウイリアムは携帯電話を取り出してハーゼンクレーバーに電話をかけた。周囲の

人々には彼がいつになく焦っているように見えていた。が、心の中でウイリアムは

事がうまく進んでいることを喜んでいたのであった。

↳時は少し戻って、ハヴィランド宮殿↳

ファルケンハイン大使とハーゼンクレーバー中将の2人は、ジェームズ1世と

ウエールズ皇太子に現在の戦局を全て伝えていた。その中にはレコ

ンキスタ

総司令官、オリヴァー・クロムウエルの死亡もあつた。

「もう敵司令官を倒したとは…恐れいつた」

「今まで苦労していた敵があつという間に…」

ジエームズとウエールズはぼけーっとしていた。

「これで貴国の内戦も終了です。復興には時間がかかると思いますが、我が国は

全力で支援いたします」

「本当にありがたい、ファルケンハイン大使。基地の件はすぐにも部下に…」

「いえ、基地は後回しで構いません。そこまで急ぐ必要はありませんから。まずは

貴国の復興が最優先です」

ハーゼンクレーバーが穏やかな笑みを浮かべながら説明する。そして空気に化していたトリスティン組の方を見る。

「ミスター・ポーカン、だったかな？ このことをトリスティン王家にも伝えて

おいてくれ。これはアルブレヒト3世陛下からの親書だ。持って行ってくれ」

そう言って手紙を渡されたが、ポーカンはイライラしていた。

(アルビオンにゲルマニア軍の基地だって!? 目と鼻の先にトリステインがある

のに! 許されることではないぞ!)

それは他の隊員も考えていた。そこで。

「ジエームズ1世陛下、ファルケンハイン大使殿。1つよろしいでしょうか?」

「ん? なんだね?」

直接意見をぶつけることに。

「貴国領内へのゲルマニア軍基地建設の件ですが、近隣諸国の同意を得ないまま

許可を出すのはいかがなものかと思えます。まずは一番近いトリステインと

相談してから行うべきなのではありませんか?」

それに答えたのはハーゼンクレーバー中将であった。

「いいかね、ボーカン君。君も私も軍人だ。軍人の仕事は祖国と国民を守ることだ、

そうだろうか? その軍人が政治の世界に口を突っ込んではいけないのだよ」

「中将の言う通りだ」

ジエームズ1世も続ける。

「君がそんなことをいう資格などないのだよ。それに君達の国トリステインは

我が国から食糧援助を受けている立場にあるのを忘れたのか？  
あまり

調子に乗るんじゃない。こっちはいつだって援助を止められるのだからな。

わかったらとっとと帰ってくれ」

もし今ここにいるのがグリフォン隊隊長のワルドであったら、おとなしく

トリステインに帰っただろう。だが遺憾なことにここにいるのは血の気が多く、

経験が少ない隊員だけであった。さらに遺憾なことに、この若い10人はプライドが

無駄に高い昔ながらの貴族であり、三国同盟基準で言うところの”平民のことを

なんとも思わない典型的なクソ貴族”であった。さらにさらに遺憾なことに

まだ彼らは若いので”任務に私情を挟むな”という軍人にとって当たり前前の

ルールを簡単に破ってしまった。

「くっ、野蛮人共が調子に乗るんじゃないぞ！！」

なので返すがえすも遺憾なことに、トリステイン組10人は我慢できずに杖を

抜いて、イライラの原因 この場合は駐アルビオン大使、ゲオルグ・ファルケン

ハインと駐在武官であるカール・フォン・ハーゼンクレーバー陸軍

中将を

ふっ飛ばそうと魔法を放ってしまったのであった。

「大使！」

ハーゼンクレーバーは咄嗟に大使にタツクルをかまして、大使に向かつて飛んで

きたエア・ハンマーやらエア・カッターを避けた。そして彼はどこぞの漫画の

超A級スナイパーといい勝負の速さで懐からゲルマニア軍制式拳銃であるUSP

COMPACT(9mm×19弾仕様)を引きぬき、腰だめ(肩の高さまで持ち上げない)の

上にノン・サイト(ねらいをつけるための照準を使用しない)で発砲した。

実はこのハーゼンクレーバー、軍の拳銃射撃コンテストで毎年優勝をしている

ほどの銃の腕前だったりする。

ちっぽけな拳銃1つで何ができる、と高をくくっていたポーカン達だったが、

ハーゼンクレーバーが放った10発の銃弾はポーカン達の杖に命中し、杖は

木っ端微塵になってしまった。

「なっ…!?!」

ポーカンは呆然としていた。頭の中では、なんであんな小さな銃で連射ができる

のか、ということを考えていたが、入り口から入ってきたアルビオ



ン軍兵士に

取り押さえられて、彼は現実の世界に引き戻された。

「大使、中将！ 怪我はないか？」

「いえ、大丈夫です。いきなりで驚きはしましたがね」

ハーゼンクレーバーはすました顔で銃をホルスターにしまい、大使を立てさせていた。

そしてジエームズ1世は青筋を立ててポーカン達を見据えた。

「貴様ら…我がアルビオン王国の友人であるファルケンハイン大使とハーゼン

クレーバー中将を攻撃するとは…全く馬鹿な事をしたものだな」

「いえ、あれは…」

「言い訳無用だ！ 衛兵、こいつらを牢にぶち込め！」

『ははっ！』

ポーカン達は兵士に引きずられて部屋から消えていった。その時携帯電話が鳴り、

ハーゼンクレーバーが出た。

「ハーゼンクレーバーです」

『国防長官のウィリアムだ。大丈夫か、中将？』

「長官！ こちらは大丈夫です」

『一体何があつた？』

「はい、実は…カクカクシカジカということがありまして…」

『そうか、シカクイムーブということが起きたのか…全くトリステインの連中は…』

何はともあれ無事でよかつたよ。ところでそこにジェームズ1世陛下はいるか？』

「ええ、います。かわりましょうか？」

『頼む』

ハーゼンクレーバーはジェームズ1世に電話を渡した。

「陛下、我が国のウィリアム国防長官です。是非お話がしたいと」

「そうか、ありがとう。もしもし？」

『陛下、お久しぶりです。そちらは大丈夫ですか？』

「ああ、問題ないよ。トリステインの連中ときたら、いきなり攻撃してきおつて！」

もう国交断絶してやるわい！ それよりも、レコンキスタの件、本当に助かつた！

感謝しきれんよ」

『いえ、友好国が危険に晒されていたのですから、当然のことをしたまでです。』

既に我が軍がロサイスとシティオブサウスゴータに上陸し、戦闘部隊は敵を

追撃中です。また工兵部隊が損壊した建物などの調査を、衛生兵部隊は現地で

怪我人の手当を行っており、ロサイスの郊外では輸送艦が食料や医療品などの

支援物資の荷降ろしを始めています。明日から各地への輸送任務を開始する

予定です』

「助かるよ、長官。アルブレヒト3世陛下に感謝の手紙を書かなければ。それと

基地建設の件だが、そちらの要望通りの場所を探しておこう」

「いえ、実はすでにこちらで建設予定地をいくつかピックアップしています。

出来ればすぐにそちらにお伺いしたかったのですが、残念なことにこれから

我が国、いえ、三国同盟は戦争を始めることになるかもしれないので……」

「…トリスティンと、かな？」

「そうです。我が国の大使と軍人にいきなり攻撃してきたのですから。しかも

王家に仕える魔法衛士隊が、です。到底見過ごすことはできませんね。では

そろそろ失礼します。ウェールズ殿下にもよろしくとお伝え下さい』

「わかった。幸運を祈っているよ、長官」

電話を終えたジェームズ1世は大使を見る。

「今日は色々と疲れましたな。どうです、軽く1杯？」

「ではお言葉に甘えさせて頂きます、陛下」

2人はテラスに出て一緒に酒をのんびりと飲むことにした。ハーゼンクレーバーは  
一足先に大使館へと戻り、今日起こった出来事の報告書の作成をした。

アルビオン内戦へのゲルマニア軍介入、そして内戦の終結のニュースはその日のうちに三国同盟全体に伝わった。ハヴィランド宮殿で起こった事件も含めて。そして翌日、ゲルマニア、ガリア、クルデンホルフの議会は全会一致でトリストインとの開戦を決定、即座に宣戦布告したのであった…

続く…

第30話：レコンキスタ終了のお知らせ 後半（後書き）

「アイリーン」はあれです、ブラックホーク・ダウンでお馴染みですよ。あの映画は実に良かったと思います。

シェフィールドのセリフはA C f Aの「シャミア・ラヴィラヴィ」から。艶な声音に怖い言葉でどこかヤンデレな気もするのでシェフィールドに合うのではないかと。

無理やりすぎだっけ？ 気にしたら負けです。

今回は「トリスティン終了のお知らせ」。そして今まで地下に潜っていたP F L Tが表舞台に登場します。才人にアニエス、シエスタも出てくるよ！

では

第31話：トリスティン終了のお知らせ 上（前書き）

ついにトリスティン（笑）に終わりの日が出てくる…

11/2 タイトルを「前半」から「上」に変えました。

### 第31話：トリステイン終了のお知らせ 上

（トリステイン、王都トリスタニア、現地時間9時）

それは突然だった。甲高い音と共にトマホーク巡航ミサイルがトリスタニアに飛来してきた。初めて見るミサイルを市民はポケットと見ていた。そして王城の真上に到達すると、ミサイルのノーズコーンが爆発し、特殊作戦用の補給ポッドがはじけ飛んだ。そしてパラシュートを開くと、フワフワと漂いながら王城の敷地内に落ちた。

たまたま敷地内を警備していたワルドは、落ちてきたポッドを注意深く観察し、取っ手のようなものを引いて開けた。すると中には1通の手紙が入っていた。表にはゲルマニアとガリア、クルデンホルフの3ヶ国のマークが記されていた。そしてその下にはでかでかところ書いてあった。

「宣戦布告のお知らせ」

と…



マザリーニは恐る恐るその手紙の封を開け、アンリエッタとマリ  
アンヌの前で  
内容を音読した。挨拶も何もなく、いきなり用件から書かれている、  
そんな  
手紙であった。

「昨日アルビオン王国のハヴィランド宮殿において、ゲルマニア王  
国の大使と

軍人が貴国の魔法衛士隊に突然攻撃されました。これを受けて、  
我々三国同盟は

トリステイン王国に宣戦布告を致します。12時間後に一斉攻撃  
をいたしますので、

今のうちに死ぬ覚悟でもしておいてください。

…と書いてあります。1番下にゲルマニアとガリアの国王、そし  
てクルデンホルフ

大公の3人の直筆のサインもありますので、間違いないかと…」

「そうですか…アンリエッタ、何故グリフォン隊の隊員をアルビオ  
ンへ行かせた

のですか？ そのようなことをしていたとは聞いていませんよ？

マザリーニも

知らなかったそうじゃないですか」

マリアンヌはいつもと違ってイライラしながら娘を問いただした。  
グリフォン隊の

派遣の件はアンリエッタが勝手にやったことであり、マザリーニや  
マリアンヌには

全く相談していなかったのであった。

「だ、だって…」

「だってもへつたくれもありません!」

机をダンツ! と叩きながらマリアン又は叫ぶ。アンリエッタが勝手な行動をしな  
ければ、こんなことにはならなかったのだから。

「…まあいいでしょう。それよりも、マザリーニ」

「はい」

半ベソをかいている娘を無視してマザリーニに話しかける。

「あの3ヶ国の軍隊が一斉に攻撃してきた場合、我が国の軍はどれ  
だけ持ちこたえ  
られますか？」

なんかいつもより頭の回転が早いな、と思いながらもマザリーニは  
正直に答えた。

「…1日もてばいいほうでしょう。7年前の戦闘で王軍の大半を失  
った我が国には  
ほとんど対抗手段がありません。フネは再建しましたがそれを動  
かす風石が不足  
していますし、傭兵を雇おうにも給料を支払えません。それに諸  
侯軍を招集しよう

にも時間がありません。よって我が国で今動かせる軍隊は魔法衛  
士隊のみです。

彼らは皆優秀な兵士ですが、数が全然足りません」

そこまで言うと、マザリーニはため息をついた。

「マリアンヌ様、姫様。こんなことは言いたくはありませんが、明日までには我が

トリステイン王国は間違いなく滅亡してしまうでしょう。そうなる前にどうか

お逃げ下さい。王家の血を途絶えさせてはいけません。ここには私が残り

ますのでどうか！」

「ですがマザリーニ、一体どこに逃げると？ 我が国は四方を三国防盟に囲まれて  
いるのですよ？」

そう言った瞬間、再び甲高い音が聞こえてきた。

「きゃあー!!」

アンリエッタは耳を塞いで床にうずくまっている。しばらくするとワルドが部屋に飛び込んできた。

「何事だ!?!」

マザリーニが詰問する。

「はっ。また手紙が来ました。今度はアルビオン王家の印が入っております」

「アルビオンから？」

2発目のトマホークはアルビオンで作戦行動中のミサイル巡洋艦の1隻から発射

されたものだったが、それを知る人間はここにはいない。手紙を急いで開けて

読むと、マザリーニは愕然とした。

「マザリーニ？」

「はっ!？」

マリアンヌに声をかけられて彼は現実世界に戻った。

「どんな内容だったのですか？」

「それが…」

さらに声のトーンを落として彼は音読した。

「本日付けでアルビオン王国はトリステイン王国との国交を断絶します。理由は

国王の眼前でゲルマニアの友人が貴国の軍人にいきなり攻撃されたからです。

アルビオン大陸への接近も禁止しますので、もし貴国のフネが接近してきた

場合、我が軍は躊躇なく発砲します。本当なら三国同盟と同じように貴国に

宣戦布告したいところですが、我が国は内戦が終結したばかりな

ので、今回は

何もしないことにします。あと、現在我が国に滞在中のトリステイン人は国外

退去処分とし、3日後に出る輸送船で貴国に送り返します。もつとも、3日後

まで貴国がハルケギニアに存在していれば、の話ですが…健闘を祈ります

b y ジェームズ1世

追伸：誰とは言わないがもう2度と手紙送んな b y ウェールズ

だそうです…」

「これでアルビオンへの亡命も不可能になりましたね…」

マリアン又は絶望した感じで呟いた。アンリエッタはウェールズから拒否られて

呆然としている。

「マザリーニ…やむを得ません、手の打ちようがないのですから降伏しましょう」

「…ですが、問題があります。あともう少してリッシュモン高等法院長らが

来ますが彼らは納得してくれるでしょうか？」

マザリーニはこの後行われる緊急会議の行く末を思い浮かべていた。今のところ

2つのパターンが彼の頭に浮かんだ。1つは、

「戦わずして負けを認めるなどあってはならない!」

と言い始めて、

「では誰が前線に出て指揮をとるのだ?」

という段階になると、その役目をお互いに押し付けあいグダグダになるパターン。  
もう一つは、

「明日に攻撃されるだ!?! なら急いで逃げない!」

「じゃあ誰が姫様をお守りするのだ!?!」

「お前がやれよ」

「いやいやお前の仕事だ!」

と、こんな感じになるパターンである。

「納得させるしかないのでは?」

マリアン又はそう言うが、きっとあの連中は納得しないだろうな、とマザリーニは

考えていた。そしてどのように納得させようかと、必死に考えをまとめていた。

その頃、トリスタニアのPFLT司令部では、リーダーのベイツがメンバーの前で演説をぶっていた。この演説は、無線を通じてトリステイン各地の基地にも送信されていた。

「勇敢なる同志諸君！ ついにこの日がやってきた！ 長い間よく耐えてくれた。

だがそれも今日で終わりだ！ 今まで我々平民を散々苦しめてきた貴族共に

生まれてきたことを後悔させてやれ！」

『うおおおおおおお！！！』

雄叫びを上げて銃を上振りかざす兵士達。そんな様子をスカロンはベイツの

後ろから見ている。

( やつとこの時がきたか…長かった。あいつだけは私がこの手で…  
！ )

彼は亡き妻の顔を思い浮かべながら改めて復讐を決意した。

演説後、兵士達は作戦に従いトリステイン各地に展開を始めた。  
その中のある

分隊ではシエスタとジェシカ、アニエス、それに才人が準備を整えていた。彼らは  
トリスタニア高等法院長リッシュモンの屋敷の襲撃を行う予定である。

「才人さん、準備はいいですか？」

「ああ、バッチリだよ、シエスタ。アニエス、地図は覚えたか？」

「問題ない。きっちり暗記してあるさ」

「ねえシエスタ、サブマシンガンとショットガン、どっちがいいかしら。両方とも

使い勝手がいいから迷っちゃうわ」

いつの間にかPFLTに加わっていたジェシカがそう聞いてきた。  
彼女は衛生兵である。

「ん、ジェシカにはUMP45がいいと思うよ。威力あるし」



「そっか、ありがと　じゃあこれにレッドレッドレッドサイト付けよう  
つと。弾はFMJで…」

そこにベイツがやってきた。

「どうだ、準備は？」

「リーダー！　はい、準備はできてます」

「よかった。それと、俺が君達の分隊を率いることになった。だから  
らっしかり

ついてこいよ？」

「リーダー自らですか！？　わかりました！」

「うむ、良い返事だ」

そして時は過ぎる。

くトリスタニア、現地時間19時55分（三国同盟軍の攻撃まで1時間5分）

王城の一室ではマザリーニが窓から夜の街を眺めていた。アンリエッタとその母

マリアンヌは自室にこもり、マンティコア隊、グリフォン隊、ピポグリフ隊が護衛に付いている。だがそんなものは気休め程度にしかならないだろう、と彼は思っていた。

会議ではマザリーニの考えていたことが現実に起きた。集まった数少ない貴族達は戦うという選択肢を即座に放棄し、どこに逃げれば助かるかということ話し合った。だが、結局四方を囲まれているのでどこにも逃げられない、ということの説明すると、なんと彼らは自分の屋敷に逃げ戻ってしまったのだ。想定外のことであった。おそらく

自分が持っている数少ない資産を根こそぎかき集めて、敵が来たら

それを差し出して  
命だけはお助け下さい、とでも言うつもりなのだろう。

（だが私は命乞いなどするつもりは全くない。私はこのトリステインを昔から愛して

きた。もしトリステインが滅ぶのであれば、私もトリステインと共に死のう）

そう彼は決心していた。彼はこの国では珍しい、数少ない真の愛国者だった。

「ここからの眺めも見納めか…」

マザリーニは1人呟いた。が、その時突然爆発音と衝撃がマザリーニを、そして

トリスタニアを襲った。あまりの衝撃に立つことも出来ずに、彼は倒れてしまった。

「い、一体何が…!?!」

衝撃自体はすぐに収まったので、マザリーニはすぐさま立ち上がり窓の外を見た。

すると、トリスタニアの貴族街（7年前に吹き飛んだが再建された）と、王城の

敷地内から炎と煙が吹き出ている光景が彼の目に飛び込んできた。

トリスタリア貴族街、リッシュモンの屋敷の外壁

Side アニエス

「5…4…3…2…スタンバイ…やれっ！」

ベイツさんの命令と共に私は発火レバーをぐいとねじった。壁に設置した爆弾が

炸裂して人間が通れる穴が開いた。それと同時にトリスタリアのあちこちから

爆発音が聞こえてきた。三国同盟軍の攻撃より1時間早くPFLTは作戦を開始することになっていた。

「行くぞ！」

ポイントマンを務める才人は即座に穴を通り抜けた。彼の後を付いて行き、一緒に

庭の扉を蹴破って屋敷の内部に突入すると3人のメイジが驚いてこつちを振り返った。

「貴様ら、ここで何を…」

そこまで言ったメイジは才人に真つ二つにされた。私も1人のメイジの首を切り

落とし、残りの1人は悲鳴を上げながら逃げようとした。が、シエスタに撃ち

殺された。物音がしたので振り返ると、才人の後ろから2人の新手が襲いかかる

のが見えた。

「相棒、後ろだ！」

私が警告を発するより前に彼の相棒であるデルフリンガーがそう叫ぶ。才人は

振り返りざまにいつの間にか手にしていた拳銃で2人の眉間を撃ちぬいた。

「ありがとよ、デルフ」

「何いってんだ、相棒ならあたりめえだろ」

正面の門にいた護衛も味方が片付けたようだ。ジェシカは1階に残り、才人と

私、シエスタ、それにベイツさんの4人で2階へ上がった。数少ない護衛が

魔法を飛ばしてくるが、才人がデルフを使って全て吸収していった。そして

目にも留まらぬスピードで全員を斬り倒した。

「ふっ、こんなものか。つまらないな」

「相棒が強すぎんだよ」

(さすがガンダールヴだな)

と思いながら1番奥の部屋に突入する。そこに私の家族とセシールさんの仇である  
リッシュモンがいた。セシールお姉さんはベイツさんの彼女さんのことである。

ダングルテールに住んでいたお姉さんの親戚の叔父さんと叔母さんに会いに来る  
時にしか会えなかったけど、一緒に遊んでくれた優しいお姉さんだった。

「く、来るなああああ!!--!」

あいつは杖を構えたが、ベイツさんに手を撃たれて悲鳴をあげた。

「ぐああああ!!--!」

私とベイツさんは並んであいつの前に立った。

「ようリッシュモン、セシールとアニエスの家族の敵討ちをさせてもらおう」

「な、何のことだ!?!」

「覚えていないのか? ダングルテールの事だよ!」

そう言つとあいつは真つ青になった。

「ま、まさか…あの生き残りか…死に損ない共め…」

それを聞いた私は、頭の中でナニカが切れたような気がした。

「そつだよ…私の家族も、近所の人達も、セシルお姉さんも、みんな…みんな

お前が殺したんだ！ でも私は生き残つた！ だからその死に損ないが復讐に

来たんだよ！」

気付いたらそう叫んで剣を振りかざしていた。隣でもベイツさんが拳銃を構えて静かに言つた。

「死に損ないで悪かつたな、リッシュモン。お前を神の元へ…いや、セシルや

アニエスの家族がいる神の元へは行かせない。お前には安息も救いもない

地獄へ送つてやる」

そしてベイツさんがあいつの両耳を撃ち抜いた。悲鳴をあげて両耳をかばうが、

私はあいつが逃げないように両足のアキレス腱を切り裂いた。次にベイツさんは

何故かあいつの両肩を銃で撃ち抜いた。するとあいつは今まで以上に凄まじい

悲鳴をあげ始めた。なぜだろうか？ でも気にすることはない。あいつがやつた

ことはもつとひどいことなのだから。

あいつはもう血まみれで抵抗する気もない。ただこっちを怯える目で見ただけ

だった。それを見ていて私は面白い事を思いついた。

「ねえベイツさん、賭けをしませんか？ 例のやつですよ」

「あれか？ 賭けにならんだろう」

「でも面白いですよ」

そう言って私は予備の拳銃をあいつに投げつけた。

「さあリッシュモン、好きに使いな。私は黒にします」

「言っただろう、俺だって黒だ。賭けにはならん」

あいつは痛みを堪えて見慣れない銃を手を取った。そして唸りながらゆっくりと

それを自分の頭に当てた。

「くそ…くそくそくそおおおおお！…！」

ただ引き金を引く前にあいつは私達に銃を向けて引き金を引いた。



でも何も起こらなかった。何度引き金を引いても銃弾は発射されなかった。

「そんなっ…!？」

「なあ？ 賭けにならないって」

そんなあいつを見てベイツさんは呆れていた。

「少しは骨があるのかと思いましたが…錯覚でしたね」

そして私とベイツさんは”ちゃんと銃弾が装填されている”銃を構えた。

「アニエス、任務を完了しよう」

「わかりました」

ほぼ同時に2発の銃声が鳴り響き、私たちは復讐を果たした。

S i d e o u t

「同時刻、ゲルマニア、国防総省」

「ちょうかーん、トリステインの各地で異変が起きています（棒）」

「な、なんだってー（棒）」

「ご覧下さい、主要都市で大規模な戦闘が勃発しています（棒）」

「どうやら貴族の連中を攻撃しているようです（棒）」

「へいかー、チャンスですよー（棒）」

「よし、予定より早いが全軍に攻撃を開始させるー（棒）」

「了解しましたー（棒）」

「ガリア軍とクルデンホルフ軍にも越境攻撃開始を伝えるんだー（棒）」

「既に伝えてあります（棒）」

「うむ、よくやったー（棒）」

続く…

第31話：トリスティン終了のお知らせ 上（後書き）

リッシュモンさようなら

なんで「トマホーク速達」にしたのかというと、国境を閉じているので、王家に直接届ける必要があったからです。でも手渡しするのは面倒なのでトマホークで送ることに。随分と高い速達ですけど。

「アニエスとベイツの賭け」はブラックラグーンから頂きました。

次回は続きです。1回にまとめるのが難しい…では

第32話：トリスティン終了のお知らせ 中（前書き）

前回からの続きです。

### 第32話：トリステイン終了のお知らせ 中

（トリスタニア）

『市民の皆さん！ 危険ですから家から出ないでください！ 現在トリステイン

解放人民戦線による決起が行われています！ トリステイン軍兵士に告ぐ！

直ちに武器を捨てて降伏せよ！ 命だけは助けてやる！ もし従わない場合は  
実力で排除する！』

市内のあちこちから聞こえてくるこの声は、PFLTがこっそり設置したスピーカーから流れている。何が起きているのかわからない市民に情報を伝えるためである。

ベイツ達の分隊がリッシュモンの屋敷を出る頃には本部を経由して各地からの報告が次々と入ってきた。

『こちらラ・ロシエール部隊。街全域と棧橋、造船所、風石保管所を占領確保

しました。敵兵は全て死亡、数名の貴族を拘束しました。また一般市民及び

我が部隊の被害はゼロです』

『こちらシユルピス部隊です。都市全体を制圧下に置きました。被害なしです』

『魔法学院制圧部隊です。若干の抵抗はありましたが制圧完了です』

『チエルノボーク部隊より報告。完全に制圧しました』

「よし…作戦通りだな。スカロン、王城はどうなっている？」

『現在交戦中だ。魔法衛士隊の連中がなかなか強い。既に10名が負傷している』

「わかった、重火器を持たせた増援を送る」

ベイツは無線を切ってひと息入れようとしたが、そこに新たな無線が入った。

『こちらフォーエス1だ。ホトトギス、応答せよ』

「こちらホトトギスです。どうしたのですか？」

『リツシュモンを始末したそうだが…残念ながら君とアニエスの復讐は終わって

いないようだ』

「なんですって!?!」

思わずベイツは大声で叫んでいた。隣にいたアニエスも飛び上がっている。

『そこにアニエスはいるか？ 彼女にも話さなければならぬ』

「わかりました」

そしてアニエスも会話に加わった。

『さて、ダングルテールを燃やすよう命令したのはリッシュモンで間違いない。』

だがつい先程G C I Aの調査で新たにわかったことだが…実際に燃やした連中が

まだ生きている事が判明した。いや、正確にはその部隊の隊長が生きている。

隊長以外の隊員はすでに全員死亡しているそうだ』

ちなみに原作で生きているメンヌヴィルだが、アルビオンでレコンキスタと

共に死亡している。

「そ、そんな…」

アニエスは怒りのせいで顔が真っ赤になっている。

「それで、そいつは今どこに？」

『今奴は君等が占領確保したトリステイン魔法学院で拘束されているはずだ。』

なにせ、そいつはその教師をやっているからな』

「…あの悲劇をしでかした野郎が教師を？ ふざけていやがる…」

『全くだな。現在三国同盟軍が越境攻撃中だ。30分以内にそちらに空軍のヘリが着く。』

それに乗って学院に行き、復讐を終わらせるんだ』



「…感謝します」

『なに、気にしなさんな。ああ、肝心なことを言い忘れていた。その隊長の名前は

ジャン・コルベールだ。ハゲだからすぐに分かるはずだ。あとそいつが持っている

火のルビーを絶対に回収してくれ。頼んだぞ』

「わかりました。ホトトギス、通信終わり」

ベイツはアニエスの方を向いた。

「アニエス、今度こそ終わらせよう!」

「はい!」

「ところでなんでさっきあいつの肩を撃つたらすごい悲鳴をあげたんですか？」

「ああ、ジェシカに聞いたんだが、肩のあの位置に痛覚神経が通っているそうだな、

それを傷つけると死ぬほど痛いらしい」

「なるほど……」

今回ゲルマニア軍はそこまで派手な攻撃は行わなかった。というもののPFLTが大暴れ

したので戦うべき相手が既に壊滅しかかっているからである。陸軍部隊はガリア軍と

共にぞろぞろと国境を超え、空軍はC-130J スーパーハーキユリーズで既に占領確保

された街に輸送物資を投下した。海軍はガリア軍兵士をトリステイン沿岸部に上陸させた。ゲルマニア・ガリア支援のもと新設されたクルデンホルフ陸軍も、数は少ないが進軍を開始した。

先程”派手な攻撃は行わなかった”と言ったが、全く攻撃をしなかったわけではない。7年前に墜落した不発の巡航ミサイルの調査を行っているアカデミーには、再び巡航ミサイルが撃ちこまれた。大怪我が治り再びアカデミーで働いていたヴァリエール家の長女であるエレオノールは薬の調合をしていたが、いきなり

天井から何かが杭を打ち込むように床に突き刺さった。くすんだ灰色の筒状の物体とへしゃげたフィンがつかの間見えたが、その時巡航ミサイルの高性能爆薬弾頭の信管が発火した。

アカデミーに潜入していたスパイは、今日は無断欠勤して遠くから観察していた。

どでかいきこの雲がもくもくとぼるのを確認すると、スパイは無線で二言三言話してその場を後にした。

そこから離れた場所にあるとある屋敷には、魔法学院の元校長、オスマンが

住んでいた。仕事をやめた後、1人でこの屋敷でひっそりと暮らしていた。しかし  
ゲルマニア軍上層部は、その魔法の腕は未だ衰えていない、すなわち脅威だと判断し、  
この屋敷に対して新型爆弾での攻撃を決定した。そして今、屋敷の上空からMOABが  
2発落ちてきた。8tオーバーの炸薬が詰まっている超大型爆弾2発を食らって屋敷と  
オスマンは消滅した。

また、7年前の攻撃ではフネの造船所や風石の保管庫なども吹き飛ばしたが、  
今回はそれらの場所へミサイルが撃ち込まれることはなかった。今後使う予定があるからだ。なのでそれらの場所はPFLTによって制圧された。

場所は離れて、かつて水の精霊が住んでいたラグドリアン湖。今そこにガリア軍が押し寄せていた。ド・モンモランシ領の兵士達はいきなり現れたガリア軍に驚いたが、それでも反撃を開始した。しかしその兵士達にガリア両用艦隊からの攻撃が襲いかかった。全部で75隻ある艦隊から今回は10隻がやってきた。この10隻は対地攻撃能力を極限まで高めてある、いわゆる対地攻撃艦であった。

対地攻撃艦の船体は全て鋼鉄できており、甲板にあった昔ながらの大砲は全部撤去された。その代わりに対空用のファランクスCIWSを2つ、12.7mm連装機関砲を4つ、そして対地攻撃兵装として長距離攻撃用の130mm30連装ロケット弾発射機（最大射程：14,500m）8つと、比較的近距离攻撃用の220mm30連装ロケット弾発射機（最大射程：3,500m）4つを搭載した。ガリアはこれらを下にも撃てるように改造した。しかも自動装填装置付きである。なので攻撃力はあり得ないくらい向上した。そして主砲は2連装に改造した380mm61式ロケット臼砲2基である。125kgの高性能炸薬を弾頭に充填した長さ約1.5mのロケット弾を発射し、最高で2.5m厚の鉄筋コンクリートを貫通することができる。この最大射程距離は5,650mである。

そんな艦隊の一斉射撃を受けて、ド・モンモランシ領の兵士達は文字通り消滅した。その10分後、ド・モンモランシ家の屋敷周辺一帯に徹底的な攻撃が行われた。15分くらい撃ちまくった結果、屋敷から半径5kmの範囲の地形がかなり変わってしまい、生存者は誰1人として存在しなかった。その威力に攻撃したガリア軍も驚いていた。

「トリスタニア、王城」

スカロンが率いる部隊は持っている火力全てを投入して、魔法衛士隊を次々と

倒していった。先程まではかなり苦戦していたが、増援が持つてきたRPG-7D3のお陰で突破口が開けた。そして彼は護衛の死体をまたいで先に歩いていった。

途中で羽帽子をかぶった口髭の男の死体を踏んづけたが、気にすること無く先に進んだ。

ある会議室に突入するとそこにはとある貴族がいた。運悪く王城に来ていたのだろう。その貴族の顔を見るとスカロンは凍りついた。そいつこそ、あの日彼の妻のために買った水の秘薬を取り上げた貴族だったのだ。

「サブリーダー？」

副官が聞いてくる。

「悪いが先に行ってくれ。私は大事な用事がある」

「…りよ、了解。みんな、行くぞ！」

部下が行った後、スカロンはAK-101を貴族に向けた。

「た、助けてくれ！ ほら、金だ！ 全部持って行って構わんから命だけは！」

だがスカロンは微動だにせず、銃の引き金に指をかけた。

「お、お前の目的は一体…」

そこから先は言えなかった。スカロンが弾倉に装填されていた30発の5.56mm弾を

全てその貴族の足に撃ち込んだからだ。貴族は両足が蜂の巣になって絶叫した。

「俺の目的だと？ もちろん復讐だ。お前がいくら金を持っていようとも、死んだ

妻は帰って来ないさ…」

1人そう呟いたスカロンは、会議室を出る前に手榴弾を投げ込んだ。数秒後に爆発し、動けない貴族は部屋ごと木っ端微塵に吹き飛んだ。

部隊と合流したスカロンはついにアンリエッタ達がいる部屋に到

着した。部屋に  
突入しようとしたが、後ろからベイツがやってくるのが見えた。

「ベイツ、魔法学院に行くのでは？」

「まだヘリが来ないからな。一応あのアホに挨拶をしようとしたのさ」

「なるほどな。それじゃ行くぞ！」

扉に小型爆弾を貼り付けて起爆させる。木製の扉は木っ端微塵に吹き飛び、ベイツ

達は一斉に部屋になだれ込んだ。そこにはアンリエッタとマリアンヌ、そして

マザリーニがいた。

「あなた達は三国同盟の兵士ですか？ 予定時刻よりも早いのですね」

3人を代表してマリアンヌが口を開く。それに答えるのはベイツ。

「いや、我々はトリステイン解放人民戦線だ。腐った政府を叩きのめし、愚かな

貴族共を根絶やしにする。そして平民の平民による平民のための国を作るために

立ち上がったのだ」

「なるほど、我々は反乱を起こされたということか…」

それを聞いたマザリーニは1人納得した。



「マザリー二枢機卿、我々はあなたの頭脳を高く評価しています。我々と共に

新たな国づくりに協力してくれはしませんか？」

そんなベイツの提案をマザリー二は即座に拒否した。

「私は今のトリステイン王国に仕えているのだ。もしこの国が滅ぶのであれば、

私もこの国と共に死ぬつもりだ。残念だが君達と協力することはできん」

「そうですか、分かりました」

そして3人を一時的に地下牢に閉じ込めておくことになった。連れていかれた後、ベイツとスカロンはバルコニーに出た。

「さて、王都と国のトップは押さえた。これで第1段階完了だな」

「ああ。主要都市も既に我々の手中にあるし三国同盟軍も進軍中だ。この戦争は

間違いなく勝利だな」

「だな」

ふと2人は顔をあげた。地平線の彼方からヘリコプターが無数にやってくるのが

見えた。攻撃ヘリだったり、大型輸送ヘリだったり様々な種類である。

「来たな」

「ああ。さてと、じゃあ俺とアニエス、才人とシエスタは借りていくぞ。魔法

学院に用があるのでな」

「わかった。ここの指揮は任せてくれ…ん？ お前とアニエスちゃんはいいとして、

なんで才人くとシエスタちゃんまで？」

「才人君は魔法学院にいた頃、貴族のガキどもにリンチされて死にかけてそうだ。

そのお礼参りといったところだろう」

「なるほど…で、シエスタちゃんは才人についていくと」

「だろう。早くあの2人結婚すればいいのに。どこからどう見ても恋人にしか

見えんぞ」

「ははは、それは同感だ」

くしばらくして、トリステイン魔法学院

ゲルマニア空軍のMH-60G ペイブ・ホークが中庭にふわつと着陸する。中から

ベイツとアニエス、才人、シエスタが降りてきた。すぐに現地の部隊長が駆け

寄ってきて状況を報告した。

「作戦開始から15分後には完全に制圧を終えました。教師と一部の生徒が抵抗して

きましたが、催涙ガスや閃光弾を使用して無力化しました。こちらの負傷者は

6名のみでいずれも軽症です。命令通り全員に使い捨てのプラスチック製の手錠を

かけて拘束、杖は全て回収してあります」

「ごくろうだった。で、今教師と生徒はどこに？」

「食堂に押しこんでありますが…それが何か？」

「なに、ちょっと会いたい奴がいるのでな…行こう」

4人は食堂に入った。そこには多くの学生と教師が寝巻きのまま拘束されていた。

全ての目が4人に向けられる。ベイツは大声で聞いた。

「ジャン・コルベールはその場で立て！ さもないと生徒を1人殺すぞ！」

「や、やめてくれ！ 私がコルベールだ！」

すると即座にハゲのコルベールが立ち上がった。

「貴様がコルベールか…連れて行け」

「はっ」

部下がコルベールを外に連れていくと、今度は才人が大声を出す。

「今から名前を呼ばれた生徒は立つんだ！」

そしてあの日 ルイズによってこの世界に召喚された次の日に才人をリンチした

生徒の名前を次々と言った。その数6人。その中にギーシュ・ド・グラモンと

ヴィリエ・ド・ロレーヌの姿があった。彼らも同じく、外に連れていかれた。

「お、お前は…グエツ！」

「とつとと歩け！」

ギーシュは才人に気づくと声を荒らげたが、すぐにPFLTの兵士に殴られた。

「さて、貴様の名はジャン・コルベールで間違いないな？」

中庭に連れていかれたコルベールはベイツにそう聞かれた。

「あ、ああそうだ。頼む、生徒達に危害を加えないでくれ！」

「抵抗しなければ、な。それでだ、貴様がダンゲルテールを焼け野原にした部隊の隊長だな？」

「っ！？ なぜそれを…」

「もちろん調べたからだ。長い間探したよ…これで俺の恋人の復讐ができる」

ベイツの後ろにいたアニエスも前に出た。

「私も家族や友達のかたき討ちができる。覚悟しろ、コルベール」

「ま、まさかあの時の生き残りなのか!？」

コルベールは真っ青になった。そんな彼を見てアニエスはポツリポツリと話し始めた。

「…私はあの日近くの森できのこを探っていた。夢中になりすぎて気がついたら

夜になっていた。急いで帰ったら全部が燃えていた。家も、人も、何もかもが。

それを見た私は頭が真っ白になった。気付いたら朝になっていた。もしかしたら

まだ生きてる人がいるかも知れない、って思ったけどみんな焼け死んでいた。

家がある場所に行ったら黒焦げの死体があった。両親だったよ。近所に住んでいた

セシルお姉さんも、友達も、みんな死んでいた」

「俺の恋人、セシルは新教徒ではなかった。ダングルテールに住んでいた親戚の

家に遊びに行ってただけなのに、突然やってきたお前等に焼き殺されたんだ。

彼女には何の罪もなかった」

2人はそれぞれ武器を構える。

「ダングルテールのみんなのためにここで死んでもらう」

「セシルの仇、とらせてもらおう」

まずベイツが両足に銃弾を撃ち込み、アニエスが両腕を切り落とす。あまりの痛さに

悲鳴を上げるコルベールをベイツは壁まで引きずっていき、新型の14mmヘビーペネト

レーター、通称”ハンマーヘッド”を両肩に放って彼を壁に張り付けた。このハンマー

ヘッドは、14mmの劣化ウラン製のスパイクを撃ち出す銃である。金属を貫通できる

ので、防弾チョッキを着ている敵でも余裕で倒せる。ただ、欠点としては連射性が

低いのと、とてつもなく重いというのがある。装弾数は25発で、フル装弾時の重量はなんと6kgを超えるからだ。

撃つたり斬つたりするのをやめた2人は何やらゴソゴソと他の準備を始めた。

「はあ……はあ……な……何、を……する、気だ……？」

息も絶え絶えにコルベールは2人に問いかける。アニエスは無言でガソリンの入った小さなポリタンクを彼の頭の上で逆さまにした。そしてベイツは彼に猿ぐつわを噛ませてからマッチを擦った。

「お前は何かを燃やすのが得意なんだろう？　なら燃やされる気分も味わってみるがいい、炎蛇よ」

そう言つてベイツはマッチを投げつけた。火のついたマッチはくるくと空中を回つて動けないコルベールの足元、溜まっているガソリンに落ちた。

生きながら燃やされるコルベールに背を向けて、2人はコルベールの小屋に行き火のルビーを回収した。これようやく2人の復讐は終わったのだ。

続  
く  
…



第32話：トリステイン終了のお知らせ 中（後書き）

原作と違ってアニエスはコルベルに助けてもらっていません。その方がいいと思ったので。にしてもコルベルやオスマンの最期があつさりすぎですかね？ まあいいや。

ガリア両用艦隊の対地攻撃艦の主砲は、第二次大戦時にドイツ軍が使っていたシュトルムティーガーのやつです。ベイツが使っていたハンマーヘッドは私の好きなゲーム「F・E・A・R」シリーズから。

本当なら今回で終わらせる予定でしたが、次でトリステインをおしまいにします。才人無双も次回に持ち越しに。期待していた人がいたら申し訳ありません。

では

**第33話：トリスティン終了のお知らせ 下（前書き）**

前回からの続きです。これでトリスティン編はおしまいです。

11/13 カトレアのセリフの一部を編集

### 第33話：トリステイン終了のお知らせ 下

「ベイツとアニエスが火のルビーを探している頃」

才人やシエスタ、それにギーシュ達にもコルベールの断末魔の声が聞こえていた。

「ベイツさんとアニエスも終わったようだな…よし、お前等！ほらよ」

「えっ!?!」

ギーシュ達6人は投げつけられた杖をあたふたしながら受け取った。

「なんで杖を…」

「決まっているだろう？ あの日の決闘の続きといこうじゃないか」  
才人はデルフを抜いて構えた。それを見て6人は

（あの時と雰囲気が全然違う！）

と思った。いつの間にか審判役になっているシエスタが、非常にシンプルな決闘のルールを説明する。

「時間無制限！ 死んだら負け！ では始めっ!！」

「そ、そんなルールひどすg」

反論しようとした1人は即座に才人によって首を斬り落とされた。

「ひ、ひいっ！ お、俺は逃げ」『バンッ！！』ガハッ！！」

それを見て逃げようとした1人はシエスタに撃ち殺された。

「言い忘れましたが、決闘から逃げ出したら殺しますからね？」

「くそ！ ならやってやる！！」

ヴィリエが杖を構えて魔法を放つ、が全てデルフが吸収してしまう。

「な、なんで魔法が効かない！？」

「お前みたいな雑魚に教えるか、馬鹿がっ！」

「ヴィエリ、援護するぞ！」

ギーシュもバラみたいな杖を振って青銅製のゴーレムを作り出した。  
それを

見て才人は鼻を鳴らす。

「ふんっ、成長しないな、お前は」

そして一気にゴーレムの懐に入ってなます切りにした。

「えっ」

ギーシュは開いた口がふさがらない。青銅製のゴーレムがなます切

りになった？

それも一瞬で？ 全然あいつが見えなかったぞ？

「いつまでぼやっとしているんだ？」

才人の声が自分の後ろから聞こえてきたので、慌ててギーシュは振り返ろうと

するが間に合うわけもなく、背中を思いっきり蹴られて5mほど前方に吹き飛ば

された。地面とキスする羽目になったギーシュは、泥まみれになりながらも

立ち上がる。だが彼の目の前でヴィエリが喉を斬られ、そこらじゅうに血を

まき散らしながら倒れた。

「ヴィエリ！」

「全く…弱いな、お前等は。あの日みたいに俺をボコボコにしてみろってんだ。

さてとギーシュ。あとはお前だけだ」

才人は血に濡れた顔をギーシュに向ける。

「く、来るなあー！」

「ほら、かかってこい。まだお前は死んでいないじゃないか。さあ立ち上がれ！」

杖を拾え！ ゴーレム達を作り反撃しろ！」

「くそっ！！ くそくそくそくそおおおおお！！！！」

破れかぶれになったギーシュは再びゴーレムを作り出すが、あっけなく破壊され、  
逆にサイトによって右腕を斬られた。

「ぎゃあああああ！……！」

杖を落とし地面でのたうち回るギーシュ。才人はそんなギーシュを冷ややかな目で

見下ろし、彼の両足と左腕を思いつきり踏みつけて粉々に折った。

「痛いかな？ 痛いだろうな。あの日お前等が俺にしたのはこういうことさ」

才人はデルフをゆっくりとギーシュの首に向ける。

「でも痛いのは嫌だよな？ そりゃ誰だって嫌だからな…痛いのが好きなDMの変態は

除いてだけど。でもまあ、俺は優しい人だからすぐに楽にしてやるよ」

そして才人は思いつきりデルフを振りかぶってギーシュの首を

斬り落とすこと無く太腿に深々と突き刺した。しかも前後左右に大きく動かして  
傷口をぐちゃぐちゃと引っ掻き回す始末。

「ぎゃああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」  
もちろんギーシュは獣のような悲鳴を上げるが、才人は特に悪びれた様子もなく、

「悪い、手が滑っちゃった、テヘツ　でも間違いだつてあるさ、にんげんだもの」

と、ぼやいた。シエスタもそれに同意する。

「そうですね、人間ですから……つて才人さん、大事な事忘れてません？」

「え？……ああ！　忘れてた！」

才人は悲鳴をあげ続けているギーシュからデルフを引っこ抜いて尋ねた。

「おいギーシュ。俺の質問に素直に答えてくれたら痛いのはやめにしてやる。」

ルイズはどこにいる？　さっき食堂を見たけどあの貧乳ピンクはいなかったぞ？」

ギーシュは息も絶え絶えになんとか声を絞り出した。

「る……ルイズは……退学、した……君が……いなく、なつてから……」

暴れる、ように、なって……公爵が……引き取って、いったよ



だから……ここには、もう、いないんだ……頼む……もう、やめて、くれ……」

「そうか、じゃあ今は実家にいるのかな。ならすぐに行かないとな」

「そうですね才人さん。だからとっとと終わらせましようよ」

「そうしよう。ありがとなギーシュ。じゃあさいなら」

ズシャツッ！

今度こそギーシュの首を……斬り落とすこと無く今度は下腹部……正確には

彼の”紳士のソーセージ”に突き刺した。しかも前後左右に大ききk  
(ry。

「#\$%&’()=!!……」

声にならない悲鳴をあげるギーシュ。

「さつき痛いのはやめにすると約束したな？ あれは嘘だ」

「人間ですから嘘を付くこともありますよね」

「その通り。完璧な人間などどこにもいないさ。その証拠に、おつと手が滑った」

才人はポケットから取り出していた伯の塩を、血まみれになっ  
ているギーシュの

”紳士の領域”に落としてしまった。



そして才人は首を斬り落とし、ギーシュはやっと痛みから解放されたのであった。  
ヘリコプターに乗った才人とシエスタは、ルイズがいるヴァリエール家の屋敷まで飛んでいった。

「さて、待つてろよルイズ！」

しばらくして、ヴァリエール家の屋敷

この屋敷は既にPFLT第1歩兵大隊が制圧していた。捕虜にしたメイジは全員射殺。

ヴァリエール公爵は逃げようとしたが、迫撃砲の攻撃を受けてバラバラになった。

そして屋敷にいた次女のカトレアと三女のルイズを捕虜とした。部隊はその後、

屋敷の宝物庫の中身を回収したり、屋敷内に残っている金目の物を集めていた。

私利私欲のためではない。これらの財産は全てPFLTが管理し、新たな国家が  
成立した後にそれらを売りさばいて国家予算とするのだ。

そこにやってきたのは才人とシエスタ。部屋に案内されると、両手に手錠を

かけられて猿ぐつわを噛まされているルイズとカトレアがいた。

「よおルイズ！ 調子はどうだ…っていいわけねえか」

「むー！ むーー！！」

「さて、どうやって痛めつけようかね…」

するとカトレアが必死に何かを言おうとアピールした。シエスタは才人の許可をとってから彼女の猿ぐつわをはずした。

「お願いします！ 私はどうなってもいいから妹を…ルイズを殺さないでください！」

「えー、でもこいつのせいで俺は散々な目にあわされたからねー。それを全部

無かった事に…なんていくわけねえだろうが！俺はこの爆発ピソクチビ貧乳を

殺しに来たんだ！俺の人生をめちゃくちゃにした罪だ！何が  
使い魔だ、

「冗談も程々にしろ！」

才人は激昂してデルフを抜き放ちルイズの喉に突きつけた。

「しかもこいつは俺が気に入らないから新しい使い魔を呼ぶために俺を殺そうとした

んだぞ！？ そんな奴を殺さないで、だと？ ふざけるのも大概にしる！」

「あ、あなたを…殺そうとした？…ルイズが…？」

「え、知らなかったのか？ んー、そりゃいくら身内だろうと、都合の悪いことは話したくないわな」

カトレアは顔を青くしながらルイズを見る。

「ルイズ…本当なの？」

「……………」

カトレアの問いにルイズはうつむいた。それを見たカトレアは才人の言葉が事実だと理解した。

「…いないわ」

「むー？」

そんなカトレアのつぶやきにルイズは顔を上げる。

「私の可愛いルイズは……もういないわ。あなたは私の知っているルイズじゃない」

「むー！…むー！…」

ルイズは涙目になりカトレアに訴えようとしたが、その前にカトレアが言った。

「そんな身勝手な理由で、人を殺そうとする妹なんかいらぬ。もうあなたは私の妹

なんかじゃないわ」

「っ……………」

それを聞いたルイズは何も言えずに、ただ涙を流し続けた。優しい姉が、最後の

味方がいなくなってしまったのだから。そんなルイズを無視してカトレアは才人に尋ねた。

「私はどうなりますか？ この後処刑されるのですか？」

「さあね。それは俺が決めることじゃない。で、これはどうする？」

才人はルイズを指差すが、カトレアは見向きもせず冷やかに言った。

「お好きなように。もうこれは私の妹ではありませんから」

「そっか、わかったよ。じゃあ先に出てっくれ」

カトレアが兵士に連れていかれた後、才人は改めてデルフを突きつけた。

「さあてご主人様。死ぬ覚悟はできていますか？ ってな。まあ覚悟ができて

いようがいまいが知ったことではないがね。じゃあな」

しかしデルフが振り下ろすのをシエスタが止めた。

「…シエスタ。何故止める？」

「いえ、実はちょっと面白いことを考えまして…」

シエスタが才人の耳にあることを囁く。

「…本気か？」

「もちろんですよ、才人さん」

「それはいい考えだな…シエスタ、ならこうしないか？」

才人が囁き返す。

「…いいですね！ 早速ベイツさんに言ってみます」

「頼んだ。さてルイズ」

くるりと振り返るとルイズは、今度こそ殺される、と思った。





「じゃあ今度はこっちにしよう。手伝ってくれ！」

「はい！」

他の兵士に手伝ってもらい、手錠を外したルイズを逃げないように取り押さえた。

そして今度は左肘にハンマーを振り下ろす。嫌な音と共にルイズのくぐもつた

悲鳴が響く。彼は敢えて右肘と左膝を破壊しなかった。何故かという、将来

ルイズが何かをやらかす可能性 例えば脱走などを考慮して、もし何かやらか

したら残っている肘と膝を破壊するぞ、と脅すためだ。彼女に使えるのは右腕と

左足だけ。それらを失いたくないであろうルイズはきつとおとなしくこっちの

言うことを聞いてくれるだろう。才人は短時間のうちにそう考えた。

「ふう、とりあえずこれくらいでいいか。どうだ、ルイズ？ まだ生きてるか？」

「……………」

才人の問いかけにルイズは答えない。

「まったく貴族は返事も出来ねえのかよ。見ててイライラするな。ついでにこっしょう」

ペンチを取り出した才人はルイズの両足の爪を全て剥がした。



翌日。トリステイン王国がレジスタンス組織に反乱を起こされ、新たな国家、トリステイン共和国が誕生したというニュースがハルケギニア中に広がった。ベイツが臨時の指導者を務めるトリステイン共和国は、アンリエッタら王族を三国同盟に引き渡した。これにより戦争は終結した。そして三国同盟に加盟することとなった。三国同盟は会議で、

- 1．トリステイン共和国は6ヶ月以内に政府機能を確立すること。
- 2．上記の事項を支援するため、三国同盟加盟国はあらゆる援助をすること。
- 3．トリステイン共和国内に展開中の三国同盟軍は1個歩兵大隊規模の戦力を残して撤退すること。
- 4．旧トリステイン王国所属の貴族らの処分は全て共和国政府に任ずる。

ということを決定した。4番の項目は、トリステイン人はトリステイン人の手で裁かれるべきだ、という意見が出たから追加された。

ベイツは三国同盟立ち会いのもと国民アンケートを行った。議題は

「貴族の処分、どうする？」

である。99%の平民が回答し、その結果王族や貴族、その家族全てを絞首刑にすることが決定した。

「全員ってやり過ぎだよー（棒）」

という意見が三国同盟から出たが、ベイツ率いる共和国は、

「今まで我々平民にしてきたことを考えれば、これは当然の結果である。何より、

これはトリスティン共和国国民の民意である」

と主張した。そしてその日のうちに死なずに捕虜となっていた貴族達、王族の関係者、魔法学院に通っていた貴族の子供達は例外なく全員処刑された。

………というのは表向きの話であり実際には貴族の妻や娘は処刑されたように見せかけて、ある場所へ連れていかれた（男は全員処刑された）。そこは広大な地下施設で、ジメジメとした場所であった。その中にはアンリエッタやルイズ、カトレアなどもいた。

そこに現れたのはPFLTの兵士達であった。壁に取り付けられたスピーカーから男の声が聞こえてきた。

「さて、元貴族のみなさん。死んだ気分はいかがかな？　これから君達には

ある事をしてもらおう。兵士達を見てくれ」

女性達の目が兵士達に向けられる。

「彼らはこの国を変えるために立ちあがった戦士達だ。ほとんどが平民である。

君達貴族に蔑ろにされ、君達貴族を恨み、殺したいと思っている。そんな

彼らだが、今回の戦闘でとても疲れている。そこでだ、君達に彼ら戦士達の

体と心を癒してもらいたい。もし拒否したら……言わなくてもお分かりですね？

それじゃあ戦士諸君！　派手にやりたまえ！！」





第33話：トリスティン終了のお知らせ 下（後書き）

最後の部分ですけど、彼女達がどうなったかはご想像におまかせします。決して面倒くさくて書かなかったわけではありませんとも、ええ。ノクターンノベルズの方で彼女達の行く末を書こうかなと一瞬考えましたが、18禁の話をうまく書ける気がしないのでやめときます。

これでトリスティンは終了。次回もお楽しみに。  
では



第34話：一息入れる…暇はなかった（前書き）

早く就職決めたいな、と言ったところで内定なんか  
もらえない今日この頃。

長くなってしまいましたけどどうぞ！

### 第34話：一息入れる…暇はなかった

Side ウィリアム

くだいたい1ヶ月後、ゲルマニア、国防総省

やあやあウィリアムだ。無事にトリステイン戦が終わってほっとしているよ。

あとはロマリアだけだが、しばらく様子見をする予定だ。兵士達も疲れている

だろうしね。なので俺は通常の仕事をせざるを得ない…はあ。ま、愚痴を言っても書類が減るわけじゃないし、おとなしく仕事しよう。

まずは新しくできたトリステイン共和国について。政府機能がまだ整っていないので、今のところ三国同盟から派遣された政治家が臨時的にトリステインを動かしている。なるべく早くトリステイン人に任せられるように指導もしている。国内のインフラ整備などやることは山ほどあるから忙しいだろう。

PFLTはトリステイン共和国軍と改名し、国防の任務に携わっている。いつまでも

レジスタンスではいられないのでね。あと、リーダーのベイツとアリエスがなんかいい仲らしい。

次は我が国だがデックスが画期的なものを開発した。しかも風石を用いたものだ。

その名も「風石巡航ミサイル」。今までの巡航ミサイルは燃料を燃やして飛んでいた

が、これは風石の力で飛んでいく。なので環境にも優しい。しかもエンジン音が小さく

なったのでバレにくいし、ミサイルの速度も従来より15%向上した。実にいい兵器だ。

欠点は風石を使うのでちょっと高いことぐらいかな。これを応用して自動車用の風石

エンジンなども開発された。あと衛星打ち上げ用のロケットにも風石エンジンを搭載

したそうだ。従来よりパイロードが3倍になったので、より大きな人工衛星の打ち上げが

可能になった。なので俺はデックスに頼んで”ある兵器”を打ち上げさせた。これは

きっとロマリア戦で活躍するだろう…

お次はアルビオン。1週間前、三国同盟に加盟したいと連絡があったので、俺と

デックスがアルビオンに行った。その時の話。

）

）  
）  
）

~~~~~

「1週間前、アルビオン、ロンディニウム、ハヴィランド宮殿」

「ようこそウィリアム長官、デクスター長官！」

ジェームズ1世は笑顔で俺達を迎えてくれた。もちろんウェールズも一緒だ。

あとアルビオン政府の閣僚も揃っている。

「お久しぶりです、陛下」

デックスがジェームズ1世と直に会うのは7年前の講和会議以来だった。

「さて、本題に入りましょう」

俺は鞆から幾つか書類を取り出してジェームズにすべらせた。

「これが三国同盟加盟に必要な書類です。確認の上サインをして頂けますか？」

「わかった。ん、ウェールズ、わしの老眼鏡を取ってきてくれ」

「はい、父上」

「すまん。最近細かい字がよく読めなくてな」

2人は書類を10分ほど熟読してからきちんとサインをした。

「これでいいかな？」

「…はい、確認しました。アルビオン王国は三国同盟に正式に加盟しました。」

おめでとございます、陛下」

「ありがとうございます、長官！」

しっかりと握手をすると、アルビオンの閣僚から拍手が湧いた。それもそのはず、同盟に加盟するとメリットがいっぱいあるからだ。

ひとしきり拍手が終わると、ウェールズが質問をしてきた。

「長官、1つ質問が。加盟国がすでに3ヶ国以上あるにも関わらず、三国同盟という

名前は変えないのですか？」

「いい質問ですね、殿下。ここだけの話、1年以内に呼称を変える予定です。まだ

決まっているわけではありませんけどね」

「そうですか、分かりました」

「それで陛下、これを御覧ください」

俺は新しい書類を広げた。そこにはアルビオンの地図が書かれていた。

「ファルケンハイン大使から聞いています、貴国に建設予定の我が軍の

基地の建設予定地の件です。我々で幾つか予定地をピックアップしたのですが、

この中で都合の悪い場所がありますか？」

「ふむ…どの土地も外縁部で、人気のない場所ばかりだな。そして誰の所有地でも

ない、か。どのような施設を建設する予定なのだ？」

「はい、航空機用の滑走路、軍艦の棧橋、陸軍の演習場等を建設する予定です。

我が軍では初めての陸海空3軍の合同基地となります」

「なるほど、だから広い土地が必要なのか…よかろう、この中の候補地ならどこに

でも建設していいぞ」

「ありがとうございます、陛下」

俺は書類をしまってからジエームズとウェールズに向き直る。

「それで、もう1つの件なのですが…その前に人払いをしていただけますか？」

「…わかった。皆の者、下がっておれ」

そろそろと閣僚が部屋を出ていく。それから俺は話し始めた。

「話とは3つ目の要求の事です」

「ああ、大使が言っていたな。確か我が国の損になることではない、と」

「ええ。デックス、説明を」

「あいよ」

ここでデックスとバトンタッチ。

「お2人とも御存知の通り、三国同盟では翼人やエルフの人々への差別をしない、

という決まりごとがあります。もちろん最初は人々にも抵抗がありました、

今ではお互い仲良くなり、関係は非常に友好的になっています。もっとも、

エルフの住む国『ネフテス』にいるエルフ達は、蛮人の言うことなど信用

出来ない、などと言っていますけど。で、アルビオンでエルフ達が受け入れ

られるまでには、そこそこ時間がかかると考えています。そりゃ、いきなり

仲良くしてくれ、と言われても難しい部分が多々あるでしょうから。そこで、

まずは国のトップである陛下と、その息子であるウェールズ殿下が、国民の

前でエルフと仲良くしているところを見せれば、国民にも受け入れやすい

のではないか、そう考えました」

「つまり…3つ目の要求は我々にエルフと仲良くしろ、と？」

「いえ、違います。実はある人を許して欲しいのです」

「許す？」

ジェームズとウェールズは首を傾げる。

「かつてアルビオンには、エルフの女性と非常に親密な関係を持ち、その女性との

間に子供を作り、そのことを咎められ、約8年前に忽然と姿を消した人がいました」

「ま、まさか！？」

デックスが話している間に俺はノートパソコンを取り出して通信システムを起動した。

相手が画面に出ると、俺はパソコンをジェームズに向ける。

「お、お前はっ！？」

『…お久しぶりです、兄上』

そこに映っていたのはジェームズ1世の弟であるモードと、その妻シヤジャル、そして2人の娘のティファニアだった。

「生きて…いたのか？」

『ええ。今私達はゲルマニアに住んでいます』

「ゲルマニアだって!？」

ジエームズはびっくりして椅子から落ちそうになった。

「約8年前、モード元大公から亡命の相談があり我が国はそれを受けました。

我が国の諜報機関と海軍が協力して秘密裏にアルビオンから脱出させたのです。

なお、サウスゴータ夫妻も一緒に亡命をしました」

「そんなことが…(ていうかあの女の子おっぱいでかすぎる…)」
ウェールズも驚いている。

「陛下、3つ目の要求は、『モード元大公及びその家族との和解』
です」

「うっむ……」

「この和解の事実を国内に流せば、エルフを妾にした人間は罪に問
われない

ということを国民は知ることになります。そうすればエルフの存
在も受け入れ
やすくなるでしょう」

「……………」

ジエームズ1世は悩んでいる。なので俺からも一言。

「陛下、エルフってちょっと耳がとんがっているだけであとは我々人間と大差ないじゃないですか。それだけの理由で差別するのはいかがなものかと。」

それに人間はエルフを恐れすぎているのですよ」

「恐れ、すぎている?」

ジエームズは鸚鵡返しに尋ねた。

「そうです。今まで人間とエルフは互いに歩み寄ろうとはしなかった。何故なら、

人間はエルフが扱う先住魔法を恐れて近づこうとしなかったからです。ですが

陛下、遠くから見ていただけでは何も変わりません。1歩ずつでも、時に後戻り

することがあるうとも、歩み出さなければならぬのです」

「1歩ずつでも、か……………」

ジエームズはパソコンのモードに向き直る。

「弟よ、お前を許すかわりに1つだけ条件がある」

『…それはなんですか?』

「……………その2人を死ぬまで愛し続けること。これが条件だ」

『も、もちろんです。この命をかけてでも2人を愛し続けます!』

「よし！ ならこれ以上言うことは何も無い！ 今度こつちにきた時には

一緒に酒を飲もう。積もる話もあるだろうしな！」

『はい、喜んで！』

~~~~~

~~~~~

）

こうしてジエームズとモードは仲直りしましたとき、めでたしめでたし。これで

アルビオンでもエルフを受け入れやすくなるだろうね。それにロマリア戦まで

基地の建設を終えておかないとな。

で、次はガリアとクルデンホルフ、正確に言うとジョセフとクルデンホルフ

大公がいい年こいて大喧嘩した。きっかけは俺がいつ結婚するのだろうかという

話だったそうだ。

ジョ『早く結婚して欲しいものだな』

大公『そうですな。父親としても嬉しいですし』

ジヨ『ところでウィルの正室はうちのイザベラで決まりだったな？』

大公『なんですと！ 我が娘ベアトリスでしょう！』

ジヨ『何を！ ウィルと1番付き合いが長いのはイザベラなんだぞ！』

大公『ウィリアム長官とベアトリスの子供が我がクルデンホルフの跡継ぎに！』

ジヨ・大公『ぐぬぬぬ……表に出ろっ！！』

という流れだったそう。虚無が使えるジヨゼフによる一方的な喧嘩になるかと

思ったが、なんと大公は昔ハルケギニアでも珍しい二刀流の使い手だったそう。で、

ジヨゼフといい勝負を繰り広げたそう。結局シェフィールドが止めたんだけど。

そして俺の正室は誰になるかは未だに決まっていない。デックスの場合はほぼ

間違いなくジヨゼットになるだろう。ただ俺もデックスも結婚は

ROMARIA戦が
終わってから、と決めているからそれまでにはきちんと決めないと
ね。

で、そのROMARIA。トリスティン王家&貴族が全員死亡し、アル
ピオンも同盟入り

したのを聞きつけたのか大慌てだそう。そりゃハルケギニアに口

マリアの味方と
なる国がいなくなっちゃったからね。で、以前から作っていた10
隻のフネが完成
した途端に追加でもう10隻のフネを造り始めた。冗談抜きで新た
な土地に移住する
つもりらしい。おそらく神官だけが乗り「ただし平民、ためーらは
ダメだ」って
なるだろう。とりあえず空軍のバンシーのコースをもっとロマリア
寄りにしておく。
いざというときはバンシーが吹き飛ばす。

お次は海外拠点だな。ロシアではやっとな寒さが落ち着いたのでダ
イアモンド鉱山が
フル稼働を始めた。これで安定した供給が可能になるそうだ。

アフリカでは現地人と取引したいのだが、何を言っているのかさ
っぱりわからない
という問題が浮上した。今までは万能翻訳機（地球で話されていた
言語全てに対応）を
使っていたのだが、それでも翻訳できないとは…未知の言語だな。
早急に解決を
しないと。

オセアニア合衆国ではオーストラリア大陸から石油が出て大はし
やぎ。あそこにも
油田があったとはねえ。まあこれで遠路はるばる油を運ぶ必要もな
くなっただな。

これは…南アメリカ大陸への上陸に成功、早速現地人との取引を開始したか。うむ、
スピリティーでよろしい！ ワインやビールで酒盛りしたら仲良くなっただろうな。
やはり酒は万国共通のコミュニケーションツールだな。

ああ、アメリカと言えば2週間前にあんなことがあったな…

）

）

）

）2週間前、サン＝ヘント海軍基地内、SOSUSセンター）

ここではゲルマニアが設置したSOSUSを管理・運営している。
今日も5人の軍人が
常駐し、モニターをチェックしている…のだが、実を言うとこの部署はゲルマニア
海軍で1番暇な部署である。何故かというと、SOSUSに反応するものが少なすぎる
のだ。鯨がゲップする音とか海老が屁をする音とかイルカの歌声とかをソナーが
キャッチするが、それ以外は何も聞こえない。従って、ここに配属された軍人は
いつもポーカーやブラックジャックをしている。

その日、5人のうち4人はランプをしていたが、1人はモニターを見ていた。

彼女はここに配属されてからそんなにたっていないので、今も任務に集中している。

「おいリリー。そんなもの見てたって何も映らねえよ」

「そうだよ。最後に反応したのが2ヶ月前なんだぜ？」

リリーと呼ばれた女性は同僚2人を睨みつける。

「だからといってサボっていいという事にはならないでしょう？
全くも…う？」

画面に目を戻すと、大きな反応が出ていたのでリリーはびっくりした。

「な、7番ラインに反応あり！ 水面近くでの大規模爆発を確認！
！」

『な、なんだってー！？』

同僚4人はトランプを放り投げてリリーの後ろに駆けつける。その間にも次々と画面にデータが出現する。

「場所はここから150km沖です。爆発による津波の影響は…約1m…」

「まずいな、到達予定時刻は？」

「それは気象庁に任せてある！ とにかく政府に報告を…えっ、何

「これ？」

「今度は何だ？」

「…多数、いえ無数のスクリー音！ 2軸と3軸…4軸もいる！いきなり現れたわ！」

この海域を通過予定の民間船舶のデータをちょうだい！」

「もうやってる…いや、ないな。今日その海域を通過する民間船はゼロだ」

「じゃあこいつらは何？」

「いいからそれも全部報告しちゃえ！」

国防総省では報告を受けた俺が偵察衛星で写真を撮らせた。

「まだか？」

「今出ます…これはっ！？」

「なんだこの艦隊は…？」

そこに写っていたのは大規模な艦隊だった。

「ん〜と、戦艦が6、空母が8、重巡洋艦が12、駆逐艦が30…なんつー規模だ…」

てか軽巡洋艦はいないみたいだな…それでこれは何だと思っ？」

「見たところ我が海軍のいかなる艦よりも巨大ですね…」

1隻だけ超巨大な軍艦がいた。どうみても全長は500m以上ありそうだ。

「どでかい砲に飛行甲板…航空戦艦なのか？」

「おそらくそうでしょう…長官、無人偵察機が位置につきました。映像出ます」

急いで飛ばした偵察機からの映像が出る。

「どの艦も動かないな。報告ではスクリー音がしていたそうだが？」

「はい、最初は多くのスクリー音が聞こえていたそうですが、すぐに消えてしまった」

「それで…ってあれは!？」

「おいおい潜水艦までいるのかよ!」

突然海面が割れたかと思うと、5隻の潜水艦が浮上した。そのうちの1隻を見て

俺と副官はため息をついた。

「…なああれはどう見ても…あれだよな？」

「ええ、そうですね…」

「「あいつら潜水空母まで持ってたのかよ…」」

300mはありそうな飛行甲板を持った潜水空母が浮上していた。

「とりあえず会いに行くか」

で、オスプレイに乗って会いに行ったんだけど、近づいたらいきなり高角砲を

ぶっぱなしてきたので肝が冷えたよ。慌てて無線で呼びかけたら、なんと英語で

返事が帰ってきた。旗艦に着陸しろって言われたので、例の超巨大航空戦艦に

降りた。そして艦隊の司令官と話した。いやーこの世界に来る前に大学の授業で

ビジネス英語とっておいてよかった。

「ようこそ『フィラデルフィア』へ。私はアメリカ合衆国海軍太平洋艦隊司令、

アルフレッド・ヘストンです」

「ゲルマニア王国国防長官のウィリアム・タイベリアス・フォン・ゲルマニア

です。素晴らしい艦ですね」

「いえいえ、どうぞ座ってください」

出されたコーヒーを飲みつつ話を始める。

「それでゲルマニア王国、でしたか？ 聞いたことがない国ですね…」

「こちらもびつくりしましたよ、いきなり我が国の沖合150kmにあなた方が現れた」

「のですから。一体何があったのです？」

「私が率いる太平洋艦隊はパールハーバー海軍基地から硫黄島に向かっていた」

「のです。そしたら突然まばゆい光に襲われてな…気付いたらここにいたというわけです」

「太平洋だって？ ここは地球で言うとお西洋辺りなんだが…ま、まさか…な。」

「…なんで硫黄島に？」

「もちろんのクソツタレのジャップ共と戦ってる友軍の支援に向かうためです」

「えーと、ジャップって…もしかして大日本帝国軍ですか？」

「ええ、それ以外にないでしょう？」

「…はい、確定しました。アメリカ太平洋艦隊はそっくりそのままハルケギニアに」

「ご招待されちゃったんですね。だから戦艦には古臭い砲塔が付いて」

いるし、対空
機銃や高角砲がいつぱい載ってるのか。俺は魔法とか異世界とかその辺のことも
踏まえて全部説明した。

「馬鹿なっ！ 魔法だなんてありえない！」

「じゃあお見せしましょう」

そうやって手のひらに火の玉を出現させるとヘストンは啞然としていた。

「信じられないが…これが現実か…」

「そういうことです」

「なんとということだ…ん？ ということは我が祖国もこの世界にはないのですか！？」

「地図的に言えばこの世界は地球によく似てますけど、アメリカ合衆国はありません。」

現在北アメリカ大陸に存在するのは『北アメリカ共和国』です」

「合衆国ではないのか…」

「とりあえず我が国の港に入港しませんか？ いつまでもここにいらるわけにはいかない
でしよっ」

それを聞くとヘストンは難しい表情を浮かべた。

「それはありがたいのですが、先程確認したところ動ける艦が少ないのです。潜水艦

5隻とこの『フィラデルフィア』、双胴空母『レッドラム』、そしてあそこに見える

『トーマス・A・エジソン』のみしか動けません」

「なぜですか？ 機関の故障ですか？」

「燃料がないのです。この世界に来た時には燃料計がゼロになっていたそうでした」

「そうですか…じゃあなぜ残りの艦は動けるのです？」

「ああ、それは他の艦と違い原子炉を搭載しているからです」

「げ、原子炉ですって!？」

「おいおい原子力戦艦とかマジで？ ていうか第二次世界大戦中になんで原子炉

あるの？ なんか色々とおかしいな。」

「ええ、つい1年前に完成しまして。試験的に搭載してあるんです。あとこの艦には

原子炉ではなく、核融合炉を搭載しています」

「……………」

「なんかもう色々とおかしい。でも気にしたら負け…なのかな？」

「そ、そうですね。ならばすぐに我が海軍の補給艦を呼びます。それから移動

しましょう」

「ではそうしましょう」

~~~~~

~~~~~

）

その後我が海軍の補給艦が空を飛んでやってきたのでまた一悶着が起こったけど、

とりあえずサン＝ヘント海軍基地に入港した。そして協議をした結果、この太平洋

艦隊は全艦にGPSや衛星通信システムなどの電子機器を搭載することになった。その

見返りとして、艦隊は近い将来行われるであろうロマリアとの戦いにおいて海から

攻撃をもらうことに。その後は『北アメリカ共和国』の海軍として編入される

ことになった。ちょうどいいタイミングで良く訓練された海軍が来てよかったよ。

「ふう、これでおしまいかな」

気がついたら夕方になっていた、なんてことは毎度のことである。集中しているよ

時間があつという間に過ぎているんだよね。昼飯もカロリーメイトで済ませてるし。

「サリー、そろそろ帰るけど誰かから連絡あつたか？」

荷物をまとめて執務室を出てから秘書のサリーに尋ねる。

「いえ、特にありません」

「そか、じゃあまた明日。お疲れさん」

「お疲れ様です、長官」

1階の自転車置き場までのんびり歩いて行き、愛用のマウンテンバイクで城まで

帰った。最近運動不足だと思ひ始めてみた自転車通勤だが、早朝は気持ちいいし

夜は街の夜景がきれいだし楽しくやっている。

城に帰って飯を食い部屋に戻ると、バスロープ姿のイザベラとベアトリスがいた。

「ど、どした？」

「いやさ、最近ご無沙汰だから……その……」

顔を真っ赤にしているイザベラ、可愛いです。

「ウィリアムお兄さま…一緒に寝ませんか？」

そんな事を言われたら断れない！

「喜んで！」

「「いや〜ん？」」

俺は瞬時に服を脱ぎ捨てると2人を抱えてベッドに飛び込んだ。

S i d e o u t

おまけ。

「はっ！」

「ん？ どうした2人とも？」

その頃マチルダとテファはウィンドボナのモード家にいた。久しぶりに一緒に食事をしていたのだ。2人が突然声をあげたのでモードは首をかしている。

「いや、ウィルが女といちゃいちゃしている気がしたもので……」

「私も同じです。イザベラとベアトリスかも……」

「うふふ、ウィルアム殿下も愛されていますね」

テファの母親のシャジャルが笑顔でそういうと2人は顔を赤らめる。

「そそそそういうわけじゃななないんですけど……」

「なななに言ってるの、おおお母さん！」

この後夜通し2人はモード夫妻にいじられたのであった、まる。

おまけ その2

アメリカ海軍太平洋艦隊詳細

第二次世界大戦時からハルケギニアにやってきた艦隊を紹介します。なぜ原子炉を搭載していたり、オーバーテクノロジーな武器を搭載していたのかというと、多分忠実の第二次大戦よりも兵器技術の進歩があったのでしょう。まあ細かいことはさておきどうぞ。

艦隊旗艦 超大型航空戦艦『フィラデルフィア』

全長550m 基準排水量185,000t
全幅55m 満載排水量227,000t
最大速度46.7ノット

機関 核融合炉2基

武装

- ・50.8cmレールガン連装2基4門
- ・38.1cmレールガン連装2基4門
- ・30mmCIWS14基
- ・対潜ミサイルVLS10基
- ・対空パルスレーザー16基

搭載機数 56機（機種による）

アメリカ海軍が対日本戦での切り札として建造した超大型航空戦艦。連合国軍の軍艦では世界一の大きさを誇っている。飛行甲板は装甲化されており、戦艦大和の主砲弾が直撃してもかすり傷1つつかないほど頑丈にできている。また主砲の50.8cmレールガンの射程は100kmを軽く超える。対空ミサイルを搭載していない理由はパルスレーザーで充分だから。CIWSはパルスレーザーが冷却中に艦を守る。

超大型戦艦『トーマス・A・エンジン』

全長368m 基準排水量105,000t
全幅40m 満載排水量145,000t
最大速度49ノット

機関 原子炉2基

武装

- ・ 80口径43.2cm砲4連装6基24門
- ・ 38口径12.7cm両用砲3連装6基18門
- ・ 65口径12.7cm高角砲連装20基40門
- ・ 40mm対空機銃4連装34基136門

大和の対抗策として建造された超大型戦艦。大和の46cm砲は技術的に製造が難しいと判断されたため、主砲は43.2cmとし、威力不足は門数で補った。設計時よりパナマ運河の通行はキャンセルされたので、アメリカ海軍の戦艦では『フィラデルフィア』の次に全幅が33mを超えた艦となった。ただ、コストがかさんだので1隻しか作られなかった。

バツファロー級戦艦 5隻

『バツファロー』 『ヨーク』 『イーストン』 『シラキュース』 『ユ
ーティカ』

全長293m 基準排水量50,000t
全幅33m 満載排水量60,500t

最大速度46ノット

機関 ガスタービン5基

武装

- ・ 80口径40.6cm砲3連装4基12門
- ・ 65口径12.7cm高角砲連装20基40門
- ・ 40mm対空機銃4連装40基160門

アイオワ級戦艦の後継である次世代高速戦艦。新型電探や自動装填装置を搭載

しており、その戦闘力は絶大。1番の特徴は「統合射撃システム」。各艦の主砲

制御を電子的にリンクすることで、同一データによる射撃を可能にすることができる。成功すれば単一目標に対する命中率は飛躍的に高まる。ま

たアメリカ

海軍ではガスタービン機関を搭載した初の戦艦である。航続距離は減ったが

速度は上がった。

超大型双胴空母『レッドラム』

全長385m 基準排水量112,000t

全幅125m 満載排水量147,500t

最大速度46ノット

機関 原子炉2基

武装

- ・ 65口径12.7cm高角砲連装20基40門
- ・ 40mm対空機銃4連装22基88門
- ・ 28cm9連装噴進砲2基

搭載機数 200機（機種による）

パールハーバーでボロ負けして空母の重要性を認識したアメリカ海軍が建造した超大型双胴空母。被弾しやすい双胴式理由は、敵陸上基地への洋上攻撃基地としての役割を考え建造されているからである。対地攻撃用の噴進砲も備えてある。

さらに艦隊護衛用の潜水艦への補給機能も備えている。

ニューハンプシャー級空母 7隻

『ニューハンプシャー』 『ルイジアナ』 『オハイオ』 『メイン』 『オレゴン』

『ワイオミング』 『テネシー』

全長285m 基準排水量62,000t

全幅33m 満載排水量87,500t

最大速度42ノット

機関 新型ボイラー4缶、新型蒸気タービン3基

武装

- ・ 65口径12.7cm高角砲連装12基24門
- ・ 40mm対空機銃4連装24基96門

搭載機数 140機（機種による）

アメリカ海軍最新の正規空母。アングルドデッキと蒸気カタパルトを採用して

いる。飛行甲板も装甲化されており、40.6cm砲弾の直撃にも耐えられる。舷側

装甲も従来よりもかなり分厚くしてあり魚雷対策を施してある。例え日本海軍の

特攻兵器「回天4型（炸薬1.8トン）」の直撃を受けても、1発では沈まないよう

設計されている。本来なら原子炉を搭載する予定だったが、様々な理由により

通常機関に変更された。

アウルス級重巡洋艦 12隻

『アウルス』 『コア』 『ナッソー』 『ダンカン』 『サウスフィールド』 など

全長225m 基準排水量16,500t

全幅25m 満載排水量19,800t

最大速度50ノット

機関 ガスタービン3基

武装

- ・ 80口径25・4cm砲3連装3基9門
- ・ 80口径15・5cm砲3連装2基6門
- ・ 65口径12・7cm高角砲連装12基24門
- ・ 40mm対空機銃4連装24基96門
- ・ 20cm12連装噴進砲4基
- ・ 533mm誘導魚雷連装2基
- ・ 新型酸素魚雷連装2基

デモイン級重巡洋艦の後継である次世代高速重巡洋艦。新型酸素魚雷は鹵獲した

日本海軍の駆逐艦から回収した酸素魚雷を元に開発された。水中を100ノットを超えるスピードで敵に突き進む。その反面、射程距離は従来の魚雷と比べて短め。

デivain級駆逐艦 30隻

『デivain』 『カースル』 『ランスデール』 『ホーエル』 『シーマン』 など

全長125m 基準排水量4,500t
 全幅15m 満載排水量6,800t
 最大速度51・1ノット

機関 ガスタービン2基

武装

- ・ 80口径15・5cm砲連装2基4門
- ・ 80口径12・7cm砲連装2基4門

- ・ 40mm対空機銃4連装16基66門
- ・ 12cm30連装噴進砲 2基
ヘッジホッグ
- ・ 噴進爆雷砲2基
- ・ 533mm誘導魚雷連装2基
- ・ 新型酸素魚雷連装2基

ギアリング級駆逐艦の後継である次世代高速対潜駆逐艦。ドイツ海軍のUボートに
 対抗するため開発された。その後ドイツが降伏したので日本海軍の
 潜水艦を撃沈する
 ために太平洋艦隊に配属された。また数多くの対空機銃も備えてお
 り、対空駆逐艦
 としても活躍する。

ハンマーヘッド級原子力潜水艦 4隻

『ハンマーヘッド』 『クッキーカッター』 『メガマウス』 『ゴブリ
 ン』

全長115m	水上排水量8,500t
全幅15m	水中排水量9,800t
最大速力 水中46ノット	浮上中36ノット

機関 原子炉1基

武装

- ・ 533mm魚雷発射管8基
- ・ 無線誘導型対空ミサイル12発（浮上時しか使えない）
- ・ 特殊弾頭ミサイル1発（浮上時しか使えない）

最新型の攻撃原子力潜水艦。特殊弾頭ミサイルには弾頭に核弾頭を搭載してある。

ドイツが開発していたV2ロケットを小型化・高性能化した短距離弾道ミサイルである。

音を立てずにこっそり敵の懐に忍び込み、迎撃不可能な距離からミサイルを撃ちこむ

という戦法を取る。日本が降伏しなかった場合、東京にミサイルを撃ち込む予定だった。

超大型潜水空母『サイパン』

全長305m 水上排水量19,900t

全幅32m 水中排水量23,600t

最大速度 水中47.7ノット 水上37.1ノット

機関 原子炉2基

武装

・格納型65口径12.7cm高角砲連装2基4門

・格納型40mm対空機銃4連装2基8門

・533mm魚雷発射管6基

搭載機数 80機（機種による）

アメリカ海軍初の超大型潜水空母。降伏したドイツが開発していたものを完成

させた。蒸気カタパルト2基に艦載機用エレベーターを5基備えて

おり、発艦
スピードは早い。だが構造上の問題から400mより深く潜ることができない。

クリーブランド級軽巡洋艦6隻も太平洋艦隊所属だったが、軽空母に改装される
ために本土に戻っていたので、ハルケギニアに飛ばされることはなかった。

続く…

第34話：一息入れる…暇はなかった（後書き）

この駄文も終わりに近づいて来ました。最後までがんばろうと思います。

艦隊の詳細ですけど、「鋼鉄の咆哮3」で設計したのち、独自の設定（という名の妄想）をつぎ込みました。あのゲームはとても面白いんですけど、他のプレイヤーとの通信対戦が出来ればもっと楽しいと思います。

次回はロマリアをどうしようかなー、と考える回です。
では

第35話：極秘会談、そして…

「ガリア王国、王都リュティス、ヴェルサルティル宮殿、会議室」

その部屋には3人の姿があった。1人はガリア王国外務大臣のジョゼフ。1人は

クルデンホルフ大公国の大公。そしてもう1人はゲルマニア王国国防長官である

ウィリアム。また、ここにはいないがアルビオン王国のウェールズ皇太子も

あとからテレビ電話で会議に参加することになっている。

「皆さん、今日のご足労感謝する。本日集まっていたいただいた理由は他にもない、

ロマリアに関することだ」

まずはこの会議の主催者であるジョゼフが話し始める。

「三国同盟加盟国におけるロマリア教の影響力はほとんどないものと思われる。

新たに加盟したアルビオンからもすぐに神官共は追い出されるだろう。これで

ロマリアはもっと追い込まれることになるだろう。今日の議題は、もっと

ロマリアを追い込むにはどうしたら良いか、そしてどういう理由で連中と

戦争をすべきか、の2点だ」

するとクルデンホルフ大公が手を挙げる。

「追い込む、ということに関しては既に充分ではないのか？ 敵地での破壊工作や

心理作戦等は継続して行うとして、問題はどうかやって戦争を起すか、だ」

「ううむ、それが問題だな…トリステインの場合はゲルマニアの大使を攻撃して

くれたから宣戦布告ができたが、今回の場合どうしたものか…」

ジョゼフもいい考えが浮かばず唸る。そこでウィリアムが口を開いた。

「…なあジョゼフ、ロマリア方面からの難民はここ数年間でどれだけ増えてる？」

グレートウォールは普段完全に閉じているが、難民が来た場合には保護することに
なっている。食料を与え、希望すれば移住も許可している。中には難民のふりを
したスパイも来るが、そういう連中は皆始末してばいっちょよしている。

「ロマリア方面からの？ ゲルマニア空軍やGCIAがせつせと移住させているでは

ないか？」

「それとは別に、だよ」

「ちょっと待ってくれ…あった、グレートウォール警備部隊からの

報告書によると

アクイレイア方面からの難民がここ数年で増えているそうだがどうした？」

「…じゃあその難民達に役立つてもらおうとするか」

「「？」」

2人はわけがわからないといった表情を浮かべている。

「詳しくはあとで話すとして…おや」

そこにウェールズがテレビ電話で会議に参加してきた。

『遅れてすみません、皆さん』

「なに、まだ始まったばかりだよウェールズ。じゃ話を戻して、実際にロマリアと戦う」

場合だが、我がゲルマニア陸軍第4軍団とガリア軍、クルデンホルフ軍、そして

北アメリカ共和国海軍の合同作戦という形になるがよろしいか？」

「ああ、それで問題ないだろう」

「異議なし。アルビオンは軍隊の派遣はまだ難しいだろうからな」

大公の言葉にウェールズも顔をしかめる。

『ええ、まだ国内の復興などが終わっていないため戦争をするのは不可能です』

「まあしゃなあないわな」

そして話はロマリア軍の動向にうつる。

「これは我が国のスパイが撮影したものだ」

ジヨゼフは写真をテーブルにすべらせた。そこには炭鉱らしき場所が。

「…炭鉱、かな？」

大公が写真を手に取りじっくり眺める。

「既に廃坑となっていてははずなのだが、ここ数ヶ月何故か掘りまくっているそうだ」

「何を掘ろうとしているのか…いや、もしかして地下に何かを建設しているのでは？」

ウィリアムの指摘にジヨゼフは頷く。

「ウイルの言う通りだ。どうやらこの廃坑から近くの山までトンネルを掘り、地下

要塞を築いているそうなのだ。地図を見ればわかると思うが、この山の向こうには

ロマリアの首都がある。ここに行くにはこの山を超えなければならぬ。他に

道がないからな。従ってこの要塞は木っ端微塵に吹き飛ばす必要がある」

「その通りだな。だが他にも悪いニュースがある」

ウィリアムは例の大型のフネ10隻と追加で建造中の10隻の事を話した。

「まあこれに関してはいくらでも対処の仕様がある。問題はロマリアの首都だ」

『首都？』

ウェールズが聞き返す。

「偵察機がここ数ヶ月、正確には廃坑と同じ時期からだ、首都に向かう馬車の量が

急激に増えたのを確認した。だが商人が物を売りに来たわけではない。首都に

向かう馬車には積荷がなかったからだ。だが首都から郊外に向かう馬車には

シートに覆われた積荷を山ほど積んでいた。調べた結果、首都から運んでいた

のは大量の土や岩だった」

『土や岩？』

「なんでだ？」

「わけがわからないよ」

3人は素っ頓狂な声をあげた。大都市からそんなものを運び出すな

んて聞いたことが
なかったからだ。

「もちろん俺も理解できなかった。だから無人偵察機で地下の様子
を見ることにした。」

偵察衛星がちょうどロマリア上空にいないくてね。それで…」

「ちょっと待て、上空から地下の様子をどうやって見るんだ？」

「ん？ うちの空軍のグローバルホークには合成開口レーダーが搭
載されていて、

それを使えば地下なんてあつという間に見えるのさ。で、その結
果こんなものが」

「なんだこれは!？」

ジョゼフが大声をあげたのも無理は無い。ロマリアの首都の地下に
は大きな
トンネルが張り巡らされていたからだ。

「さっきの炭鉱が陥落した場合にはここを使って時間稼ぎでもする
んだろ。都市

上部を制圧しても地下から出てきて攻撃可能だし、なんといつて
も広いから制圧
にも時間がかかる。その間に神官共はフネでさよーならーって作
戦だと考えている」

『そんなところを攻めるとしたらかなり面倒臭いね』

「全くだ。詳しく調べたらこのトンネルは深さ50mのところにあ

る。よくここまで

掘ったもんだよ。それにこの地下施設と地上の間には土メイジが
やったと思われる

分厚い鉄板が仕込んである。鉄板の厚さは10mもあり、通常爆
弾で破壊するのは

困難だろう。だが、この首都地下要塞の制圧はゲルマニアに任せ
てくれ。炭鉱

要塞はガリア軍に一任する」

「わかったが：大丈夫なのか？」

「心配なさんな、ジョゼフ。策はあるからな」

例によってウィリアムはニヤリとした。それを見た3人は

(ああ、また悪だくみしてるな)

と一瞬で悟った。

「で、それ以前にどうやってロマリアに戦争をふっかけるか、とい
う話だ。これは

ガリアの積極的な協力が必要なんだが、こうしたらどうだろうか
？」

ウィリアムが説明すると3人は思わず苦笑いをした。

「そういうことを思いつけるのはウィルだけだな」

「その発想はなかったよ」

『ウイルスを敵に回したくないよ、ほんと』

（会談から1ヶ月後、ガリア・ロマリア国境、アクイレイア方面）

普段ここは立ち入り禁止になっているが、今日はガリア国营放送を始めとした

各国の報道陣が詰めかけていた。カメラマンは熱心に映像を撮り、リポーターはマイクを持って仕事をしていた。

「ロマリアの海上都市、アクイレイアから続々と難民がやってくる

のが見えます」

「どの人も皆痩せこけており、難民の話によりますとここに来るまでに亡くなった

人も多くいるそうです」

「ガリア軍はロマリアからの難民に対して食料の無償提供、さらに仮設住宅を建設
していると発表しました」

「火竜山脈のふもと、虎街道付近にある人工島と水路で構成された海上都市である

アクイレイア。そこで一体何が起きたというのでしょうか？」

「新たな情報です。アクイレイアに住んでいた難民は、ロマリア教の神官達から

食料を奪われた、と証言しているそうです」

「ガリア王室はこの事を受けて、30分後に緊急の記者会見を開くと発表しました」

そして30分後、リュティスのヴェルサルテイル宮殿で会見が行われた。シャルルが
椅子に座りマイクを握る。

「皆さん、こんにちは。今日はお集まり頂きありがとうございます」

と、報道陣にいつものように挨拶をしてから本題に入る。

「知つての通り、今日ロマリアの都市アクイレイアから1万人を超える難民が我が国にやつて来ました。報告によりますと、皆瘦せこけており、栄養失調の子供も数多く

いたたのことで。以前から我が国にやってくるロマリア国民は少なからずいました。

しかし今回は規模が全然違いました。正直、想定の外でした。さらに難民達は

ロマリア宗教庁からやつてきた神官達に食料を全部奪われたと証言しています。

アクイレイアに元々いた神官は平民に優しくしていた人物で、食料を奪うことに

反対していたそうです。一部の平民の方も反対したそうですが、彼らは全員聖堂

騎士隊に殺されてしまった、とのことですよ」

一息ついてからシャルルは続ける。

「皆さん、これがロマリア教なのです。献身的な信者達から生きるために必要な食料を

奪い取り、その上さらなる信仰を求める。自分達の言い分を拒否する信者や神官は

殺してしまう。私にはこんなものが宗教とは思えません。このまま誰も助けなければ

今もロマリアに住んでいる多くの平民が食料を奪われ、あまつさえ殺されてしまう

かもしれません。私はそれを黙って見過ごせるような人間ではありません。故に、

私は明日議会において、ロマリアへの宣戦布告の議決を取りたい

と考えております。

宣戦の理由は、悪質非道なロマリア教の神官達を打ち倒し、ロマリアに住む人々を

救うためです。どうか国民の皆さんのご理解とご協力をお願いいたします」

このニュースは大きく報道された。シャルルの記者会見からわずか1時間後には

ゲルマニアのアルブレヒト3世が、その30分後にはクルデンホルフ大公が会見を開き、

「全くもって同意見である」

とコメント。そして同盟国ガリアがロマリアに宣戦布告した場合は参戦すると発表した。

翌日、ガリア議会は宣戦布告を全会一致で承認。これを受けてガリア・ゲルマニア・

クルデンホルフ政府はロマリアに宣戦布告した。

くロマリアく

「大変まずいですね…」

「ええ、そうですね…（というか既に終了している気がするのは気のせいだろう…）」

聖エイジス32世ことヴィットーリオ・セレヴァレとその使い魔ジュリオ・チェザーレの

会話である。ここはロマリア宗教庁の教皇の部屋。先程ガリアから届いた宣戦布告の

手紙を読み終えたところである。ちなみに宣戦布告の手紙はトリステインの時と同じく

”トマホーク速達”で届いた。

「アクイレアの件はちょっとやりすぎましたか…」

ロマリアはアクイレアと同じようなことを全土で行っていた。

何故国民を殺して

まで食料を集めているのか。それは後に判明するが、ともあれヴィットーリオは

素早く指示を出した。

「とにかく急いで会議を開きましょう。幸い敵が攻めて来るまで3日間の猶予があり

ますから、その間に対策を」

「わかりました」

その30分後、会議室には多くの神官が集められていた。全員教皇を崇めており、
教皇の命令なら何でもやるような連中である。

「要塞の方はどこまで完成したのですか？」

開口一番にヴィットーリオは尋ねた。

「首都防衛用の地下要塞はほぼ完成しました。連中が扱う鉄の鳥の攻撃にも耐え

られるように土メイジ達に分厚い鉄板を作らせ、それを埋めこんであります

ので問題はありません。あと猯下から頂いた武器も配備させていただきます。あと

廃坑要塞は既に完成しております」

言うまでもないが、鉄の鳥とは三国同盟の航空機のことである。

「素晴らしい。どれだけの兵士を配備していますか？」

「残念ながら3日間ではそう多くの兵士を集めることはできません。なんとか約4万の

兵を集め、それらを地下要塞、廃坑要塞、そして猯下の護衛の3つに均等に分ける

つもりです」

「それで結構です。とにかく急いでください。最後に…例のフネの方はどうですか？」

「それが…追加の10隻は到底間に合いません。従って10隻のみしか…物資の積み

込み作業は大急ぎで行なっていますので、3日後までには必ず間に合わせて

みせます」

「そうですか…わかりました。では艦隊の出動準備を。艦隊は2つに分けてください。

1つは最前線に、もう1つは例のフネの護衛に」

「かしこまりました」

その時会議室に1人の兵士が入ってきた。

「失礼します、猊下！」

「何事ですか？」

「それが…平民達が首都から逃げ出しています！」

『なんだと!?!』

周りの神官達も驚いている。だがヴィットーリオは冷静に聞いていた。

「なぜそのようなことに？」

「はい、一部の平民が逃げ出したと思っただら他の平民も一斉に逃げ出しました。」

「どうやら郊外や沿岸部に逃げれば生き残れると考えているようです。いかが？」

「いたしましょうか？」

「…構いません、無視して結構です」

「いいのですか、猥下!？」

「まだ三国同盟はこのことを知りません。三国同盟軍が首都に攻めてきても、平民が

いると思っている民家にまで攻撃はしないでしよう。その民家に我が軍が隠れて

攻撃の機会を待っていたとしたら？」

「なるほど!」

「野蛮な侵略者共を蹴散らすのです。偉大なる始祖ブリミルの加護が有らんことを」

「ははっ!」

会議が終わってから3時間後、ロマリアで1番大きな軍港であるタラントから

ロマリアの誇る艦隊が次々と出撃していった。全艦が完全武装をし

ており、その数なんと35隻であるが、そのうちの半分17隻が出撃していた。軍港に残った18隻のフネは、ヴィットーリオが言っていた”例のフネ”の護衛任務についた。その”例のフネ”10隻は軍港の奥で準備を整えていた。その大きさは200mを優に超えるほどであった。そのフネの貨物室に次々と運び込まれているのは、大量の風石であったり、食料であったりする。

実はこの食料、自国の平民から取り上げたものである。トリステインの場合と違い、食料を買う金はあるのだが、肝心の食料がロマリアに輸入されなくなった。なので教皇庁は、

『食料を持っている献身的な信者達から譲ってもらえばいいじゃないか！』

と考えた。自分達が食べるための食料を平民から奪う。普通では考えられないことだが、教皇庁は実行した。その結果アクイレイアのような事が各地で発生した。いくら献身的な信者であっても、元々少ない食料を譲れと言われたら誰だって断る。だが彼らに逆らえば聖堂騎士隊に殺されてしまう。なので泣く泣く平民達は食料を渡すしかなかった。

大事な食料を奪われてがっかりしている平民達。そこにある噂が飛んできた。

曰く、ガリアに逃げれば食料と家と仕事がもらえるらしい、というものだった。

それを聞いた平民達は荷物をまとめてガリアへとすっ飛んでいった。この噂を

ロマリアのあちこちで流したのはある女性率いる部隊だった。ゲルマニア中央

情報局の凄腕エージェント、エレナ・バースタイン中佐とその部下10名である。

ある時は平民に、またある時はシスターに、さらにある時は神官に変装して

噂を流しまくったのだ。

そして先ほどの「首都から平民が逃げ出している」というロマリア軍兵士の

報告。これを引き起こしたのも、バースタイン中佐らの仕業であった。平民達は

ただ逃げ出したわけではなかった。というもの、バースタイン中佐らは再び

噂を流したのだ。その噂とは、

『首都から離れた沿岸部まで行けばおいしい食事が待っているそう
だ！ おまけに

国外に逃がしてくれる上、家も仕事もくれるんだってさ！ みんな行こうぜ！』

である。最初は誰も信じなかったが、実際に行ってきた連中が見たこともない、だが

とてもおいしい食料を持ってきたので、平民達はその噂を信じ、な

けなしの財産を
引っ掴んで家を飛び出していった。

沿岸部にいたのはガリア・ゲルマニア空軍の兵士達であった。彼らはやってきた

平民達に温かいご飯を提供し、希望すれば待機しているC-130で国外へ脱出させて

いた。沖にはゲルマニア海軍艦2隻が待機しており、もし敵がやってきた場合は

問答無用で主砲弾を撃ちこむ用意をしていた。

この結果、首都からはほとんどの平民が姿を消すことになった。

これはロマリア、
三国同盟共に良いこととなった。平民のことを何とも思っていない
ロマリアは、

「わーい、これで空き家に隠れて敵を不意打ちすることができる！」

と喜び、一方の三国同盟 特にゲルマニアは、

「わーい、これで首都をあらゆる兵器で攻撃することができる！」
と喜んだのであった。

そして3日後。 ついに開戦となる……

続
く
…

第35話：極秘会談、そして…（後書き）

就活？ ああ、まだ終わってないよorz
もうニートでもいいよね？

次回はロマリア終了。
では

第36話・全力でプレー（戦争）しよつ 前半戦（前書き）

それがフェアプレーってもんですよ。

第36話：全力でプレー（戦争）しよう 前半戦

（宣戦布告から3日後）

宣戦布告の日時通りにガリア陸軍10万、同空軍機100機以上、両用艦隊全艦が、またゲルマニア陸軍第4軍団8万8千、同空軍機50機、同海軍第4空母戦闘群が一斉にロマリアに対して攻撃を開始した。大地を走る大規模な戦車軍団はまさに”壮観”という言葉がぴったりであった。また、飛行機雲を棚引かせながら航空機が空を舞い、軍艦はその巨体に様々な武装を詰め込み敵を粉碎せしめんとしていた。ただ、トリステイン戦の時とは異なり、今回は遠距離からの精密誘導兵器による攻撃は消極的なものであった。

国境を越えた三国同盟軍はすぐさま火竜山脈を抜けてアクイレイアを制圧した。神官や貴族達を拘束し、飢餓に苦しんでいた平民を助けることに成功する。そして軍は南下を続けていった。敵であるロマリア軍の主力は遙か彼方にある廢坑要塞、首都地下の要塞、そして現在タラントに向けて移動中の教皇ヴィットーリオの護衛の3つに分かれていた。もちろんロマリア各地の主要都市にもロマリア軍は駐留していたのだが、数が少ないという最大の欠点があった。なの

で即座に叩き
潰されていった。

〜同時刻、ロマリア沖15km地点にて〜

「いよいよだな、艦長」

「はい、長官。やっとこの艦の主砲を敵さんにお見舞いすることができます」

そんな会話をしているのは、元アメリカ合衆国海軍太平洋艦隊司令長官であり、
今は北アメリカ共和国海軍の海軍長官となったアルフレッド・ヘストンと、同国
海軍所属の超大型航空戦艦『フィラデルフィア』艦長である。艦隊
は全て最新式の
電子機器 GPS、衛星通信システム、自動装填装置などをゲルマ
ニアから提供して
もらった。その見返りとしてロマリア首都への攻撃をこれから行う
のだ。

「艦長、全戦艦、及び全重巡の射撃準備が完了。諸元入力済み、弾種はFW」

「わかった。長官、そろそろ始めましょう」

「ああ、遅れるわけにはいかんからな」

ヘストンは椅子から立ち上がり無線機のマイクを手に取った。

「ようし、作戦発動！ 射ち方始めっ！」

次の瞬間超大型戦艦『トーマス・A・エジソン』の43・2cm砲24門、バツファロー級

戦艦の40・6cm砲（5隻合計で）60門、アウルス級重巡洋艦の25・4cm砲（12隻合計で）

108門が大音響と共に一斉に砲弾を放った。不思議なことに、艦隊で1番の威力を誇る

『フィラデルフィア』のレールガンは発砲しなかった。その理由は後で明らかに
なるだろう。

その他の戦艦・重巡から発射されたのはアメリカ海軍が開発したFW弾である。

「MK3 新型焼夷クラスター砲弾」という正式名称を持つこの砲弾は、約1,000個の

小型焼夷爆弾をつめ込んだ砲弾であり、時限信管により弾頭が炸裂すると、小型焼夷

爆弾が一気に広範囲に放出され、多くの敵に一撃で致命的な打撃を与えることが

できるという優れものである。

既にお気づきになった方もいるかも知れないが、この砲弾は大日本帝國海軍が開発、使用していた「三式弾」をベースに作られている。ある日日本軍が放った三式弾が、不発のままアメリカ海軍の巡洋艦に落ちてきた。後部甲板にめり込んだ砲弾を海軍が解析し、もっと強くした結果この砲弾は生まれた。

ちなみに兵士からは「FW弾」という愛称で呼ばれていた。「FW」とは「Fire work」の略であり、日本語で「花火」を意味する。この砲弾の着弾を遠くから見るとまるで花火のように見えたことからこう呼ばれるようになったのだ。

それはさておき、このFW弾だが対空攻撃はもちろんのこと、実は対地攻撃にも使えるのである。なので今回は時限信管をかなり遅めにセットしてある。

” 首都は突如光に包まれた。そして例外なく全てが燃えた”、のちに生き残ったロマリア軍兵士はそう語ったそうだ。雨のように降ってきたFW弾はロマリア首都上空高度500mの地点に差し掛かった時に起爆し、首都の建造物に小型焼夷爆弾を
広範囲にばら撒き、あっという間に首都全体を炎に包み込んだ。地上に存在していた

建物・人は全てが燃えてしまったが、地中深くにある要塞にはほとんどダメージはなかった。それにロマリア軍にとって運がよいことに、FW弾の猛攻撃から1時間後に
雨が振り、首都を包み込んでいた火災も鎮火した。

その頃廃坑要塞では派手な戦闘が始まっていた。突然現れた輸送船から次々と降下したガリア陸軍戦闘部隊5万が一斉に攻撃を開始した。この5万の兵士達は、開戦前日に輸送船でこっそり国境を超えていた。主力戦車であるKpz 70が120mm滑空砲を放ち、山肌に設けられた敵砲台を破壊する。この砲台にはフネに積んである大砲が設置されているが、先込め式の時代遅れの兵器なのでつけなく破壊されていく。歩兵部隊は迫撃砲や無反動砲を撃ちまくり、トンネルの入口やそれに類するものを崩していった。しかし、要塞内部にはなかなか侵入できなかつた。ロマリア軍の土メイジ達が土砂崩れを発生させたり、岩を転がしてきたりするからである。山だから土や岩は腐るほどある。

しばらくするとガリア軍は徐々に後退していった。それを見たロ
マリア軍は大喜び。
だがロマリア軍は気付いていなかった。この後退も作戦の1つであ
ることに。

「艦長、やりたまえ！」

「はっ！ 『フィラデルフィア』、射ち方始めっ！！」

「ファイヤー！！」

要塞から遠く離れたロマリア沖に展開していた『フィラデルフィア』
。その主砲で

あるレールガンが独特の射撃音と共に砲弾を放った。空気を切り分
けながら超高速で

飛んでいく砲弾は、あっという間に廃坑要塞に到達して全弾が山頂
部に命中。文字

通り山頂部は消し飛んだ。ガリア軍からの報告で初弾が見事命中し
たのを確認した

『フィラデルフィア』は、レールガンのフルオート射撃を開始した。
火薬の爆発力で

砲弾を射ち出す従来の大砲と異なり、装薬を装填する必要が全くな
い上、磁力の

反撥力で砲弾の位置決めをするため、砲身と砲弾が接触することが
ない。つまり

連射をしても砲身が焼け付くことがないのである。

さて、そのフルオートで発射された砲弾は、山肌を次々と直撃し、
えぐり、1分も

しないうちに要塞内部が丸見えとなった。それを見たガリア軍は雄叫びを上げながら要塞に突撃していった。慌ててロマリア軍は穴を塞ごうとしたが、今度は側面から攻撃を受けた。攻撃を仕掛けたのはクルデンホルフ陸軍の空挺部隊である。開戦前夜にこっそりパラシュートを使って降下し、要塞の近くに潜んでいたのだった。結局、1時間後には要塞は陥落、敵軍は壊滅した。

（ガリア王国、国防省、地下司令部）

ここには三国同盟全軍の部隊配置、戦闘情報等が次々と入ってきた。

「陛下、外務大臣、廃坑要塞を完全に制圧したと陸軍から報告がありました」

「そうか、よくやったと伝えてくれ」

「はっ！」

ジヨゼフとシャルルは一緒に戦争の行方を個室から見ていた。

「これで片方は終わったね、兄さん」

「ああ、残るは2つ。首都地下要塞と軍港タラントの制圧だ。しか

しウィルは

「そうやって地下要塞を制圧するのだろうか…」

「確かに…アルブレヒト3世陛下に聞いても秘密だと言われてるしそこにウィリアムから通信が入る。即座にテレビ会議のシステムが起動して2人の目の前のモニターにウィリアムが映し出された。」

『どうも。作戦は順調に進んでいるようですね』

「ああ、こっちは炭鉱要塞を制圧したところだ。そっちはどうなんだ？」

『まあ見ててください。すごい兵器で吹っ飛ばす予定ですので。でもその前に優しい』

我々三国同盟は彼らに降伏の機会を与えようと思います。じゃまたあとで』

ちょうどその時、廃墟と化したロマリア首都上空に1機のC-130が飛来した。

ゲルマニア空軍のマークが入っているその輸送機は、後部ランプから幾つかの物を投下した。それらは空中でパラシュートを開いてゆっくりと落ちていった。地面に

落ちてから、電気回路が作動して物体に内蔵されているスピーカー

から録音されて
いたメッセージが大音響と共に首都に流れた。

『我々は三国同盟軍である！ 首都地下要塞に立てこもっている口
マリア軍に告ぐ！

先程の攻撃で我々の軍事力がどれだけのものか、わかってもらえ
たことだろう！

今すぐ武器を捨てて投降しろ！ 命だけは助けてやる！ これは
三国同盟軍の

慈悲深い配慮である！ 今から30分だけ時間を与える！ もし
30分を過ぎても

投降しなかった場合、我々は不本意ではあるが貴様らを殲滅する
『！

このメッセージが何度も流れた。それを聞いた兵士達は。

「おい、どうする？」

「どうするつたってよお、さっきの聞いただろ？ あっという間に
燃えちまった

そっじゃねえか……」

「…俺はこんな所で死にたくねえ」

「俺もだよ」

だがそんな兵士達に神官が激を飛ばす。この神官はヴィットーリオ
に命令されて

この要塞の指揮官として最後までここに残ることになっていた。

「皆の者、うるたえるではない！ 確かに先ほどの攻撃は凄まじいものではある！

しかし！ この地下要塞には何ら被害は出ていない！ 従って我々はまだ戦える！

教皇猊下から頂いた兵器もある！ 諦めずに戦おうではないか！」

ヴィットーリオが与えた武器とは、ロマリアが以前から保有していたいわゆる

”場違いな工芸品”である。年代物のAK-47自動小銃を持った2個小隊がこの要塞

に配備されていた。またタイガー戦車も倉庫に保管されており、いざというときは

すぐに地上に出られるようになっていた。ただ、地上の民家の中に隠してあった

「アハトアハト」と呼ばれていたドイツ製8.8 cm FlaK 18/36/37は、先程の

アメリカ艦隊の攻撃で弾薬に火がついて爆発し、使い物にならなくなっていた。

（ゲルマニア王国、国防総省、地下司令部）

結果から言えば、誰も投降しようとしなかった。神官の言葉を信じ、自分達は

絶対に勝てる！ 俺達には始祖ブリミルがついてくださる！ 等と考えているの

だろう。その思いを粉々にふっ飛ばすべく、ウィリアムは行動を開

始した。

「やむを得んな…陛下、よろしいですか？」

「…許可する」

「わかりました。国防長官権限に基づき特別兵器の最終安全装置を解除。攻撃隊は
ただちに発信爆弾投下」

「了解しました！ 行くぞ！」

「……はい！！」「……」

ロマリア首都上空にやってきた5機の最新鋭のF-15E ストライクイーグルは、機首を真下に向けて高度20,000フィートから一気に急降下を開始した。機体下部のハードポイントには大きな爆弾が1発搭載されていた。

「3…2…1…投下！」

指定高度に達した戦闘機隊は、搭載していたGBU-28を投下した。このGBU-28はレーザー誘導方式の地中貫通爆弾であるが、今回の任務ではレーザー誘導装置を

取り外され、代わりにGPS誘導装置を取り付けられている。投下された爆弾は速度を増しながらGPSの座標に従い地面に突っ込んでいった。地面にめり込んだ爆弾は地表から30mの地点まで潜ったが起爆はしなかった。それもそのはず、肝心の弾頭はすっからかんだし起爆装置も外されているからだ。では何のためにこの爆弾は投下されたのか。それは爆弾内部に発信機が埋め込まれており、その信号で次の攻撃の誘導を行う、そのためである。

「投下完了！ 撤退する！」

「投下完了。信号を受信しました！」

「よろしい。座標入力せよ」

「完了です！ いつでもいけます」

「わかった」

ウィリアムはキーボードを使って、今日のコードを入力した。そしてコンソールからせり上がってきたスイッチに手をかけた。

「ではやるとしよう。」キネティック・ストライク”、発射！」

その瞬間ロマリア首都の遙か上空、大気圏外にポツンと佇んでいた対地攻撃衛星

『Rods from God（神よりの裁き）』（正式名称キネティック・ストライク）から、5本の

『Rod』と呼ばれている『運動エネルギー弾』が放たれた。この長さ20フィートの

タングステン製の槍は、秒速36,000フィート（10,972 9 km。時速に直すと39,502,44 km）と

いう猛スピードで目標に向かっていった。この速度は第一宇宙速度を軽く超えており、

第二宇宙速度や落下してくる隕石の速度とほぼ同じである。5本の槍は先程の爆弾が

地面に開けた穴に飛び込んだ。そしてその運動エネルギーを一気に解放して攻撃

対象、つまり地下要塞に文字通り『神罰』を与えた。高質量の塊に加速ロケットを

付けたそれらが解放するエネルギーは、小型の核爆弾に匹敵する破壊力を持って

いた。それが5発も直撃したのだ。要塞内部の通路や人や兵器は一瞬で破壊しつ

くされ、それまで彼らを守っていた厚さ10mの鉄板も吹き飛んだ。そして首都

全体が大きく陥没した。

廃坑要塞からその様子を見ていたガリア・クルデンホルフ軍の兵士達は啞然としていた。空から何か降ってきたな、と思っただら燃え尽きた建造物などの瓦礫が土砂と共に空中高くに吹き飛び、派手な音を立てながら地表がガクンと陥没したからである。

「何なんだよ、あれは…」

「ゲルマニアの新兵器、なのか？」

これが首都地下要塞の最後であった。

「て、敵要塞、沈黙…」

ガリア国防省でもジョゼフとシャルルがその光景を偵察機のカメラ越しに見ていた。

「すごい…」

「なんつー兵器だ…」

他の軍人達もその威力に驚いていた。

一方ゲルマニア国防総省では歓声に包まれていた。

「全弾命中！ 敵要塞は壊滅しました！」

「そうか…」

ウィリアムは啞然としている父親に向き直る。

「これで残るはタラントに向かっている教皇及びその護衛だけですね」

「あ、ああ…そうだな。にしてもあれはすごい威力だな。デックスが作ったのか？」

「アイデアは私が出して、それを聞いたデックスが航空宇宙局と国防技術開発局と

一緒に開発して打ち上げました」

「なるほど…で、肝心のデックスはどこだ？」

「多分今頃航空宇宙局で他の技術者達と大はしゃぎしてるのではないかと」

ウィリアムの推測は正しかった。デックスは今まさにキネティック・ストライクの攻撃成功の知らせを受けて、他の技術者達と一緒にバク転をうって喜んでいた。

「よっしゃあああああ！！！！　ロマリアざまあああああ！！！！！！」

『長官、やりましたね！！　大成功です！！』

「おう！　で、次は…とつとと戦争終わらせて結婚だな！」

『リア充爆発しろ！！』

「お、おいやめろってスパナとかハンマー投げんなあああ！」

「なるほど、デックスらしいな、あはははは！」

アルブレヒト3世が大笑いをしていると、そこに次の報告が。

「ガリア国防省から報告。ガリア両用艦隊とロマリア艦隊が交戦を開始したそうです」

「わかった。まあ、あらゆる面で負けてるからロマリアはすぐに逃

げ出すだろう」

まさにその通りであった。ロマリア艦隊17隻に対してガリア両用艦隊は75隻

全艦が出撃していた。しかもガリア艦隊はグレートウォールと同じ76mm速射砲、

各種ミサイルなどを装備しており、ロマリア艦隊に勝ち目はなかった。両用

艦隊の前衛5隻が遠距離から速射砲を撃ち始め、一瞬で3隻が爆発・墜落する

のを目の当たりにしたロマリア艦隊指揮官は「このままではなぶり殺した」と

即座に判断し、全艦に撤退を命じた。

が、旋回を始めた時にガリア艦から数多くの何かが発射された。

それらは煙を

棚引かせながら弧を描きつつロマリア艦隊を襲った。対トリステイン戦で活躍

した両用艦隊の対地攻撃艦から発射された130mmロケット弾の弾幕射撃であった。

「地上には誰もいないしこの距離なら当たるだろう」とガリア艦隊指揮官は

考えたのだ。結果、上から雨のように降ってくるロケット弾に次々とロマリア

艦隊は墜落していった。運良く旗艦を含めた5隻は旋回を終えて近くの雲に飛び

込んだ。

「全速で離脱するぞ！ 何でもいいから逃げるんだ！」

ガリア艦隊は追撃することもできたが、あえてしなかった。指揮官は無線を

取り上げて相手が出ると一言二言話した。

ロマリア艦隊はうまく逃げきったと思っていた。敵が追ってこないからだ。

おそらく雲に惑わされて見当違いな場所を探しているのだろう、と指揮官は考えた。そして操舵手に次の雲を出て母港に帰還する針路を指示した。

しかし、彼らが母港に帰還することはできなくなった。大きな雲を抜けると見張り員の絶叫が指揮官の耳に届いた。

「ぜ、前方に別の艦隊！ あれは…ゲルマニア海軍です！！」

「何だと！？ こんな所に！？」

前方に目を凝らすと、5隻のフネがこちらに腹を向けているのが見えた。ガリア艦隊からの報告を受けて待ち伏せをしていたのだ。

「か、回避しろ！ 近くの雲に飛び込め！」

だが同じタイミングでゲルマニア艦隊の指揮官も命令を下した。

「全艦、射ち方始めっ！！ 1隻も逃がすな！」

タイベリアス級ミサイル巡洋艦（ベースはタイコンデロガ級ミサイル巡洋艦）は

1隻に2門のMk45 5インチ砲（Mod 4）を持っている。

5隻合計で10門の5インチ砲が

一斉に撃ち始めた。ロマリア艦隊旗艦は最初に攻撃を受け、艦橋にいた指揮官は

艦橋ごと吹き飛ばされた。そして5分もしないうちに残る全てのフネも破壊された。

続く…

第36話：全力でプレー（戦争）しよう 前半戦（後書き）

ロマリアの首都は海からそれなりに近いところにあるんです。原作と違っていたとしても、この小説の中ではそういう設定です。であしからず。

また、キネティック・ストライクのアイデアを下さった deitta
go 様、

本当にありがとうございます！

長くなるので後半に続きます。
では

第37話・全力でプレー（戦争）しよつ 後半戦（前書き）

続きです。

第37話：全力でプレー（戦争）しよう 後半戦

（同時刻、ロマリア、タラント）

自国の陸軍、艦隊、そして時間稼ぎのための2つの要塞。これらがあっけなく壊滅したことに気付いていないヴィットーリオとジュリオは、こういう日の為に造らせておいた大型輸送船の1つに乗り込んだ。その後他の神官達、護衛が続く。ここまで教皇らを護衛してきた兵士達のうち、半分は輸送船に乗り、残りはこの軍港を死守することになっている。

「猊下、出港準備が整いました」

「わかりました」

ヴィットーリオは椅子から立ち上がって艦橋にいる人々に話しかけた。

「これから私達は祖国を一時的に離れることとなります。こうなってしまう責任は全て教皇たる私にあります。大変申し訳ない。ですが、ここに宣言します。私達は

再びこの地に戻ってくると。そして、偉大なる始祖ブリミルの名の下に異教徒共を殲滅すると！」

パチパチパチパチ！

艦橋にいた人々は涙を流しながら拍手を送りながら、

（そうだ、俺達には偉大なる始祖ブリミルが、そして教皇猊下がついて下さるんだ！

異教徒共なんかに負けるわけがない！）

と思っていた。そして大型輸送船10隻、護衛艦隊18隻はゆっくりとタラントから出港していった。遙か上空に無人偵察機がいて全て丸見えになっていることも知らずに。

「教皇一行は国を捨てて逃げ始めたか」

「ええ、現在アフリカ方面に逃走中です」

「そうか…」

「いかがいたしますか、陛下？」

「言うまでもない。汚物は消毒したまえ」

「了解」

くしばらくして～

ロマリアを後にした艦隊。追手がいないことを確認して皆がホッとしていた。

しかし、そこにどこからとも無く声が聞こえてきた。最初は何かの空耳かと思っていたのだが、全員にその声が聞こえたので驚いた。そしてその声をきちんと聞いてみると、さらに驚くことになった。

『我々は三国同盟軍である！ 航行中のロマリア艦隊に告げる！
3分間待つて

やる！ 直ちに停船して投降せよ！ さもなければ実力で排除する！ 繰り返す…』

もちろんヴィットーリオも聞こえていた。

「げ、猊下！ どうしましょうか？」

「うるたえてはいけません。それこそ敵の思うツボですから。直ちに竜騎士を艦隊の

前後左右に展開。敵を見つけるのです。声が聞こえるということ
は我々の近くに

いる可能性が高いですからね」

「わ、わかりました！」

冷静な対応をする教皇を見て、部下は気持ちを落ち着けることができた。

「我々は祖国を奪還するため、ここで降伏する訳にはいかないのです。もし戦闘に

なった場合は全力で反撃してください」

「はい！ 全艦、戦闘配置！！」

練度が高いロマリア艦隊はすぐに戦闘態勢を整えた。

「敵艦隊から竜騎士が4…7…全部で10騎が出撃。前後左右に展開中」

「偵察だな。連中は近くに敵がいると思っているのだろう」

ウィリアムは部下からの報告にそう答えた。さっきの声はウィリアムのものである。

だが今彼はゲルマニアの国防総省にいる。どうやって遙か彼方にいるロマリア艦隊

全員に声を届けたのか。それは風の精霊ことストームのおかげである。ちよつと

前にウィリアムはストームとこんな会話をしていた。

『なあストーム』

『なんかめつちや久しぶりの登場の気が…で何だ？』

『俺の声を超遠くまで、しかもピンポイントで届けることってできる？』

『あたり前田のクラッカーだ！』

『どこでそのネタを…まあいいや、じゃあお願い。報酬はフーチエでいいか？』

『マンゴー味とピーチ味で頼む！ あれ大好きだから！』

『おっけー。じゃあ場所は…』

なので、遠くにいながらも声を届けることができたのだ。

「この様子じゃ降伏する気は全くなさそうだな」

「そうですね」

「なら仕方ない。やっちまえ」

「はっ！」

「座標入力、完了しました」

「1番から4番サイロ、発射扉開け。発射シークエンス開始」

「カウントダウン開始。5、4、3、2、1、発射！！」

「猊下、敵の姿が確認できません。念のため上下も偵察したのですが……」

「うっむ……ジユリオ、どう思いますか？」

「もしかして先程の声は魔法で飛ばしたのかもしれない。だから敵が近くに

いないのでは？」

「そうなりますかね…」「猊下っ！！」「どうしました？」

外の見張りをしていた兵士の1人が大声で叫んだ。

「真上から何かが…」

そこから先の言葉を聞くことは出来なかった。突如艦隊全てが爆発に飲み込まれ

消滅したからだ。バンシー？から発射された4発の散弾ミサイルは、ロマリア

艦隊の至近距離で起爆したのだ。ヴィットーリオが最後に思ったことは、

(空が…燃えている？)

であった。彼の使い魔であるジュリオは最後の瞬間にヴィットーリオを守るうと

したがもちろん間に合わず、主人もろとも吹き飛ばされた。こうしてロマリアの

最高権力者であるヴィットーリオは消滅した。ついでに輸送船に積みまれている

「始祖の円鏡」も吹き飛んだ。嚴重に固定化が掛けられていたが、ミサイルが

起爆する直前に土の精霊「グランド」によって固定化魔法が無力化された。

なのであっけなく壊れてしまった。

その頃タラントには居残ったロマリア軍兵士約1万人は窮地に立たされていた。

すぐそこまでガリア軍主体の三国同盟軍が来ているからである。通常では考えられない侵攻スピードだが、ゲルマニア海軍のゴライアス級大型車両貨物輸送艦のお陰であつという間にここまで来ることができたのだ。

例によって三国同盟軍は降伏を勧告した。30分以内に武器を捨てると大きな拡声器でロマリア軍に通達した。聞こえていない場合も考えて、手紙入りの小型爆弾も投下した。

「どうしたものか……」

こう呟くのはタラント軍港に居残ったロマリア軍の部隊長。正直勝てる気は全くなかった。投下された手紙には、廃坑要塞と首都地下要塞が既に陥落していること、そしてさっき出港したばかりの教皇一行の艦隊が全滅していることが書かれていた。

部隊長である彼としては、勝てる見込みが全くといっていいほどない戦いに部下で
ある約1万人の兵士を送り込みたくなかった。皆のことを考えれば
降伏するのが
お互いに最善の判断だろう、そう考えていた。しかし神官共はそう
考えていない。
きっと最後の一兵になるまで戦えと言っただろう。

「隊長…」

「おう、どうした？」

そこに副官がやってきた。

「そろそろ作戦会議です」

「ああ、わかった。ありがとう」

副官はそのまま戻ろうとしたが、思いとどまり部隊長に振り返った。

「隊長、上申してもよろしいでしょうか？」

「なんだ、言ってみろ」

「…降伏したほうが良いかと思えます。このまま戦えば皆死んでしまっ
まうでしょう」

「…やはりお前もそう思うか。俺もそう思う。出来ればお互いに死者
が出る前に

降伏しようと思うのだが…他の者はどう思っているのだろうか」

部隊長はそこを気にしていた。自分と副官だけが降伏すると言った
ら、

『臆病風に吹かれた敗北主義者だ！』

と言われて殺されてしまう可能性があるからである。

「既に他の作戦参謀にも話はつけてあります。皆降伏したほうがよいという意見です」

「そうか！ では問題はあの神官共だな」

「はい。やはりここは…」

「わかっている。そうするしかないだろう。行くぞ」

「はい！」

その10分後に作戦会議が始まった。参加者は神官10人、部長や副官などの
軍人15人だった。最初に口を開いたのは神官だった。

「部隊長！ 何としてもこの港を守り切るのだ！ やれるな？」

命令とも言えるその言葉を部隊長はバツサリ切り捨てた。

「申し訳ありませんが、できません。敵軍の兵力は我が軍を大きく上回っております。」

籠城戦をやるにしても補給物資が全くありません。全て教皇艦隊に持っていかれ

ましたので。兵士の練度も、使用している武器の性能も、あらゆる点で我が軍は

負けています。こんな状況では誰が指揮しても勝てるわけがありません」

「貴様、まさか降伏するとしても言つつもりではないだろうな！」

「その通りです。我々の負けは確定しています。潔く降伏するのが一番良いと思います。」

無駄な戦いで部下を死なせたくはありませんから」

「我々には始祖ブリミルがついてくださるのだ！ 負けるわけがないだろう！！」

（だったらここに始祖ブリミル呼んで敵を追い払ってくれよ、おい）
部隊長がそんなことを考えていると、1人の兵士がすっ飛んできた。

「お、沖合に敵艦隊です！ 距離は約15リーグ！ 湾口を完全に塞がれています！！」

「何だと！？ 敵艦の数は？」

「とても数え切れません！ 超大型の艦艇がズラリと並んでいる状態です！」

その艦隊とはロマリアの首都と廃坑要塞をフルボッコにした北アメリカ共和国
海軍の艦隊である。艦隊の平均速力が約47ノットと非常に高速なので、レール
ガンのフルオート射撃で要塞に大穴を開けた後、すぐさまここタラントまで
やってきたのだった。

部隊長は神官達を冷ややかな目で見た。

「この状況下でも勝てるかと仰るのですか？ 誰がどう考えても不可能です」

「ええい、黙れ！ お前はクビだ！ 誰か他の優秀な軍人に指揮をとらせろ！」

しかし、その神官の命令に答えるものは誰もいなかった。

「おいっ！ 私の命令が聞けないのか！？」

「残念ながら聞けないね」

そう言って副官及び作戦参謀達が杖や剣を構える。それと同時に会議室に武装した兵士の一団が突入してきて神官達を完全に包囲した。

「な、なんだお前等！？」

「軍人でもないお前等の命令を聞くのがいい加減飽きたのでね。こ

「ここからは私が
指揮をとる。全部隊に連絡。白旗を掲げる、とな」

場所はまた国防総省。

「長官、ロマリア軍タラント駐留部隊が全面降伏したそうです」

「おお、そうか！ 戦わないで勝ててよかったよかった」

「これでロマリア全土を完全に掌握しました。戦争は終結、作戦は成功ですね！」

「その通りだ！ みんなよくやってくれた！」

司令部では拍手が起こった。口笛と歓声と喜びが司令部の隅々まで広がっていった。

「あとタラントにいる我が軍の指揮官から通信が…」

「ん？ なんだろな」

ウィリアムはコンソールまで歩いて行ってボタンを押した。

「こちらウィリアム国防長官だ。何があった、大佐？」

『はっ！ 実はタラント港に隣接している施設の調査を行なってい

たところ、

地下室に地雷のようなものが大量に転がっているのを部下が確認しました。

降伏したロマリア軍指揮官の話では、神官達が大事に保管していたそうで、

一般兵士の立ち入りを厳禁していた、とのこと。第4軍団直属の工兵

部隊でも、この事はわからないという報告があったので、長官に確認して

「いただきたいのです」

「そうか、そいつの映像データをくれ」

『はい、これです』

現地から送られてきた映像を見てウィリアムは固まった。

「ウィル、どうした？」

隣にいたアルブレヒト3世が尋ねるが、ウィリアムは聞いていなかった。

「やばい…ものすごくやばい…」

「何がまずいのですか？」

国王首席補佐官のヴィンセントも尋ねたが、ウィリアムはそれを無視した。

「大佐」

『はっ！』

「まだその地下室に我が軍及び三国同盟軍の兵士はいるのか？」

『はい、念のために我が軍の兵士が5名ほど地下室の警備に。それと現在施設内部の

調査をガリア軍兵士が行っており…』

「地下室から直ちに退避！　そして今すぐその施設を封鎖しろ！　追って指示が

あるまで誰も施設に近づけるな！　これは国防長官命令だ、わかっただな？」

『りよ、了解しました！』

通信を切ったウィリアムは携帯を取り出してデックスを呼び出した。

「おいデックス！」

『ん？　どうしたそんなに慌てて』

「どこにいるか知らんが今すぐペンタゴンに来い！　緊急だ！」

『お、おう、わかったよ』

電話を切ったウィリアムは父親とヴィンセントを引きずって会議室に入った。

「ウィル、一体何だというのだ。あの地雷に何か問題でもあるのか

「？」

「大あります。あれは…」

と、そこにデスクスがやってきた。

「早いなおい」

「急げって言われたからな。で、どうした」

「これを見る」

そう言っつて映像を見たデスクスも固まった。

「…おい。それってもしかして…」

「その通り、”アレ”だ」

「最悪だ…」

「あの、一体それは…？」

ヴィンセントの疑問にウィリアムが答える。

「M23化学兵器地雷。見た目はM15対戦車地雷とそっくりですが、中に詰まっている

のはコンポジションB爆薬10kgではなく、VXガス4.8kgです」

「で、そのVXガスとは…？」

「猛毒の神経剤です。前世の地球では『人類が作った化学物質の中で最も毒性の

強い物質』と言われていました」

「そんなにひどいものなのか…」

アルブレヒト3世も驚いている。

「何故ロマリアの連中がこんな物を持っていたのか知りませんが、こいつは絶対に

廃棄処分しなければいけません。デックス、お前が現地に行つて指揮をとれ」

「わかった、すぐに行くよ」

「まったく厄介なものを残しやがって、クソツタレの神官共め…」

「ははは、まあ頑張れよウィル」

と、アルブレヒト3世は笑っていたが、

「陛下も他人事ではありませんよ?」

というヴィンセントの声を聞いて固まった。

「仕事が山のように溜まっておりますから直ちに王宮に戻りましょ
う」

「え。でも『イエーイ、戦争終わったぜヒャッハー!パーティ

「をやらないと…」

「それは私にお任せを。では戻りましょう」

「ちよー！ 待ってくれええええ…」

ヴィンセントに引きずられながら国王は会議室を後にしていった。

「相変わらず親父は…」

「それが親父クオリティってやつじゃないか」

「まあそれもそうか。じゃあ俺達もやるべき事をしよう」

「だな！」

そして”天才兄弟”も部屋を後にした。

タラントを制圧してから1時間後、三国同盟は以下の声明文を発表した。

『本日午後5時32分をもって、三国同盟軍はロマリア全土を制圧した。これにて

ロマリアとの戦争の終結をここに宣言するものとする』

続く
⋮

第37話：全力でプレー（戦争）しよう 後半戦（後書き）

VXガスとえば、オウム事件の裁判が先日ようやく終わりましたね。

まあ裁判が終わっても被害者の方々の中では何も終わっていないと思います。松本智津夫も何も語らないまま死刑判決食らってしまったしね。しかもオウムは2つに分裂して残っているんですよ。片方は今でも松本死刑囚を崇めているとか。全く何を考えているのやら。この場を借りて亡くなられた被害者の方々に黙祷を捧げます。

あ、ちなみに私は無神論者です。

次回は戦後の処理ですかね。小説としては残り数回を切りました。最後までお付き合いいただければ幸いです。

第38話：後片付けとその他（前書き）

ロマリアの戦後処理とその他です。

12 / 2 一部訂正

第38話：後片付けとその他

S i d e デクスター

ようみんな、デックスだ！　戦争も終わって皆笑顔でいっぱいだね。やはり

平和って素晴らしい。これも国民のおかげだね。さてロマリア戦争のあとの話をしようか。

まずロマリアの国土は一時的にガリアが保有することになった。近かったしね。

それで、食べ物とかがなくて三国同盟に逃げてきたロマリア人が故郷に戻り始めた。

もちろん強制ではなく希望者のみだけど。ゆくゆくは再びロマリアは独立する

だろう。あとブリミル教は三国同盟の定めた「しまっちゃんおうね」政策によって

どこかにしまわれました。詳細は…お察し下さい。

ブリミル教つながりで思い出した。捕らえられた神官共は海外での強制労働を
することになった。優しい三国同盟は彼らに2つの選択肢を与えてあげた。1つは

『ロシアでダイヤモンド掘り掘り20年コース〜疲れたらみんなで寒中水泳だ！〜』

で、もう1つは

『南米でリチウム掘り掘り20年コース、素手でどこまで掘れるかな？限界に挑戦！』』

である。いや、俺達って優しいなあ、ほんと。だって20年間つるはしを握ってれば

自由の身になれるんだぜ？ 特に問題らしき問題は見当たらないね。今頃神官達も

俺達に感謝しながら飛行機で現地に向かっていることだろう。

ああ、それと戦争の最後の出てきたM23化学兵器地雷。処理の仕方がイマイチ

思いつかなかったので、ロケットに載せて宇宙の彼方に飛ばすことにしました。

いわゆるダイナミック処理ってやつだ。これで問題なしだな。

今回の戦争ではガリア軍に少し戦死者が出た。廃坑要塞を攻撃中に戦死した。

勇敢な兵士達に敬礼！ ちなみにクルデンホルフ軍や我が軍に被害はなかったよ。

しばらくは戦争をする予定は全く無いので、兵士達は長い休暇に入ることになった。

本当にお疲れ様でした。

で、今俺はウィンドボナでのんびりと仕事をしている。え、ウィルはどこだつて？

今頃ウィルは大変だろうね。まあ頑張ってるね。

S i d e o u t

S i d e ウィリアム

俺は今ジョセフと一緒にとある所でとある人々との会議を終えたところだ。

その場所とは、砂漠にあるエルフの国『ネステス国』の首都アディールであり、
とある人々とはもちろんエルフである。

「では、今度とも宜しくお願い致しますぞ」

「いえいえ、こちらこそよろしく」

そう言っただけで俺とジョセフとガッチリ握手を交わしたのはネフテスの統領である

テュリユークである。ついさっきまでやっていた話し合いがまとまったのだ。

具体的にどんなことを話し合ったのかというと、

・長年ロマリアの連中がそちらにちよっかいを出しまくってごめんちやい

・ロマリアは俺達がコテンパンに叩き潰しておいたよ

・ブリミル教は”しまっちゃった”から「聖地を取り戻す（キリッ」とか意味不明な

ことを言う連中はもういないよ

・俺達はそっちが『シャイターンの門』って呼んでいる場所には今後一切関わらないよ

・その代わりにサルート王国や俺達と戦うのをやめてね

・あと貿易してくれたらとつても嬉しいなって

・ついでに『シャイターンの門』から出てくるもの全部ちようだい

と俺達は言った。するとテュリユークは、

・数年前のサルート王国侵攻時に邪魔したのお前等かよ
・てことは強いんだろ？ ちよっとビダーシャルと戦えし

5分後

・あのビダーシャルが瞬殺…だと…？ わかった、お前等の強さは理解した

・『シャイターンの門』に近づかないのであれば問題ない

・貿易もいいだろう

・門から出てくるもの？ あんなのでいいならいくらでもあげるよ

となつて無事に合意。これでエルフとの争いも綺麗サツパリなくな

ったわけだ。

いやーよかったよかった。ビダーシャルと戦う時、4大精霊に協力してもらった

のは秘密である。勝てばいいのだよ、勝てば！

「ああ、そうだ。実はつい昨日『門』からまた変な物がいっぱい出てきたのだが、

早速持って帰るかな？」

「そうですね、どんなものか見てから決めたいので、見せてもらっても？」

「もちろんだ。付いてきたまえ」

で、俺とジョゼフはテュリユークに付いていった。さあ何が出るか楽しみだ！

（5分後）

評議会本部から少し離れた場所にある倉庫に入ると、隅っこの方に見たことのある

銃だとか機械などが転がっていた。しかし俺の目には倉庫のど真ん中に置いてある

ものしか見えていなかった。

「…なんでこれがここにあるんだよ」

「知ってるのか、ウィル？」

そこにあっただのはとてつもなく大きな爆弾であった。そして俺はこれを知っている。

爆弾を調べながら俺は話す。

「こいつは『グランドスラム』っていう爆弾だ。弾頭の重さは約4トンあって炸薬には

トーペックスが使われている」

トーペックス：1942年にイギリス王立兵器工廠で魚雷、爆雷用として開発された

軍用爆薬の1つ。名前の由来は魚雷爆薬（Torpedo Explosive）から。

「弾頭が約4トンだって!？」

「おう。詳しい話は端折るけど、保存状態は問題なさそうだな…」

「そうか、よかった…」

ジヨゼフは胸をなでおろしていたが何か勘違いしているようだ。

「よくないんだよ。保存状態が問題ない、つまりこいつはまだ使えるってことだ」

「マジかよ!？」

「てことで統領、こいつは持ち帰らせて頂きますよ」

「ああ、よろしく頼む」

こうして俺達はグランドスラムをヘリコプター数機で吊り上げながら帰ることに。

まあこれでエルフ問題も解決したし、戦争もないし、やっと結婚式を挙げる事が

できるぜ！ 随分待たせちゃったからなあ、盛大にやろう！

S i d e o u t

ウィリアムとデクスターがそれぞれの仕事をしている時、ゲルマニアでは3人の人間が集まって会議をしていた。1人目はゲルマニア王国国王アルブレヒト3世、

2人目はガリア王国国王シャルル1世、そして最後の1人はクルデ

ンホルフ大公国

大公である。三国同盟の中核を成す国家のトップが一堂に会する。この会議の

議題とは、人類の未来を左右するような内容……ではなかった。

「だから兄さんの娘を正室に!!」

「だが断る! 私の愛娘を正室にさせていただきたい!」

「はあ……」

上からシャルル、大公、アルブレヒト3世である。この会議はウイ
ルとデックスの

結婚に関するものだったのだ。デックスの方は特に問題はなかった。
ガリアの王位

継承権を持っているシャルロットが正室に、彼女の双子の妹ジョゼ
ットとキュルケは

側室ということになった。問題はウイルである。マチルダはともか
く、1番付き合いの

長いイザベラ、アルビオン王家の血が流れているテファ、そしてク
ルデンホルフの

王位継承権を持つベアトリス。テファは「ウイルさんの奥さんにな
れれば幸せ」と

言っていたので、イザベルとベアトリスどちらを正室にするかで今
もめている。

「ベアトリスちゃんが正室でいいんじゃないの? イザベラちゃん
には申し訳ない

けどさあ……」

「ぐぬぬ…」

「ていうか忘れてた！ 結婚するってことはうちの娘を嫁がせるってことだろ？」

俺息子いねえから王位継承者いなくなる！」

「ああああ！！！！」

「そこはあれだ、デックスとシャルロットちゃんの子供を…」

「じゃあうちの場合はウィルとベアトリスの子供か」

「ちよつと待て！ 1番最初の子供はゲルマニアの物だ！！」

「何い！？」

こんな感じで会議はめちゃくちゃになってしまったが、2時間後は、

1、デックスの正室はシャルロット、ウィルの正室はベアトリス
2、シャルルと大公は王位を継ぐことのできる男の子を作る（性的に）

3、男の子ができなかった場合はウィルとデックスの子供（男）が
両国の

跡継ぎになる、が最終的な判断は本人に一任する（押し付けイ
クナイ）

4、孫はみんなで可愛がるもの、異論は認めない（キリッ

とまあ、こんな感じで話がまとまった。そして肝心の結婚式の日程、
式場などの

細かい事も全て決定された 本人達抜きで。

続く…

第38話：後片付けとその他（後書き）

短めですけどすみません。

第39話：そして…（前書き）

果てしなくどうでもいい話。久しぶりにMGS4をやってみたら「アイワナ」並に死にまくりました。中東ではPMCとカエル兵に蜂の巣にされ、南米ではストライカー装甲車に轢かれ、東欧ではレジスタンスを間違えて何度も撃ち殺し、シャドーモセスではウルフに吹き飛ばされ…セーブデータ見たら最後にセーブしたのが2年前でした。そりゃ腕も落ちるわ…ビツクボスの称号何回も取ったはずなのに。

そんなことはともかく、ウィル達の結婚式をどうぞ！

第39話：そして…

くロマリア戦争から1ヶ月後、ゲルマニア王国、ウインドボナく

王都は国民の歓声に包まれていた。至る所で人々が笑い、酒を飲んで祝っていた。

何を祝っているのかというと、”ゲルマニアの天才兄弟”の異名を持つウイリアムと

デクスターの結婚式を、である。しかも結婚相手は三国同盟の中核を成すガリアと

クルデンホルフの王族ときた。これを祝わないわけがない。

今日ウインドボナで結婚式を行い、そのまま披露宴が開かれる。

そしてガリアと

クルデンホルフ、アルビオンを訪れることになっている。新婚旅行はその後行う

予定である。

で、肝心の主役はというと…

く式場、新郎控え室く

「っべー、まじべーわ。いやいやいや、ホントにマジでべーわ」

と言いながら部屋の中をうろついているのはデックス。

「マジで緊張するからとつと終わってくれねえかな」

「少しは落ち着け、兄弟」

ウィリアムはのんびりとコーヒーを飲みながらくつろいでいた。

「いいか、やることなんてほとんどないじゃないか。奥さんの手を握って歩いて、

指輪をはめて、キスする。それで結婚式は終わりじゃん。ま、披露宴ではちよつと

したことを言わないといけないかもしれないけどな」

「それがとつても緊張するんだよ！」

そこに係員がやってきて2人は新婦の元へ。

「どんな感じになってるかな。元々美人だけでもと美しくなってるんだろっな」

「そつに違いない」

「こちらになります」

係員が扉を開けるとそこには…7人の天使がいた。

「」
「」
「」
「」
「」
「」
「」

2人は言葉を失った。あまりに綺麗で、美しかったからだ。

「……うい、ウイル…どうかな?」「……」

「……デックス、似合ってる?」「……」

花嫁達はその場でクルツと回ってみせた。

「…今まで見てきた中で最高に綺麗で美しい」

「…綺麗すぎて目が吹っ飛びそうだ」

『あ、ありがとう…』

皆顔を赤くしていると、外からドタドタという音がしてきた。そして部屋の扉が

吹っ飛びそうな勢いで開いた。花嫁の両親達がやってきたのだ。

「シャルロット! ジョゼット! とつても綺麗じゃないか!」

「素晴らしいぞ、イザベラ!」

「おお、ベアトリスよ! なんと美しい!」

「ティファニア…きれいだよ」

「キュルケ、行かないでくれ〜!」

「ついに結婚か…親として嬉しいよ、マチルダ」

しばらくすると係員がやってきた。

「皆様、そろそろ時間でございます」

「わかった。それじゃあ行こうか、みんな！」

『はい！』

式場には各国の政府関係者がほとんど参加していた。アルビオンからはジェームズ1世とウェールズ皇太子が、トリステイン共和国からは新たに就任した大統領と軍のトップであるベイツが、またサルート王国等の海外からも国王などがやってきた。

「皆様、どうぞ拍手でお迎え下さい。新郎新婦の入場です！」

そのアナウンスと共に会場にいた人々、そして結婚式のテレビ中継を見ている国民は歓声を上げて拍手をした。が、途中から何故か笑い声が始まった。その理由はウィル達にあった。

入場する時新郎が誰と手をつないで歩くか、ということ親同士

が喧嘩になりそうになつたのだ。なのでデックスが即座に考えた結論が、

『1人をお姫様抱っこして、2人は両サイドから抱きつけばいいんじゃないね?』

であつた。なのでデックスはシャロットを抱っこしてキュルケとジヨゼットは両サイドから抱きついて歩くことに。ウィルの場合は4人なので、ベアトリスを抱っこして、マチルダとテファは両サイドから、そしてイザベラはなんと肩車をした状態で入場してきたのだ。なのでこれを見た人は笑つてしまつたのだ。

(まあ、こんな入場の仕方をした結婚式なんて今までなかったからねえ…)

とウィリアムは考えていた。

このハルケギニアにはキリスト教なんてものは存在しない上、ブリミル教もしまつちやつたので、結婚式では参加者の前で堂々と「俺達は結婚する!」と宣言して指輪交換してキスするだけである。もし異議があれば後日役所に届け出ることになっている。

「さて、それじゃあ…」

「ああ、やるか」

ウィリアムとデクスターはマイクを使わないで地声で堂々と宣言した。

「今日私、ウィリアム・タイベリアス・フォン・ゲルマニアは、愛する4人の女性、

ベアトリス、イザベラ、ティファニア、マチルダと結婚することをここに

宣言する！！」

「私、デクスター・ハミルトン・フォン・ゲルマニアは、愛する3人の女性、

シャルロット、ジヨゼット、キュルケと結婚することをここに宣言する！！」

パチパチパチパチ！！

辺りからは割れんばかりの拍手が鳴り響いた。それを聞きながらウィルとデックスは指輪を新婦の薬指にはめた。

「ウィル…」

イザベラは目に涙を浮かべながら笑っていた。

「こっやって結婚するのが小さな頃からの夢だった。正室とかそう

いうのはどうでも

いい。ただ、ウィルと結婚したかった…」

「そう言ってくれると俺も嬉しいよ、イザベラ」

そして1人ずつキスをする。さらに周囲からの歓声は大きくなった。

式場を出た新郎新婦達は、オープンカーに乗ってゆっくりとウィンドボナ城へと

向かっていった。その車の中でウィルとデックスは笑顔で皆に手を降っていた。

「…なあデックス」

「なんだ、ウィル？」

「今までで大変だったが、これからはもっと大変になるぞ？」

「確かにそうだな。一応俺達って次期国王候補だしな」

「そゆことだ。それに…子供の面倒とかも見ないとないな！」

「ははは、それもあつたな！ 頑張って子作りするか！」

「だな！ これからも一緒にこの国を発展させていこう！」

「もちろんだ！ これからもよろしくな！」

しっかりと握手をしながら兄弟は最高の笑顔を見せたのであった…

続く…

第39話：そして…（後書き）

前回は今回も短くなったのは私の責任だ。だが私は謝らない。

これで一応本編はおしまいです！ 次回はエピソード的なものを。
おそらく次回も短いです。
では

エピソード

（数十年後）

Side ウィリアム

あの日の結婚式が昨日のように思える。その後の披露宴では俺もデックスも

酔っ払っていたっけ。その2年後には4人の妻全員が元気な子供達を産んでくれた。

デックス達も多くの子供達を授かっていたなあ。結婚から10年後に親父は老衰で

死んでしまい、新たな国王は俺とデックス、どちらになるかで大きく揉めたことも

あった。最終的に俺とデックスは古代から伝わる物事の決め方、じやんけんで

正々堂々と勝負、俺が新ゲルマニア国王、ウィリアム1世となった。本当はこう

いう面倒な仕事はデックスに全部押し付けたかったけど。で、俺は孫が生まれる

までしっかりと仕事をしてから、6人いる息子の1人に国王の座を渡した。

デックスは俺が国王になってからも研究を続けた。この惑星と2つある月との間に

軌道エレベーターをつなげたりしている。デックスの子供達や孫達は、父親と

同じように研究職に就いている。

その結果、ゲルマニアと三国同盟は成長を続けていき、この惑星に存在するほぼ全ての国家が同盟入りした。そして今では”国際連合”として世界平和を守るため、世界経済の安定を守るために活動している。

肝心の俺はというと、いや、もう”儂”と言ったほうが年齢的に良いかもしれないかもしれないけど、今自分の家のベッドで家族に見守られている。もう体を満足に動かすこともできないし、老眼鏡をかけないと本を読むこともできない。

だがそれは昨日までの話であり、今儂は死にかけている。病気などではない。親父と同じく衰えているのだ。デックスも2年前に老衰で死んでしまった。儂ももう長くないと自覚している。

「あなた……」

「父上……」

「お父様……」

「お祖父様……」

「ああ、みんな…」

そばにいるのは愛する妻達。そして息子達や娘達、孫達もいる。

「ベアトリス…」

「なんですか、あなた」

「昔みたいに呼んでくれないか…初めて会った時によ…」

「…はい、ウィリアムお兄様！」

ベアトリスは儂の手を握りながら満面の笑みでそう言ってくれた。

「それが聞きたかったよ…遠い昔のことだが今でも鮮明に覚えている…」

「私ですよ。絶対に忘れませんからね」

「ああ、俺もだよ…イザベラ」

「なんだい、ウィル？」

「君と出逢ったのは…俺が4歳、いや3歳の時だったかな？あの時の君も綺麗だった」

けど、今でも全く変わらないな…」

「な、何言ってるんだい。そういうウィルだって昔も今もかっこいいじゃないか」

イザベラは頬を赤くしながらも答える。

「それは嬉しいね…テファ、マチルダ…」

「はい！」

「ウイル…」

「2人にも色々世話になったなあ…ありがとう」

「アルビオンで窮地に立たされていた私達を助けてくれたのはウイルさんですよ。」

「こちらこそ感謝しています！」

「そうだよ。テファの家族とあたしの家族を守ってくれたんだからね」

「そうだったなあ…息子達よ」

「」「」「」「ここに」「」「」

6人の息子達はすぐに返事をする。国王になった長男、ルーファス以外は全員が軍で働いている。

「立派に育ったなあ。父としてうれしいぞ。いいか、お前達。儂が死んでも前に

進み続けるのだ。決して立ち止まってはいかん。そして母さん達を、この国を

よろしく頼む…ゴホッ！　ゴホッ！」

「…わかりました、父上。全てお任せ下さい」

「良い返事だ…娘達よ…」

「……………お父様……………」

娘達は全部で7人いる。皆母親に似て美人である。

「みんな若い頃の母さんにそっくりだ…ルーファス達と共にこれからもしつかりと

生きてゆくんぞ。いいな？」

「はい、お父様…」

長女のローザは涙ぐみながらも儂の言葉に頷いた。

「孫達はいるか…？」

『お祖父様…』

儂の孫達は…何人いたかな…数えきれないくらいいる。

「これからが大変かも知れんが、しつかりと生きる。お前達の未来はきつと輝かしい

ものになるだろう」

『はい、わかりました！』

そこまで言つと儂は急に眠くなつてきた。ついに来たか…

「もう…儂は…疲れた…ゆっくりと…寝ること…するよ…」

「あ…た！」

「…イル！」

妻や子供達が何か言っているが、もう儂には理解出来ない。

「デックス…今…そっちに…行く…ぞ…」

ウィリアム・タイベリアス・フォン・ゲルマニア。

元ゲルマニア王国国防長官兼國務長官、前ゲルマニア王国国王。

弟のデクスターと共にゲルマニアを、ハルケギニアを、そして世界を変えていった。

4人の妻と13人の子供達、そして多くの孫達に見守られながらこの世を去った。
享年89歳であった。

葬儀は世界中の政府関係者が参列した。遺体は遺言通りに焼却し、先に亡くなった弟と同じ墓に入れられた。

『ゼロの使い魔 ～よくある転生のお話～』 完

エピソード（後書き）

「これで終いか…短すぎるわー!」とか言わないでくださいいません。

あとがき

皆さん、作者のカニンガムです。今まで『ゼロの使い魔』よくある転生のお話』を

読んでいただき誠にありがとうございました！ 皆様のお陰で何とか書き終えることが

出来ました！ まだ前作の「なのは」の方が終わっていないのにながちが先に終わると

いう変な状況ですけど…ですが、これからは「なのは」の方もしっかりと更新する

”つもり”ですのでご安心ください。

それと次回作ですが、感想の返信やら活動報告やらでもチラホラ言っていました通り

『IS インフィニット・ストラトス』よくある転生のお話』を書かせて頂きます。

言うまでもありませんが、ハイパーチート&主人公最強です。なお作者はISの

原作は読んでおらず、アニメしか見ていませんのであしからず。

内容ですけどアーマード・コアネタをふんだんに盛り込んだ内容になります。

ACfAとAC4の武器・キャラクターのネタをメインとしますが、レイヴン達も登場

するかも？ 他の作者様の小説と内容がダブらないよう注意して書くように思います。

内容に関してもう1つ。今ストーリーに関して悩んでいます。そこでアンケートを
取りたいと思います。

- 1、原作にそつてみんな仲良く楽しい学生生活楽しもうぜルート
- 2、ISとか束なんてマツハで蜂の巣にしてやんよ！ 束アンチルート

どっちがいいですかね？ 選ばれなかった方は別の作品として投稿する事になる
かもしれない。その辺は私のリアルの状況に左右されます。期限は大晦日まで！

最後に、書き始めるのは…未定です！！ すいません！！ 就活
が終わり次第投稿
することにします。なので誰か私に内定を下さい。

それでは！！

2011/12/12 カニングム

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3256t/>

ゼロの使い魔 ~よくある転生のお話~

2011年12月12日13時08分発行